

研 究 編

外来診療棟地点における藩邸周縁部土地利用

—遺構属性による空間復元の試み—

成瀬 晃司

1. はじめに

東京大学本郷キャンパスは本郷地区、弥生地区、浅野地区の3つの地区によって構成されている。医学部附属病院を含む本郷地区は、大枠で加賀藩とその支藩（富山藩、大聖寺藩）の江戸屋敷に対比できることは過去に何度も紹介されている。

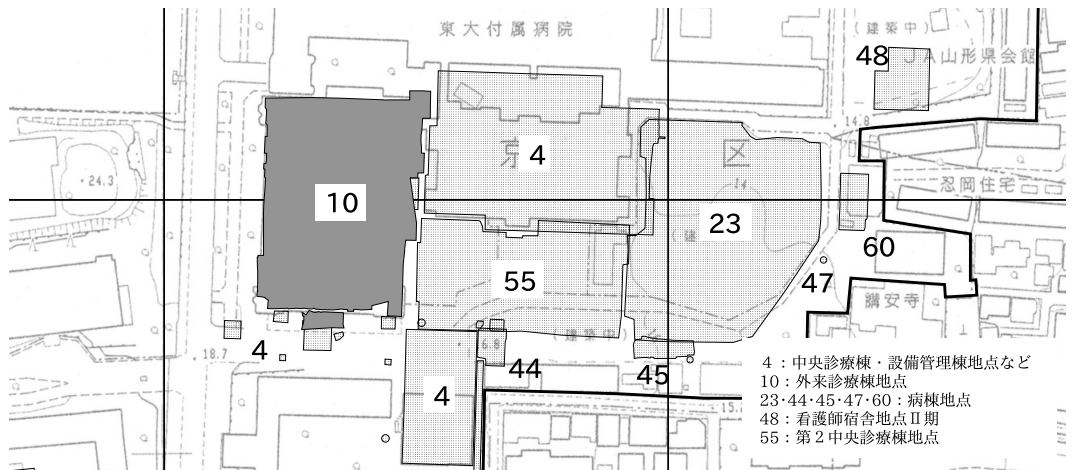
病院地区は『医学部附属病院地点』（東京大学遺跡調査室 1990）として報告された中央診療棟地点（大聖寺藩邸、富山藩邸など）、設備管理棟地点（大聖寺藩邸、高田藩邸）、給水設備棟地点（高田藩邸）、共同溝地点（大聖寺藩邸など）をはじめ、その後、本地点（大聖寺藩邸、加賀藩邸）、看護師宿舎地点（富山藩邸）、MRI-CT棟地点（富山藩邸）、病棟地点（大聖寺藩邸、講安寺など）、看護師宿舎第2地点（富山藩邸）、第2中央診療棟地点（大聖寺藩邸）と大聖寺藩上屋敷エリアを中心に調査が続いた（図1a）。一方、加賀藩邸に関する文献調査は『山上会館・御殿下記念館地点』（東京大学埋蔵文化財調査室 1990）に詳細な調査結果と論考が掲載され、大聖寺藩邸に関する文献調査は『医学部附属病院地点』で報告されている。考古学的調査と文献調査との対比事項として遺跡の位置（屋敷割り）、性格（居住者と機能）、変遷（火災、地割りの変化）がまず揚げられる。本地点においても加賀藩邸に関する部分は豊富な絵画資料と文献資料によって、考古学的調査によって得られた物質資料をビジュアルに加工することが可能になる。

2. 段階設定と根拠

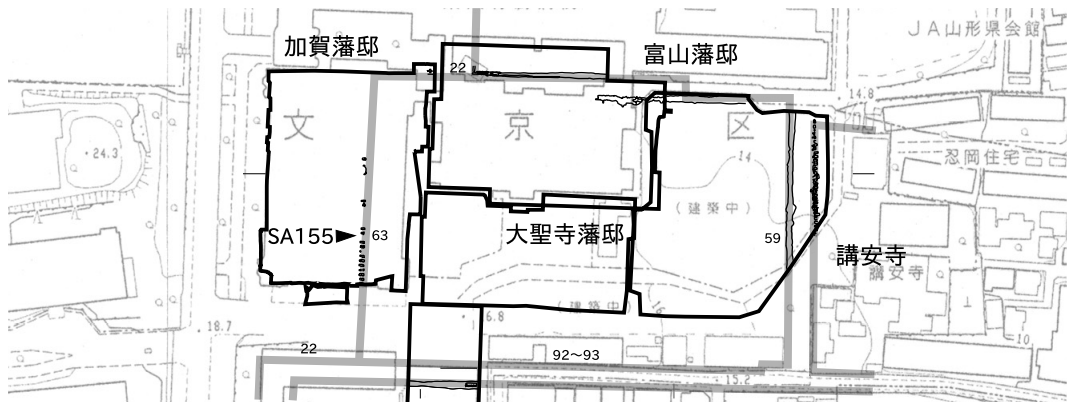
さて、本地点では、土地利用の断絶を捉えることができる多くの火災廃棄資料が検出され、出土遺物の年代観と文献資料による火災年代との対比から、定点を設定することが可能であった。さらに記録にみる屋敷割りの変遷の一端を検出遺構から確認することができ、これらの成果に東大編年（堀内 1997）による遺物群の様相を併せ、以下の段階設定を行った。

1 期 加賀藩、大聖寺藩、富山藩の3藩邸全てが全焼した天和2（1682）年の火災を下限とする段階。本火災は、これまで行われた本郷キャンパス内の調査において、瓦礫廃棄遺構、生活上の焼土、被災建築遺構などその痕跡がほぼ全ての調査地点で認められている。全焼記録を持つ藩邸火災のなかでもその痕跡の遺存度は突出したもので、本郷邸調査のメルクマールの主要なパーツとして位置づけられる。また、加賀藩邸は本火災を契機に下屋敷から上屋敷へ移行するとともに隣接する大聖寺藩邸、富山藩邸との地境も変更になった。加賀藩、大聖寺藩両藩邸の境界付近に位置する本地点の検出遺構もこの火災の前後で帰属が大きく換わってくることからその意義は大きい。

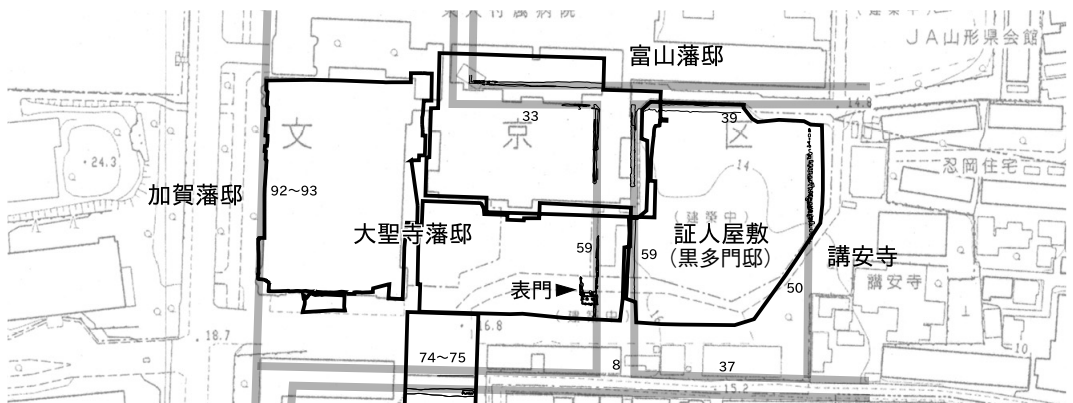
研究編 1. 外来診療棟地点における藩邸周縁部土地利用



a)現在



b)天和3年以降の屋敷割りと調査地点



c)天和3年以前の屋敷割りと調査地点

図1 病院地区の調査地点と屋敷割りの変遷(1/3000 藤本1990より作成)

火災翌年に施行された各藩邸外郭の変化に関しては、藤本強によって大聖寺藩邸外郭の復元と現状地形との対比が試みられ(藤本 1990)、それをもとに病院内各調査地点を投影したのが図1b、cである。多少の測量誤差はあるものの天和2年以前は本地点の大半が大聖寺藩邸に含まれていることが理解でき、本段階に属する遺構のほとんどは大聖寺藩邸に帰属する遺構である(図1c)。なお本段階は東大編年Ⅱa～Ⅲb期に該当する。

2 期 天和3(1683)年の屋敷割り変更以降から文政12(1829)年に大聖寺藩が加賀藩より借地を行い、再度屋敷割り変更が行われるまでを本期とする(図1b)。東大編年では、Ⅳa～Ⅷa期に該当する。本段階は、加賀藩邸絵図にみる土地利用の変化、藩邸火災による土地利用の断絶、遺構配置にみる土地利用の変化などから以下に示す4小期に細分することができる。

2-1期 天和3年から元禄16(1703)年の火災(水戸様火事)を下限とする段階。加賀藩邸は上屋敷となり、3藩の屋敷割りに大きな変更が行われた。調査地点は、東約1/3が大聖寺藩邸、西2/3が加賀藩邸に含まれる。東大編年Ⅳ期に該当する。

2-2期 元禄16年の火災以降、享保15(1730)年もしくは元文3(1738)年の火災を下限とする段階。東大編年Ⅴa期に該当する。

2-3期 享保15(1730)年もしくは元文3(1738)年の火災より1780年代頃を下限とする段階。作事所南側が「明地」となり、本地点南部に大形不整形土坑が集中する。東大編年Ⅴb～Ⅵb期に該当する。

2-4期 18世紀末から大聖寺藩邸拡張により再び屋敷割りに変更がみられる文政12(1829)年を下限とする段階。作事所南側に存在した空き地部分に建物が建設され、該所に対する土地利用の変化が、1790年代に作成された絵図から読み取れる。東大編年Ⅶ～Ⅷa期に該当する。

3 期 文政12年から幕末までを下限とする段階。大聖寺藩史によると「文政十二年、新御廣式の建築あり。その土地は加賀藩邸の一部を借る。」と記録があり(1)、この屋敷割り変更により本地点の大部分は再び大聖寺藩邸に含まれることになる(大聖寺藩史編纂委員会 1938)。東大編年Ⅷb～Ⅷd期に該当する。

3. 検出遺構からみた土地利用

(1) 1 期 異なる主軸方位

本段階の遺構主軸は2種に大別できる。1つは南北に延びるSD45と、東西に平行して延びるSD54、SD253のグループで主軸方位は真北から西へ5°傾くN-5°-Wに直交もしくは平行する一群である。もう1つは真北から1.5°東へ傾くN-1.5°-Eに直交もしくは平行する一群でSD14、SD92などが該当する。前者を第1主軸グループ、後者を第2主軸グループとして稿を進めていきたい(図2)。

第1主軸グループに属するSD45は、断面逆台形状を呈する溝状遺構で、覆土最下層に砂粒が堆積していたことより流路としても機能していたことが推定される遺構である。本遺構は、SD14、SK158、SD161と重複関係にあり、新旧関係は主軸方位が共通するSD161より新しく、第2主軸グループのSD14や17世紀後半の遺物が廃棄されたSK158より古い。出土した焙烙、焼塩壺

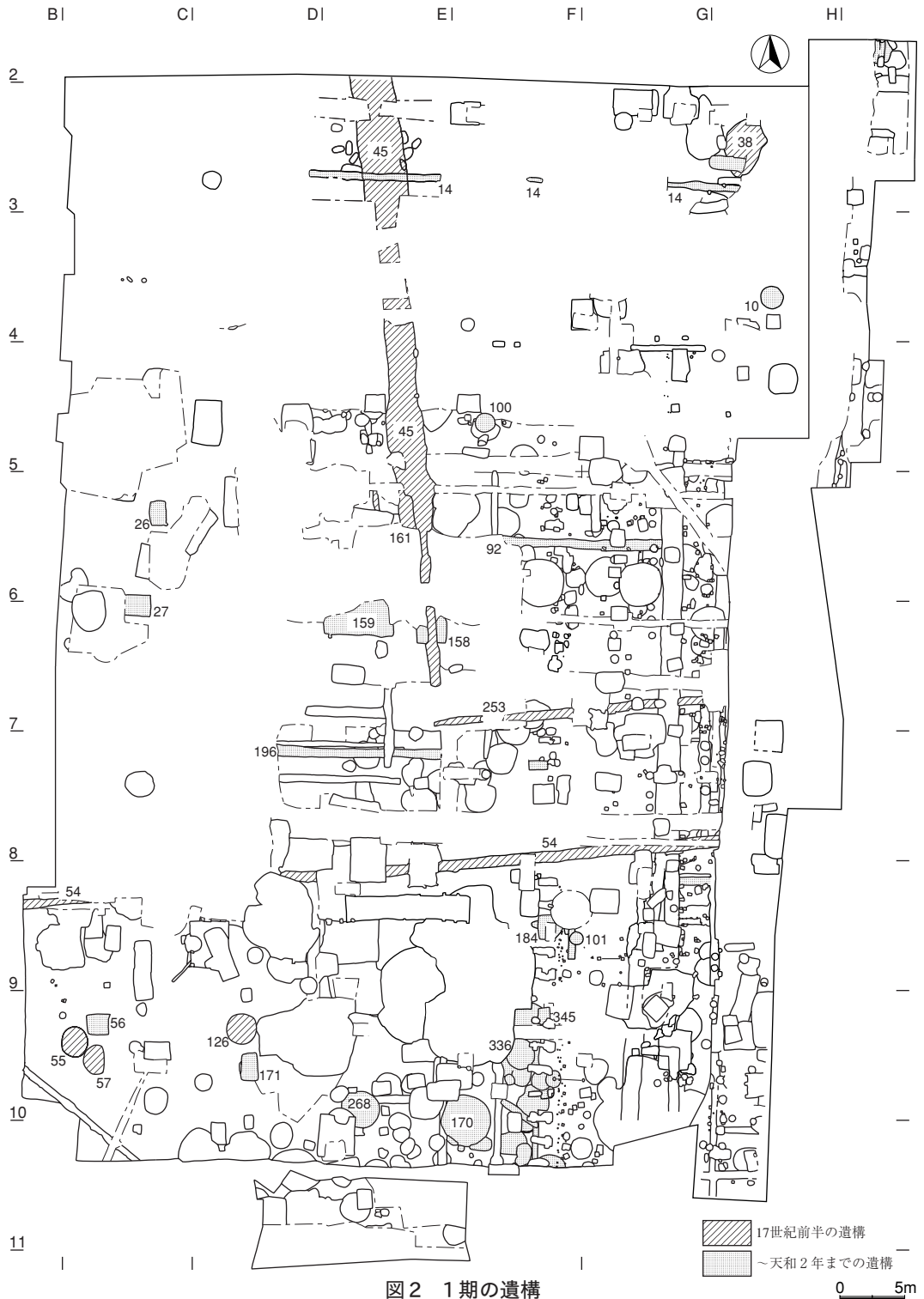


図2 1期の遺構

など、出土遺物の年代からも本遺構の廃絶時期は17世紀前半に比定され、本地点出土遺構のうち最も古い年代が与えられる遺構の一つである。しかし、寛永6(1629)年の御成に伴う廃絶・廃棄資料と位置づけられている中央診療棟地点「池」遺構と比較すると、小片のため未掲載であるが、肥前磁器(染付天目形碗など)が少量含まれていることや、焼塩壺の形態も新しい様相を示すことから、本遺構の廃絶時期は1630年代と推定される。

SD54、SD253は、SD45と直交する主軸方位を示し、平行に延びている。いずれも遺物は出土していないが、断面形はともに箱形に近い逆台形を呈している点で共通する。SD54は調査区を東西方向に横断し、両端はともに調査区域外に達しているが、SD253は攪乱の影響も考えられるものの、西端はSD45の南端と近接し、SD45からL字状に屈曲して連続する可能性も考えられる。この2条の平行する溝状遺構の間隔は、外法で11.8mを測り、京間(6尺5寸)5.99間、真々で10.9mを測り、田舎間(6尺)5.99間を示すが、本遺構に関してはどちらの尺度を基準にして設定されたのか判断しがたい。

第2主軸グループには、前掲したSD14、SD92の溝状遺構をはじめ、ほぼ東西、南北方向の主軸を示すSK26、SK27、SK159、SK56、SK171、SK184などの長方形遺構が該当する。溝状遺構は確認面からの深さに差はあるものの、いずれも断面形が上方へやや開く長方形を呈する点で共通する。特にSD92は溝底に扁平川原石ないし切石を利用した礎石が約200cm間隔で設置されていることから境界施設と判断される。またSD14も覆土の堆積状況に流水路としての痕跡は認められず境界施設としての可能性が高い。SD14とSD92は後述する天和3年以降の加賀、大聖寺兩藩邸の境界施設と位置づけられるSA155を跨いで構築されていることから、天和2年を下限とする境界施設と考えられる。長方形土坑はいずれも東大編年Ⅲ期に位置づけられる遺物を有しており、特にSK26、SK184は焼土とともに被熱した遺物が検出され、天和2年の火災に伴う廃絶遺構と考えられる。またSK159を除き、長辺が2m前後の平面規模を有している点で共通性があるが、その分布には規則性は認められなかった。

以上、主軸方位の異なる遺構群についてその年代を検討してきた結果、第1主軸グループは1630～40年代頃に、第2主軸グループは1650～70年代に位置づけられることが明らかになり、1期における本地点の土地利用は第1主軸から第2主軸へ移行していることが確認された。

その年代観をもとに1期に属する他遺構の様相をみると、出土遺物の年代観から第1主軸グループ段階に該当する遺構には、SU38、SK55、SK57、SK126がある。SU38出土遺物はSD45よりも新しい様相が認められるが、17世紀第二四半期よりは下らない。本遺構は北壁に棚状の掘り込みを有し、また北半部の覆土直上には巨大なロームブロックが存在することから南壁を開口部とした地下室と考えられ、本郷邸内の地下室としては最も古い段階に位置づけられる。SK55、SK57、SK126は円形ないし楕円形土坑で、規模もほぼ一様で、植栽痕の可能性も考えられる。調査地点南東部に集中していることから、その一帯が植樹帯であったことが推定される。

第2主軸グループ段階に該当する遺構にはSK336、SX350、SX340、SK170、SK268などの円形もしくは不整形円形を呈する遺構とSE10、SE100の井戸がある。前者はD～E・9～10グリッドに集中し、植栽痕と推定されるSK336、SK170、SK268の存在から他遺構もそれに関連する可能性もあり、やはりこの一帯が植樹帯として利用されていたことが推定される。遺構密度は散

漫としているが、長方形土坑が分布する西側から井戸が分布する北側にかけて本段階における生活区域であったことを窺わせている。

ところで、1640年代を下限とする第1主軸グループは、文献資料との対比から大聖寺藩邸成立以前(1639)、即ち加賀藩下屋敷に帰属する遺構と推測され、第2主軸グループに帰属する遺構は大聖寺藩邸成立後に構築された遺構と推測される。該期の本地点は絵図面との対比から西側の一部分を除いて大聖寺藩邸に含まれることが、また第2中央診療棟地点の調査成果から(東京大学埋蔵文化財調査室 2004)大聖寺藩邸御表門は藩邸東に設置されたことが確認されており(図1c)、本地点は大聖寺藩邸の最奥部分に該当していることも、本段階での散漫な遺構密度に関連していると考えられる。

(2) 2-1 期 境界施設と遺構分布による空間復元

天和2年の火災では加賀、大聖寺、富山全ての藩邸が全焼したと記録されている(大聖寺藩史編纂委員会 1938、(財)前田育徳会 1931)。この凄まじい大火で灰燼に帰したのを一つの契機に、各藩邸の地境が変更された。加賀藩邸の飛び地として大聖寺藩邸東側に道を挟んで存在した『黒多門邸』を廃し、そこを大聖寺藩邸に組み入れ、大聖寺藩邸西側部分をほぼ相対替える形が取られた。そもそも大聖寺藩邸、富山藩邸ともに加賀藩からの借地であり、この屋敷割りの変更も加賀藩主導で行われたことは想像に難しくない。そして新たに設定された加賀藩邸との境界が、SA155に該当する(図1b)。では、SA155を境として本段階における東西各々の空間利用に目を向けてみたい(図3)。

加賀藩邸に該当するSA155西側では、大形長方形土坑の存在が目を引く。8ライン付近に分布するSK176、SK139、SK313はSK176のみが東西方向に長軸を有するものの、3遺構の北壁はほぼ同一ラインで揃っており、土地利用の規制が働いていたことが窺われる。またこの3遺構はいずれも壁柱穴を伴う点でも共通し、地山以外の屋根状施設を有する地下室であったと推定される。特にSK139、SK313は覆土に焼土と被熱遺物を多量に含有し、遺物の年代観と火災記録から元禄16(1703)年の火災に比定され、少なくとも同一時期に2基の半地下室が共存していたことを物語っている。この3遺構の南側にはSU300が存在する。本遺構はローム土によって極短期間に埋め戻された様相を示しており、遺物もほとんど含まれていなかった。重複する遺構との新旧関係より東大編年V a期以前に位置づけられるため、本段階から存在した可能性を指摘したい。本遺構は中央部に置かれた入口から階段を介し東西両側の室部へ接続する形態をとる。特に東側の室部には天井及び壁面の補強を目的とした柱、棧が組み上げられ、非常に丁寧な造りを呈している。SU300以南で本段階に帰属する遺構にはSU262、SK301があるが、ともに壁面がハの字状に緩やかに拡がる地下室状遺構で、8ライン付近の大形土坑群とは様相を異にする。8ライン以北では、5ライン南付近に位置するSK160が攪乱によって遺存率は低いものの、東西700cm、南北310cm以上の規模を有する大形土坑である。しかし床面レベルが先述した3遺構より約80cm高く、壁柱穴も認められないことから形態的類似性は低い。以上から本段階の壁柱穴を伴う大形土坑は8～9ライン付近に限定する分布状況を示し、土地利用と遺構の密接な関連性として捉えることができる。

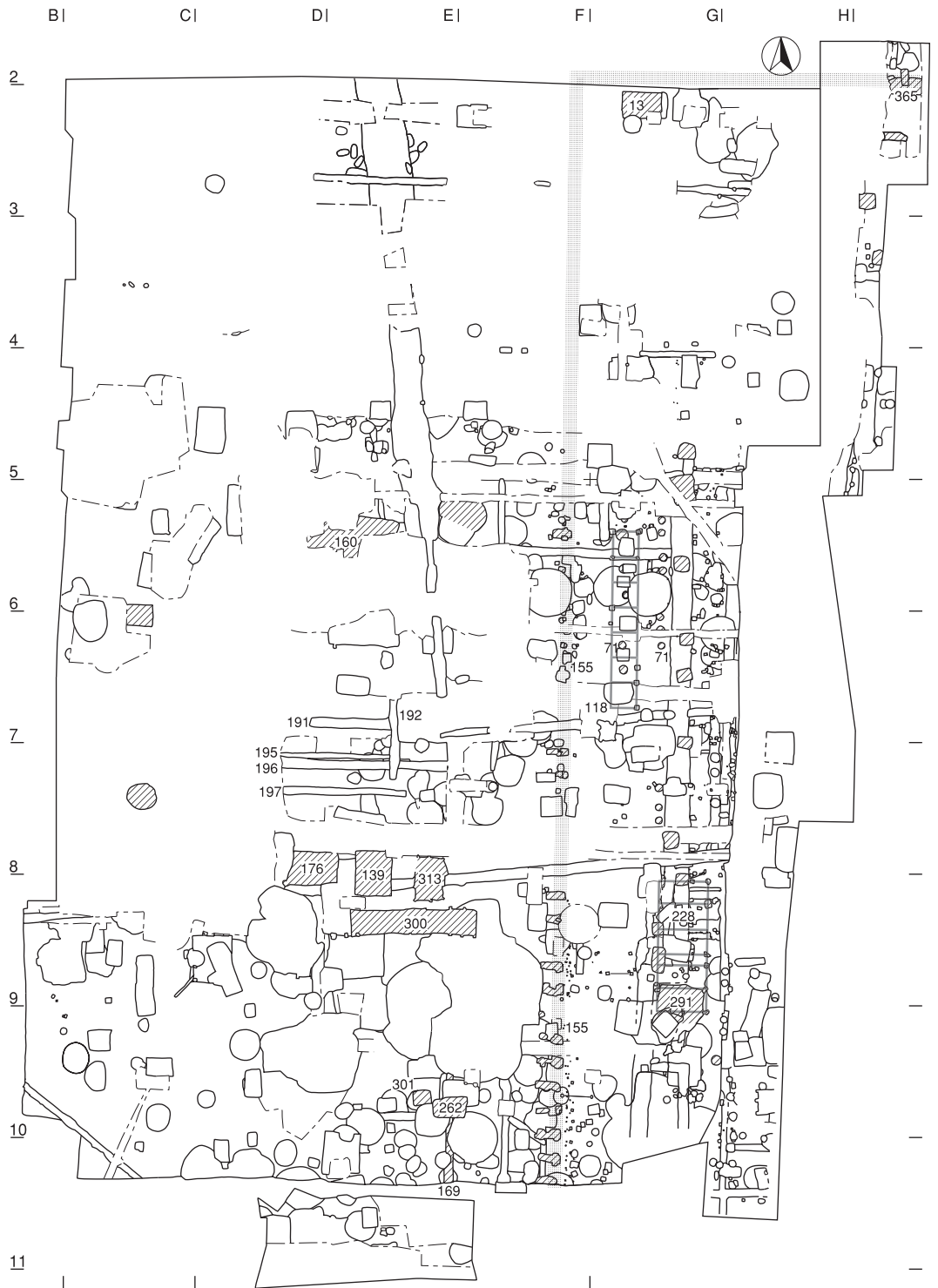


図3 2-1期の遺構

大形土坑群の北側にはそれと平行する溝状遺構が存在する(SD191、SD195、SD196、SD197)。いずれの遺構も遺物がなく具体的な年代観を提示することができないが、1期における遺構主軸変化の様相から第2主軸グループに属するこれらの溝が17世紀後半以降に帰属することは明確である。さらに断面形がやや上方へ開く長方形を呈していることに加え、SD195、SD197は溝底にピットを有している点でも共通する。溝底にピットを有する溝は御殿下記念館地点(I～III期の遺構面)、第2中央診療棟地点(5～7期の遺構面)において17世紀代の遺構面から主体的に検出されており、該期における柵柱穴構築技法の一つとして位置づけられる。その成果から本地点の溝状遺構に関しても17世紀段階の遺構としての蓋然性が高いと考えられ、これらの溝状遺構は邸内の空間を区画する施設と位置づけることができる。さらに遺構の西側は攪乱によって破壊され、その境界域を確認することはできないが、東側は直交するSD192付近で止まる溝をはじめ、SA155の東側まで延びる遺構がないことから、天和3年以降に構築された、即ち本段階に帰属する遺構として考えたい。

加賀藩本郷邸を描写した絵図面のうち最も古い絵図面に元禄元(1688)年の「武州本郷第図」がある。比較的精緻に描かれた絵図であるが、測量誤差も多く含まれている。そこで相互の誤差を極力少なくするために、SA155と藩邸東境、現在の龍岡門から無縁坂へ続く道との位置関係など調査地点の近隣部に定点を設定し、対比を試みた(図8)。

本絵図は設計段階の様相もあり本地点周辺部では建物の具体的な平面図は描かれておらず、区画のみを示したものとなっている。本地点の北東部分に対比したほぼ正方形の区画には「役所一ノ九百四十四歩二尺七寸四分余」と書かれ、この場所に何らかの役所が設置されたことがわかり、続いてその面積が表記されている。その区画の東南角から南へ延びる長方形区画には北側に「四間二尺四寸五分」と東西幅と推定される距離が書かれている。また南側の路地に通じる部分には「作事方門」と書かれており、ここに門が設置されていること、この長方形区画が北側の正方形区画に通じる路地であること、門の名称から北側の正方形区画が作事方役所であることが読み取れる。作事方門から作事方役所へ通じる路地幅は京間換算で862cm、田舎間換算で802cmと約60cmの開きがあるが、SA155から西約8mに位置し、南北方向に延びるSD169がおおよそその位置に対比される。また先述した東西に延びる溝状遺構群は正方形区画の南端にあたり、「役所一」=作事方とその南側の区画の境界として機能していたと考えられる。3基の大形土坑群とSU300の開口部分も作事方役所へ通じる路地の西側、正方形区画の南に隣接する長方形区画内に該当する施設と考えられるが、この区画に関する具体的表記はなく、本絵図から得られる情報はこれが限界である。

そこで、もう一度本地点周辺を含む藩邸東エリアに視点を広げてみたい。SA155は、長方形を呈する掘方内に東西2基の礎石が配置されているが、西側に対して東側の礎石規模が大きく、東側に主柱、西側に支柱が設置されていたことが推定され、その様相から加賀藩邸を取り囲む塀として構築されていたと理解できる。SA155の延長線とやはり天和3年以降の大聖寺藩邸と富山藩邸との地境と位置づけられている中央診療棟地点2号組石延長線を復元したのがSA155から調査区外で東に折れる網線である(図3)。東西推定線の線上にはSA155と類似構造を有すSP365が存在し、本遺構も藩邸境界施設と推定される。18世紀後半以降に作成された絵図面との対比からこの東西ラインに加賀藩邸から大聖寺藩邸に通じる門が設けられていたことがわかる。そして藩邸境界

は富山藩邸南西角に達するとそこから屈曲して北上し、そのライン上に富山藩邸に通じる門が設けられていた。即ち本地点北方には支藩との通用門が設置されており、その周辺は藩邸内でも重要な区域の一つとして位置づけている田中の指摘や(田中 1995)、18世紀後半以降の藩邸絵図における周辺部土地利用の一貫したあり方から、本区画も役所として機能していたことが考えられ、その結果、壁柱穴を有する大形土坑は役所の施設＝共有施設として構築され、収蔵庫(保管庫)として機能していたと推定される。

続いてSA155の東側、即ち大聖寺藩邸サイドの遺構について触れたい。大聖寺藩邸内で本段階に位置づけられる遺構の多くに焼土及び被災遺物を含む覆土が認められる。遺物の年代観から元禄16年の火災による廃絶遺構と推定され、火災被害の大きさを物語っている。またそれは見方を変えれば、それほど瓦礫処理が可能な容積を持つ遺構が多く存在していたことにも繋がる。その筆頭が地下室である。F8グリッドのSU291やF2グリッドのSK13を除くと、筆者が以前2類とした詰人空間に分布する地下室形態に該当する(拙稿 1994)(2)。それらはF5～F8グリッドにかけて南北方向に分布する一群と、調査区東端際でH2～H3グリッドにかけて南北方向に分布すると推定される一群に大別することができる。遺存状況の良好なFラインの地下室群を例に取ると、地下室の開口部は19世紀段階の石組溝SD62掘方の範囲内で収まり、東西方向のぼらつきがほとんどない。地下室間隔は開口部の中心距離で2.7～5.5mを測り、理学部7号館地点(東京大学遺跡調査室 1989)(以下、理7地点)や法学部4号館・文学部3号館地点(東京大学遺跡調査室 1990)(以下、法文地点)で認められた地下室が重複または密接した分布のあり方とはやや異なる様相を示す。この背景には天和3年～元禄16年までの20年以内の存続期間が影響していることが考えられる。

FラインとHラインの地下室群間距離は約14mを測り、この数字は長屋敷地間隔を表している。中級藩士の居住区であった理7地点では長屋敷地間隔が絵図との対比から約23m、下級藩士の居住区に対比される法文地点では最も狭い長屋敷地間隔は足軽長屋の17.6mであった。絵図との対比から建物奥行き3間、庭奥行き2.25間、敷地間4間(以上越前間)を測る。また「足軽・番番の居住区」と記録されている病棟地点D1面で検出された長屋群(庭はなく、必然的に地下室も存在しない)では路地を挟んだ場合が12m、隣接する場合は約8mであった(拙稿 1997)。病棟地点検出長屋の奥行きは3間を測るため、建物間隔は2.6m間隔と狭い。さて、本地点の敷地間隔14mは病棟地点の路地を挟んだ長屋敷地間隔(12m)と法文地点の足軽長屋敷地間隔(17.6m)の中間にあたり、かつ地下室を有することから法文地点の長屋配置に近い。すなわち奥行き3間の足軽クラスの居住区が想定される。さらに間口に関しては地下室間隔の最小値が2.7m～5.5mを示すことから間口1間半から3間の長屋が、また地下室間平均値約4mからは間口2間の長屋が想定される。

『加賀藩史料』によると、天和の火災後の貞享2(1685)年に定められた長屋貸与規定に、藩士の身分によって間口の広狭基準が細かく規定されている。最大間口は「十間 三間梁 庇五尺 空地四間一尺 御番頭」に始まり、「四間 小頭」「三間 徒目付」「二間 組中」で終わっている((財)前田育徳会 1931)(3)。加賀藩での小屋割り基準をそのまま大聖寺藩邸に当てはめることはできないが、間口2間は下級藩士クラスの居住区として考えることはできよう。

Fライン地下室群の西側に位置するSL71は、東側にa～jと西側k～pの2列、15基を確認した便漕遺構群である。西側列のkが次段階(2-2期)に帰属するSU49に切られていること、SL71覆土最上層に焼土層が堆積していることから、元禄16年の火災を下限と想定した遺構群である。西側の列に関しては、直径90cmと、他より30～40cm大きいSL71-1を除くと、ほぼ越前間1間間隔で分布している。さらにSL71西列を取り囲むように存在する東西1間、南北8間のSB118と対比させると、SL71西列はSB118の1間四方のほぼ中央に分布することが明らかになり、SL71西列とSB118は共存し、便漕を伴う1間四方を基準とした建物遺構として捉えることができる。その形態は、御殿下記念館地点や病棟地点で検出された既遺構と類似していることからSL71西側列とSB118は既遺構と考えられる。

一方、SL71東列は、西列と異なり2基1組で構成されている。これらはFライン地下室群と近接し、両遺構群の軸線はほぼ平行に延びている。厩と地下室(長屋庭)までの距離を考えたとき、その間に別建物の存在は考えられず、SL71東列は長屋に伴い、その庭先に設置された厩であると推定される。

以上の遺構配置から、SA155東側の景観を復元してみよう。加賀藩邸との境界塀の脇には少なくとも8疋立以上は存在する厩があり、厩の東側には南北に延びる長屋が2棟、棟を並べている。建物の西側に庭を持ち、そこには地下室1基と2基1対の厩が設置されている。建物は奥行き3間で、1戸あたりの間口は2間ほどの小規模な構成を呈しており、下級藩士の居住区と推定される。

(3) 2-2期 絵図情報と遺構の対比

元禄16年の火災によって再び灰燼に帰した本郷邸は、再度復興が行われた。18世紀前半の本郷邸を描写した絵図は存在していないが、「武州本郷第図」と1760年代頃の藩邸を描いたと推定される「前田家本郷御屋鋪図」(図9)とを比較すると、その間に屋敷割りの変更は認められない。即ち、SA155を境界とする加賀藩、大聖寺藩の地割りはそのまま継続して用いられていたと考えられる。それは考古資料にSA155と重複する18世紀代の遺構が存在しないことから追証することができる。よって、2-1期同様にSA155を境として東西の遺構のあり方を検討したい(図4)。

まずSA155の西側(加賀藩邸側)では、2-1期同様大形長方形土坑が存在する。前段階で東西に並んで配置されたSK139、SK176の間にSK137が、その南にはSK320が構築される。ただし2-1期の大形長方形土坑が壁柱穴を有す構造を取っていたのに対しSK137、SK320とも柱穴はなく、さらに両遺構は壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が顕著で整形加工が施されていない。この様相から前段階と同様の機能を有していたと考えることは難しく、空間利用のあり方に変化があった可能性もある。大形長方形土坑の西側B8グリッド周辺には地下室が分布するが、そのうちSU58は階段が付設された2室を有する形態で、御殿空間に多く分布する4類に該当する(2)。調査区北西部は病院施設の基礎による攪乱の影響で遺構残存状況は極めて悪く、単純には比較することはできないが、遺存している遺構で本段階に帰属する遺構が少ないことから、遺構が希薄な空間であったと推定される。先述した1760年代作成と推定される「前田家本郷御屋鋪図」を観ると、「武州本郷第図」で「役所一」と記され「作事方」区域と推定された方形区画が、「御作事所」と明記され、大小数棟の建物が描かれている。区画南側境界付近には、東西に延びる建物が描かれている

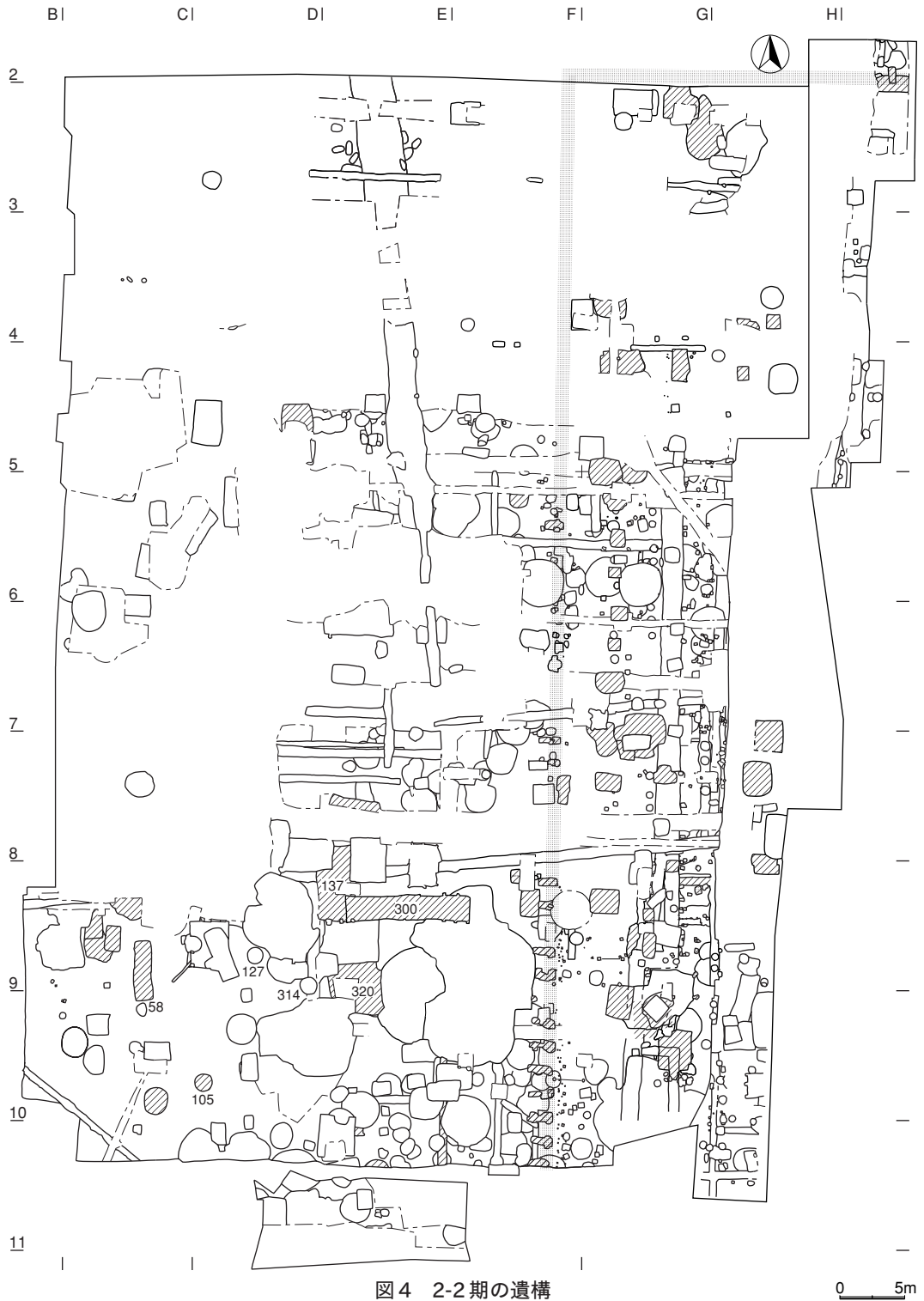


図4 2-2期の遺構

が、この建物の南面が「武州本郷第図」での正方形区画南端の境界と一致することが読み取れる。即ち、7ライン付近を南北に区画する溝状遺構集中区にその境界が該当する。残念ながら一連の溝状遺構には、個々の年代を特定できるような出土遺物、遺構の切り合い関係が乏しく、本段階における境界施設を特定することは不可能であるが、火災を挟んでも7ライン付近が、邸内における個別空間の境界として機能していた可能性は高い。

もう一度「前田家本郷御屋鋪図」を観てみよう。7ライン以北は先述したように「武州本郷第図」段階から土地利用に変更はなく作事所が設けられている。「前田家本郷御屋鋪図」によると、南側区画に接し東西に延びる長屋が1棟、その北側で西側区画に面して「入口」が設置されている。入口の北東には「番所」と書かれた小規模建物があり、さらにその北東にはL字形の建物、東側区画付近には南北に延びる長方形建物が描かれている。それらには注記がなく具体的な機能は不明であるが、同一区画内に配置されていることから、作事所に関する施設であると考えられる。しかし調査区内では、再三触れているように著しい攪乱の影響で絵図面と対比できる遺構は確認されなかった。

一方、作事所区画の南側は、「武州本郷第図」で区画された長方形区画はなくなり、区画を伴わない空間が描かれている(4)。藩邸外郭東南角には「御作事方御門」があり、元禄段階から変化していない。門の北側には「番所」と書かれた小規模建物が描かれている。その建物の北東に●(黒丸)が2ヶ所描かれている。この●は絵図面に描かれた凡例によると「●付合紋割場支配水溜桶」と記されている。水溜桶の表記から地上施設がイメージされるが、同様の記号は法文地点、理7地点で調査された長屋にも観ることができる。法文地点では東西方向に延びる長屋北側の西側に井戸を示す○が、東側に●が描かれている。理7地点では南北方向に延びる長屋東側にあり、●は長屋中央付近に、○は長屋の南北に2基描かれている。「武州本郷第図」ではそれらはいずれも●で表記されており、特に区別はされていない。各々の報告書の考察では検出された井戸の配置と「武州本郷第図」に描かれた井戸の位置を重ね合わせ遺構と絵図面との対比を行っている(山口・羽生 1989、拙稿 1990)。その結果、理7地点では3基の井戸のうち中央の井戸に対比され、法文地点では東西両方の井戸に対比された。法文地点の井戸に関して堀内秀樹は、検出遺構の形態と絵図面での表記に対する検討から、絵図面における「水溜桶」の位置には、上部付帯施設を有する井戸が対比され、「水溜桶」が単に防火用に埋設された埋め桶を指す表記に限定されず、防火用として位置づけられた井戸をも包括する可能性を指摘している(堀内 1990)。

本地点において●周辺にはSE105、SE127、SE314の3基の井戸が存在する。SE105は覆土上部に大量の焼土が廃棄され、含有された遺物の年代観から享保15年もしくは元文3年の火災による廃絶と位置づけられている。SE127は19世紀前～中葉の遺物が出土している。SE314は出土遺物がわずかで自立した廃絶年代を与えることは不可能だが、本遺構を切って構築されたSU138に18世紀末～19世紀前半の遺物が廃棄されていたことより18世紀代に廃絶された可能性が高い。水溜桶が防火用井戸を含んだ用語と考えた場合、年代的にはSE314が最もその可能性を秘めているが、いずれの井戸も上部付帯施設が付随していない点で共通し、堀内が指摘した絵図面での水溜桶表記＝上部付帯施設を有する井戸には当てはまらず、邸内の井戸に対する形態と機能のあり方に関する今後の検討課題としたい。

次にSA155の東側、大聖寺藩邸エリアに目を転じてみたい。藩邸内において最西端に位置するこの区域は、前段階では地下室、便漕の配置を通し、南北方向に延びる長屋群の存在を提示したが、本段階においてもやはり地下室の存在がキーワードになる。地下室はFライン～Fライン東4mを東西の分布範囲とし、北は5ライン付近、南は9ライン付近まで延びる1群(以下Fライン地下室群と呼ぶ)と、Gライン東2m～東7mを分布範囲とし、北は4ライン付近、南は9ライン付近まで延びる1群(以下Gライン地下室群と呼ぶ)の2つのまとまりが認められる。いずれの地下室も2-1期同様2類タイプで、開口部は東西方向に軸を有す長方形形態が主体を成している。Fライン地下室群13基のうち、北から10基までは開口部の中心からの遺構間隔が2.5～4.5mを測るのに対し、南に位置するものは8～9mと間隔が広がっている。一方、Gライン地下室群は攪乱などの影響から未確認部分が多く存在し、分布特性を抽出することは困難である。

さて、2つの地下室グループは東西及び南北の分布範囲が類似していることから、南北方向に延びる同規模の長屋が少なくとも2棟存在したことが推定される。Fライン地下室群西端からGライン地下室群西端の距離は12mを測り、2-1期の区間距離を若干下回る結果になった。2棟間の路地幅も加味する必要があり、断定はできないもののほぼ同規模の長屋を推定することができ、2-1期と同様の身分を有する家臣団の居住区を考えたい。また、Fライン地下室群の西端からSA155までの距離は2m弱しかなく、建物は地下室の東側に位置していたことは明確で、建物と庭の配置が2-1期の長屋とは逆に構成されていたことが判る。また庭部分はFライン地下室群で奥行き4m、Gライン地下室群で奥行き4.6mを測ることから、庭の奥行きは約2.5間と考えられ、法学部の足軽並規模の長屋、即ち下級藩士の居住区と位置づけられる。

(4) 2-3期 藩邸周縁部の土地利用

2-2期の下限は地下室群、大形長方形土坑群など多くの遺構から共通して検出された焼土と被災遺物より享保15年もしくは元文3年の火災を想定した。よってその火災以降の土地利用様相が2-3期の上限に対応する。本段階においてもSA155を境界とした藩邸域に変更はなく、前段階同様その東西の様相を概観したい(図5)。

SA155西側では調査区8ライン以南に大形不整形土坑が集中して分布する。SK152とSK290は重複しており、掘削と埋め戻しが頻繁に行われたことを物語っている。SK290出土遺物はコンテナ22箱と多量に出土しており、東大編年Vb期に位置づけられ、それを切って構築されたSK152は遺構規模もSK290の2倍以上の体積を有するが、遺物もそれに比例しコンテナ約50箱が出土した。陶磁器、土器の年代観は東大編年VIa期に位置づけられる。SK174は陶磁器の他、漆椀、ほうき、羽子板などの木製品、食物残滓などの自然遺物が多量に出土している。陶磁器、土器の年代観は東大編年VIa期である。SK175は南側を大きく攪乱によって破壊され遺存状況は良くない。そのためもあり遺物出土量はコンテナ約4箱と少ないが、年代的にはVI期を下らない。これらの遺構は平面形が不整形を呈し、坑底、壁面ともに凹凸が著しく、複数遺構が重複しているかのような形状を呈しているが、覆土の堆積状況に遺構重複状況は認められず、一時期に埋め戻された点で共通する。その最終的な形状から大形不整形土坑は土採りを目的として掘削された遺構、即ち採土坑と位置づけられる。また、出土遺物についてもSK290にて大量の焼塩壺が局所的に出土

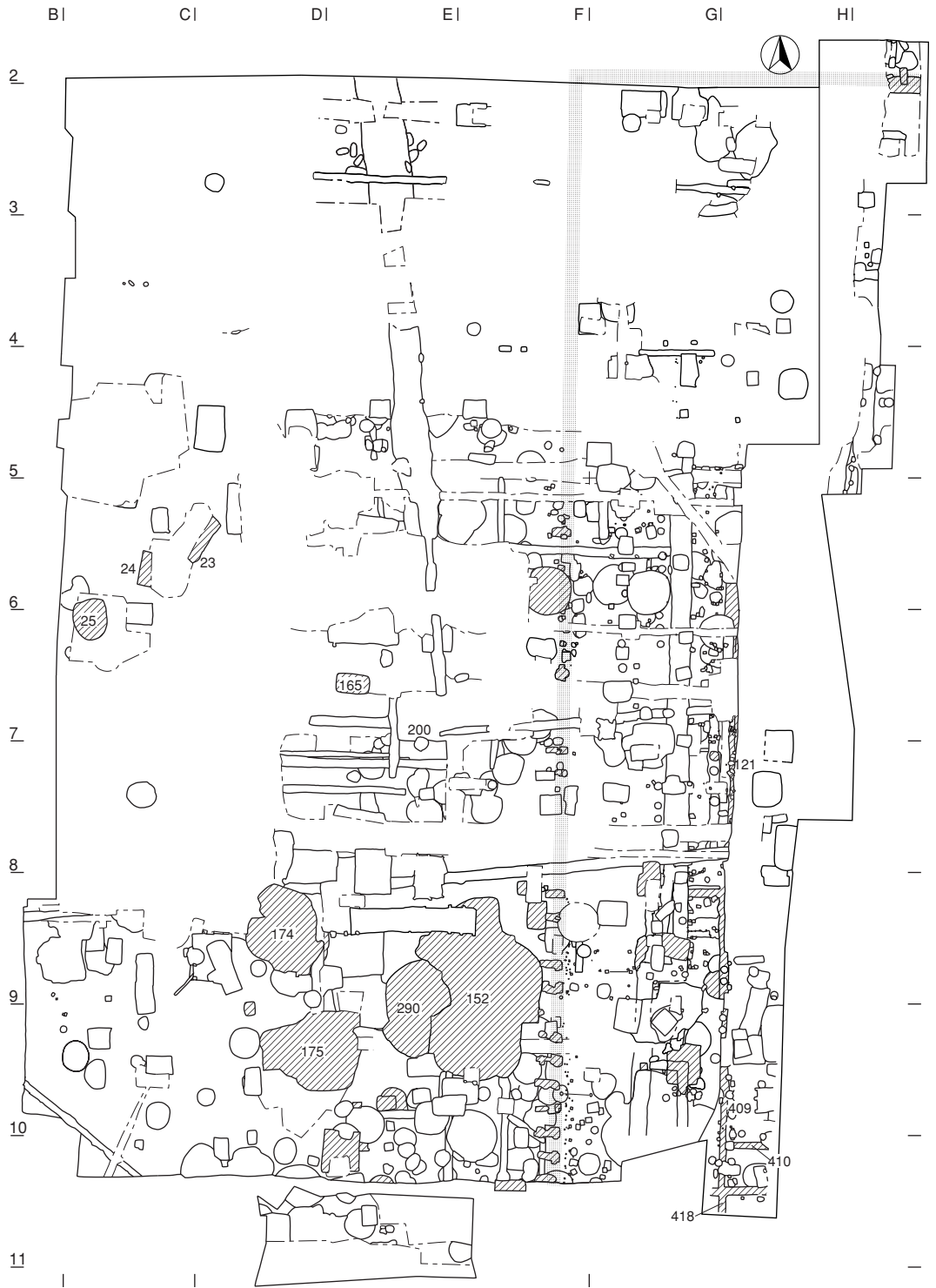


図5 2-3期の遺構

し、宴会後の一括廃棄を窺わせる状況も一部には認められたが、基本的には多器種に及ぶ量産品が廃棄されている状況から、日常的な廃棄行為による産物であると推定される。

このように、採土坑が密集するエリアは、そこに建物が無いオープンエリアであることが前提にあるが、オープンエリアとはいえ広場の利用の対象ではないなどの藩邸内土地利用計画的視点での選択や、藩邸の周縁部に位置する空間的特性からの選択が、頻繁な掘削を可能にする要因として抽出される。さらに、大形不整形土坑出土遺物の年代観は東大編年Vb~VI期に集中しており、土採り行為から遺物廃棄・埋め戻しまでのサイクルが短期間で終了していることがわかる。特にVb期の遺物が出土したSK290以外は全てがVI期に帰属する遺物を出土していることから、このエリアにおける土採り行為がVb期、即ち火災後の1740年代頃に始まり、VI期には、さらに盛んに進められたことを物語っている。東大編年VI期の下限は肥前磁器広東碗出現以前に設定され、おおむね1770年代に比定されることから、このエリアは約40年間にわたり、土採り行為とその(副)産物として廃棄行為に利用されたといえよう。

さて、1770年代の藩邸を描いた絵図に「江戸御上屋敷図」(図10)がある。現存する絵図では2-2期の遺構で引用した「前田家本郷御屋鋪図」(図9)に続く絵図と位置づけられている。この絵図には「右在京之内写之、安永六丁酉年暮春五月、高島厚定」とあり、年代の下限は安永6(1777)年であることがわかる。さらに絵図には安永元(1772)年に建設途中で焼失した「西御殿」の場所が大きく空き地になっていることから、その間の藩邸を描いた資料と位置づけられている(細川1990)。この絵図と調査地点と対比させてみると、調査地点北側に位置する作事所は、建物の配置状況に「前田家本郷御屋鋪図」から変化が認められるものの、正方形区画に変更はなく、区画は踏襲されていることがわかる。しかしその南側に位置するエリアに変化が認められた。南東隅の番所とその西側の建物に変更はないが、建物の北側から作事所までのエリアが「西御殿」焼失場所と同様に、隅丸形状に区画され、その中が彩色されている。そして中央には「明地」と書かれている。作事方門から藩邸に入り、作事所へ行くためには、番所の前を西へ進み、建物が切れたところを右折北上し、作事所南西角にある「入口」から入るルートが想定され、番所の裏側にあたる「明地」は通行の妨げにもならず、門からの景観にもそれほど気を遣う場所ではなかったように思われる。ところで、「西御殿」焼失後の空き地に関しては、法学部4号館地点の調査で、焼失した「西御殿」のものと同様に推定される被災瓦が不整形遺構に多量に廃棄され、さらにそれを切って掘削された大形不整形遺構へ多量の遺物が日常的に廃棄された様相が確認されている(5)。

この「明地」と作事所との境界は、先述したように絵図との対比から変更は認められず、調査地点7ライン付近と考えられる。7ライン以北、作事所区域に関しては繰り返し述べているように病院建物による攪乱のために遺存状況は極めて悪く、SK22、SK23、SK165の長方形土坑、SK25の不整形土坑、SU24の地下室が検出されたにとどまる。このうちSK23は他の遺構に対し、主軸方位がN-33°-Eと大きく東へ触れている。17世紀後半以降本地点検出の遺構主軸はほぼ東西南北方向で統一されており、遺構の性格、空間利用の規制などが働いていたことも想定されるが、現況では判断し難く課題として残される。

この作事所想定区域内の南側境界付近に位置するSK200は、出土遺物が全くなく帰属する年代を位置づけることは不可能であるが、第III章でも触れたように本遺構はその平面形態が農学部図書

館地点SK10と類似している(東京大学埋蔵文化財調査室 2004)。SK10からは鍛冶を想定させる生産関連遺物が出土していることから、作事所区域内で検出された本遺構も、藩邸内での生産活動に関連する遺構としての可能性を指摘したい。

一方、SA155東側の大聖寺藩邸では、2-1～2期に観られた地下室群が姿を消し、Gライン付近に溝状遺構が認められる。本郷邸において2類タイプの地下室は、17世紀後半から18世紀前半にそのピークがあることが、法文地点、理7地点、山上会館龍岡門別館地点(東京大学埋蔵文化財調査室 2004)などの詰人空間の調査によって明らかにされている。よって、本地点においても地下室が認められなくなったことが、詰人空間長屋域から土地利用に変更があったことには直接繋がるものではない。そこで溝状遺構のあり方から土地利用の状況を考えてみたい。SD121、SD409、SD410、SD418と複数の遺構番号が付された溝状遺構は、南北に延びるSD121、SD409を基準に考えた場合、SD410、SD418はそこから東西方向に派生した遺構で、全て関連した遺構であると考えられる(6)。第Ⅲ章でも触れているようにこの溝の構造は側壁際に残された多数の杭痕から板枠の溝と考えられる。東西方向のSD410、SD418の間隔は真々ではほぼ350cmと田舎間でも2間に満たない間隔で延びている。さらにSD418はSD409の西側へも延びており、非常に細かい区画が意識されていたことが看取される。このような溝による細かい区切りは年代は100年近くさか上るものの病棟地点で検出された「黒多門邸」内の長屋群に配された溝と共通する(拙稿1997)。「黒多門邸」長屋群における溝の配置は、基本的には各長屋建物に沿った路地の側溝の形態を呈しているが、最西端の長屋に関しては路地を横断する溝が幾条も設置されていた。この溝の間隔は隣接する長屋の各住戸単位で付設されており、流しなどの水利関連施設に対応した形で設置されていたと考えられる。その様相から水場を伴う区画が細かければそれに対応するように溝も必然的に支線が増え、例えば御殿の膳所のような大規模施設では長屋域と比較して溝の本数は少なくなると考えられる。この推論にたてば本地点の溝のあり方は長屋空間を反映したものと考えることができ、大聖寺藩邸側は引き続き長屋域であったことが想定される。

(5) 2-4期 大聖寺藩邸絵図と検出遺構

1790年代頃に作成された絵図には、前段階の絵図に表記された「明地」部分に長屋建物が建設されており、本地点における土地利用に変化があったことが窺える。この長屋建物はそれ以降、文政12年の大聖寺藩邸拡張以前のいずれの藩邸絵図にも描かれている(図11)。本段階に帰属する遺構は少なく、特に18世紀末段階に比定される遺構はC4グリッドに位置するSK122などが認められるのみで、帰属年代の特定できる遺構のほとんどが19世紀初頭、東大編年のⅧa期に該当する遺構である。以下に、SA155を境にⅧa期の遺構分布と特徴を概観したい(図6)。

SA155西側、即ち加賀藩邸サイドでは、4D～4EグリッドにSK98、SK99の長方形土坑などが分布する。SK98、SK99はともにほぼ東西方向に主軸を持つ同規模の長方形土坑で、砂利、ローム粒を含む暗灰褐色土を覆土に持つ点で共通する。また、覆土には完形率の高い陶磁器類が多量に廃棄されており、覆土の状況も併せ、第1次廃棄を目的とした廃棄遺構と考えられる。調査区7ライン以北の土地利用は引き続き作事所として機能していたことが絵図面から判断でき、それに伴う「芥溜」と位置づけられる。作事所の南側、調査区7ライン以南は、前段階では積極的に採土坑

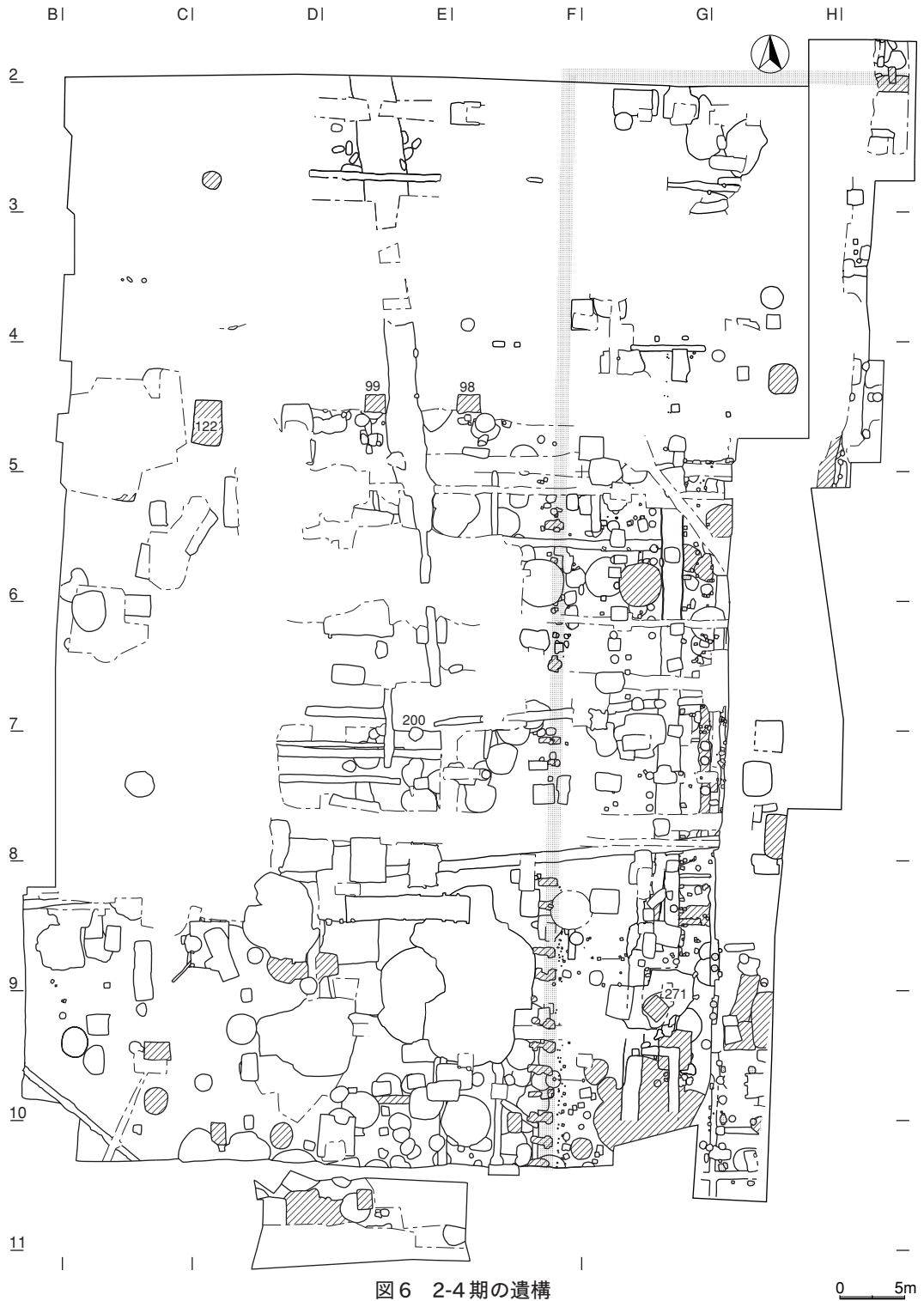


図6 2-4期の遺構

が掘削されたエリアである。18世紀末から19世紀前葉(文政12年以前)に描かれた絵図には南北に延びる2棟の長屋が描かれ、居住空間として利用されたことが読み取れるが、それに伴う遺構は検出されなかった。

SA155東側、大聖寺藩邸サイドではF9グリッドに位置するSE271がある。SE271はほぼ東西南北方向の主軸で統一された大聖寺藩邸内の遺構のなかで、約45°の傾きを持っている。大聖寺藩邸には文化年間の様相とされる絵図が唯一存在する。本絵図と検出遺構の対比の試みは、中央診療棟地点の調査報告において2基の井戸を基準に行われ、本絵図が比較的正確に描かれていることを検証した。本絵図と調査地点とを藩邸境界や井戸を基準に対比させると上屋施設と考えられる小黑点を左右に2基伴った井戸がSE271付近に該当する(7)。その井戸に描かれた小黑点を結んだ方位が周囲の建物より約45°ずれており、SE271の主軸方位とほぼ同一方向を指すことから、SE271とこの井戸が同一である可能性は極めて高いものと考えられる(図13)。

(6) 3 期 遺構構造からみた空間の推察

第1節でも述べたように、本段階では文政12年に加賀藩邸からの借地によって大聖寺藩邸西側が拡張される。この屋敷割りの変化によって、大聖寺藩邸の西端は調査地点B～Cライン付近へ移動したことが絵図との対比で読み取ることができる(図12)。しかし残念ながら再三述べているように該区の遺存状況は悪く、境界関連の遺構を検出することはできなかった。以下に、出土遺物から帰属年代が明らかな遺構を中心に前後の土地利用状況を検証し、本地点における空間復元を試みたい(図7)。

文政12年の屋敷割り変更によって調査地点の大部分が大聖寺藩邸に含まれることは既に述べた。それ以降に廃絶されたと考えられる遺構にGライン付近を南北に延びるSD62とSA120、C8～D8グリッドに位置するSK265、SK269の大形方形土坑、C10グリッド付近のSK81、SK392やB8グリッドのSK51などの不整形遺構、A9～B10グリッドにかけて北西方向に延びるSD53、SD62東側の便漕遺構群などがある。

SD62は当初SE271の北側で西側へクランク状に屈曲していたが、その後SE271の南側でさらに東側へ屈曲するように改築され、結果的にSE271を囲み、その部分だけが西へ張り出した形態を取るようになる。本遺構の存続期間は覆土中から「錦書」が施された薄手小坏が出土したことからⅧc期以降までは機能していたことが認められ(拙稿 2005)、おそらく幕末まで存続していたと推定される。一方上限については大聖寺藩邸絵図との関連から以下のように推測される。文化年間の大聖寺藩邸絵図によると井戸の西側には南北に延びる長屋が1棟描かれている。長屋は細かく間仕切りされ、西壁には部分的に庇状の施設が、東側には厠と考えられる正方形施設が間仕切り2～3ヶ所に1基付設されている。長屋の北側藩邸北西角には東西に延びる厩があり、東側にはもう1棟長屋が続いている。この長屋は井戸西側の長屋よりも短く、そのため井戸の東側は大きな空き地になっている。5ライン付近で東へ直角に曲がるSD62を絵図に対比させたとき、井戸北側に描かれた長屋のほぼ中央を横断することになり、長屋と同時期に存在したとは考えがたい。よって、絵図の描かれた文化年間頃にはSE271のみが存在し、その後、長屋が取り壊されたのを契機にSD62が構築されたと考えたい。その要因として文政12年の屋敷拡張が大いに関連していること

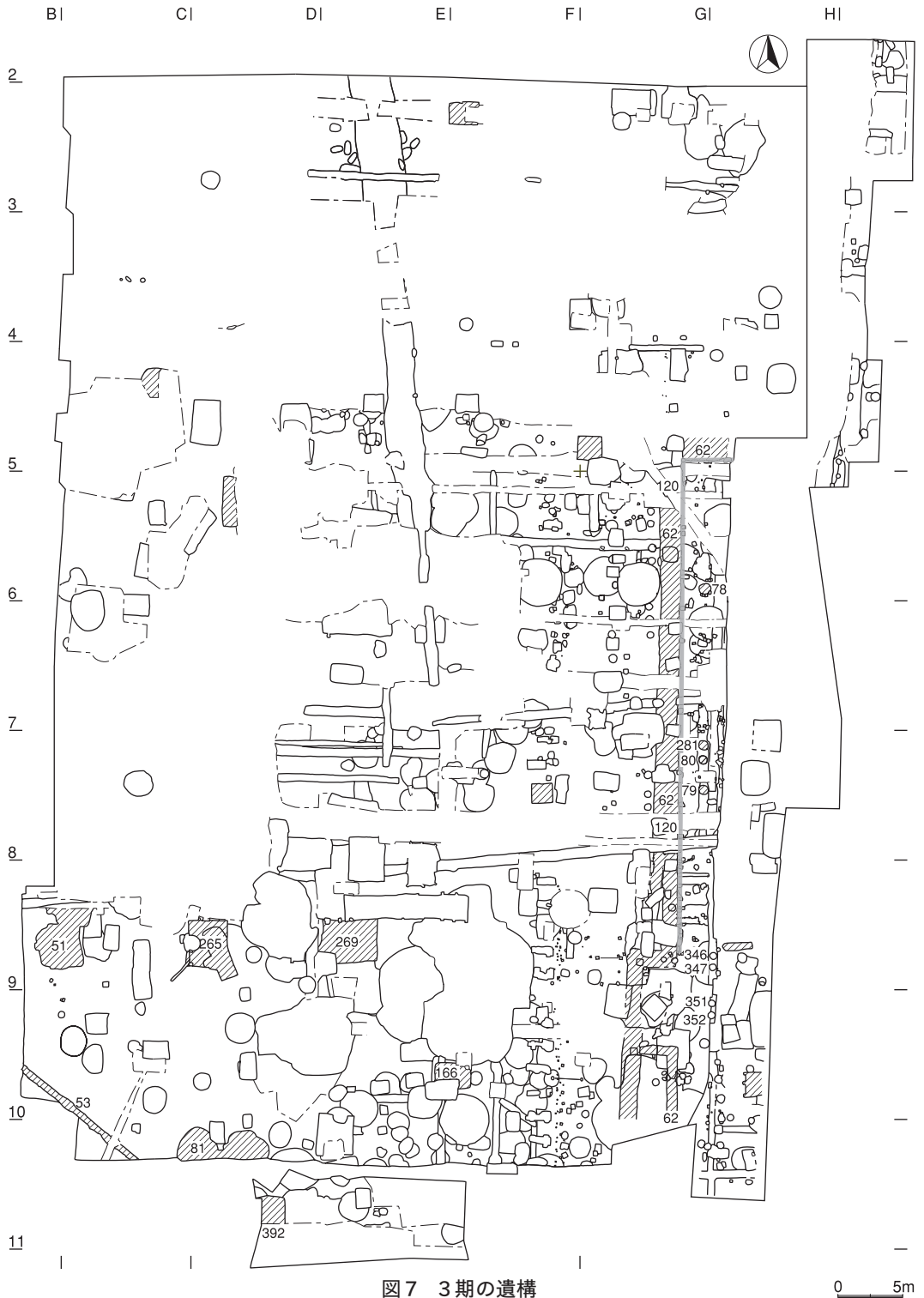


図7 3期の遺構

が推定される。

大形方形土坑はともに壁柱穴を有し、ほぼ平行に並んでいる。このような形態の土坑は本地点においては2-1～2期の加賀藩邸側に位置し、御殿空間や役所などの共有空間部分に構築される遺構であることを指摘した。本遺構もその規模から類似する土地利用を想定でき、加賀藩から借地したエリアには役所などの共有施設、もしくは御殿空間に伴う収蔵施設を構築するような空間として利用されていたことが考えられる。大形方形土坑の西側と南側に不整形土坑が存在する。それらの遺構から出土した陶磁器類の年代観は大形方形土坑よりも新しい様相を呈している。これらの不整形遺構は複数の遺構が重複しているかのような複雑な形態を呈しているが、覆土の埋没状況から単一遺構と考えられ、土採り行為が行われていたことが推定される。また掘削後はやはり廃棄遺構として利用され、特にSK81では大量の陶磁器・土器類をはじめ、食物残滓、木製品など日常生活において生じた「ゴミ」の廃棄が行われており、コンテナ約50箱の遺物が出土している。そのなかには「天保四歳」(1833年)と墨書された遺物が含まれていることから、本遺構が借地後の大聖寺藩邸に帰属する遺構であることは間違いない。文政12年の借地は「新広式」建設のためとされていることから、表門を藩邸東側に持ち、既に南北には余裕のない御殿空間が新広式建設によって西側へ膨張したであろうことは容易に考えられる。この場所がゴミ捨て場に選ばれたのは、御殿空間の外側にあり、且つ藩邸の最奥(西南)部に位置していたことによると考えられる。表門からみて同じ裏手であっても北西部には加賀藩邸との通用門が設置されており、土採り行為及び廃棄行為を行うことができるエリアは藩邸西南部に限られていたと推定される(8)。

このように本地点の西側では詰人空間の役所区域とその南側に廃棄区域が存在したことを推定させる遺構分布状況が認められた。では、東側の様相について、再びSD62に焦点を当てて考えてみたい。

SD62の側壁構造は、東側が間知石による石組であるのに対し、西側には側石が無い部分が多く、多数の杭痕のみが検出されている。このうち北寄りに関しては残存する間地石や掘方規模から、後世に抜き取られた可能性が指摘されるが、南寄りでは掘方規模から間地石を設置できるだけの奥行きがなく、元来石組で構築されていなかったと考えられる。杭痕群には何条かの直線状に延びる組み合わせを観察することができ、杭列が複数回作り直された結果として捉えることができる。それに対し、東側の側縁石下にはこのような杭痕は無く、間地石を設置するための土台として打たれたとは考えがたい。以上の様相から西側の杭列は板材を支えるための支柱として打たれたものと推定され、板枠と石組という東西で異なった壁構造を呈した排水施設であったことがわかる。

ところで、本遺構の東には隣接してSA120が存在する。この柱穴列はSD62が北端で東側へ直角に折れるとそれに従い、東側へ延びていることが確認されており、明らかにSD62を意識して構築された塀と位置づけられる。加賀藩邸内部を詳細に顕した「江戸御上屋敷絵図」には、御殿空間の周囲、諸所の区画の周囲に塀が巡らされていることが看取される。そのなかには(例えば厩の周囲、御殿空間の周囲など)塀が水色で彩色され、排水施設が付設されていたことを読み取ることができる(図12左端の太線部分)。加賀藩邸の例を援用するならば、SD62は単に藩邸内の排水施設として機能していたのみでなく、石組後方に塀を伴う境界施設としての機能も有していたと考えられる。さらにその東側区域における遺構状況を分析して、空間区画の目的について考察したい。

SD62の東側には便漕遺構が南北方向に分布している(北からSL78、SL281、SL80、SL79、SL346、SL347、SL351、SL352)。遺構廃絶年代を特定できる遺物が出土していない遺構がほとんどだが、ほぼ同列上に2基セットの様相を呈して配置していることから同時期に存在した遺構群と考えられる。このうちSL78からは銀製の簪が2点(IV-117図8、9)、SL80からは銀製の簪2点、真鍮製の笄、襟留め(IV-117図11～14)、SL347からは銀製の簪(IV-118図52)が、いずれも坑底直上から出土している。覆土中にはほとんど遺物が含まれていないにも関わらず、装身具のみが出土した特異的な状況に加え、遺構の性格を便漕と特定した一要因である灰褐色粘質土が覆土下層にほぼプライマリーな状態で堆積しており、遺構廃絶時の様相を維持して検出されたと判断されることから、これらの装身具は遺構存続期において居住者(利用者)が、廁使用時に誤って遺失したものと推定される。そして、出土した装飾品が簪、笄など女性を所有者として特定できる物品であることから、本遺構群は女性居住区に帰属する廁群であることが推定される。

ところで、文政12年の藩邸拡張理由は「新広式拡張のため」であった。広敷とは奥向き、即ち藩主の私的空間を指す用語で、藩主の私的居住区に続き、夫人に仕える奥女中の居住区(長局)も設置されている。近接して配置された廁の様相が、長屋に帰属するあり方であることは、法文地点や理7地点での研究成果及び加賀藩邸絵図の長屋描写からも追認することができる。従って本地点における便漕群は、奥御殿のなかでも奥女中居住区に帰属する施設とみなすことができる。

本地点における大聖寺藩邸区域は、文政12年の藩邸拡張まで、遺構配置、絵図情報から詰人空間の一角に該当していた。文化年間の絵図に示されるように大聖寺藩邸の表門は藩邸東側の私道に面して設置されている。表門の位置は、嘉永年間の尾張屋版江戸切絵図などにみられる拝領者表記文字方向から、幕末まで変化していないものと読み取れ、表門から西へ表御殿、奥御殿と続く藩邸の基本的空間構成は、文政12年の新広敷建設による藩邸拡張に伴って大規模な変更はなかったと捉えられる。従って、新広式建設に伴う御殿空間の拡張が、本地点内に奥女中居住区が存在するようになった要因として考えられる。

SA120と便漕群は、約半間と至近距離に構築されていることから、その間に構築物の存在は考えられないし、現状でも存在しない。また便漕群は、5ライン以南に分布し、SA120の東西部分より北へは拡がりをみせていない。従って、便漕群と帰属する居住区を取り囲むようにSA120が配置されており、居住区の区画施設としての機能を有していたと予想される。しかしながらSA120とそれと平行するSD62の東西部分は隣接する中央診療棟地点に向かって伸びているものの、中央診療棟地点の南半部は明治期の病院建物基礎による大規模攪乱を受けており、残念ながらその延長に対応する遺構を確認することはできなかった。そのため遺構配置からはSA120+SD62が建物を区画するための施設であったのか、広域に及ぶ境界施設であったのかを判断することはできなかった。そこで、先述したSD62の壁構造と、隣接するSA120との関連から周辺域の様相を以下に検討したい。

SD62の石組側にはSA120が構築されており、両者には側溝と区画塀という一連の関係をみいだすことができる。即ち、ある特定の区域を取り囲む塀施設SA120が地表面へと連続する景観としてSD62があり、石組があるといえる。もちろんその位置関係から間地石直上に塀が構築されたものではないが、本遺構の場合、SA120が柱穴列であることから側溝からやや内に引いた位置関

係になることは必然的な結果といえる。塀は広辞苑によると「家や屋敷などの境界とするかこい」とあり、大名藩邸ではまず外界との遮蔽のために藩邸周囲に巡らされている。さらに先述したように藩邸内部を区画するためにも構築されている。法文地点では御殿空間と詰人空間を仕切る18世紀前半の塀跡が検出されている。この塀跡は本地点のSA155と同じ形態を取り、一掘方内に支柱と支柱を支える礎石を有していた。礎石立ての塀は後ろへの控えとなる支柱を伴うことから、塀の正面を容易に認識することができる。その結果、法文地点の塀跡では詰人空間側を正面とし、本地点のSA155では大聖寺藩邸側を正面としていることが確認された。両地点の事例は御殿空間と詰人空間、加賀藩邸と大聖寺藩邸という2空間を区画する施設として構築されており、法文地点では御殿空間が、本地点では加賀藩邸が塀の内側に入る、即ち囲まれている側にあたり、道路や溝、堀などを介さずに1枚の塀によって境界が設定される場合、藩邸内にあっても必ず上位にあたる側が塀の内側—囲まれる側—に位置づけられる。この状況からSD62の属性を考えた場合、塀を伴う石組側が、囲まれる側と判断することができ、塀から石組までを共有する景観がそこに存在していたと考えられる。一方、SD62の西側は、一部に石組の構築が認められるものの、その間地石下にも杭穴が存在することから、SD62構築当初の西側壁構造は板材を杭で固定した簡素な構造を呈していたことが想定される。そして、SD62は排水施設としても機能していることから、当然両壁の構築は同時に行われており、時期差が形態差の要因となることはあり得ず、SD62は石組から塀に至る景観を持つ側面と、板枠の簡略構造を持つ側面の2側面が同居する属性を有している。即ち、塀の内側と外側の空間属性の差が、直接両壁の構造差として表出された結果として捉えるべきで、塀の内側には女中居住区、即ち奥御殿の一部の存在が明らかなことより、塀に囲まれた空間は御殿空間と考えられる。それに対し、塀の内部からみて下位に位置づけられ、簡素な壁構造に表出された外側空間は、詰人空間として位置づけることができ、SD62 + SA120は大聖寺藩邸御殿空間を取り囲む境界施設の一部であると考えられる。

4. おわりに 藩邸研究の展望と課題

筆者は以前、加賀藩邸における地下室の構造と配置、検出遺構主軸方位の差から御殿空間と詰人空間の様相差と土地利用に働く規制を論じたことがある(拙稿 1990、1994)。本調査でも17世紀末～18世紀前半の地下室分布のあり方に加賀藩邸と同様のあり方が認められた。さらに地下室、便漕などの構成施設の分布状況から長屋の規模復元につながる成果を導くことができたことは、居住者の階層にも応用することができ、このような成果を蓄積することによって、絵図情報などが得られない調査であっても、住環境復元の一助になることだろう。また、遺構構造にみられる特質を周辺遺構と文献資料からの分析で藩邸内の様相差として位置づけることを試み、やはり絵図、文献資料が乏しい状況下で一定の成果に達することができたと考える。その一方で、検出された建築遺構の基礎構造や基準尺度の問題、本地点南西部から検出された木樋の問題など本地点検出遺構に対する諸問題について充分触れることができなかつた。また1期における第1主軸グループに関しては、その主軸方位が旧地形に規制されていることを示唆したものの、本段階の遺構に関しては本郷構内他地点での検出例も増加しており、今後本郷邸全体を視野に入れて検討する必要がある。さら

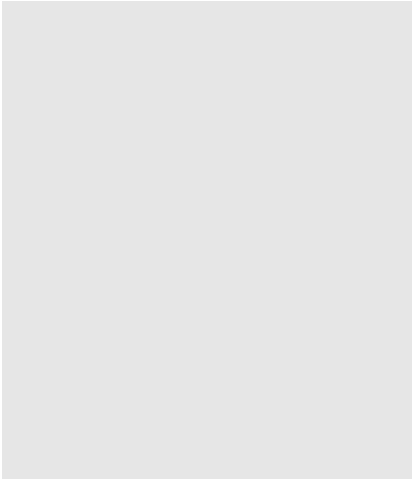


図8 1688年の絵図と調査地点

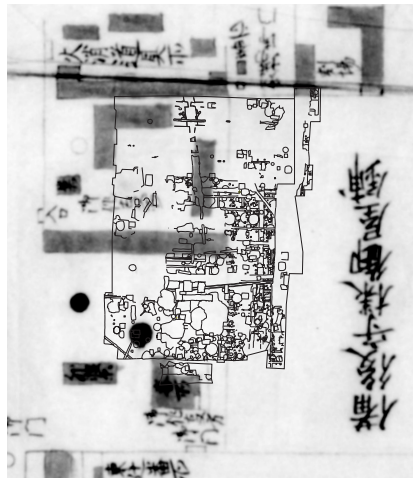


図9 1760年代の絵図と調査地点

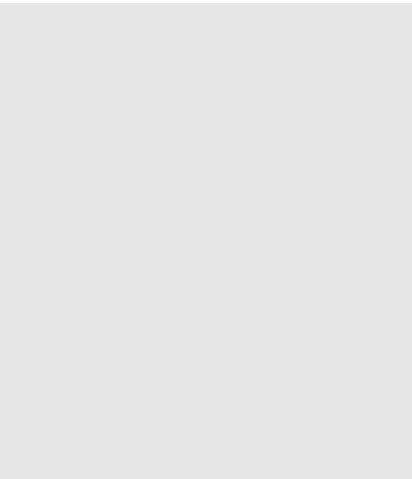


図10 1770年代の絵図と調査地点

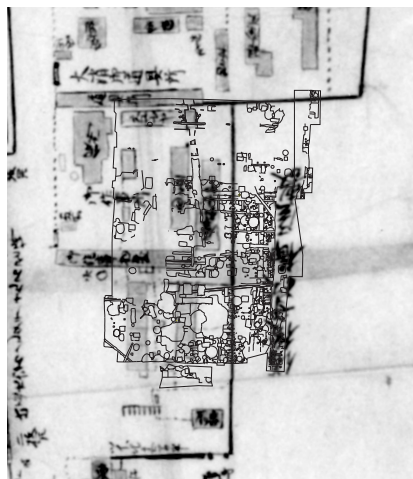


図11 1800年頃の絵図と調査地点

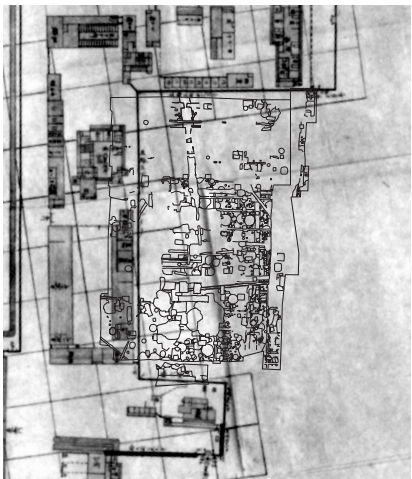


図12 1840年代の絵図と調査地点

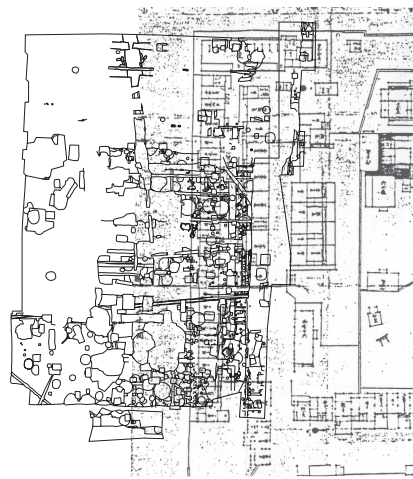


図13 大聖寺藩邸絵図と調査地点

に溝状遺構のみにとどまらず、本郷台地の東縁部に位置し、尾根から緩斜面上にありながらも浸食谷による複雑な様相を呈する旧地形に対して、17世紀代に繰り返行われた本郷邸形成土木事業は、藩邸内での循環型造成作業としても位置づけることもでき、土地利用の変化、境界、土砂・瓦礫のリサイクルなど多角的視点からのアプローチを踏まえて論じる必要性があり、今後の検討課題としたい。

冒頭でも触れたとおり、大聖寺藩邸の調査は病棟地点、第2中央診療棟地点と続いて行われ、今後両地点の分析を加え、大聖寺藩邸における空間構造の再構成を図ることは調査担当者に課せられた責務である。さらに都内各所で調査された他藩邸との十分な比較検討を試み、追川によって「小宇宙」と称された(追川 2004)大名藩邸の考古学的研究の発展と探求を課題とし、筆を置きたい。

文末になったが、絵図面の解説にあたっては史料編纂所の宮崎勝美氏の御教示によるところが大きい。また絵図面掲載に関して、快諾をいただいた前田育徳会尊経閣文庫、財団法人三井文庫、石川県立歴史博物館、金沢市立玉川図書館の各機関に関しても、記して感謝の意を表したい。

【註】

(1) 大聖寺藩史に以下のような記録がある(大聖寺藩史 1938)。

【青池文書】

一、文政十二年、江戸表に新御廣式建申に付、御本家様より御屋敷拜借也。

七百二十八坪初而來る。

二百十四坪半重而來る。

なお、廣式とは、大名藩邸の奥向きのことである。

(2) 筆者は、拙稿において本郷邸から検出された地下室を以下のように分類した。

1類：入口部から直接室部へつながる地下室のうち、断面形は巾着形を呈し、床面の平面形は楕円形、もしくは隅丸方形を呈する。天井高が低く、室内で大人が活動する際、腰を屈めなければならない規模である。

2類：入口部から直接室部へつながる地下室のうち、断面形は凸形を呈し、床面の平面形は方形、長方形、台形を呈する。1類同様天井高が低く、室内で大人が活動する際、腰を屈めなければならない規模である。

3類：入口部から直接室部へつながる地下室のうち、天井高が高く、室内で大人が優に直立して活動ができる規模である。基本的には断面形は凸形を、床面の平面形は方形もしくは長方形を呈するが、中には複数の室部を有し、平面形がL形、T形を呈するものもある。また入口部直下の床面には梯子を固定したと考えられる柱穴を有したものや、壁面には柵状の掘り込みを有するものもある。

4類：入口部から作り付けの階段により室部へつながる地下室である。3類同様天井高が高く、室内で大人が優に直立して活動ができる規模である。開口部は階段部分のみで室部は全て天井に覆われている。床面の平面形は方形もしくは長方形を呈するが、3類同様ヴァリエーションが多く、複数の室部や室内施設を有するものもある。

(3) 貞享2(1685)年5月に、以下のように長屋の貸与が規定されている(『加賀藩史料』第四編所収)。

十間	三間梁	庇五尺	空地四間一尺	御番頭
同				御小將横目
同				知行千石以上
九間	同断			
八間	同断			知行七百石

九間之者は、十間にも又は八間にも、至其時頭々見計次第也。若又九間之所有之長屋は是にても。

七間	知行四百石より六百石迄
六間	同三百五十石より二百石或百五十石
五間	同百五十石以下

九間江者小將横目入申心得にて内圍相計可申候。三間梁庇有。

四間 小頭。 三間 徒横目。二間 組中。

- (4) 「前田家本郷御屋敷図」は1760年代作成の絵図とされており、本段階の空間構成と厳密に対比することは不可能であるが、次段階の土地利用のあり方に大きな変更が認められた調査成果が、1770年代作成とされる「江戸御屋敷図」と比定できる可能性が高いことから、時間軸に隔たりはあるものの本段階の様相を考える上での資料として扱いたい。
- (5) 出土遺物の年代観は、東大編年Ⅶ期と本地点より一段階新しい様相を呈している。
- (6) 事前発掘に携わる1人として弁明にもならないが、緊急追加調査という環境下で残念ながらその詳細を認識することはできなかった。
- (7) SE271と絵図面との関係は、Ⅲ-106図を参照されたい。
- (8) 本地点に隣接する中央診療棟地点、病棟地点、第2中央診療棟地点は、大聖寺藩邸の東域に該当するが、Ⅷb期以降の遺物を伴う大形廃棄遺構は検出されず、藩邸東域には廃棄空間がでなかったことが確認されている。

【引用・参考文献】

- 石川県図書館協会 1972 『景周先生小著集』
- 追川吉生 2004 『江戸のマイクロコスモス 加賀藩江戸屋敷』シリーズ「遺跡を学ぶ」011 新泉社
- 大聖寺藩史編纂委員会編 1938 『大聖寺藩史』
- 田中正幸 1995 「加賀藩上屋敷本郷邸における長屋類型と詰人空間構成」『東京大学史紀要』第13号
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「農学部図書館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 成瀬晃司 1990 「江戸藩邸内土地利用研究の一指針」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2
- 成瀬晃司 1994 「江戸藩邸の地下空間－東京大学本郷構内の遺跡を例に－」『武家屋敷－空間と社会』山川出版社
- 成瀬晃司 1997 「加賀藩江戸藩邸の調査－天和二（一六八二）年焼失の長屋群－」『地方史・研究と方法の最前線』雄山閣

研究編 1. 外来診療棟地点における藩邸周縁部土地利用

- 成瀬晃司 2005 「上絵小坏と商標－江戸遺跡出土資料を中心に－」『江戸時代の名産品と商標』江戸遺跡研究会第18回大会資料
- 藤本 強 1990 『埋もれた江戸－東大の地下の大名屋敷－』平凡社
- 細川 義 1990 「加賀藩本郷邸の全体図について」『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4
- 堀内秀樹 1990 「江戸における井戸の有する二側面」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2
- 堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- (財)前田育徳会 1931 『加賀藩史料』第四編
- 山口剛志・羽生淳子 1989 「考古資料から見た理学部7号館地点」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1

【絵図の出典】

- 図8 「武州本郷第図」(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)
- 図9 「前田家本郷御屋敷図」(財団法人三井文庫所蔵)
- 図10 「江戸御上屋敷図」(前田育徳会尊経閣文庫所蔵)
- 図11 「加藩江戸本郷屋敷総絵図」(石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション)
- 図12 「江戸御上屋敷絵図」(金沢市立玉川図書館所蔵清水文庫)
- 図13 「江戸藩邸上屋敷図」(『大聖寺藩史』所収)

外来診療棟地点出土陶磁器・土器類について

堀内 秀樹

1. 分析の目的と方法

出土遺物を位置づけるにあたり器種組成、産地組成の分析から①文化相の復元（衣・食・住文化など）、②社会・経済相の復元（流通、階層性など）、③年代相の復元（編年など）を目的とするものである。ここであげた目的である文化史、社会・経済史の復元、時間軸の構築を行う手段として数量的分析法（Assemblage）が現段階では極めて有効な分析法であると考えている。

外来診療棟地点出土の陶磁器・土器の整理、分析するにあたっては分類可能な遺物全点を分析の対象とし、特に遺構中より出土したものについては一括遺物としてまとまりとしてとらえ、遺構別の把握を行い、以後の定量的分析の基礎資料とした。分析は推定個体数100個体以上出土した遺構について行った。ここで使用したカウント法は、基本的に底部中央など個体に1カ所しかない特定の部位をカウントする推定個体数で表示した（表2）。また、特定の部位が確認できなくても分類自体が存在する場合には「0」を表示した。この手法は評価するユニットが遺構のみならず、遺跡・地域・年代などに求める場合においても、重複してカウントするといった数量的誤差が生じにくいメリットがあると考えている。

分析の方法については、以下のような手順で行った。

- ① 出土した陶磁器全般にわたり胎土、施釉技法、成形技法、文様等の特徴で産地、また主に器形的特徴で器種の分類を行う。さらに細分可能な器種に関しては細分類を行い、その分類基準となった諸特徴を示す。これについての詳細は「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)」(東京大学埋蔵文化財調査室 1999)において既に行った。
- ② 遺構一括遺物群における各分類の数量を推定個体数での呈示を行い、以降の分析の基礎資料とする。
- ③ 陶磁器群がほぼ同様の器種組成を示すものについて同時期の廃棄ととらえるとともにその組成が相対年代に位置づけるに際して共通の理解を得られるであろう最小単位の把握を行う。またその組成を明示する。
- ④ 各最小単位の相対的順序を把握する。遺跡における層序、遺構の切り合いから各期の組列の方向を推定し、段階の古い順にその様相をとらえていく。
- ⑤ 各期の実年代の推定を行う。推定は出土量も多く、文様・器形等の変化が顕著であり、生産地での研究も進んでいる肥前及び瀬戸・美濃の磁器碗・皿を用いて行った。本分析において分類された器種について、生産地での研究及び東京大学本郷構内の遺跡及び他の江戸遺跡における紀年銘資料、災害、土地利用の変遷など遺跡の状況とを判断材料とした。③～⑤については「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」(堀内 1997)において既に行った。

○胎質

J. (磁器) T. (陶器) D. (土器)

○生産地

A - 輸入陶磁器

- A1 景德鎮窯系
- A2 漳州窯系
- A3 德化窯系
- A4 龍泉窯系
- A5 宜興窯系
- A6 朝鮮
- A7 ベトナム
- A8 ヨーロッパ

E - 備前系

F - 志戸呂系

G - 常滑系

H - 萩系

I - 万古系

J - 大堀・相馬系

K - 丹波系

L - 堺系

M - 益子・笠間系

B - 肥前系

N - 九谷系

C - 瀬戸・美濃系

O - 壺屋系

D - 京都・信楽系

P - 淡路系

Z - 不明

○器種

- | | | | |
|-----------|----------|-----------|-------------|
| 1. 碗 | 17. 爛鍋 | 33. 鍋 | 49. 涼炉 |
| 2. 皿 | 18. 合子 | 34. 土瓶 | 50. 五徳 |
| 3. 大皿 | 19. 水滴 | 35. 戸車 | 51. 塩壺 |
| 4. 爛徳利 | 20. 蓮華 | 36. ちろり | 52. 燭台 |
| 5. 鉢 | 21. 植木鉢 | 37. 薬研 | 53. 蒸し器 |
| 6. 坏 | 22. 花生 | 38. 手焙り | 54. 懐炉 |
| 7. 猪口 | 23. 片口鉢 | 39. おろし皿 | 55. 泥面子・芥子面 |
| 8. 仏飯器 | 24. 灰落とし | 40. 油受け皿 | 56. 基石形製品 |
| 9. 香炉・火入れ | 25. 鬢水入れ | 41. 油徳利 | 57. 玉 |
| 10. 瓶 | 26. 茶入れ | 42. 行平鍋 | 58. 鈴 |
| 11. 御神酒徳利 | 27. 水注 | 43. 十能 | 59. 笛 |
| 12. 油壺 | 28. 洩瓶 | 44. ひょうそく | 60. 人形 |
| 13. 蓋物 | 29. 播鉢 | 45. 瓦燈 | 61. ミニチュア |
| 14. 筆立て | 30. 餌入 | 46. カンテラ | 62. 面型 |
| 15. 壺・甕 | 31. 火鉢 | 47. ほうろく | |
| 16. 急須 | 32. 柄杓 | 48. 七輪 | 00. 蓋 |

表1 東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(略)

2. 外来診療棟地点の出土陶磁器・土器群の様相

医学部附属外来診療棟地点からは、コンテナ箱にして約630箱の陶磁器・土器類が出土した。これら遺物はSD45など17世紀前半から幕末まで連続して出土が認められるが、当該地点の歴史的環境から加賀藩、大聖寺藩に関係するものであると判断される。ここでは外来診療棟地点の出土陶磁器・土器群の様相から、「2-(1)陶磁器・土器の出土様相と土地利用」、「2-(2)元禄十六(1703)年と享保十五(1730)年もしくは元文三(1738)年の火災資料」について概観したい。

外来診療棟地点で推定個体数100個体以上の遺構は、SK139、SK18、SU20、SK141、SU279、SK137、SK290、SK152、SK174、SE271、SK81、SK166、SK392の13遺構である(表2)。器種組成の様相からSK139は東大編年のIVb期、SK18、SU20、SK141、SU279はVa期、SK137、SK290はVb期、SK152、SK174はVIa期、SE271、SK81はVIIIb期、SK166、SK392はVIIIc期にそれぞれ比定される。

(1) 陶磁器・土器の出土様相と土地利用

ここでは外来診療棟地点出土の陶磁器・土器の様相を遺構検出状況、絵図面・文献からわかる藩邸の変遷などと対比させてその特徴を概観したい。本郷邸の歴史的環境は別項で詳細に触れている(東京大学埋蔵文化財調査室1990、堀内1997)ので省略するが、大きく四段階に分けることができる。ここでは加賀藩下屋敷期(1616、1617～1639)とそれに続く大聖寺藩上屋敷期(1639～1682)を一括して、次の三大別して進めることにする。1期 加賀藩下屋敷期、大聖寺藩上屋敷期(1616、1617～1682、東大編年Ib～IIIb)、2期 大聖寺藩・加賀藩上屋敷期(1683～1829、東大編年IV～VIIa期)、3期 大聖寺藩上屋敷期(1829～幕末、東大編年VIIIb～VIIId)。

1期 加賀藩下屋敷期、大聖寺藩上屋敷期(1616、1617～1682、Ib～IIIb期)

Ib～IIIa期 本郷邸が前田家に拝領したのは元和二から三(1616～1617)年のことで、それ以前は大久保忠隣の屋敷地であったことが記録に残っている。しかし、これまでの発掘調査で大久保の時期のものと思われる遺構・遺物は検出されていない。加賀藩本郷邸は拝領から天和二(1682)年「八百屋お七の火事」を契機に上屋敷ここに移るまで下屋敷として利用されていた。大聖寺藩は藩として成立を見るのが寛永十六(1639)年である。加賀藩主前田利常が隠居、嫡男光高に藩主を継がせるのにあたって、三男利治に加賀国の南部7万石を分地し、大聖寺藩を立てた。同時に前田利治は本郷邸内の東側を上屋敷用地として加賀藩から貸与される。この時期、当該地は加賀藩の支藩である大聖寺藩邸域にあった。当時の大聖寺藩邸の屋敷構成の詳細は不明であるが、表部分は屋敷の東南側に位置していたことが門(SG1608)が検出された医学部附属病院第二中央診療棟地点の調査成果によって推定されており、調査区は裏部分に該当すると推定できる。

当該期でもっとも古い一括資料はSD45出土遺物である。ここからは初期のJB(肥前系磁器)が少量出土しており、寛永年間くらいには土地利用が開始されたと考えられる。

IIIb期 当該期で遺物が量的に多く出土した遺構は認められなかったが、天和二(1682)年の廃絶と推定できる一括資料が出土している遺構として、SE100出土資料がある。東大編年のIIIb

期に比定される。SE100は二次的火熱を受けた上質の肥前系染付皿、小坏、蓋物、銚子などが複数個体出土しており、遺物群における磁器の割合が非常に高いことや七寸以上の揃いの皿が多く認められることなど際だった特徴が伺える。皿は江戸期を通じて四寸から五寸が基本的サイズであると考えている。このサイズは膳の大きさに規制されていると考えており、当時の武士が一般的に食されたとされる一汁一菜あるいは一汁二菜が膳に載せるのに適した大きさであると推定できる。つまり一つの膳に飯椀、汁椀と共に一から二の惣菜を載せる皿のサイズとして適した大きさであり、翻ってみるとこうした食生活を行っているかぎり、これ以上のサイズの皿は必要はないことになる。このSE100あるいは医学部附属病院中央診療棟地点（以下、「中診」と略す）L32-1、医学部附属病院病棟地点（以下、「病棟」と略す）C-2層などからは多量の七寸以上の磁器皿がしかも揃いで出土している。これらの製品は、上記の食事とは異なる必要から存在したと想起でき、大部が上質な製品で構成されることから藩邸内の上級階級の道具であろうと推定できる。大名は年中行事、人生儀礼、他大名とのつきあいなどで頻度高く藩邸内で宴会が行われているが、これらはいわばハレの場に使用された器物であろうと考えている（堀内 2005a）。SE100は井戸であるため遺構全体を調査できなかったが、遺物の含まれた焼土層は調査を行えたレヴェル以下にも存在し、廃棄された個体数は出土したもの以上のものであろうと推定できる。同遺構の位置は両藩の屋敷境に近いので遺物の帰属は限定できないが、同じ火災で廃棄されたと推定される中央診療棟地点L32-1、病棟地点C-2層出土の製品に近似した製品が少ないことから、購入のタイミングが異なっていたのかも知れない。

2期 大聖寺藩・加賀藩上屋敷期（1683～1829、Ⅳ～Ⅷa期）

Ⅳ期 1682年の「八百屋お七の火事」以降本郷邸は上屋敷になるが、当該地点はSA155を境に東側が大聖寺藩邸、西側が加賀藩邸の東端域となる。元禄十六（1703）年本郷邸は再び火災により全焼するが、この火災により廃絶したと推定できるSU2、SK139、SK313とSK102、SU76、SU286、SU285、SU283、SU284、SU151、SU214と一列に並んだ地下室群などの遺構からも遺物が確認されている。これら地下室群から出土している遺物は二次的な火熱を受けているものが多く、遺構の覆土も多くは焼土を多く伴う土が堆積していた。また、地下室群はその規模、出土状況が詰人空間の法学部3号館地点、理学部7号館地点などの状況と類似しており、長屋の存在が想起される。地下室群は長屋に伴って東大編年Ⅳb期に機能していたと考えられ、元禄十六年の火災により廃絶したと思われる。地下室の中から出土した遺物が付近の火災ゴミを処理したものであれば、詰人空間の使用品であろうと推定される。これら遺構に含まれる遺物群は年代的には同じであるが、やや内容が異なることが看取された。これについての詳細は後述する。

元禄十六年以前の絵図面は2枚現存している。当該地点は南北に大きな区画が2つあり、北半は「役所」と書かれ、南側は不記載である。南側角大聖寺藩との境には「作事方門」と書かれた門があり、付近に作事所があったことを伺わせる（武州本郷第図）。

Ⅴa期 加賀藩史料でわかる享保十五（1730）年と元文三（1738）年の火災について知られるところをあげてみたい。享保十五年の一月十二日未下刻に根津下谷七軒町から出火、北風、夜半より東風強く、湯島切通、新御徒町、金助町、春木町、本郷一丁目、丸山菊坂など類焼し、本郷邸は「御上邸残ラズ御類焼」（加賀藩）、「備後守様御上邸残ラズ御焼失」（大聖寺藩）、「出雲守様御上邸ノ

内、下御長屋残ラズ焼失」(富山藩)とほぼ壊滅的な惨状となった。当該地付近の記載も「東二筋、足軽小屋、割場、作事会所、東御門続キ南御小屋残ラズ」と屋敷東側割場、作事周辺も残らず焼失していることを伺わせる。この後、二月十六日より本郷邸の普請が開始されるが、「御作事道具置所」は江戸町棟梁権十郎・勘兵衛が普請を担当することが書かれている。同年四月十八日に斧初の議、五月二十八日に上棟式、八月十六日に比較的短期間の内に本郷邸が竣工し、次の藩主になる前田重熙がこれに移っている。

元文三年の火災は、一月二十九日無縁坂講安寺門前町屋より出火、「造酒丞様御屋形残ラズ焼失」(大聖寺藩)、「出雲守様御長屋十五筋」(富山藩)、「本郷御館御作事御門并ビニ割場ノ役所等焼失」、または「此方様割場御作事所火消道具置所御類焼」(加賀藩)した。この記載では大聖寺藩邸と加賀藩邸の作事門、割場など外来診療棟地点にあった建物が被災したとある。この火災に関する再建の記事は加賀藩史料には見あたらない。

以上の文献から享保十五年と元文三年の両火災は、外来診療棟地点にあった建物が被災したと思われる。発掘調査では火災層など直接火災の痕跡等が確認されることはなかったが、火災の後片づけに伴うと推定できる焼土と二次的な火熱を受けた遺物群が複数の遺構から確認された。物質資料としての火災資料はそれ自体が直接年代を特定できるものではないが、資料の内容と文献史料との対比によって可能になる。ここで扱う資料群も東大編年や文献史料との対比を踏まえて抽出したものである。しかし、享保十五年と元文三年の両火災は実年代で8年の違いしかなく、物質資料から両火災を特定することは困難であった。

V a 期に比定された遺構のうち、カウントの対象になった遺構はSK18、SU20、SK141、SU279である。このほか注意したい遺構として大聖寺藩邸内のSK141、SU279などやや大型の土坑とSU49、SU63、SU64、SU65、SU75、SU117の一例に並んだ地下室群である。IV b 期にみられた地下室群同様に出土遺物は二次的な火熱を受けているものが多く、遺構の覆土も焼土が堆積していた。この地下室群は長屋に伴ってV a 期に機能していたと考えられ、享保十五年あるいは元文三年の火災により廃絶したと思われる。内容の検討をしたい。これらの地下室群で磁器の五寸皿、陶器の碗類、播鉢、片口鉢、徳利、ほうろく、火鉢、かわらけ、七輪、瓦燈、塩壺などの器種が多く、上手の皿・鉢(IV-69 図3)、七寸以上の皿(IV-36 図SU102-3)などは少量認められるのみである。これらの器種は後述するが、医学部附属病院病棟地点(以下、「病棟」と略す)D面焼土一括資料に類似する器種組成であり、藩邸境より東、大聖寺藩邸側の様相は遺構、遺物から伺える相は詰人空間の様相を示している。一方、Fラインより西側の加賀藩邸側ではこのような遺物の多い遺構は確認されていないが、SU58、SE105など享保十五年あるいは元文元年の火災により廃絶したと思われる遺構がある。これらの出土遺物の内容は陶器碗、播鉢、火鉢、香炉、灯明具などが出土し、前述した詰人空間的な様相を呈しているが、量的には少量で、大聖寺藩側よりは密な土地利用の痕跡が遺物からも伺えなかった。

当該期の絵図面は存在しない。加賀藩側では前述の「作事門」は当該地に幕末まで継続して使用されており、18世紀後半～文政十一年の絵図面には「作事所」が本地点の北半に、南側には空闲地が多いが「番所」などがあったことが記されている。この加賀藩側の状況は遺物の出土状態と一致する。

Vb～VI期 Vb期ではSK139及びSK290では大型の遺構であり、特にSK290は大型の土取り穴で埋め戻す際に廃棄したものであろうと推定される。このVb期以降、VIa期にはSK152、SK174、カウントはしていないがVIb期に該当するであろうSK175など18世紀前半から中葉にかけて大型の土取りの土坑が確認され、前述したSK290と同様の過程で埋められていると考えられる。これらの遺構は一度で埋め戻しを行っている状況は確認されるが、これが一度で掘削されていることは保証しないはずで、形態から何回かに分けて土取りが行われている可能性が高い。土取り後はSK81などと比較すると単位容積あたりの遺物量が小さく、最終処分地としてある程度の開口期間が想定できる状況とは考えていない(堀内 2005b)。いずれにしても大型土坑が空けられるスペースが存在するある程度の空闲地であったと考えられ、ここに埋められた遺物も大量の土と共に廃棄されており、付近で日常生活廃棄物であるかは断定できない。腐臭の強い泥土と共に多量の木製品と共に出土しているSK174では、池などを浚った土で埋められたことなどが推定され、埋土が遺構の付近の土が使用されていない可能性も高い。また、遺物も塩壺がSK290では49個体、SK152では32個体も出土しており、御殿の廃棄物が持ち込まれたことも考慮される。ただ、器種構成は御殿の廃棄物を想起させるような顕著な組成を示しておらず、藩邸の広範囲な地域から持ち込まれたと思われる。

VII～VIIIa期 当該期における遺物出土量の多い遺構は確認されていない。遺構数も少なく、土取り穴のような大規模のものがなくなることから土地利用の変化が想起される。この時期と推定される遺構にはSK265、SK304、SU138などがある。

絵図面によると18世紀末に加賀藩邸内作事門の北側にある門番所の北に南北方向に延びる「御附引越小屋」と書かれた長屋が二棟建てられている。これは文政十二年まで続くが、位置的にみてこれに関連すると推定される遺構群がSK265、SK304、SU138などであろう。

3期 大聖寺藩上屋敷期(1829～幕末、VIIIb～VIIId期)

外来地点は文政十二(1829)年に大聖寺藩が加賀藩から借地した九百四十二坪の中に該当しており、大聖寺藩邸として幕末まで経営される。この時期に多く遺物を出土した遺構としてはSK81、SE271、SK166、SK392がある。SK81には出土遺物の何点かに「天保」(52)、「天保四」(87)など年代が墨書されたものが確認されている。これらは大聖寺藩邸になった文政十二年以降であり、SK81から出土している遺物は大聖寺藩邸のものであろうと考えられる。SK81の覆土は自然遺物を多く含む腐臭の強い粘質土中に陶磁器・土器片が多量に包含されており、生ゴミと共にこれらを廃棄している状況が看取された。内容的には、数量の多い順に磁器碗、陶器徳利、かわらけ、陶器土瓶、磁器皿で、皿類が突出している状況ではなく、また、磁器と陶器の割合も磁器282個体、陶器283個体とほぼ半数であり、磁器の割合が突出していない。これらの状況は詰人空間の様相を示している。他のSE271、SK166、SK392などの遺構も磁器碗、陶器徳利、陶器土瓶、磁器皿が出土量が多く、おおむね類似した様相を呈していた。また、本郷邸は明治元(1868)年に全焼するが、この際の後片づけと推定できる遺構がSK51である。陶磁器・土器の出土量は少量であるが、覆土のほとんどを焼瓦が占めており、大規模な火災が想定できる。同じ火災で被災したと思われる総合研究棟(文・経・教・社研)地点(東京大学埋蔵文化財調査室 2002)SU107出土の瓦と刻印に共通性が認められる。当該期の様相は絵図面からは確認できず、また、明確に幕末VIIId期に

比定できる遺物群は確認できなかったが、SK81、SE271、SK166、SK392あるいはSK51の様相から藩邸裏部分の廃棄土坑が構築されるようなエリアであることが推定できる。

(2) 元禄十六(1703)年と享保十五(1730)年もしくは元文三(1738)年の火災資料

① 年代的位置づけ

外来診療棟地点から出土した陶磁器・土器の器種は、冒頭に示した東大分類のほぼ全てにわたって出土している。一瞥した限りではあるが、これまでの調査成果と比較して器種や生産地のアセン

東大編年	地点	遺構名	碗 (JB-1)				皿 (JB-2)					備考	
			u	e	f	v	d	e	f	k	l		m
IV b	家畜	SK09	○	○	○		○	○	○				
		SU76	○					○	○				
	外来	SK102	○				○	○					
		SU151											
		SU214	○				○	○		○			比較的上手の製品が混じる
		SU283											
		SU284	○		○			○					
		SU285											磁器無し
SU286	○				○	○		○					
V a	中診	F33-3	○	○	○	○	○	○	○		○	○	
		SU49				○		○	○				
	外来	SU63					○	○	○				
		SU64	○			○			○				
		SU65							○				
		SU75											
		SU117	○										混入多い

表3 地下室群出土の遺物構成

ブリッジが特に異なった遺物群は認められなかった。しかし、当該地点に確認された元禄十六(1703)年と享保十五(1730)年もしくは元文三(1738)年の火災に伴う廃棄資料には、並んだ地下室群に伴って出土したのがあり、廃棄物の居住者が類推できる資料と言える。当該期における東大編年の基準資料として取り上げた遺構は、IV b期が農学部家畜病院地点(以下「家畜」と略す。東京大学埋蔵文化財調査室 1997)SK09、V a期が医学部附属病院中央診療棟地点F33-3であった。これらはいずれも陶磁器群に二次的な被熱が認められず、火災時の廃棄資料ではない。これら資料との様相差の有無と実年代については検証の必要があろう。これに加え元禄十六年の火災資料として取り上げた遺構は、御殿下記念館地点537号遺構で、これは遺物群の内容から御殿の使用品であろうと推定できるものであった。また、享保十五年もしくは元文三年の火災は、これまで史料では確認されていたものの良好な遺物の考察が行われていなかった。ここでは、両火災資料の分析から年代的考察及び居住者について再考したい。

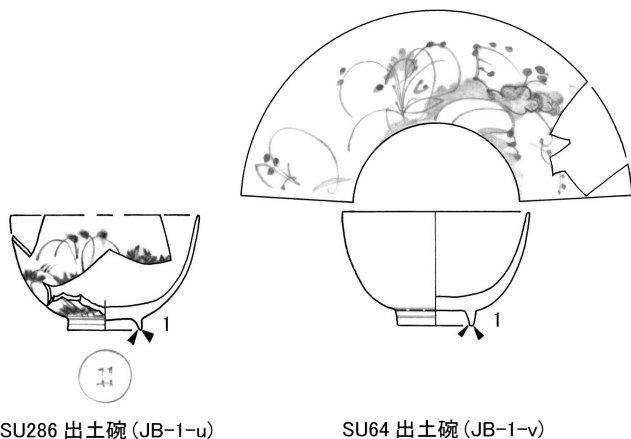
「2-(1)陶磁器・土器の出土様相と土地利用」でも触れたが、東大編年IV b期に該当するSK102、SU76、SU286、SU285、SU283、SU284、SU151、SU214とV a期に該当するSU49、SU63、SU64、SU65、SU75、SU117の二列に並ぶ地下室群は位置や規模の規則性などから長

屋に伴う地下室として構築、使用されたと推定された。また、各々同時期に廃絶されている。まず、当該期の東大編年のメルクマールとなっている器種の様相を確認したい(表3)。

東大編年IV b期の指標となっている家畜病院地点SK09には本段階のメルクマールとなっている碗JB-1-u(高台断面シャープな「U」字状を呈し、やや小振りな碗)の他に、JB-1-e(高台断面シャープな「U」字状で、高台高が低い碗)、JB-1-f(薄手の半球形碗)が出土している。皿ではJB-2-d(高台断面シャープな「U」字状で、上質な皿)、JB-2-e(高台断面シャープな「U」字状の皿)、JB-2-f(深めで腰が張る皿)が出土している。一方、V a期はその指標となっている中央診療棟地点F33-3では、家畜SK09に出土しているものに加え、碗ではJB-1-v(梅樹文の粗製碗)が加わる。皿ではJB-2-k(蛇ノ目釉剥ぎで底部無釉の皿)が無くなり、新たに高台に釉が施される蛇ノ目釉剥ぎの皿であるJB-2-lやJB-2-mが確認される。

これら指標資料の状況と地下室群の資料との比較をしたい(図1、2)。まず、分類小器種の存否であるが、家畜SK09と中診F33-3で確認されている器種以外のものがある例はIV b期のJB-2-kのみである。これはⅢ期には既に確認されている小器種であり、流通年代としてIV b期が含まれるかは別として、出土量も少なく該期の流通量も少ないことは指摘できそうである。この他の小器種は全て標識遺構の組成と齟齬が認められるものはなく、器種組成は整合していることが確認できた。したがって基準資料と二列の地下室群の遺物は同一段階に比定でき、さらにIV b期とV a期は元禄十六年の火災、享保十五年もしくは元文三年の火災を含む年代を与えられることが確認された。

内容を細かくみていきたい。IV b期の下限として挙げた地下室群からは、出土遺物は数量が少ないことも関係している可能性はあるが、碗ではSU284でJB-1-fの小片が確認できたのみで、おおむねJB-1-u(図1左)で構成され、器種のバリエーションが少ないようである。皿ではJB-2-dやJB-2-fが散見されるが、これらは比較的上手の製品であり、粗製のものとは含まれていない。その他、量的には粗製のJB-2-eが多く確認されている。また、この段階では見込み蛇ノ目釉剥ぎの皿製品は、JB-2-k(見込み蛇ノ目釉剥ぎで底部無釉の皿)のみが確認された。V a期では、碗はIV a期から出土しているJB-1-uの他には、ここでは図示していないが粗製のJB-1-g(絵付・作りが粗雑な碗)とJB-1-v(図1右)しか認められなかった。皿ではIV b期では立ち上がりが浅いタイプが、Ⅲ期で多くみられる高台の断面を三角に削り出すもの(JB-2-c)から高台を丸く成形するもの(JB-2-e)に変化するが、引き続き主体的である。この段階の文様は側面に直線の唐草などの簡略化した文様が入るもの(図2左SU102出土皿)が多く見られた。しかし、立ち上がりの浅いタイプはV a期では急激に量が減少し、代わって図2の右で挙げたような深いタ

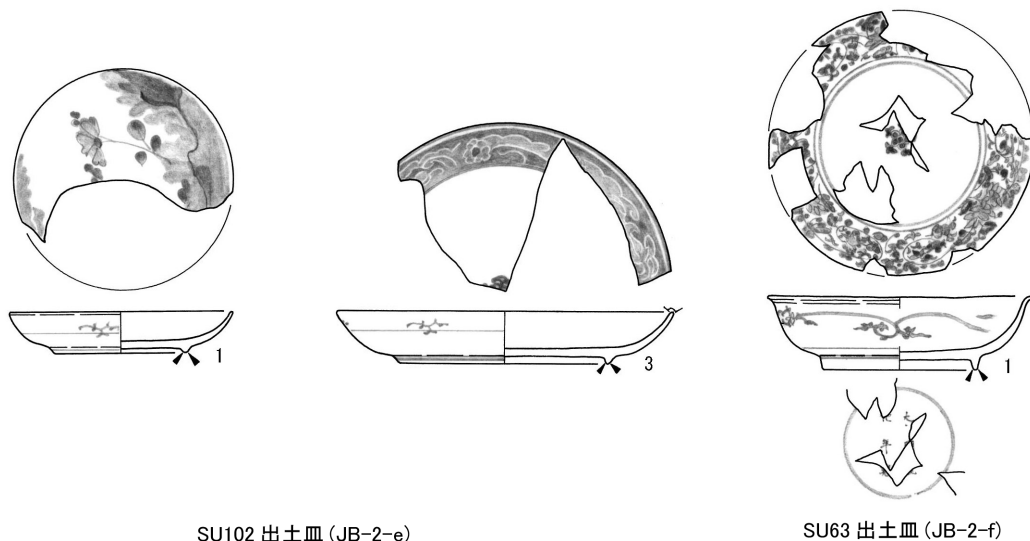


SU286 出土碗 (JB-1-u)

SU64 出土碗 (JB-1-v)

図1 磁器碗

イブ (JB-2-f) の皿が多く確認されるようになる。地下室群からは磁器の出土量が少なかったSU75と混入が多く認められたSU117以外では一定量出土している。質的にも違いが見られ、IV b期の本類が比較的上手の製品が多く認められるのに対し、V a期では粗製の製品が多く確認できた。これはIV b期とV a期を区別するメルクマールの1つとして考えられる可能性がある。



SU102 出土皿 (JB-2-e)

SU63 出土皿 (JB-2-f)

図2 磁器皿

② 地下室群出土遺物の様相

元禄十六 (1703) 年と享保十五 (1730) 年もしくは元文三 (1738) 年に年代的下限を持つ二列の地下室群については前述した。これら遺構に含まれる遺物群が共通の特徴を有することも確認したが、特徴を再確認したい。

- 碗はほぼIV b期ではJB-1-u、V a期ではJB-1-uとJB-1-vで構成されている。
- 皿の主体はIV b期では立ち上がりが浅いタイプであるが、V a期では深いタイプが主体になる。
- JB-2-fはIV b期では比較的上手のものであるが、V a期では粗製のものが確認されている。

碗・皿のみの観察ではあるが、2点目の器形的変化は主に時期差、1点目と3点目の特徴である出土器種に多くのバリエーションが無く、粗製で少ない器種で構成されていることは時期差を表出していると言うよりむしろ階層差と見た方がいいと推定している。

次に全体的な様相として、磁器と陶器の比率をみてみたい。SK139が磁器35個体(37%)、陶器60個体(63%)、SU02は磁器50破片(42%)、陶器70破片(58%)、SU313は磁器315破片(85%)、陶器が56破片(15%)^(註1)で、SK139とSU02は陶器が多いのに対し、SU313では圧倒的に磁器が多く出土しており、明らかな差異が認められる。東大構内遺跡の他遺構出土資料と対比してみると天和二(1682)年下限の中診L32-1では磁器721個体(90%)、陶器77個体(10%)、元禄十六年下限の御殿下記念館地点(以下、「御殿下」と略す)537号遺構では磁器1433破片(69%)、陶器645破片(31%)とも磁器の割合が高い。一方、日常生活する上で使用した道具が廃棄されたものであれば、使用されていた器種がセットで確認されるはずで、このセットは東大構

内では病棟地点D面焼土一括資料が大きな示唆を与えてくれる(成瀬 2000)。D面焼土一括資料は天和二年の火災で消失した長屋遺構上面に焼土と共に多量の遺物が出土したもので、出土状況から火事後にこの長屋で使用されていた陶磁器類がほぼプライマリーな状態で拾うことができた。病棟D面焼土一括資料では、磁器424個体(40%)、陶器639個体(60%)で、陶器の比率が多い。また、この中には土器を含めて播鉢52個体(5%)、香炉60個体(6%)、ほうろく22個体(2%)など日常的に使用する器種が多く認めらるのに対し、中診L32-1が播鉢12個体(2%)、香炉9個体(1%)、御殿下537号遺構が播鉢29破片(1%)、ほうろく11破片(0.4%)など、これら器種の割合はかなり少なくなっている。こうした反面、D面焼土一括資料の中にも揃いの皿がラフに絵付けがされている肥前系磁器や陶器などが認められ、揃いの有無がハレの場の道具であると断定できない。ただ、これらの製品はいずれも五寸程度の皿で、七寸以上の製品は認められない。これらからSU313は天和二年以降元禄十六年までのハレの場などで使用する道具である可能性が高く、SU2、SK139は藩邸の詰人が日常生活する上で使用した道具が廃棄されたものにとらえることができよう。

また、V a期でも地下室群の出土状況も表4のように凹凸はあるものの陶器が磁器の割合を上回っている。V a期の遺構は全体の数量が少なく、播鉢や徳利など破片数が多くなりやすい器種の影響を受けやすいことやSU117では数量は上げてみたが後世の混入品が多いものなどが含まれ、詳細なことを言及し得ない状況はあるが、傾向としてIV a期のSU2、SK139と同様の使用から廃棄の状況が想定されよう。

【註】

(1) SU2とSU313は推定個体数100個体以下の出土量であるためにカウントの対象にはならなかったが、あえて数量を呈するために破片数での呈示を行った。これは大まかな数量を示すことができればこの議論には十分であり、かつ個体数呈示では数字が小さくなってしまい量比呈示には不相当と判断したためである。

【参考文献】

東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1
 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3
 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4
 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 「農学部家畜病院地点発掘調査報告書」『東京大学構内遺跡調査研究年報1』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1999 『東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(1)』東京大学構内遺跡調査

段階	遺構	磁器		陶器	
		個体数	割合	個体数	割合
III b	中診L32-1	721	90%	77	10%
	病棟D面焼土	424	40%	639	60%
IV a	御殿下537※	1433	69%	645	31%
	SU2※	50	42%	70	58%
	SK139	35	37%	60	63%
	SK313※	315	85%	56	15%
V a	SU49※	31	44%	40	56%
	SU63※	90	49%	95	51%
	SU64※	28	33%	56	67%
	SU65※	12	30%	28	70%
	SU75※	13	18%	60	82%
	SU117※	12	21%	45	79%

※は破片数でカウント

表4 磁器と陶器の割合

研究年報2、別冊

- 東京大学埋蔵文化財調査室 2002 「総合研究棟(文・経・教・社研)地点発掘調査概報」『東京大学構内遺跡調査研究年報』3
- 成瀬晃司 2000 「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦紀年論文集』
- 成瀬晃司 1997 「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷—文様、銘款を中心に—」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1
- 堀内秀樹 2005a 「東京大学本郷構内の遺跡、医学部附属病院外来診療棟地点SK171出土陶磁器の自然科学的調査」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点発掘調査報告書』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5
- 堀内秀樹 2005b 「加賀藩本郷邸における廃棄物処理に関する小考」『東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点発掘調査報告書』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6
- 前田育徳会 1933 『加賀藩史料』清文堂出版社

外来診療棟地点SK171 出土陶磁器の自然科学的調査

降幡 順子・村上 隆・堀内 秀樹

1. はじめに

本調査では、東京大学本郷構内の遺跡、医学部附属病院外来診療棟地点SK171から出土した陶磁器片2点について蛍光X線分析による調査をおこなった。この地区は大聖寺藩の屋敷範囲に含まれることになるため、出土磁器片の分析をおこなうことにより、特に九谷古窯の可能性が高いのかどうか調査することを目的とした。

蛍光X線を用いて、現在までに報告されているいくつかの指標となる元素、ルビジウム (Rb) とストロンチウム (Sr) のスペクトル線の強度比を比較し、さらに、チタン (Ti) について標準試料を用いた定量分析をおこない、有田・波佐見地域 (肥前とする)、姫谷窯出土の染付片の分析結果と比較検討した。その結果、ルビジウム・ストロンチウムによる相対強度比の分布は、この2点については肥前とは異なり、またチタン含有量が多いことがわかった。

2. 分析資料の出土状況と可視的観察

分析資料2点は、調査区南西側に位置するSK171より出土した。遺構はややいびつな長方形を呈し、規模は東西140cm、南北210cm、確認面からの深さは150cmを計測する。遺構の覆土はしまりの強い土が細かく分層でき、西から東に傾斜を持って堆積している。遺物は分析資料の他に17世紀後半の陶磁器小片が数十点出土している。遺構や遺物の状況から遺構の性格は判断できなかった。当該地点は年代によって加賀藩と大聖寺藩の藩邸境が動いていることが文献によってわかっているが、本遺構の位置、廃棄年代からSK171は、大聖寺藩邸に伴うものと判断された。

分析資料No.1は染付磁器坏で、実測個体の他破片数から他に2～3個体の存在が推定できる。全体的に薄造りで、高台も分析資料No.2と比べてシャープに削り出されている。胎土は、やや硬質な感じを受ける。色調は淡灰色を呈し、黒色の微粒子が観察できる。呉須は濃い青に発色し、やや流れている。文様は外側面および見込み中央に梅鉢文が書かれ、文様は外枠線を取った後に濃みで花びら部分を埋めている。釉は薄く掛けられている。全体に大きめの貫入が入り、高台脇の釉が厚い部分は小気泡が観察される。高台にはやや粗めの白色の砂が付着している。

分析資料No.2も染付磁器坏で、No.1より扁平である。出土個体数は1個体と推定できる。No.1と比較して厚く作られており、高台も断面形丸く削り出されている。胎土はやや軟質な感じを受ける。色調は淡黄色を呈し、黒色の微粒子が観察できる。呉須は薄い青色に発色している。文様は簡単な草花文が外枠線を取らずに書かれている。釉はやや厚く、器面全体に御室風の京焼の様な細かい貫入が認められる。高台には細かい白色の砂が付着している。

以上の2点は、大聖寺藩邸から出土したこと、可視的にこれまで本遺跡から出土している典型的

な肥前や中国の磁器製品と胎土、釉調、器形などが異なっていると判断された。

3. 分析資料

医学部附属病院外来診療棟地点の発掘から出土した陶磁器片2点についての分析をおこなった。これら2点は染付碗である。胎土は、淡灰色を呈し、微細な黒色粒子が僅かに観察できる資料1点(No.1)、淡黄色を呈し、黒色粒子は極僅かに観察できる資料1点(No.2)である。釉の光沢度は、No.1が約18.2を示し、No.2は約7.2であり、No.2のほうが光沢度は小さい。

比較資料は、肥前、姫谷窯出土染付片である。今回分析に用いた試料は以下の通りである。

- ① 医学部附属病院外来棟地点出土染付片 2点
- ② 有田地域(中白川窯、平床窯、山辺田窯、多々良の元)窯跡出土染付片 27点
- ③ 波佐見地域(中尾上登窯、咽口窯、木場山窯)出土染付片 12点
- ④ 姫谷窯跡出土染付片 2点
- ⑤ 再興九谷窯跡(吉田屋窯、宮本屋窯、藩営九谷本窯)出土陶磁器片 12点



図1 染付碗実測図(左:資料No.1 右:資料No.2)

4. 分析方法

近年、胎土分析に最も一般的に用いられている元素分析の手法として蛍光X線分析と放射化分析がある。蛍光X線分析は、従来主成分分析をおこなう分析手法として一般的に用いられてきた。須恵器に含まれているルビジウムとストロンチウムの量を産地推定に用いる研究が三辻利一氏により報告されている。また、微量成分分析として放射化分析が用いられており、河島達郎氏らにより報告されている。本調査では、簡便な手法の一つとしてあげられる蛍光X線分析法にて磁器資料の胎土分析をおこなうこととした。

蛍光X線分析では、まず陶磁器片を厚さ約5mmとなるようにダイヤモンドカッターにて切り出し、切り出した面を耐水研磨紙#1500まで研磨し表面を調整した。測定条件は、管電圧40kV、管電流2mA、測定時間500秒、コリメータ径1mmφ、装置はテクノス製TREX650(エネルギー分散型)を用いて測定した。また、同一資料に対して3ヶ所測定し、ルビジウム(Rb)、ストロ

ンチウム (Sr) に注目し、ジルコニウム (Zr) を用いて規格化し、それぞれの相対強度比を求めた。

標準試料 JG-1a を用いた定量分析は、上記の試料について、堀場製 X 線分析顕微鏡 XGT-2000W にておこなった。測定条件は、管電圧 30kV、電流 1.0mA、測定時間 1200 秒、コリメータ径 100 μ m、分解能 P4、WD = 0mm である。

5. 結 果

① ルビジウム・ストロンチウムの相対強度比

ルビジウム・ストロンチウム相対強度比を用いての古九谷と有田古窯の判別は山崎一雄氏の報告があり、ルビジウムの相対強度比の大小で判別できる可能性が指摘されている。今回分析した資料および比較資料についての相対強度比の値を図 2 に示した。

外来診療棟地点出土片 2 点については \times で示している。ルビジウム相対強度比が小さい範囲に存在しているため、肥前とは異なる可能性が高いと考えられる。また \triangle は再興九谷（吉田屋窯、宮本屋窯、藩営九谷本窯）の値を示している。値は広がっているが、今回の資料と値はより近いことがわかる。再興九谷のうち、吉田屋窯はストロンチウム相対強度比の大きい範囲に存在している。○ は、肥前の窯跡出土染付片 27 点の値を示している。ルビジウム相対強度比は、外来診療棟出土片、再興九谷よりも値が大きい範囲に存在している。また肥前の中でも、値の大きい範囲は山辺田・多々良の元窯などの外山にあたる破片を多く含んでおり、値の小さい範囲は、中白川窯・波佐見中尾上登窯を多く含んでいることがわかった。■ は姫谷窯 2 点の値を示している。ルビジウム、ストロンチウムの相対強度比はどち

らも値が小さい範囲に存在し、肥前、古九谷とは判別できる可能性は高いが、さらに多数の資料を分析していく必要があると考える。

今回の資料は、肥前（有田・波佐見地域）および姫谷窯とは異なる範囲に分布をしており、九谷古窯の可能性が高いと考える。また全体に山崎氏によって報告されている値よりもやや小さい値を示したことは、装置および測定条件に違いによるものと考えた。

波佐見高尾窯のルビジウム相対強度比の値はやや小さいた

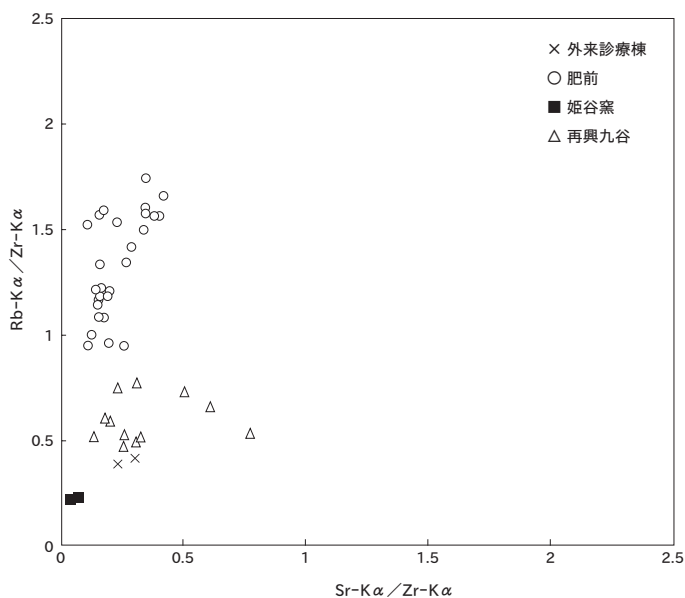


図2 ルビジウム・ストロンチウム相対強度比

め、一部再興九谷窯と範囲が重なることがわかった。しかし次に述べるチタン含有量は再興九谷とは異なり、値が小さいことから、これらの判別できる可能性は高いといえる。

② チタン定量分析による比較

蛍光X線分析に基づいた九谷・肥前産の判別基準について、二酸化チタン (TiO₂) の含有量 0.10% が判別する基準として挙げられており、ひとつの有効な指標であるといわれている。本調査では、厳密に 0.10% を判断基準とするというよりも、チタン含有量のばらつきを調査し比較検討することとした。

表1に、分析資料とそのチタン含有量を示し、図3は、棒グラフでばらつきを示した。番号の1～7は、肥前の山辺田窯、中尾上登窯・木場山窯・高尾窯の結果を示している。これら7資料はすべて0.10%以下であり、これらの平均値は0.03%であった。また今回調査した外来診療棟出土片は、平均0.12%であるため、この資料が肥前である可能性は低いということがチタン含有量からも示されたと考える。また判断基準である0.10%以上ということができると、九谷古窯としても矛盾しないことがわかった。

しかし、チタン含有量については嬉野地域も多いことが報告されているため、さらに詳細な分析が必要であると考えられる。

	出土窯跡	TiO ₂ (%)
1	山辺田1	0.03
2	山辺田2	0.04
3	山辺田3	0.03
4	山辺田4	0.05
5	中尾上登	0.04
6	木場山	0.02
7	高尾	0.03
8	姫谷1	0.06
9	姫谷2	0.09
10	外来診療棟1	0.13
11	外来診療棟2	0.11

表1 二酸化チタン含有量

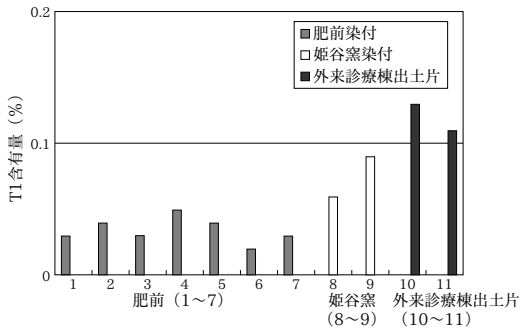


図3 チタン含有量のばらつき

6. 考 察

大聖寺藩の屋敷範囲地点である医学部附属病院外来診療棟地点の発掘によって出土した古九谷様式の陶磁器片2点について自然科学的調査をおこなった。蛍光X線分析法による研究において指標となると報告されている、ルビジウム、ストロンチウムの相対強度比およびチタン含有量について調査をおこなった結果、今回の資料2点は、肥前よりルビジウム相対強度比が小さいことがわかり、またチタン含有量が肥前のものと比較して多いことが確認できた。また同時期に稼動していたと考えられている姫谷窯の結果と比較したが、今回の資料とは異なることを示すことができたため、これらの資料は肥前、姫谷窯の可能性は低いと考えられる。またチタン含有量の判断基準となる0.10%を参考にすると、今回の資料は平均0.12%であるため、九谷古窯の可能性が高いのではないかと考えられる。しかし分析試料数を増やし、また他の分析との比較検討をおこなうなど、より詳細な調査が必要であると考えられる。

謝 辞

今回分析に使用した資料は、姫谷窯染付片は村上正名氏、檜崎彰一氏、山崎一雄氏、再興九谷各窯資料は加賀市教育委員会田嶋正和氏、肥前資料は有田町歴史民俗資料館野上建紀氏、波佐見町教育委員会中野雄二氏より提供していただきました。ここに各位のご援助・ご協力に対し篤く感謝いたします。

【参考文献】

- 山崎一雄 1986 「九谷ならびに有田古窯跡出土陶磁器片の化学的判別」 東洋陶磁第14号, pp37-42
東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄 1988 「大型寺藩上屋敷と「古九谷」—東京大学医学部附属病院中央診療棟第I期建築地点の調査より—」『考古学雑誌』73-1, pp79-97
河島達郎・松野外男 1985 「放射化分析による古九谷の産地推定」『考古学と自然科学』18, pp51-76
三辻利一 1983 『古代土器の産地推定法』考古学ライブラリー14 ニューサイエンス社
二宮修二・羽生敦子・大橋康二・藁科実・網干守・大沢真澄・長佐古真也 1991 「放射化分析による消費地遺跡出土磁器片の生産地推定—江戸時代前期の資料を用いて—」『貿易陶磁研究』11, pp201-234
檜崎彰一 1993 「九谷古窯の調査結果」『東洋陶磁第』20・21号, pp95-112
沢田正昭・村上隆・二宮修治・降幡順子・野上建紀・中野雄二・成瀬晃司・堀内秀樹 2000 「肥前産磁器の流通に関する自然科学的研究」『日本文化財科学会第17回大会研究発表要旨集』pp172-173
降幡順子 2002 「アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的研究」研究代表者沢田正昭、科学研究費補助金国際学術研究（共同研究）研究成果報告書, pp69-80
東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1
東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3

加賀藩・大聖寺藩江戸屋敷で使用された肥前磁器と「古九谷」

堀内 秀樹

1. はじめに

東京大学本郷構内では1984年以降、学内の校舎の建て替えなどに伴う事前発掘調査が行われ、これまでに立ち会い、試掘、事前調査を含めて70地点以上、面積にして約56,000m²の調査が行われている。出土した遺物の総量はコンテナ箱にして2万箱以上、おそらく数百万点にのぼる陶磁器類が出土していると推定できる。

周知のように「古九谷」は17世紀に独特な色使い、絵画的な筆致から評価を得ている色絵磁器である。そしてその生産地に関して、加賀大聖寺藩領内と九州肥前有田で生産されたとする両説が議論されてきた。東京大学本郷構内から確認された「古九谷」は加賀藩および大聖寺藩江戸藩邸である山上会館・御殿下記念館、理学部7号館、医学部附属病院中央診療棟の各地点から出土した。特に大聖寺藩邸である病院地点の調査では、1682年以前の廃棄と年代的に限定される出土状況、化学的分析などの結果、生産窯が領内にあることなどによって、「古九谷」の問題が大きく取り上げられることになった。ここで確認された「古九谷」を嚆矢に、1980年代後半から90年代前半にかけて生産地問題を中心に再議論され、これと平行して行われた山辺田窯、楠木谷窯、丸尾窯などの有田町教育委員会の発掘調査や東洋陶磁学会、九州近世陶磁学会を中心とした研究が、17世紀における日本の色絵磁器研究を大きく前進させることになった(註1)。

本稿では、20年間加賀藩・大聖寺藩邸の調査によって得られた膨大な資料の出土状況から看取できた17世紀における加賀藩や大聖寺藩邸における磁器製品の使用状況、およびそこから推定される両藩における「古九谷」製品の位置づけを考察するものである。

2. 東京大学本郷構内遺跡出土の「古九谷」と磁器製品

「古九谷」は医学部附属外来診療棟地点SK171から新たに2種、4個体が確認された(註2)(図1)。これを合わせて本遺跡から出土し、化学的分析によって石川で生産されたと推定できた製品は、色絵磁器2点、染付磁器5点の計7点である。

これまでも紹介したが、加賀藩本郷邸は何度か屋敷が全焼するような火災に見舞われている。文献では慶安3(1650)年、天和2(1682)年、元禄16(1703)年、享保15(1730)年、明治元(1868)年の火災は屋敷の全焼の記載が確認できる。発掘調査においても焼土層や遺構の覆土に焼土が充填されている例がしばしば確認されており、火災による藩邸類焼の頻度の多さが想起できる。これら事例中には被災によって廃棄されたと思われる多量の遺物が伴っている例も多い。火災による廃棄は、使用不能になった器物が一括して廃棄されていることが推定でき、年代的定点としてだけでなく、それらの使用状況が推定し得る重要な資料となる。ここでは「古九谷」との関係をみる

ために、まず、天和2年の火災で廃棄されたと考えている医学部附属病院中央診療棟地点（以下、「中診」と略す）L32-1、および医学部附属病院病棟地点（以下、「病棟」と略す）C2層、D面焼土層から出土した3事例の陶磁器群を中心に分析を加え、加賀藩・大聖寺藩邸における磁器の使用状況について考えてみたい。

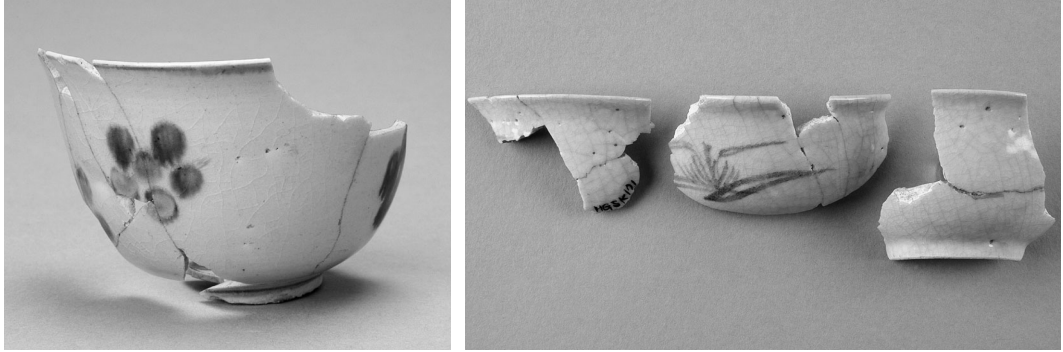





図1 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点SK171出土磁器

医学部附属病院中央診療棟地点L32-1（図2）

中診L32-1は、大聖寺藩邸内に位置している地下室である。遺構は近代以降の攪乱を受け、全体の1/4～1/5程度が遺存しているにすぎなかった。遺構の覆土は最下層の純焼土層の他はほぼ遺物で充填されている状態であった。遺物は質の高い磁器皿を中心とした陶磁器類で構成されており、ほぼ全てが二次的に火熱を受けていた。出土量はコンテナ箱にして約60箱、総点数は約4万点で、個体識別できた数798個体（この他破片は火災により細片になり、同一個体などの識別がつかないものも数多くあった）のうち磁器が721個体で、全体の90%以上を占めている。揃いの例も多く確認されており、最も多い揃いは60個体以上と推定される（図2-10）。磁器製品は肥前系磁器が約9割、中国製品が1割といった構成であった。

製品の年代的位置づけについて考えてみたい。最も新しいと判断された製品は図2-5である。裏銘に「」が付されるもので、この銘は有田町のムクロ谷窯、柿右衛門窯、南川原窯ノ辻窯、樋口3号窯の早い時期の製品に類例を求めることができる。文様も様式化がすすみ、いわゆる柿右衛門様式と分類できる製品である。しかし、中国製品を除くこの他の製品については、多くは裏銘に「」（図2-8）や「」（図2-6）などが付されている。これらの銘款は長吉谷窯、外尾山窯、中白川窯などに類例が見られるもので、図2-5例より古い段階の窯の製品が中心に構成されている。製品群の下限は天和2年ではあるが、これらの多くは17世紀第三四半期に購入されたと考えることができる。

医学部附属病院病棟地点C2層（図3）

病棟C2層は、大聖寺藩邸内に位置している。天和2（1682）年の火災後、屋敷再建のために行う整地に使用された、焼土を主体とする盛土層である。当該地点の天和2年を下限とする生活面は、C2層より下に確認されたが、後述する理由により加賀藩の御殿空間から運ばれてきたと推定でき

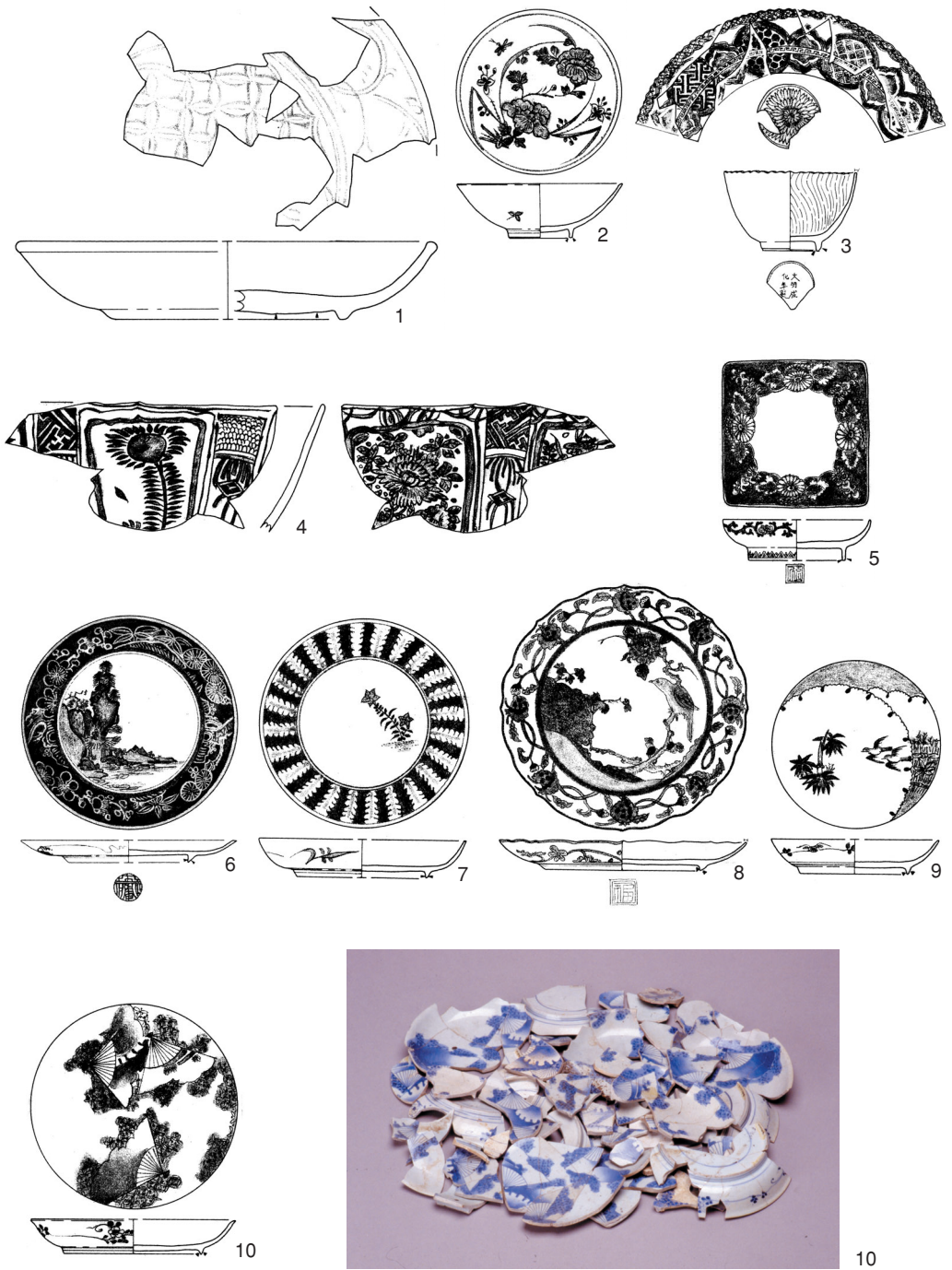





図2 中央診療棟地点L32-1 出土遺物 (S=1/4)

た。C2層には多量の二次的な火熱を受けた陶磁器類が含まれていた。陶磁器は、報告前で詳細なデータをあげることができないが、コンテナ箱にして約40箱、このうち9割が皿を主体とした肥前磁器製品で、中国製品も一定量認められる。本例も揃いの例も多く、10枚以上の揃いも多く確認できる(図3-4など)。これらの出土様相は中診L32-1ときわめて類似している。

また、本遺構から出土している遺物は、医学部教育研究棟地点(仮称)(以下、「医研」と略す)から出土している遺物と十数例の接合が確認されている。医研は発掘調査成果から加賀藩の御殿空間と推定できる地点であるが、C2層の遺物は加賀藩邸にあった製品が被災し、大聖寺藩内に運ばれ、廃棄されたものと推定された。

製品の年代的位置づけについて考えてみたい。ここで確認できる裏銘は「」(図3-3)、「」、
「」(図3-2)などで、見込みには四弁花あるいは五弁花などが多用されている(図3-3)。これらの銘款などは、先述したムクロ谷窯、柿右衛門窯、南川原窯ノ辻窯、樋口3号窯の早い時期の製品などに多く見られるものであり、遺物群全体の年代的様相は中診L32-1より新しく、被災して廃棄された天和2年よりそれほど遡らない時期にこれらが購入されたと推定できる。

D面焼土層(図4)

これと比較する意味で、同じ医学部附属病棟地点D面焼土層を取り上げたい。D面焼土層はC2層の下に調査区北側全域にわたり確認された焼土層である。焼土層は直下にある長屋礎石列を伴う硬化面を覆うように認められ、当該生活面の建築物の火災により堆積したものと判断された。礎石列は内部に区画を持つ長方形を呈しており、南北に主軸を有するもの7側と東西に主軸を有するもの1側が確認された。これらは構造および伴う施設から長屋建物と考えられる。

遺物は焼土中より二次的火熱を受けた陶磁器が多量に出土した。陶磁器群の特徴は多くの器種が認められること、陶器の割合が多いことである。器種は陶磁器全体の推定個体数1230個体のうち50個体以上の出土が認められたのは、碗183個体、皿399個体、鉢112個体、瓶77個体、壺・甕64個体、播鉢52個体、香炉・火入れ60個体、かわらけ118個体の他、多くの器種が確認されている。また、陶器の占める割合は主要6器種において碗が3/4、皿が1/3、鉢が5/6、瓶が5/6、壺・甕が3/4、香炉・火入れが3/4、播鉢が全てといずれの器種も多くを占めている(註3)。

天和2年の火災によって廃棄された3遺構について陶磁器の様相を概観したが、中診L32-1、病棟C2層の遺物の共通性が高いことが伺えた。これらと比較して明らかにD面焼土層は異なる組成を呈している。当該地点調査者の成瀬晃司によればD面焼土層出土の遺物について、焼土層が長屋全体を覆い、井戸以外の遺構の覆土を形成していること、また、調査時に設定し、取り上げた5mグリッドを大きく越えて接合関係が認められなかったことの2点から、「火災時まで居住者が使用しないし所蔵していた資材であり」、「現位置(使用された住戸)から大きく離れていないもの(前出、成瀬 2000)」と性格づけられるものである。さらに、文献で長屋が寛文5(1665)年から天和2(1682)年の間に足軽や聞番の居住地として存続していたことが確認できることから、「使用期間、使用者層を特定でき」一括資料であると言える。したがって、これらの遺物は当該期に足軽・聞番の生活道具として使用していたものと考えられることができる。

一方、中診L32-1、病棟C2層はこれらと大きく異なる様相を呈しており、このことは明らかに

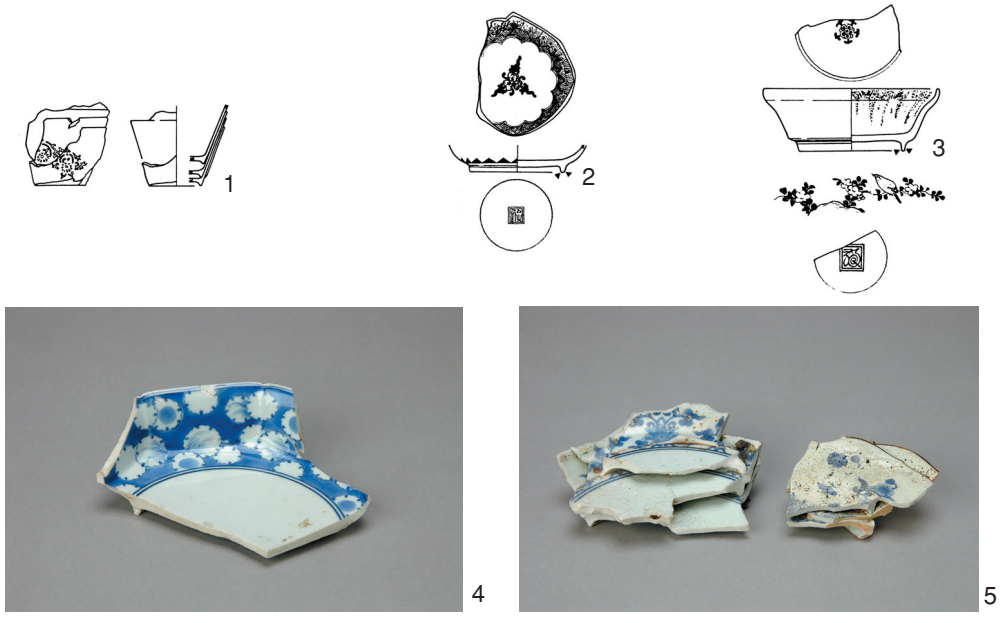


図3 病棟地点C2層出土遺物 (S=1/4)



図4 病棟地点D面焼土出土遺物

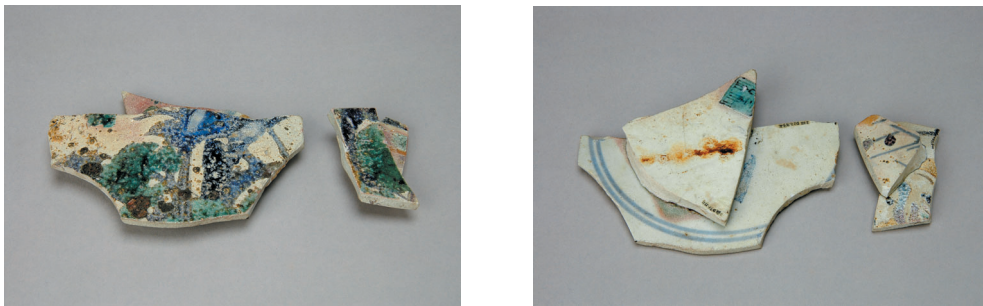


図5 古九谷五彩手大皿溶着例

足軽階級の日常生活のセットと乖離していると考えられることができる。この両遺構の遺物出土状況と製品の内容について以下の点において共通の特徴が看取された。

- 遺物群は大皿を含む磁器皿類が多く、偏った胎質・器種組成を示している
- 遺物群は高級磁器製品がその主体を占めている
- 皿類の多くは揃いで使用・保存されている
- 皿類の法量は、6～7寸が主体を占めている
- これらは装飾品ではなく実用品として使用されている
- これらは加賀藩・大聖寺藩の御殿で使用されていた可能性が高い

第1に胎質組成、器種組成である。前述したように中診L32-1、病棟C2層出土遺物は磁器がその大部を占めている。器種組成は大皿を含む皿が多くを占めるが、その他に鉢、坏も一定量含まれている。その他の器種は無いか微量にしか確認されており、胎質・器種組成においては特定のものに偏在している状況が看取された。

第2に磁器製品のグレードである。中診L32-1、病棟C2層の遺物は景德鎮窯、漳州窯、龍泉窯をはじめとする中国の製品が一定量認められる。大部を占める国内産のものは肥前有田の長吉谷窯、柿右衛門窯、楠木谷窯、外尾山窯、中白川窯、南川原窯ノ辻窯などの出土品と成形、施文技法、文様、器形などの類似性が高い。これらの窯の製品は他窯の製品に比べて非常に丁寧に作られており、高級磁器製品と評価されているものである(註4)。その類似性から本遺跡出土例もこれらの窯で生産された製品が多く含まれていると推定できる。

第3に揃いの存在である。両例とも中・小皿、鉢を中心に揃いの製品が多く認められた。中診L32-1を例にとると図2-10が推定個体数65個体、図2-9が47個体、図2-7が28個体、図2-2が23個体で、これらを含めて10個体以上確認できたものが14種類あった。C2層例もほぼ同様に、推定個体数が10個体以上の揃いは10種類を越えると推定された。最も多い例は図3-4で、20個体を越える数が確認できた。これらは使用者である加賀藩あるいは大聖寺藩が一括購入したと考えることができる。

第4に皿の寸法である。前述した病棟D面焼土では、「主体的な構成要素は、口径15cm(約5寸)の染付皿と見込み蛇の目釉剥ぎで底部無釉の皿(前出、成瀬 2000)」にある。この見込み蛇の目釉剥ぎで底部無釉の皿とは肥前嬉野町にある陶器窯内野山窯のいわゆる青緑釉輪剥皿を指しており(図4-1左上)、足軽などの下級階級の武士が使用する皿のサイズは、5寸にその主体があったことが確認できる。これに対して中診L32-1、病棟C2層例とも5寸も多く含まれてはいるが、6～7寸程度のサイズが最も多くを占めていることが指摘できる。L32-1では、報告で図化した磁器丸皿のうち5寸以下7個体、5寸99個体、6寸142個体、7寸66個体、8寸以上11個体とカウントされた。C2層もほぼ同様の傾向が見られた。皿のサイズはこれまでに何回か指摘しているように、日常的な食事において習慣的に用いられる食膳形態による法量的制約の存在を考えており、江戸時代を通じて大きな変化はない(堀内 2002、2003など)。すなわち、日常的な一汁一菜や一汁二菜などを載せる一尺四方程度の個人膳の大きさが、そこに載せる皿などの食膳具の法量を規制していると推測される。翻って考えてみるとこれ以外の特に大型製品の存在は、上記のような食事とは異なる用途に使用するものと考えられることができるだろう。

第5に使用状況である。これらの製品のうち、皿や小鉢のいくつかには製品同士が入れ子状に溶着している例が認められ(図3-1、3-5)、現在では優品と評価されている古九谷様式の大皿や鍋島でさえ例外ではない。図5は古九谷様式の溶着例である。右は亀甲文大皿と百花手大皿の、左は五彩手大皿同士の溶着例である。これらは保管時の状況を反映していると推定でき、古九谷様式の皿や鍋島なども含めて皿や鉢が、おそらく大箱などに入って何枚も積み重ねられた状態で保管されていたと考えることができる。茶陶のように単品で箱や袋などに入れて保管されている状態、あるいは部屋の装飾として単独で置かれた状態とは異なっていたと言える。これらは中診L32-1や病棟C2層から出土するような皿類は、威信材というよりもむしろ実用品として利用されていたことが推定できる。

第6に使用した場所(人)についてである。これについては前に軽く触れたが、C2層が存在している場所から直線距離で300m以上離れている医研の天和2年の火災によって廃絶した溝状遺構SD246出土遺物と十数例の接合が確認されている。ここでは焼土下にある生活面から直径一間程度の建物基礎遺構が等間隔に確認され、瓦を使用した御殿建物の存在が想定されている。これらからC2層の遺物は加賀藩で使用・保管されていた什器が、火災の後に大聖寺藩邸内に運ばれ、盛土中に廃棄されたものと推定された。

以上指摘した何点かの諸特徴は大名屋敷一特に上屋敷の御殿空間を中心とした一における陶磁器製品の使用・保存法などを反映していると見るべきであり、換言すれば、加賀藩・大聖寺藩邸においてこれを用いるおそらく上層階層の生活と強い相関があると推定できる。

3. 御殿における大名の生活

前章では加賀藩・大聖寺藩邸から出土した陶磁器一括資料の分析から看取された特徴を指摘した。ここでは江戸上屋敷における大名の生活から陶磁器の使用法について推定してみたい。この様な揃いで上質の陶磁器の使用は、藩主やその家族などを含めた大人数の飲食に関わるもの、おそらく藩邸で行われたさまざまな行事などによるものと推測される。ここでは大名やその家族が江戸藩邸で行った人生儀礼や年中行事などから大人数の飲食に関するものを考えてみたい。

幕府や大名に年中行事などで行われた仕法や献立などに関する文献は数多くあるが、参加した人数や酒が伴ったかなどの記述が、なされている例は少ない。表1は元禄12(1699)年江戸加賀藩邸において料理が振る舞われた年中行事と家臣の階級別下賜料理内容である(丸山 1999)ここで挙げられている日は、1月1日(元旦)、1月2・3日(初事)、1月7日(七草)、1月15日(上元)、1月19日、3月3日(上巳)、5月5日(端午)、6月朔日(氷室)、6月16日(嘉祥)、6月晦日、7月7日(七夕)、7月14・15・16日(盆、中元)、8月9日(御月見)、9月9日(重陽)、10月初亥日(玄猪)、12月(煤払)、12月大晦日(年越)などである。これらのうち記録に酒が振る舞われない日は、氷室、嘉祥、6月晦日、玄猪で、その他は祝儀なので、規模の詳細は判らないが、当然宴会を伴っていただろう。

また、表2は天保7～14(1836～43)年にわたる大聖寺藩邸の御膳所の献立に関する記録(田嶋 1998)で、加賀市橋立町旧北前船船頭重野家の襖下張りから発見された。これには年中行事の

研究編 4. 加賀藩・大聖寺江戸屋敷で使用された肥前磁器と「古九谷」

役所	不時	夜中	平生 朝暮	御年越 夕	追儺	御煉払	御玄猪	九・九	御月見	八・九	十六	十四 十五	七・七	晦	十六	六・朔	五・五	三・三	十九	十五	七	三二	正・元	
	寄合所 各階級により下す		御旅籠・御狩場 御料理定なし	一汁四菜・御酒	御料理定なし	煎大豆 御料理定なし	鹿子餅 御料理定なし	赤飯 御料理定なし	御餅菓子・吸物・肴・御酒・枝大豆	蓮飯・刺鮓(一五日) 御料理定なし	御料理定なし	餛飩・瓜	餛飩・瓜	餛飩・瓜	煎麦・煎小豆	粽 御料理定なし	草餅 御料理定なし	御具足の餅・吸物・肴・御酒	小豆の御粥 御料理定なし	七種の御粥・御酒 御料理定なし	御料理定なし	蓬菜雑煮・御酒抗 一汁五菜・吸物・御酒		
	公事場 相詰めた役人に大方	吸物二菜	同上	一汁三菜・御酒	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
	御算用場 御用多き時分に折々	同上	御射初 御雑煮・吸物 肴・御酒	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上
	会所 同上	同上	御乗初 一汁三菜 一汁四菜・肴・御酒	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	平侍并 小頭 新番 与力
	御細工所 同上	同上	御掃初 一汁四菜・肴・御酒	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	御徒等
	御普請所 同上 稀に下す	軽キ汁・香之物	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	同上	足輕・坊主以下 蓬菜御台にて祝雑煮 同上
			一汁二菜 吉初 一汁四菜・吸物・肴・御酒																					町人・百姓

表1 元禄12年江戸屋敷などでの年中行事における階級別御料理下賜一覧

十二月				十一月		十月		八月		七月		六月		五月				三月		二月		正月		月									
廿二日	十五日	十日	九日	八日	六日	四日	四日	二日	朔日	廿八日	二日	廿六日	十七日	朔日	十六日	十五日	十四日	十八日	十六日	廿九日	十九日	十四日	五日	四日	十五日	十九日	十一日	日	説明				
殿様御誕生日二付	御年忘二付	篤含院様御年忘二付	寒中二付	針千宝二付	寒入二付	御本宅江御歳暮二付	御年忘二付	御年忘二付	川端祭二付	冬至入二付	初子二付	玄猪二付	天神講二付	御花見二付(菊)	八朔御祝方	生身魂二付	中元二付	盆中二付	金龍院様御年忘二付	嘉祥御祝方	恭信院様御年忘二付	大神宮御祭礼二付	御誕生日二付 貞寿院の誕生日と推定される				端午二付	御雛見立二付	釈迦如来涅槃二付	二ノ午御祭礼二付	大神宮様秋葉様御祭礼二付	庚申二付	

(恭信院：不明、金龍院：加賀藩12代藩主斉広、篤含院：9代藩主利之、殿様：11代藩主利平)

表2 大聖寺藩江戸藩邸の御膳所記録に見える年中行事(田嶋1988より抜粋)

<p>御年忘二付 御三方様御入 召上り方等左之通 (御餞拾八人)(六百目)</p> <p>御吸物 鮎鮒(九つ八寸) 内(二つ)</p> <p>御盃 御銚子 角田川(五合) 瀧水酒(同)</p> <p>御取肴 松葉鮭(壹枚) 鷹羽半餅 壹枚五寸かしめ 二枚八寸 二つ畑九寸 二枚平め尺</p> <p>御硯蓋 含玉子 (在) 簾婦 (七十五) 砂糖煮長芋 (三本大)</p> <p>右三付頭より御醫師 御本殿□□□□ 御醫師式同女中拾八人御□□□□ 女中江被下方</p> <p>(仕出し) 寿満し 吸物 丸雪崩 (四升五合) 古ん布 (在) セリ (壹わ)</p> <p>(仕出し) 煮物 御酒 切魚 芋能子 香能物 沢庵漬 大根 塩茄子 小豆めし (壹升並小豆) 白めし (五升) (五升)</p> <p>御歩横目より御鎖口番江被下方 吸物 前同断 御酒 (図り方前二在)</p> <p>小頭より日懸迄被下方</p>	<p>同十五日</p>
---	-------------

史料1 天保14年御年忘部分抜粋

みならず人生儀礼や交際なども含まれており、史料の性格上断片的なものではあるが江戸藩邸における大名や家臣の食生活が伺える良好な史料である。これによると上記のものを含め諸行事が認められ、行事に応じた料理や菓子などが出されている。酒が振る舞われるのは祝儀としての年中行事のほか、藩主一族の誕生日、国元にいた藩主一族などの入府などである。逆に振る舞われない行事は、先述した嘉祥(6月16日)には饅頭が出され、また、年忌などの法事、針千宝などの女や子供に関わるものが多い。法事では「供物される物故者は比較的近い年代の人々しか記録がなく、初代や二代のといった藩主の命日にも何ら記載はないので、五十回忌、百回忌といった年忌しか御膳賄いは行われなかった」と報じられている。

ここではその中から、天保14(1843)年12月15日に行われた「御年忘」の料理を一例として取り上げてみたい(史料1)。「御年忘」とは忘年会のことである。この様に藩主や正室等の他に家臣、医師、女中、日雇いまで、たくさん的人数に食事や御酒が振る舞われていることがわかる。逐一例を挙げることはしないが、ここで挙げた「御年忘」に限らず行事では、規模、質などの異なる食事や祝宴が行われていた。

加賀藩藩主の年中行事や人生儀礼などは『金沢市史』に多数引用されている。年中行事は先述したので、人生儀礼を中心に祝いの食事を行った記載のみ拾うと、御七夜、着帯の式、宮参り、髪置、着袴、留袖の式、初弓の儀、乗馬初の儀、具足着初の儀、官位昇進、家督相続、元服、前髪取り、婚儀などが確認できる。これは藩主とその幼年期にあたる時期の行事であり、女子には異なる行事であろう。また、子供が複数いれば頻度が多くなると思われ、この他、葬儀、疱瘡の快癒(酒湯)祝い、大名家への訪問、藩邸の上棟式、藩主の引越など実に頻繁に儀式があることに気づかされる。

こうした儀式は江戸藩邸でも多く行われ、出土遺物はこの際の食事や祝宴などで使用されるものの一部であろうと推定される。そして、それらを行う費用は莫大なものとなったと推定できる。江戸東京博物館で行われた『参勤交代』展図録に掲載された伊達研次の研究によると延享4(1747)年の加賀藩の年間予算171,667両のうち約6割が江戸藩邸での支出に計上されている。年代はまちまちであるが弘前、秋田、長岡、備中松山、久留米、土佐などの各藩の状況も併記されている。最も比率が少ない久留米藩で5割弱、最も多い長岡藩では約8割もの費用が江戸藩邸で消費されており、江戸藩邸での支出が各藩の財政を大きく圧迫していたことは容易に想起できる(江戸東京博物館 1997)。これらは、「身分としての格式を保つために支出を強いられる費用」(磯田 2003)であり、磯田があげた加賀藩御算用者である猪山家の史料からも家来給銀、祝儀交際、儀礼行事入用、寺社祭祀の費用が全体の1/3にあたる。大名においても例外ではなく、身内のみならず親類、家中などのこうした祝儀・交際が繁多であったことが伺える。

4. 加賀藩・大聖寺藩における磁器使用と「古九谷」の位置づけ

「2. 東京大学本郷構内遺跡出土の「古九谷」と磁器製品」では東京大学本郷構内の遺跡中診、病棟地点出土陶磁器の様相から伺えたいくつかの点を挙げてみた。「3. 御殿における大名の生活」ではそれを使用したと推定される加賀藩藩主をはじめとする人生儀礼、年中行事、大名同士のつきあ

いなどの存在を確認した。

加賀藩と大聖寺藩における本郷邸の利用を細かく見ると、17世紀中葉～後葉では若干異なった状況にあった。加賀藩の3代藩主前田利常は寛永16(1639)年に致仕した後、万治元(1658)年に没するが、それまで本郷邸は下屋敷であるものの江戸における隠居所として利用している。一方、大聖寺藩邸は利常の致仕と同時に成立するが、その当初から本郷邸を上屋敷として利用している。このように本郷邸の利用は両藩で異なるが、前藩主や藩主が居住していたことは確かであり、ここで行われたであろう様々な上記行事に上質の磁器製品が使用されたことはほぼ間違えない。換言するならば、江戸藩邸で出土しているこれらの磁器製品は行事に使用するために必要な什器であり、近世における「威信材」に該当するというより、大名一少なくとも前田家では一にとって行事やつきあいの道具(tool)であったと見る点である。こうした視点に立ち、出土している製品の内容を再度確認すると、組物の染付が大部を占めている一方で、中国製品や「古九谷」の大皿も確認できる。これらは使用や保管の状況などから当時は実用品として使用されていたと推定できるとはいえ、前田家では非常に質の高い磁器製品で構成されており、後世において美術的に大きい評価の対象になるものも多く含まれていた。例えば、中国製品であれば、瑠璃地白花大皿、青磁大皿・大鉢(図2-1)、色絵祥瑞皿、黄地緑彩鉢、南京赤絵瓶、芙蓉手大皿・大鉢(図2-4)、呉須赤絵大皿等が出土している。これらの所有については長崎に派遣された御買物師の存在や大聖寺藩邸の書院や御道具などの様子を記した文献などからも看取することができ、荒川正明が指摘するように加賀藩や大聖寺藩がとりわけ中国磁器や肥前磁器製品を蒐集していたと考えることができよう(荒川 2004)。

多量の磁器製品が武家、特に大名家に必要な道具であり、それを所持していることは文献からも確認できる。徳川家では徳川家康が尾張家徳川義直と水戸家徳川頼房に分け与えた相続品目録と言わなければならない『駿府御分物御道具帳』が存在している。尾張家に伝わる本の中から陶磁器に関する一部を抜粋してみる(史料2)(徳川美術館・徳川博物館 1992)。

一、染付の茶碗	千	但、十箱=入、
一、同小茶碗	七百	但、七箱=入、
一、同寸皿	二百	二箱=入、
一、同かにの糸のなます皿	百	壹箱
一、同寸皿	百	壹箱
一、同ぼたんの繪のなます皿	五百	五箱=入、
一、同甲なます皿	百二拾	壹箱

史料2 『駿府御分物御道具帳』尾張本から抜粋

この史料2は、家康が死ぬ元和2(1616)年頃のものであり、ここに書かれた染付は質の高低は不明であるが、年代的にみて全て中国製品であろう。しかし、ここでは揃いの皿を大量に持っていたことと、それがまとめて箱に入れられていたことに注目したい。少なくとも上級武家ではこうし

た道具が必要であったと考えることができる。これより先になるが、天正18(1590)年に豊臣秀吉によって陥落した後北条氏の八王子城では、514枚揃いあるいは271枚揃いをはじめとして中国磁器皿の揃いが出土している。八王子城例が特異な例であったにせよ、江戸時代以前から武家の中でこの様なものを所持していたことがわかる。

大名における江戸藩邸、特に上屋敷の機能は、「出府した藩主の居屋敷であり、主たる年中行事が行われ、幕府や諸藩との交渉の拠点」(細川 1989)であることは共通の理解であろう。他藩や他時期においても同様の機能を有するならば、発掘調査によって類例が認められるはずである。

数例挙げてみたい。港区汐留遺跡仙台藩上屋敷跡6I060(図6)、同6I521(図7)、新宿区尾張藩上屋敷跡149-3N-5(図8)などでは上質の磁器製品を中心とした一括遺物群が確認できる。汐留6I060例は、大皿を多く含む一括遺物群で、報文によると遺物は二次的火熱を受けていない。内容は遺物のほとんどが磁器製品であり、碗は少なく、小・中皿、角皿、鉢・猪口は組物と書かれている。遺物群は内容から18世紀後半の廃棄と推定される。また、汐留6I521例は遺構・遺物の出土状況など報告の記載が無く不明である。ただ、二次的な火熱を受けていることが観察表から確認できる。また、図7に挙げた1、2、6は10個体以上、4、7は数個体以上と書かれている。被災した火災の年代等は不明であるが、内容から18世紀前半の製品が中心である。尾張藩上屋敷跡149-3N-5例は天和3(1683)年の火災によって廃棄されたと報告される資料である。個体数の実数の記載がないので、揃いの状況が不明であるが、実測図版に同じ皿が複数枚掲載されているもの(図8-1)や図2～6は「複数個体合成復元」と記載されており、複数個体の存在が判断される。これらはいずれも特に顕著な例であり、この他港区宇和島藩伊達家屋敷遺跡(宇和島藩中屋敷)、新宿区水野原遺跡(尾張藩付家老水野家屋敷)、千代田区飯田町遺跡(讃岐藩上屋敷)などからも大皿を含む一括資料が見られる。この中で注目したいのは、御庭焼(藩窯)が出土している水野原遺跡と飯田町遺跡である。それらの出土状況から御庭焼の性格を類推できると考えているが、これについては後述したい。

これまで加賀藩や大聖寺藩で使用された磁器製品の用途を概観したが、重要な点はこの中に九谷古窯の製品が含まれていない点である。加賀藩が九谷村に磁器窯を開窯した目的の中に領内で中国や肥前のような上質の磁器を焼成するためであろうと指摘する研究は数多くある。若干拾ってみたい。「有田で焼かれた色絵磁器というものに加賀藩はかなり興味を示していた・・・(中略)・・・そういう状況の中で九谷焼きというもののが作られ・・・」(林屋 1993)、「加賀藩が有田と並んで大形の色絵磁器を生産しようとしたのは、やはり大藩であり、日本海側にあつて、早くからその芸術的・経済的価値を認識していたからであろう。」(植崎 1993)、「こうした、加賀藩における付加価値の高い陶磁器製品の購入、贈答の数々が、九谷での磁器生産を生み出した背景にあつたことは想像に難くない」(藤田 2004)などで、ここでの共通した論調は、陶磁器生産における経済的効果といった側面よりも加賀藩における経済力を背景とした芸術的価値の高い製品を生産する窯の構築という文化的側面からの理解であろう。

一方、九谷古窯の状況は発掘調査報告書が刊行していない現在、詳細な資料の比較はできないが、これまでに調査概報、論文やいくつかの展覧会図録や全集本などで一部が紹介されている(石川県教育委員会他 1972、島崎 1976、石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館 1987、平凡社

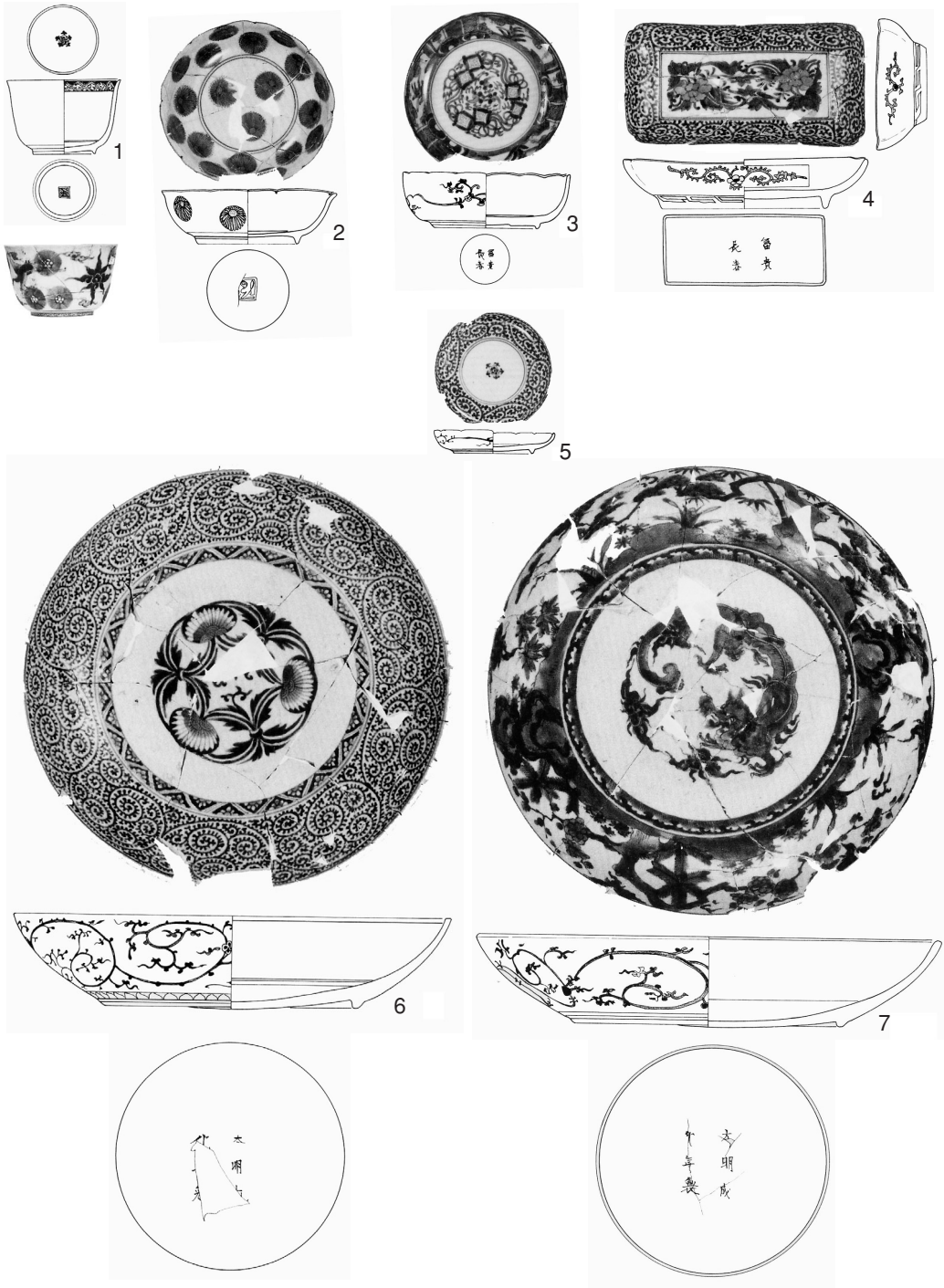


図6 汐留遺跡6I060出土遺物(S = 1/4)

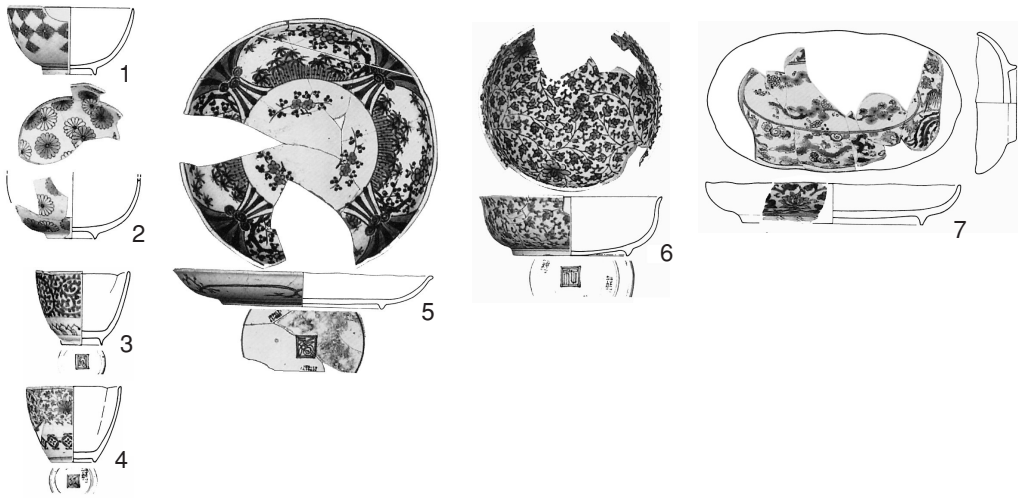


図7 汐留遺跡61521出土遺物 (S=1/4)

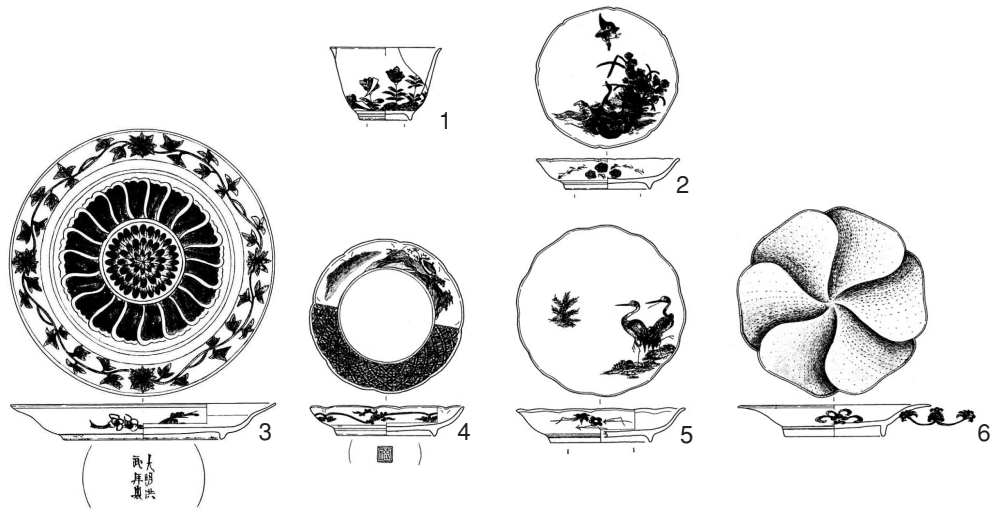


図8 尾張藩上屋敷跡149-3N-5出土遺物 (S=1/4)

1983、榑崎 1993など)。これらを見ると九谷古窯の出土磁器資料には色絵磁器の素地と推定できる白磁の他、染付、青磁などが見られる。特に染付は江戸屋敷出土資料において主体的に構成されていたものであり、かつ、多くが揃いで保持・使用されていたことから、九谷古窯の染付製品の使用状況が両藩における九谷窯の評価と関わっていると考えることができよう。なぜなら、自藩において上記目的で生産を開始した経緯を有する窯であれば、当然、その製品が十全のレベルであると評価された場合には、江戸藩邸において中国や肥前製品と同様の状態で使用されると想定できるからである。これを踏まえて九谷古窯の製品を考えてみると、両藩邸内で廃棄された御殿で使用されたと推定できる一括磁器遺物群の中には、九谷古窯出土遺物に類似した製品が確認できず、また、他に分析により九谷古窯と推定できた製品全体の量もきわめて少ない。この事実から、筆者は九谷古窯の製品がこの様な行事に使用するための什器にとって必要な質的あるいは量的に十分なレベルに達していなかったと推定している。また、製品の観察からも質的に当時肥前で最先端に技術で焼成していたと推定できる有田の長吉谷窯、外尾窯、中白川窯などから出土する精緻に文様が描かれた染付などと比肩できるレベルではないように思える。

島崎丞の九谷古窯物原の状態から「下層に青磁、上層に陶器が存在するところから、九谷1号窯は、次第に磁器を焼成する能力を失い、最後には陶器しか焼成することのできない窯になったのではないかと思われる」の指摘は重要であろう(島崎 1987)。窯の調査からは、

- ① 状態のいい磁器製品が継続的に生産・供給できない状況であった
- ② ある段階で磁器生産から陶器生産にシフトした

と判断することができる。この陶器生産にシフトした理由は不明であるが、あるいは付加価値の高いものから量産窯として指向する方向を変えたとも考えられる。

新宿区水野原遺跡は三楽園焼、千代田区飯田町遺跡は理兵衛焼が水野家、松平家両屋敷跡から出土している。御庭焼は藩窯といい変えてもいいが、この藩窯製品の利用については、出土品の分布状況から例えば鍋島のように自藩で使用すると言うより大名への贈答品としての性格を有するものと三楽園焼や理兵衛焼のように自藩の御殿などで使用するためのものと分類できよう。翻って、九谷古窯を考えると製品が自藩、他藩問わず江戸藩邸から出土例が見られないことや加賀藩や大聖寺藩の領国内の消費遺跡からも散見される程度の出土しか見られないこと、これら消費地における出土状況からは、九谷古窯は付加価値の高い磁器製品の継続的な生産ができなかったこと、のみならず陶器生産にシフトした後も商業的にも期待された成果が十分にされなかった窯であったように思われる。

5. おわりに

加賀藩邸・大聖寺藩邸の発掘調査を約20年間行って、ようやく「古九谷」を出土傾向から見られる状況になり、不十分ながら使用に関して考察を加えることができた。陶磁史にとって「古九谷」は重要な問題点であるが、本稿では大名家—特に御殿—において磁器がどの様に使用されるのかを考えてみた。これまでも御殿下記念館地点、医学部附属病院地点などから出土している多量の磁器群は年代的定点資料でもあり、いくつかの視点によって取り上げられてきた。しかしながら本稿で

取り上げた加賀藩邸の出土状況が大名における典型的な事例であるとは考えていない。今後、他家の様相を踏まえて大名屋敷あるいは江戸における消費について考えていきたい。また、「古九谷」の問題は本報告刊行を待って、資料の対比を十分に行った上で稿を改めたい。

本稿を草するにあたり、荒川正明、田嶋正和、成瀬晃司、村上伸之、吉田千沙子の各氏にはお世話になりました。感謝いたします。

【註】

- (1) このあたりの経緯は、大成可乃・堀内秀樹「本郷キャンパスにおける発掘調査の成果－東大構内出土「古九谷」と生産地論争－」に詳しい
- (2) 降幡順子・村上隆・堀内秀樹「東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属外来診療棟地点SK171 出土陶磁器の自然科学的調査」『医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- (3) これらは成瀬晃司 2000 「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦紀年論文集』に詳しい。
- (4) 「・・・柿右衛門窯は中・小の高級皿を主製品とするため・・・」有田町 1988、「・・・高級品焼造の窯である長吉谷窯が・・・」有田町 1988、「南川原窯ノ辻窯は柿右衛門古窯に続く窯であり・・・高級磁器の主たる焼造窯である・・・」佐賀県立九州陶磁文化館 1986 など。

【参考文献】

- 荒川正明 2004 「古九谷－その歴史と造形の展開－」『古九谷』出光美術館
- 有田町教育委員会 1991 『向ノ原窯・天神山窯・ムクロ谷窯・黒牟田窯』
- 有田町史編纂委員会 1988 『有田町史 古窯編』
- 石川県教育委員会他 1972 『九谷古窯 第2次調査概報』
- 石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館 1987 『伊万里・古九谷名品展』
- 磯田道史 2003 『武士の家計簿 「加賀藩御算用者」の幕末維新』新潮新書
- 江戸東京博物館 1997 『参勤交代 巨大都市江戸の成り立ち』
- 大成可乃・堀内秀樹 2000 「本郷キャンパスにおける発掘調査の成果－東大構内出土の「古九谷」と生産地論争－」『加賀殿再訪』
- 金沢市史編さん委員会 1999 『金沢市史 資料編3 近世一 藩主と城館』
- 佐賀県立九州陶器文化館 1986 『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1990 『柴田コレクション展Ⅰ』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1991 『柴田コレクション展Ⅱ』
- 島崎 丞 1976 「豪放華麗な色絵」『日本陶磁全集26 古九谷』中央公論社
- 島崎 丞 1987 「古九谷について」『伊万里・古九谷名品展』石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館
- 新宿区生涯学習財団 2003 『水野原遺跡』
- 田嶋正和 1998 『大聖寺藩江戸藩邸の御膳所記録』
- 千代田区飯田町遺跡調査会 2001 『飯田町遺跡』
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1
- 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3

- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『汐留遺跡 I』
- 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡 II』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡 VII』
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『港区 宇和島藩伊達家屋敷跡遺跡』
- 徳川美術館・徳川博物館 1992 『家康の遺産－駿府御分物－』
- 成瀬晃司 1996 「東京大学本郷構内の遺跡－天和2(1682)年・元禄16(1703)年の火災に伴う資料－」『第6回 九州近世陶磁学会 「肥前陶磁の変遷－年代の確かな資料をもとに－」』
- 成瀬晃司 2000 「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
- 榑崎彰一 1993 「九谷古窯の調査成果」『東洋陶磁』20・21
- 林屋晴三他 1993 「－公開討論－「江戸前期の色絵磁器」について」『東洋陶磁』20・21
- 藤田邦雄 2004 「九谷磁器窯跡と九谷A遺跡」『古九谷』 出光美術館
- 平凡社 1983 『世界陶磁全集9 江戸(四)』
- 細川 義 1989 「江戸時代における理学部7号館地点の変遷」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』
- 堀内秀樹 2002 「府中宿および近隣遺跡出土陶磁器・土器の様相－井戸址出土資料との対比から－」『武蔵国府関連遺跡 オーベル府中清水ヶ丘建設に伴う事前調査報告書・ヒルズ府中白糸台ノアージュ建設に伴う事前調査報告書』 株式会社盤古堂
- 堀内秀樹 2003a 「旧小倉家出土陶磁器の年代と特色」『下鶴間の小倉家資料調査報告書3 ＝埋蔵資料＝』大和市教育委員会
- 堀内秀樹 2003b 「近世陶磁器の流通と消費」『近世宿場町の景観と流通』東広島市教育委員会
- 丸山雍成 1999 「近世における大名・庶民の食生活－その料理献立を中心として－」『全集日本の食文化2 食生活と食物史』 雄山閣
- 村上伸之 2004 「有田における古九谷の生産技術」『古九谷』 出光美術館

外来診療棟地点出土漆器資料の材質と製作技法

北野 信彦

1. はじめに

東京大学本郷構内の遺跡（医学部附属病院外来診療棟地点）からは、加賀藩・大聖寺藩関連の遺構・遺物が多数検出され、漆器資料も少量ながら検出された。今回、東京大学埋蔵文化財調査室の御厚意によりこれら漆器資料の材質と製作技法について自然科学的手法を用いた調査を行う機会を得た。本報ではこの調査結果を報告する。

2. 出土漆器資料の調査

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり、挽き物や板物の形態にする「木胎製作」の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、蒔絵・漆絵等の加飾や研磨作業を行う「漆工」の工程からなっている。本報では、これら個々の出土漆器資料の生産技術面を調査する方法として、まず各資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、(1) 用材選択、(2) 木取り方法、(3) 漆塗り構造の分類、(4) 色漆の使用顔料、(5) 蒔絵粉材料、等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った。以下、その調査方法と調査結果を記す。

(1) 調査方法

用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片を作成した。切片はサフランinおよびキシレンで、染色および脱水して検鏡プレパラートに仕上げた。

木取り方法

挽き物類である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行った。

漆塗り構造の分類

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いた細部の観察を行った。次に1mm×3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイGY1251JP、ハードナHY837）に包埋した後、断面を研磨して薄層プレパラートに仕上げた。その上で、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態などについて各種顕微鏡による落射および透過光観察を行った。

漆絵や蒔絵の加飾技法

肉眼で漆絵や蒔絵加飾の塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡および金属顕微鏡を用いて、色漆の使用顔料や蒔絵粉の粒度と粒度、色漆や蒔絵粉の接着状態や劣化の状態、などに関する細部観察を行った。

色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、走査電子顕微鏡<日立製作所S-415型>に、エネルギー分散型電子線分析装置(EPMA・電子線マイクロアナライザー：堀場製作所EMAX-2000型)を連動させて用いた。分析設定時間500秒とした。

(2) 調査結果

今回、調査を行った漆器資料は、椀・蓋型を中心とした挽き物類8点である。このような挽き物類は、当時の基本的な飲食器である飯椀・汁椀・菜椀である壺・平・菓子椀、およびそれぞれの蓋類、などに対応するものであろう。以下、各項目別の調査結果を述べる(表1)。

用材選択

挽き物類である本漆器資料の樹種には、ブナ科ブナ属、ニレ科ケヤキ、トチノキ科トチノキの広葉樹3種類が確認された。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗りなどを考慮に入れて分類すると(表2)に示すようになる(1)。その上で本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると、優材であるケヤキ材と、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ材などの2つのグループに分かれた。(写真1)。

木取り方法

資料は、いずれも板目取りもしくは柁目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、縦木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、縦木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である(図1)。これは木材の割れ狂い、収縮などを考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている。本漆器資料の樹種を木取り方法との関係でみると、トチノキ材の場合は、横木地板目取り、ブナ材の場合は、横木地柁目取りであった。一般にトチノキは、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味(心材)が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分(辺材)がある。シラタは、多く取れても四寸(約12cm)程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナは、芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柁目取りの方法が適しているという口承資料が知られている(2)。この点からも、本漆器資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれの材の性質を考慮に入れた可能性が指摘される。

漆膜面の塗り構造

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋などの漆絵文様を地外面に描く資料、に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に、各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピークがほとんど見出されない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料の2種類に分けられた。これら

をさらに金属顕微鏡で観察することにより、前者を炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）であると認識した(3)。

地の漆塗り層は、1層塗りの簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であった(4)。そして加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた(図2)。しかしNo.8資料のみサビ下地による明らかな塗り直し補修の痕跡が認められ、その他の資料とは様相が異なっていた。

色漆の性質

赤色系漆の使用顔料の定性分析と顕微鏡観察の結果、いずれもベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3 ）を用いた赤色系漆であると理解した(図3)。赤色系漆の使用顔料としてはベンガラとともに朱があるが、ともに赤色顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の赤色顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降に人造ベンガラの量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となるようである(5)。

本漆器資料の場合も、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料が中心であるが、それに即応するようにベンガラが使用されていた。

蒔絵粉の材質

表面観察において金粉（金箔）もしくは金泥（金彩）によるとみられる家紋や絵柄などの蒔絵加飾部分の定性分析を行った結果、いずれもAg（銀）のピークが顕著に確認された(図4)。

江戸期の各種文献資料には、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体が、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたこと(6)や、これら金・銀・錫などの材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと(7)が、知られる。

本資料における木胎製作の工程と漆塗り技法との関連性

本資料のうち、ケヤキ・トチノキ・ブナ材の3樹種の用材別に、漆塗り技法・赤色系漆の使用顔料・蒔絵材料等の使用状況を集計した。その結果、組成的に優品に属する資料にはケヤキ材が、極めて廉価な一般資料にはブナ材が、基本的には廉価資料の範疇に属するものの、家紋や漆絵の加飾を施すなどのやや程度の良い資料にはトチノキ材が選択されており、樹種と漆塗り構造には相関関係がみられた。

3. 考 察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本漆器資料は木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類が中心であるが、No.8資料のみが、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料であった。これは出土遺構および年代が異なることに関係している(8)。

今後の課題としては、まずは各漆器資料の器型分類との照合を行うこと。そのうえで陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことである。これらの作業を行うことが、本出土漆器資料の性格を的確に理解する上で必要なことと考える。

謝 辞

本調査を行うにあたり、東京大学埋蔵文化財調査室長の寺島孝一先生、同調査室の堀内秀樹・成瀬晃司・原祐一氏をはじめとする多くの方には、大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

【注】

- (1) 橋本（1979）の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが韌性がある材を適材であるとしている。

橋本鉄男 1979 『ろくろ ものと人間の文化史31』 法政大学出版局

- (2) 須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系〈小椋谷〉木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤護 1982 『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』 日本観光文化研究所編 ギョウセイ

- (3) サビ下地を用いた漆器の生産自体は、『延書式』の髹漆技法をみるまでもなく、その歴史は古い。しかしその生産体制が地方の漆器生産においても普及・一般化するのには、漆器の需要とそれに伴う漆器生産量が増大化した江戸時代後期～幕末期以降のようである。この状況を知る事例として、近世輪島塗の台頭や、炭粉下地による廉価な日用漆器の生産では奥州会津、近江日野とともに三大生産地の一つといわれていた紀州黒江生産地へのサビ下地〈堅地物〉技術の導入などがあげられよう。

なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地（堅下地・本下地より堅牢性に欠ける）の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦 1993 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・Ⅰ・文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として」『古文化財の科学第38号』 P65・79 古文化財科学研究会

- (4) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の1つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師の漆器碗の製作技法に関する口承資料がある。それによると〔上品〕布着せ補強（碗の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色顔料もしくは黒色顔料を混ぜた赤色漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。〔下品〕炭粉下地〈柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地〉～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆）。〔中品〕下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編 1974 『木地師の習俗 民俗資料選集2』 国土地理協会

また、寛延4年（1751）の『名古屋諸色直段集 寛延四末年小買物諸色直段帳』には、漆器の休漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蝨色塗（上品）：常溜塗（中品）：常拭漆塗（下品）の相対価格差は、約51：3.4：1と算定される。

- (5) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検試してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸出品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦 2000 「ベンガラ、朱項目」『日本民俗学大辞典（下巻）』 福田アジオ編集 吉川弘文館

- (6) 江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった籬道具類について、享保20年（1735）の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には、「一、同諸道具、梨子地ハ勿論、蒔絵無用ニ可仕候、上之道具たりとも、黒塗ニ可仕候。（名古屋叢書第三巻）」という記述がみられる。又、武家社会内部でも、万治3年（1660）の紀州徳

川家(御家中祝言道具達)では、藩士のランクを1万石から200石までの8段階に分け、道具揃や仕様を細かく規定している。その上で漆器である貝桶は2400石以下の者には調達が認められておらず、諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない。(南紀徳川史 法令制度第四)

- (7) 伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18:6:1と算定される。いずれの事例からも生産技術面(ここでは材質や製作技法)の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。

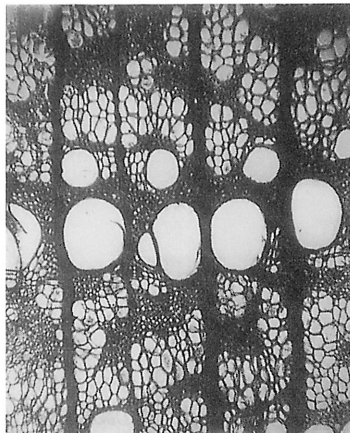
北野信彦 1997 「文献史料からみた近世薄給漆器について」『元興寺文化財研究 第61号』P1-8

- (8) 享保2年(1717)の備前庭瀬藩板倉家中文書には、年間必要経費となる御殿女中等の使用飲食器の品目・経費が記載された定書がある。この史料では、御局同並迄:上郷衆同並迄:茶之間中居半下迄:徒巳下足軽迄:下女・中間の身分別の椀代相対比率は、約9.4:5:3:1.6:1と算定される。

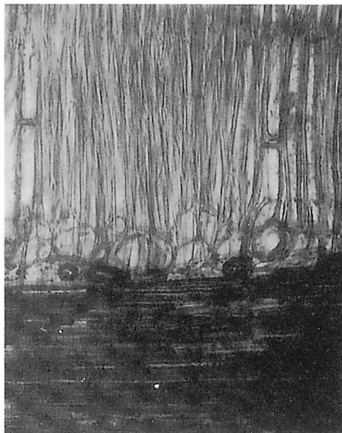
【引用文献】

- 寺島孝一他 1992 『江戸の食生活』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館
北野信彦 1998 「東京大学本郷構内遺跡(工学部1号館)出土漆器の材質と製作技法について」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2 p289-307 東京大学埋蔵文化財調査室
北野信彦 1999 「生産技術面からみた江戸遺跡出土漆器の生産・流通・消費」『第12回大会発表要旨 江戸の物流 -陶磁器・漆器・瓦-』p5-24 江戸遺跡研究会

にれ科ケヤキ



木口 (30×)

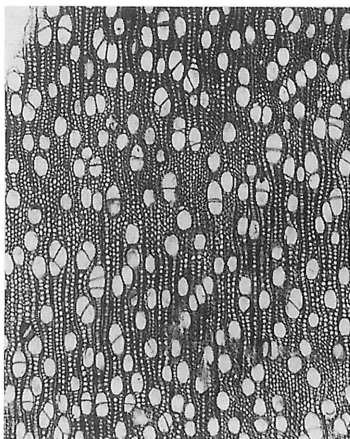


柁目 (100×)



板目 (50×)

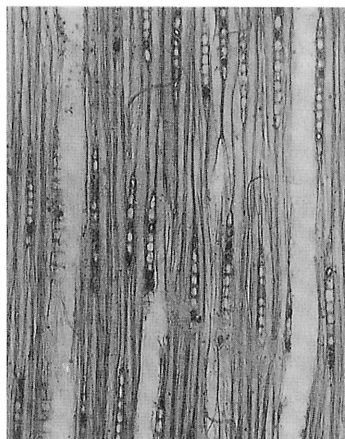
とちのき科トチノキ



木口 (30×)

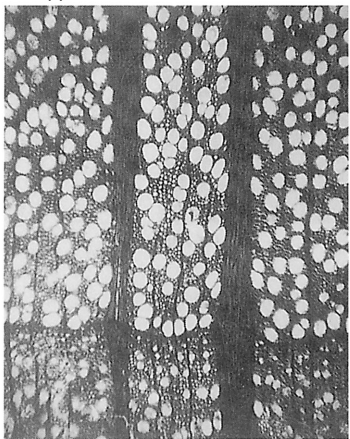


柁目 (100×)

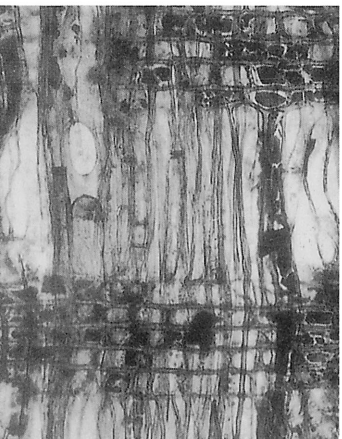


板目 (50×)

ぶな科ブナ



木口 (30×)



柁目 (100×)



板目 (50×)

写真1 代表的な樹種同定結果

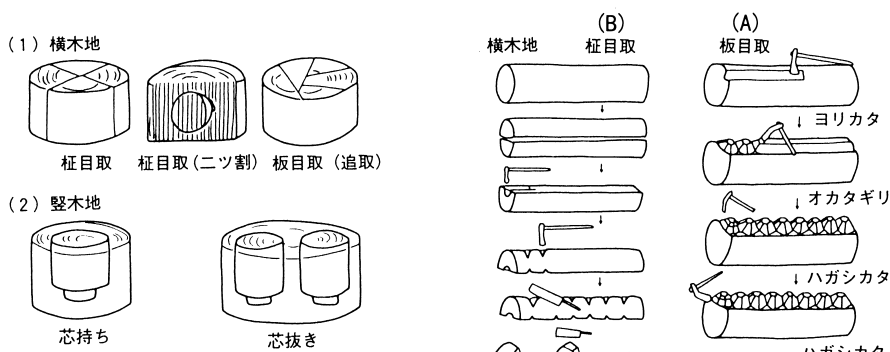
No.	器形	樹種	木取	表面塗り技法			使用顔料			漆塗構造		備考
				内	外	文様	内	外	文様	内	外	
1	平椀	ブナ	B	黒	黒	外一絵一金			Ag	I	II	
2	汁椀	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			I	I	
3	汁椀	トチノキ	A	赤	赤		ベンガラ	ベンガラ		I	I	口縁黒
4	椀蓋	トチノキ	A	黒	黒					I	I	
5	飯椀	トチノキ	A	赤	黒	外一紋一茶	ベンガラ		Ag	I	II	
6	飯椀	トチノキ	A	赤	黒	外一紋一茶	ベンガラ		Ag	I	II	
7	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒		ベンガラ			I	I	
8	椀	ケヤキ	B	黒	黒					V	V+V	病院 池

表1 出土漆器資料観察表

A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ ギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが韌性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散 孔 材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザク ラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大きい。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白く軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

橋本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-などを参考にして作成

表2 ろくろ挽き物の用材分類一覧表



1 横木地と豎木地の要領

(橋本鉄男『ろくろ ものと人間の文化史31』-1979-より原図引用)

2 近世会津木地師の木取りの方法

(須藤護『日本人の生活と文化(木)』

暮らしの中の木器』-1982-より原図引用)

図1 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

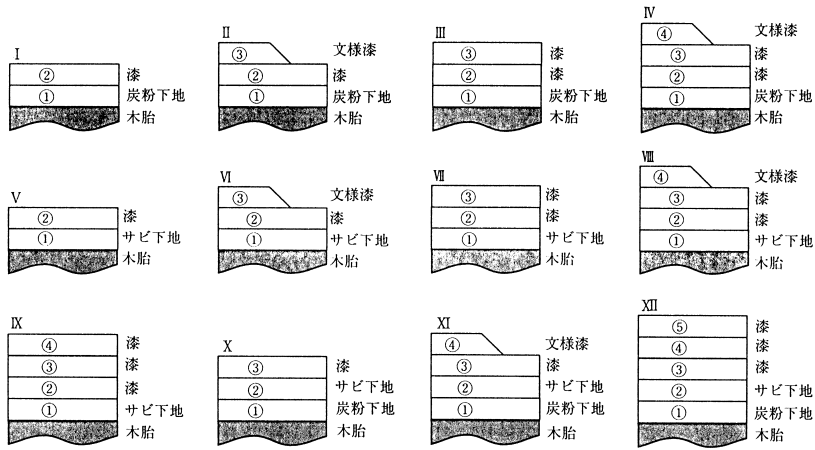


図2 漆塗り構造の分類

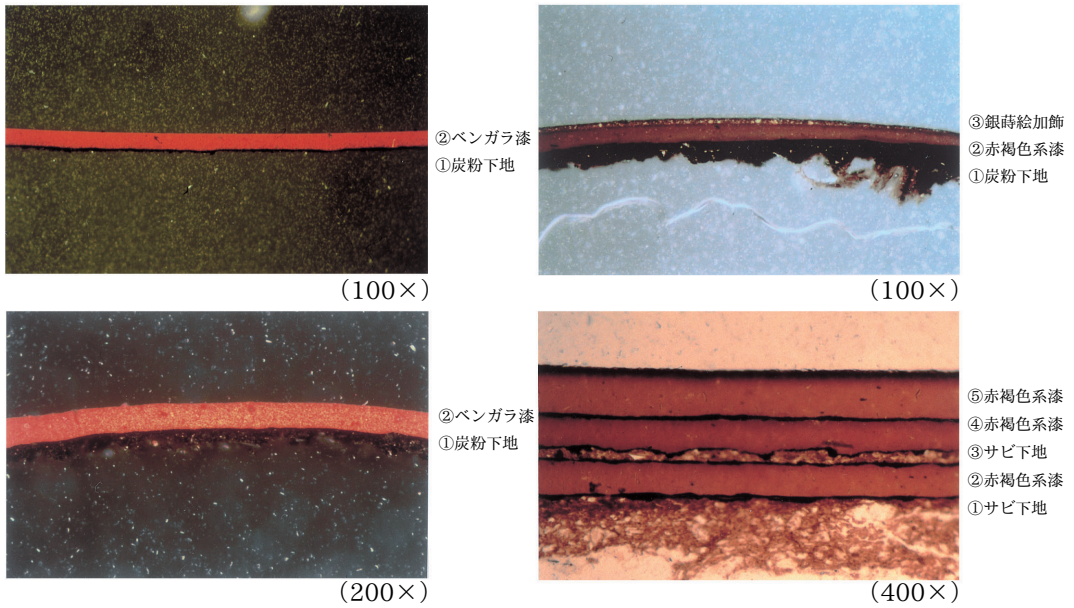


写真2 漆塗り膜面の塗り構造

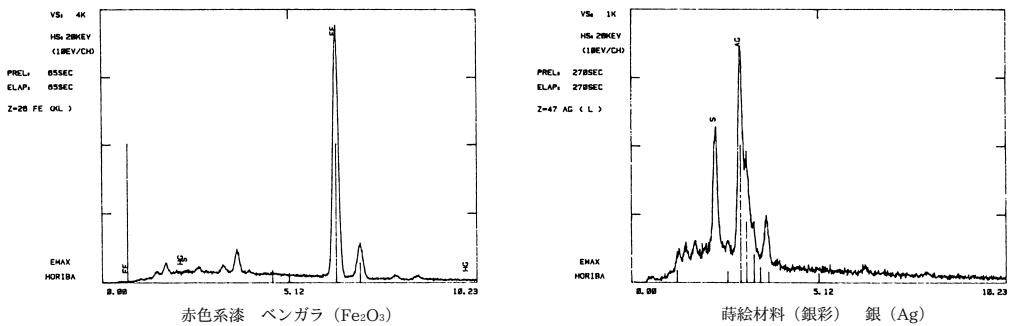


図3・4 電子線マイクロアナライザー (EPMA) 分析結果

医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体

野々村 海・江田 真毅・阿部 常樹

1. はじめに

本節では、医学部附属病院外来診療棟地点から出土した動物遺体について報告を行う。

記載は、綱ごとに行うが、水産食料という視点から、魚類と貝類は合わせて「魚介類」とし、報告を行った。

鳥類以外は、阿部常樹と野々村海が共同で、整理・分析を行った。そして、「魚介類」を野々村が、哺乳類と両生類・爬虫類を阿部がそれぞれ執筆した。鳥類に関しては、江田真毅が執筆にいたるまでの一連の作業のすべてを行った。なお、文責は各項の文末に記す。

資料の採集方法

本地点より出土した動物遺体には、現場で目視によって確認し採集された資料と、現場で土壌ごと取り上げられ、その後、水洗選別法によって抽出された資料がある。なお、水洗選別法による資料の抽出には、最小で3mmメッシュの篩を用いたとされている。水洗選別法によって資料を抽出したのは、SK81とSK290の一部である。調査者によれば、2つの遺構において目視によって自然遺物の集中が認められた部分よりその方法による資料の取り上げを行ったとされている。

保存処理

破損の激しい資料や、今後、破損の恐れがある資料については、ポリビニール・ブチラールPVB樹脂(Butvar)を用いて保存処理を行った。なお、溶媒にはアセトンを用いた。接合作業にも同様のものを使用している。

資料番号

分析・保存にあたり、綱によって適宜、番号を付した。番号の付し方については綱ごとに適した方法を用いているので、それぞれの記載を参照されたい。(野々村 海)

2. 魚介類遺体

(1) はじめに

本地点からは、16種の貝類と40分類群の魚類が出土した。

本地点は、調査時の資料の取り上げの際に、ほとんどの遺構で、目視によって容易に確認できるもののみをその対象としており、廃棄実態を反映しているとは言い難い。そのため本報告では詳細な議論は避けた。そこで、今回は組成に関しては、傾向のみを概観するにとどめ、遺体個々の観察に重点を置いた。

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda

- 古腹足目 Order Veligastropoda
 ミミガイ科 Family Haliotidae
 クロアワビ *Nordotis discus*
 メガイアワビ *Nordotis gigantea*
 マダカアワビ *Nordotis madaka*
 サザエ科 Family Turbinidae
 サザエ *Turbo cornutus*
 新腹足目 Order Neogastropoda
 アッキガイ科 Family Muricidae
 アカニシ *Rapana venosa*
 エゾバイ科 Family Buccinidae
 バイ *Balyonia japonica*

ニマイガイ綱 (二枚貝類) Class Bivalvia

- フネガイ目 Order Arcoida
 フネガイ科 Family Arcidae
 アカガイ *Anadara (Scapharca) broughtonii*
 カキ目 Order Ostreoida
 イタヤガイ科 Family Pectinidae
 イタヤガイ *Pecten albicans*
 イタボガキ科 Family Ostreidae
 マガキ *Crassostrea gigas*
 マルスダレガイ目 Order Veneroidea
 シジミ科 Family Corbiculidae
 ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
 マルスダレガイ科 Family Veneridae
 アサリ *Ruditapes philippinarum*
 ハマグリ *Meretrix lusoria*
 バカガイ科 Family Mactridae
 ミルクイ *Tresus keenae*
 シオフキ *Mactra veneriformis*

脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

軟骨魚綱 Class Chondrichthyes

- ネズミザメ目 Order Lamniformes
 メジロザメ科 Family Carcharhinidae
 属種不明 gen. et sp. indet.

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

- ニシン目 Order Clupeiformes
 ニシン科 Family Clupeidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 マイワシ *Sardinops melanosticta*
 コイ目 Order Cypriniformes
 コイ科 Family Cyprinidae
 属種不明 gen. et sp. indet.
 コイ *Cyprinus carpio*

ナマズ目 Family Siluriformes

- ナマズ科 Family Siluridae
 ナマズ属 *Silurus* sp.

サケ目 Order Salmoniformes

- サケ科 Family Salmonidae
 サケ属 *Oncorhynchus* sp.

タラ目 Order Gadiformes

- タラ科 Family Gadidae
 属種不明 gen. et sp. indet.

アンコウ目 Order Lophiiformes

- アンコウ科 Family Lophiidae
 属種不明 gen. et sp. indet.

カサゴ目 Order Scorpaeniformes

- フサカサゴ科 Family Scorpaenidae
 属種不明 gen. et sp. indet.

ホウボウ科 Family Triglidae

- 属種不明 gen. et sp. indet.

コチ科 Family Platycephalidae

- 属種不明 gen. et sp. indet.

スズキ目 Order Perciformes

- スズキ科 Family Serranidae
 スズキ *Lateolabrax japonicus*

ハタ科 Family Percichthyidae

- 属種不明 gen. et sp. indet.

キス科 Family Sillaginidae

- キス属 *Sillago* sp.

表1 医学部附属病院外来診療棟地点出土動物遺体種名表(1)

キツネアマダイ科 Family Malacanthidae	カモ目 Order Anseriformes
アマダイ属 <i>Branchiostegus</i> sp.	カモ科 Family Anatidae
アジ科 Family Carangidae	ガン亜科 Subfamily Anserinae
ブリ属 <i>Seriola</i> sp.	ガン族 Tribe Anserini
イサキ科 Family Haemulidae	属種不明 gen. et sp. indet.
イサキ <i>Parapristipoma trilieatum</i>	カモ亜科 Subfamily Anatinae
タイ科 Family Sparidae	マガモ属・種不明 <i>Anas</i> spp.
属種不明 gen. et sp. indet.	属種不明 gen. et sp. indet.
クロダイ <i>Acanthopagrus schlegeli</i>	タカ目 Order Falconiformes
マダイ亜科 Sub family Pagrinae	タカ科 Family Accipitridae
マダイ <i>Pagrus major</i>	属種不明 gen. et sp. indet.
ボラ科 Family Mugilidae	キジ目 Order Galliformes
属種不明 gen. et sp. indet.	キジ科 Family Phasianidae
サバ科 Family Scombridae	属種不明 gen. et sp. indet.
属種不明 gen. et sp. indet.	チドリ目 Order Charadriiformes
サバ属 <i>Scomber</i> sp.	シギ科 Family Scolopacidae
カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i>	属種不明 gen. et sp. indet.
マグロ属 <i>Thunnus</i> sp	科属種不明 fam., gen., et sp. indet.
カレイ目 Order Pleuronectiformes	スズメ目 Order Passeriformes
ヒラメ科 Family Paralichthyidae	カラス科 Family Corvidae
ヒラメ <i>Paralichthys olivaceus</i>	属種不明 gen. et sp. indet.
カレイ科 Family Pleuronectidae	科属種不明 fam., gen., et sp. indet.
属種不明 gen. et sp. indet.	
フグ目 Order Tetraodontiformes	哺乳綱 Class Mammalia
フグ科 Family Tetraodonidae	食肉目 Order Carnivora
属種不明 gen. et sp. Indet	イヌ科 Family Canidae
	イヌ <i>Canis familiaris</i>
両生綱 Class Ampibia	ネコ科 Family Felidae
カエル目 Order Anura	ネコ <i>Felis catus</i>
科属種不明 fam., gen., et sp. indet	偶蹄目 Order Artiodactyla
	イノシシ科 Family Suidae
爬虫綱 Class Reptilia	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
カメ目 Order Chelonia	奇蹄目 Order Perissodactyla
スッポン科 Family Trionychidae	ウマ科 Family Equidae
スッポン <i>Trionyx sinensis japonicus</i> .	ウマ <i>Equus caballus</i>
科属種不明 fam., gen., et sp. indet	
鳥綱 Class Aves	
コウノトリ目 Order Ciconiiformes	
サギ科 Family Ardeidae	
属種不明 gen. et sp. indet.	

表1 医学部附属病院外来診療棟地点出土動物遺体種名表(2)

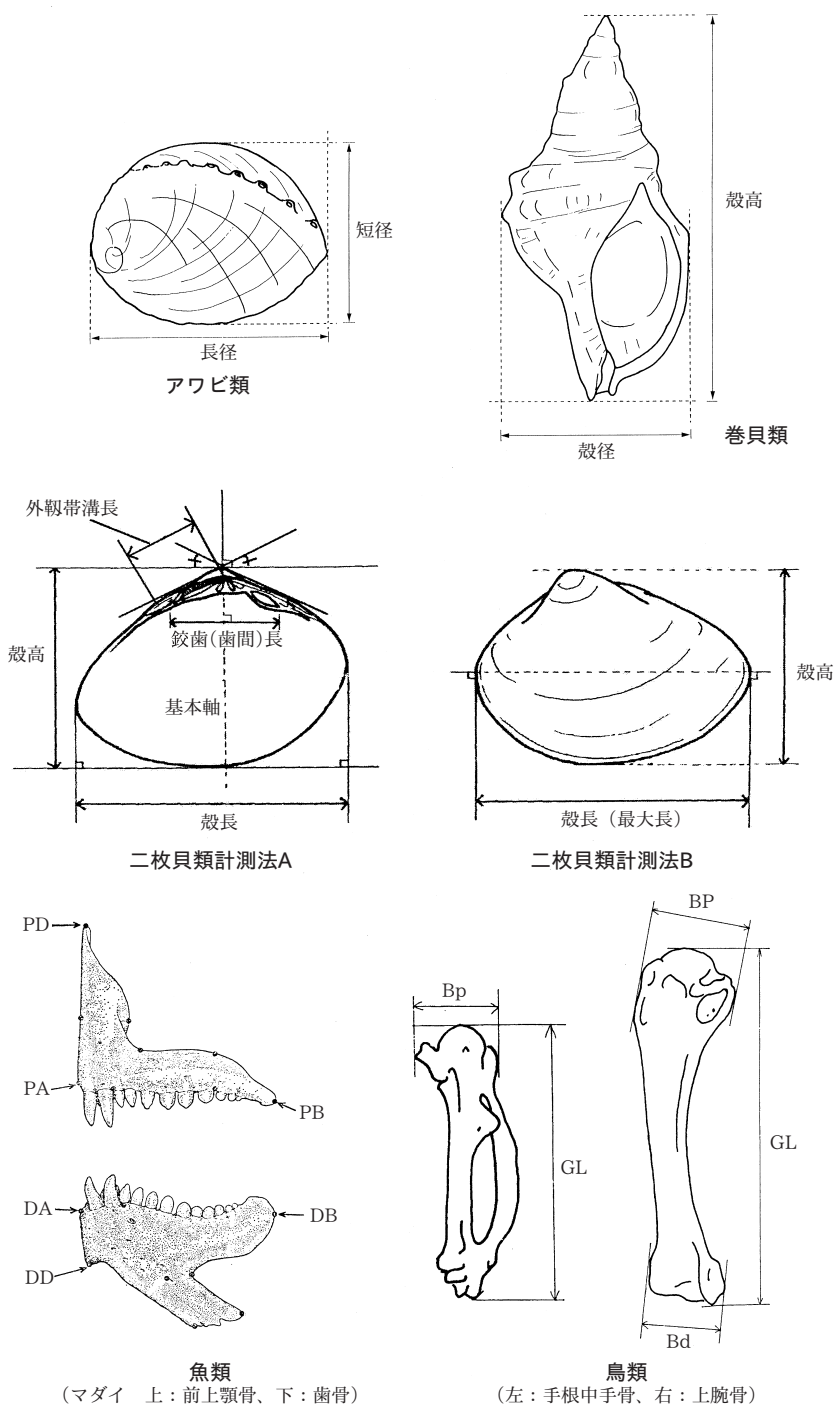


図1 動物遺体計測凡例図(1)

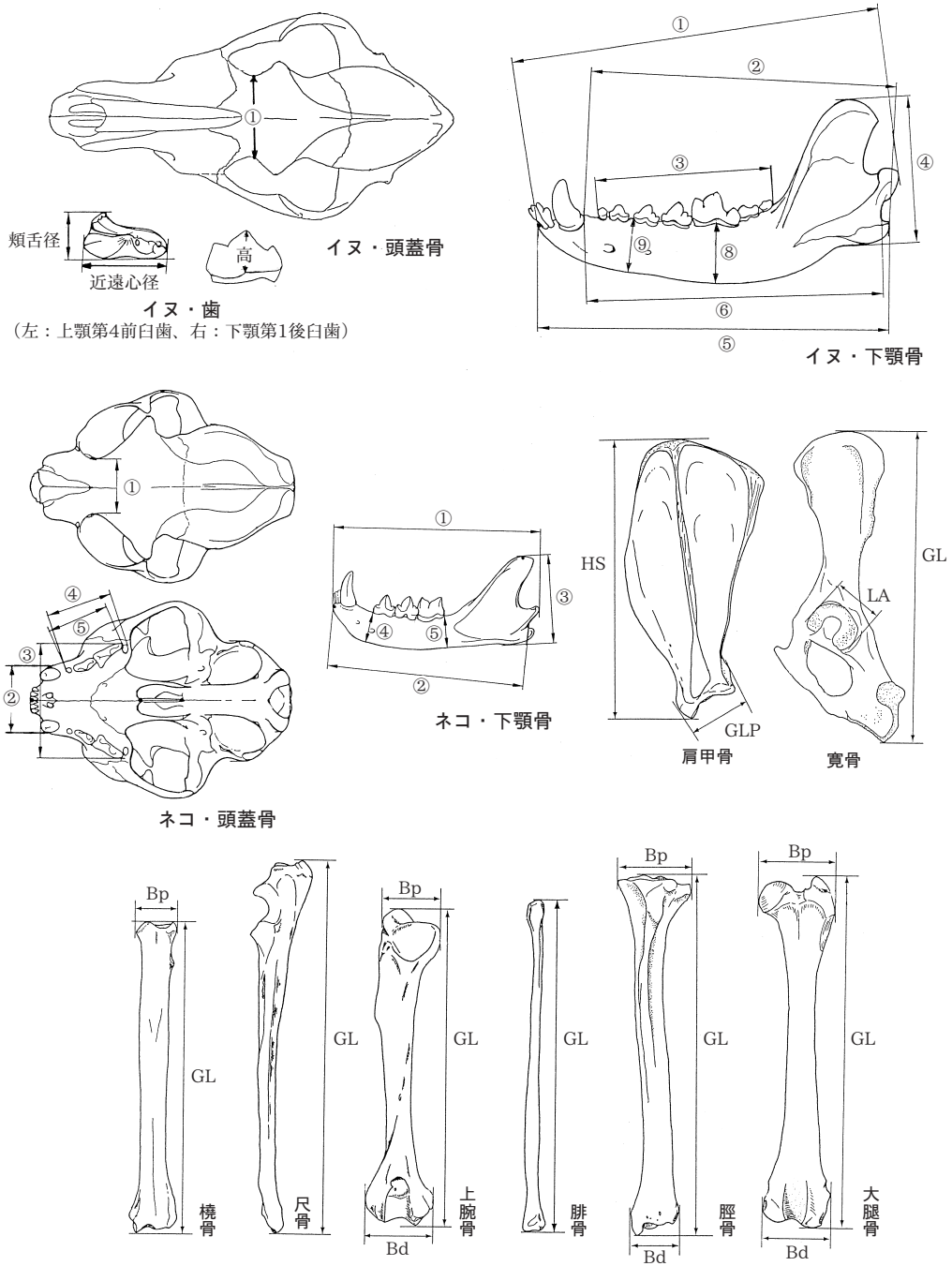


図1 動物遺体計測凡例図(2)

(2) 貝類遺体

① 分析方法

計数の方法は次のとおりである。巻貝類については殻柱が2分の1以上残存しているものをその対象とした。二枚貝類は殻頂部が残存しているものを左右殻でそれぞれ計数し、そのうち多いほうを最小個体数とした。それ以外のものは「破片」として一括した。ひとつの遺構内で破片のみが出土している貝種については破片すべてで1個体とし、表中では「○」で示した。

なお、ハマグリについては、殻長(最大長)50mm前後を境に生息環境が異なり(阿部 2003)、調理用途も異なっていた(桜井・山口 1986)可能性が指摘されているため、50mm以上を大型、それ未満を中小型として区別した。

計測方法は、阿部・加藤(2003)に基づいている。二枚貝類における計測法Aに関して説明を加えると、絞歯部分(絞歯長)に対して平行な線に挟まれた殻の幅を殻高とし、また、それらの線に対して垂直に交わる線によって挟まれた殻の幅を、殻長としている。二枚貝類において、アカガイ類・ヤマトシジミ・シオフキは計測法Aを、それ以外は計測法Bを用いている。

計測には最小値が0.01mmであるデジタルノギスを使用した。

② 分析結果

本地点より出土した貝類遺体は16種、最小個体数で282個体である。そのうち、サザエが97個体と最も多く、次いでハマグリが36個体出土している。次に多く見られたのはアカガイとヤマトシジミで、どちらも最小個体数で34個体である。また、ミルクイガイは20個体、アサリは10個体、アカニシは7個体検出された。そのほか、ヒラサザエ・バイ・イタヤガイ・シオフキ・オオノガイが1、2個体ずつ出土している。まず、主要な貝種について、その傾向を述べる。

サザエ 大きさは殻高の平均が、109.2mmであった。確認できるものすべてが棘の発達した外洋性のものであった。なお、SK166から出土したサザエ1個体には内側に紅の付着がみられた。

ハマグリ 殻長50mm以上の大型が13個体、50mm未満の中小型が16個体、破損によりどちらか不明であるものが3個体であった。

アワビ類 クロアワビ(7個体)・メガイアワビ(8個体)・マダカアワビ(3個体)の3種が確認された。長径の平均は150.4mmでほとんどの個体は平均値に近い値を示している。

つぎに、特に多く出土している遺構についてその傾向を記す。

SK81 10種47個体が出土した。アワビ類(8個体)・サザエ(13個体)・アカガイ(4個体)・ヤマトシジミ(8個体)・ハマグリ(11個体)、ほかにヒラサザエ・シオフキ・ミルクイガイが1個体ずつ確認された。本遺構は、本地点の中で最も多くアワビ類が出土している。長径150~190mm程度の大きなものが目立った。ヒラサザエは、日本近海に生息するもので現在は食用とされている。しかし近世江戸遺跡から出土した事例は今のところない。シオフキには肉食貝によってあけられた穴がみられるため、採集された時には、身が入っていなかった可能性が大きく、他の貝と共に持ち込まれたと考えられる。

SK137 10種52個体が出土した。ヤマトシジミ(16個体)が最も多く、ついでサザエ(9個

種名 遺構番号	アワビ類(巻貝類)			その他の巻貝類				二枚貝類														不明	不明	最小個体数													
	クロアワビ	メガイアワビ	マダカアワビ	不明	サザエ	ヒラサザエ	アカニシ	バイ	アカガイ		イタヤガイ	マガキ		シオフキ		ミルクイガイ		ヤマトシジミ		アサリ					ハマグリ						オオノガイ?	不明					
									殻	蓋		左	右	左	右	左	右	左	右	左	右				左	右	左	右	大型				中小型		不明	左	右
																													左	右			左	右			
11				○					○																											3	
18					2																1	1													3		
21					○											○																			2		
45					○																												○		2		
50				○																															1		
56					3	1		1						1	1						3	3										1		8			
58				○	1							○																							2		
62	1				1				○					1		1																			5		
81	2	3	3		13	4	1		4	3				1	1	1	8	7						2	1	9	7								47		
98				○																															1		
137	1				9	2		2	6	5		3	5				2	9	16	1			3	3	1	4		○	○	○				52			
144				○	1																														2		
152	1	2			52	18		3	6	8	1		6			6	10	1	3					3											89		
166	1	2			1				1	4							1	2					1		1	1									13		
174																					1															1	
290		1			2	8		1	1	5	8						3	4	1	1		3		5											32		
361					1																															2	
380																							1	1	1	2	2									4	
389	○			1					○																											3	
石基礎					1																															1	
表探				1	2	1			1											2					1	2										8	
合計	7	8	3	7	88	37	1	7	1	26	28	1	4	11	1	2	12	18	22	30	5	9	7	13	14	16	3	1	1	1	1	1	1	282			
最小個体数	7	8	3	7	97	1	7	1	34	1	12		2			20		34		10		15		18		3	1	1	1	1	1	1	282				

表2 貝類遺体組成一覧

体)・ハマグリ(7個体)・アカガイ(6個体)が目立ち、マガキ・アカニシ・ミルクイガイ・アサリ・クロアワビ・オオノガイ?も1・2個体ずつ含まれた。アワビ類は、他遺構は短径120mm前後と大きいものがほとんどであるのに対して、本遺構は39mmの幼貝のクロアワビが1個体出土したのみである。

SK152 10種89個体で、本地点では最も多く出土している。サザエ(52個体)がかなり多く、ミルクイガイ(10個体)・アカガイ(8個体)もまとまった数でみられた。ほかに、アワビ類・アカニシ・ヤマトシジミ・ハマグリが3個体ずつ含まれていた。サザエは計測できたものはいずれも殻高110mm前後、計測できなかった個体も同じくらいの大きさのものが多い。アカガイは殻長100~110mmで計測できなかったものも含め、大きさが揃っていた。イタヤガイは半分以上破損しており柄の部分を取り付ける穿孔などの加工痕は確認できなかったが、右殻であるため貝杓子として用いられたものである可能性が高い。

その他の遺構の出土状況については表2に記した。

(3) 魚類遺体

① 分析方法

同定に際し、採取された魚骨の中から部位や種の特定が困難な資料(骨片など)と鱗に関しては本報告からは除外してある。計数は、同一個体の破片と考えられるものや、その部位全体のごく僅かな部分であるものは除いて破片数を対象とした。

遺構	項目	記述統計量						計測値 (mm) のみ							
		サザエ	ヤマトシジミ		ハマグリ		アワビ類		アカガイ		ミルカイガイ				
			殻高	殻長		殻長		種名	長径	殻長		殻長			
				値	左・右	右殻	左殻			右殻	左殻	右殻	左殻		
SK18	計測値 (mm)		19.43	右殻											
SK81	サンプル数	11	5	左殻	1	6	マダカ	160.90	99.88	107.36	164.47	123.77			
	平均値	101.98	24.16			28.36			181.99	104.16	113.23				
	標準偏差	11.78	2.32			4.19			155.86		118.22				
	最小値	77.84	21.66			22.52		189.37							
	中央値	106.43	23.92			27.93		154.24							
	最大値	120.18	28.24			75.12	34.37	クロ	152.29						
	尖度	0.33	1.18			-1.67			103±						
	歪度	-0.85	1.10			0.12									
	変動係数	0.12	0.11			0.16									
	SK137	サンプル数	4		14	右殻	3	2	クロ	39.08	112.71	114.05			
平均値		109.08	21.20					(短径)		57.09					
標準偏差		10.77	2.16												
最小値		97.50	17.13		36.37		42.57								
中央値		106.05	21.79		42.57										
最大値		126.72	24.62		44.00		78.35								
尖度		2.50	-0.72												
歪度		1.34	-0.57												
変動係数		0.11	0.11												
SK144							不明	105.50							
SK152	サンプル数	18	3	右殻	1		メガイ	103.00		101.89					
	平均値	112.78	21.63								112.06				
	標準偏差	8.05													
	最小値	98.37	18.50												
	中央値	112.84	21.31			73.53									
	最大値	130.39	25.09												
	尖度	-0.17													
	歪度	0.04													
	変動係数	0.07													
SK166	計測値 (mm)	104.71	20.91	左殻		71.43			107.48						
SK290	計測値 (mm)	117.89	18.87	左殻	63.01	66.18				117.54					
			19.01												
SK361	計測値 (mm)		17.81	右殻											
SK380	計測値 (mm)					41.68									
地点内での平均値		108.88	21.50		42.63			150.39		105.32				—	

表3 貝類遺体サイズ一覧

資料数の表記については、同定資料数と最小個体数の2種類を用いた。同定資料数とは、同定を行った資料の破片数である。したがって、椎骨のように1個体に多数存在するものでもその破片数を記載した。最小個体数は、遺構内でその種を部位・左右で分類し、椎骨を除く部位で最も多かった数を最小個体数とした。なお、椎骨のみ出土の場合は1個体とした。本報告では基本的に同定標本数を用い、必要な場合にのみ最小個体数で記した。単位は、同定標本数に「点」、最小個体数に「個体」を用いた。なお、同定に用いることのできる部位で種を特定できなかった資料は「種不明」とした。以下に、注釈を要する分類群について記載する。

「タイ」型 椎骨は形状がタイ科のものと同様である魚種が多い。歯についてもタイ科以外の魚種のものである可能性のものもある。以上のような資料については「タイ」型と表記した。

カジキ類 標本はマカジキ(マカジキ属)を用いたがメカジキ属の可能性もあるためカジキ類と

研究編 6. 医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体

分類群	部位	遺構							表 採
		SK56	SK81	SK137	SK144	SK152	SK166	SK290	
メジロザメ科	椎骨						1		
マイワシ	腹椎							1	
ニシン科	椎骨							5	
コイ	主鰓蓋骨			/1					
コイ科	尾椎			1					
ナマス属	擬鎖骨						1/1		
サケ属	尾椎	1							
タラ科	歯骨 角骨 腹椎 椎骨	1/		1/ 1/ 4 7	1/ 1/				
アンコウ科	主上顎骨 腹椎						1/ 1		
カサゴ属	歯骨				/1				
フサカサゴ科	前上顎骨 主上顎骨 歯骨 前鰓蓋骨 主鰓蓋骨 方骨 擬鎖骨			1/ 1/ 1/	1/ 1/			/1	
ホウボウ科	頭骨 主鰓蓋骨			○ 1/1			○		
コチ科	歯骨 腰带						/1		
スズキ	前上顎骨 主上顎骨 主鰓蓋骨				/1 /1			1/ 1/1	
スズキ属	主鰓蓋骨 角舌骨 腹椎			1/2 2/1 1					
ハタ科	前鰓蓋骨 方骨 尾椎			/3 1/ 3					
キス属	歯骨 腹椎 尾椎			/1 1 5				1	
アマダイ属	主上顎骨			1/1					
アジ科マアジ型	腹椎 尾椎 尾節棒状骨				3 1			1	
アジ科	舌顎骨 第一椎骨				1/			1	
ブリ属	主鰓蓋骨 擬鎖骨 舌顎骨 尾椎	1/ 1/				1/1			
イサキ	歯骨 舌顎骨				/1 /1				
イサキ?	尾椎				2		1		
クロダイ	前上顎骨 主上顎骨 歯骨				2/1 1/1 1/				
マダイ	前頭骨 上後頭骨 前上顎骨 歯骨 主鰓蓋骨 角骨 方骨	1		5/4 4 4/4 5/5 3/2 2/3 /1	3/1 1 2/3 1/2 2/1 /1 /1		1 1 1/1 2/3 1/1		
マダイ亜科	主上顎骨 口蓋骨 角骨 方骨			3/3 2/ /2	/1 3/3 1/		/2 /1		

分類群	部位	遺構							表 採	
		SK56	SK81	SK137	SK144	SK152	SK166	SK290		SK361
タイ科	主上顎骨 歯骨 前鰓蓋骨 主鰓蓋骨 後側頭骨 上擬鎖骨 舌顎骨 上舌骨 方骨 第一血管間棘		/1	/1 /1 2/2 1/1 /1 /1 /1		2/4		/1	3/ 1/1	
タイ型	腹椎 尾椎 歯	1	1	8 12 25	6 26 7				2 3 18	1
ボラ科	主鰓蓋骨 角骨・上舌骨 基後頭骨 腹椎		/1	/1 /1 1	/1 1/				2/1 1 3	
サバ属	前上顎骨 歯骨 舌顎骨 角舌骨 腹椎 尾椎				1/ 3/3 1/ 1/ 4 2			1/	/1	
カツオ	腹椎 尾椎				5 3				2 1	1
マグロ属	腹椎 尾椎 椎骨		1 1 1							
カジキ類	腹椎 尾椎の棘		1 1							
ヒラメ	擬鎖骨 腹椎 尾椎		/1		4 1					
カレイ科	主上顎骨 前鰓蓋骨 腹椎 尾椎					/1			/1 1 2	
フグ科	前上顎骨 前鰓蓋骨 角骨 方骨			3/3 1 1	/2				/1	
真骨類・種不明	前上顎骨 歯骨 角骨 主鰓蓋骨 方骨 椎骨			/1 1/1 2 2 2 17	1/			/1		1
真骨類・同定不可	前上顎骨 角骨 前鰓蓋骨 椎骨			/1 15	2 4		1/		1/ 1/ 8	
真骨類・同定外	歯 口蓋骨 舌顎骨 角舌骨 間鰓蓋骨 下鰓蓋骨 上擬鎖骨 擬鎖骨 肩甲骨 烏口骨 鱗 鰭棘 破片			2 2 1 1 1 1 1 1 7 1	4 3 1 3 1 3 1 多数 多数 多数			1 13 1	4 /1 1 3 6 多数 多数 1	

凡例 「/」：左右のある部位を「左/右」で表示。「○」：破片が認められるものの、細片の為計数できなかったもの。
「多数」：微細破片などが多く計数できなかったもので、多量に出土しているもの。いずれも12×8.5cmの袋に一杯程度。

表4 魚類遺体一覧表

研究編 6. 医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体

分類群	遺構								合計
	SK56	SK81	SK137	SK144	SK152	SK166	SK290	表採	
メジロザメ科						1			1
マイワシ							1		1
ニシン科							1		1
コイ科			1						1
ナマズ属							1		1
サケ属		1							1
タラ科		1	1	1	1				4
アンコウ科						1			1
フサカサゴ科			1	1			1		3
ホウボウ科			1			1			2
コチ科		1				1			2
スズキ		1		1			1		3
ズズキ属			2						2
ハタ科			3						3
キス属			1				1		2
アマダイ属			1						1
アジ科				1			1		2
ブリ属		1	1	1					3
イサキ				1					1
クロダイ				2					2
タイ科	1	1	5	3	2	2	3	1	18
ボラ科		1	1	1			2		5
サバ属				3		1	1		5
カツオ				1			1	1	3
マグロ属		1							2
カジキ類		1							1
ヒラメ		1	1						2
カレイ科			1	1		1	1		4
フグ科			3	2			1		6
合計	1	10	23	19	3	8	16	2	

表5 魚類遺体最小個体数表

した。

② 分析結果

魚骨は、本地点全体で8箇所の遺構と表採から、同定標本数が364点(歯は除く)、36分類群が確認された。また、他に33点の種不明真骨類遺体がある。最も多かったのはマダイの82点で、マダイの可能性のあるマダイ亜科(18点)・タイ科(40点)・「タイ」型(60点)を加えると全体の55%を占める。次いで、タラ科・ボラ科・サバ属・フグ科といった中型魚が15点前後ずつ出土している。マイワシ(1点)・アジ科(5点)・キス属(8点)などの小型魚は、水洗選別を行った遺構で出土がみられた。本地点で確認された分類群は近世江戸遺跡でごく普通に出土するものである。出土部位を見ると、小型魚以外にも、アンコウ・スズキといった大型の魚も頭部から尾部の骨まで出土している。タイ科・タイ型・ホウボウ科・スズキ・ハタ科・ボラ科の一部には切断痕や刺突痕がみられた。

つぎに、特に多く出土している遺構について以下に記す。

SK81 17点12分類群が確認された。サケ属・タラ科・スズキ・マグロ属・カジキ類・ヒラメと、ほとんどが大型の魚種である。マグロ属・カジキ類は他の遺構ではあまり見られなかった。マグロ属の椎骨、マダイの歯骨に切断痕、カジキ類の椎骨に刺突痕がみられた。

SK137 本地点で一番多い135点が同定され、18分類群が確認された。そのうちマダイが42点、マダイ亜科・タイ科・「タイ」型を含めると86点で遺構内の64%を占める。スズキ属・ハタ科・キス属・フグ科も7・8点ずつまとまって確認されている。マダイ・タイ科の内臓骨や椎骨、スズキの前鰓蓋骨、ホウボウ科の頭骨に切断痕が見られた。ヒラメは、4点の椎骨が出土しているが、その横径は9.0～16.2mmであった。同定に使用した体長40cmの現生標本の最大横径8.3mmであることから、それよりは大型の個体であると考えられる。

SK144 140点21分類群が確認された。タイ科が約半数を占め、サバ属(15点)・タラ科(13点)も多い。イサキ・クロダイは本遺構でのみ出土している。マダイの前頭骨・歯骨、タイ科の後側頭骨・舌顎骨・口蓋骨に切断痕が見られた。

SK290 56点17分類群が確認された。「タイ」型を含むタイ科が半分を占める。マイワシ・ニシン科・ナマズ属は本遺構でのみ確認された。マダイの上後頭骨・歯骨・主鰓蓋骨、タイ科の前鰓蓋骨、「タイ」型の椎骨と、スズキの主鰓蓋骨に切断痕がみられた。

そのほかの遺構の出土状況・詳細については表4に記した。

③ 魚類遺体の切痕

本地点では364点の同定魚類資料中、40点から切痕や刺突痕が確認された。そのうち30点はマダイ・マダイ亜科を含むタイ科の頭部の骨と「タイ」型の椎骨である。そのほか、カジキ類・マグロ属・スズキ・ホウボウ科と、いずれも大型の種であった。

切痕の最も多かった部位はマダイの前頭骨であった。9点中、4点は左右どちらかの側面を切り落としたもの(桜井・山口(1986)の分類における、II aまたはII c:図2)、2点は中央部で縦に二分したものであり、これらの型は東京大学本郷構内の遺跡(以下“東大”と略す)の他の地点でも

種類	部位	切痕の状況	型	遺構
マダイ	前頭骨	中央右よりを縦に切断。右側が残存。	II c	137
マダイ	前頭骨	中央部を縦に半裁。右が残存。		137
マダイ	前頭骨	中央部右寄りを縦に切断し左端が残存。	II a	137
マダイ	前頭骨	中央部を縦に半裁。右が残存。		137
マダイ	前頭骨	ほぼ中央部を縦に半裁。左前端が残存。		137
マダイ	前頭骨	左端が残存し後部が切断。		137
マダイ	前頭骨	中央右寄りを縦に切断し、右端が残存。	II c	137
マダイ	前頭骨	右側を縦に切断、左側は前方から縦に1cmほどの切り込み。		144
マダイ	前頭骨	左前方を2方向から垂直に切断。		290
マダイ	上後頭骨	後方を体と垂直に横断。		166
マダイ	上後頭骨	後方に左側からの垂直な切り込みが2箇所。後方上端を後部右から斜めに切断。		290
マダイ	左主鰓蓋骨	ほぼ中央部に刺突痕。		137
タイ科	右主鰓蓋骨	下端を体とほぼ水平に切断。		137
マダイ	右主鰓蓋骨	下端を体とほぼ水平に切断。		137
マダイ	右主鰓蓋骨	下方を体とほぼ水平に切断。		290
マダイ	左歯骨	下部後端を切断。		81
マダイ	左歯骨	前端を体とほぼ垂直に、横断。		290
マダイ	右歯骨	後端を前方上部から後方下部にかけて切断。		144
マダイ亜科	左口蓋骨	中央やや下寄りを体とほぼ水平に切断。		144
マダイ亜科	左口蓋骨	前端を体とほぼ垂直に、横断。		144
タイ科	右舌顎骨	下端を切断。		144
タイ科	左前鰓蓋骨	上端を体とほぼ水平に切断。		137
タイ科	左前鰓蓋骨	上端を体とほぼ水平に切断。		137
タイ科	左前鰓蓋骨	上端を体とほぼ水平に切断。		290
タイ科	右前鰓蓋骨	後部上端から前部下端に向かって中間部までの切り込み。		137
「タイ」型	腹椎	下方の棘を両側から削ぐように切断。		137
「タイ」型	尾椎	左側面を削ぐように切断。	II	137
「タイ」型	尾椎	右側面を削ぐように切断。	II	137
「タイ」型	尾椎	両側面を削ぐように切断。	II	137
「タイ」型	尾椎	右側面を削ぐように切断。	II	290
「タイ」型	尾椎	右側面を削ぐように切断。	II	290
カジキ類	腹椎	左下部に2箇所、刺突具による穴。		81
カジキ類	尾椎の棘	椎体の中心を輪切りにするように。棘部分のみ残存。		81
マグロ属	椎骨	前端を横断。	I	81
マグロ属	腹椎	前端上部から後部下端に向かって中間部までの切り込み。		81
ボラ科	右主鰓蓋骨	関節部先端を横断。		81
ハタ科	左前鰓蓋骨	中央やや下を体とほぼ水平に切断。		137
スズキ	左主鰓蓋骨	関節部から体と水平に後方に向かって切り込み。		290
ホウボウ科	頭骨	切断。切断部位不明。		137

表6 魚類遺体切痕一覧

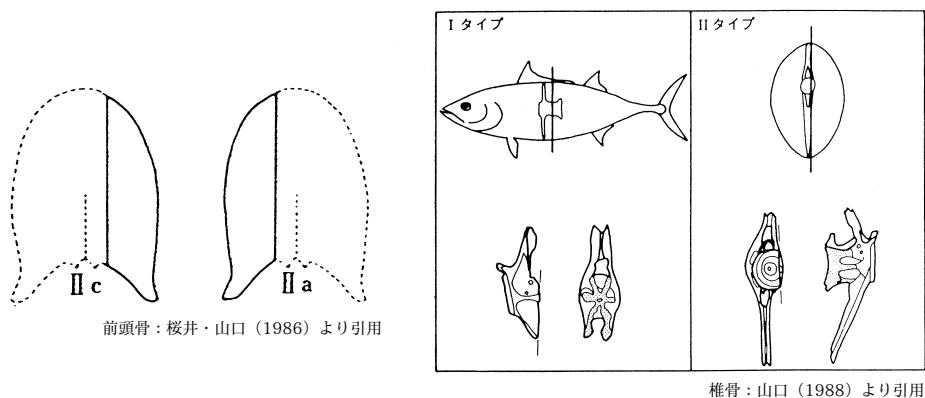


図2 魚類遺体切痕凡例図

最も多く見られた切断法である。これらのものからは、現代の調理法で言う兜焼き、アラ煮、潮汁など、マダイの頭部のみを使った料理が想定される。

次に多かったのは、「タイ」型の椎骨(7点)で、そのうち5点は左右どちらかまたは両側面を削ぐように切り落とされたもの(山口(1988)の分類におけるIIタイプ:図2)で、二枚おろし、三枚おろしの際につけられたものと考えられる。そのほか、輪切り状に横断されたもの(Iタイプ)も1点出土した。これは、魚をぶつ切りにしたときにつけられたもので、SK81から出土したマグロ属も同様である。しかし、マグロ属の場合は市場で切断されてから持ち込まれたものの可能性が高い(阿部 2001)。

切痕のほとんどが刃物で切り落とされた「切断痕」であったが、細い棒状のものによる「刺突痕」や、切断が途中で止められている「切り込み」もみられた。

刺突痕は、マダイの左主鰓蓋骨と、カジキ類の椎骨で確認された。カジキ類の刺突痕は、椎骨下方に2つ、1つは刺し損ねて滑るように、1つは突き刺すようにあるため、解体する時などに固定するためについたものと考えられる。マダイは、主鰓蓋骨の位置から頭部のほぼ中央に左から刺されたものであるが、調理過程でついたものか、流通過程でついたものかは不明である。

切り込みがあったものは5点で、うち3点はマダイの頭部、他は、スズキの頭部とマグロ属の椎骨であった。

なお、詳細については表6と写真PL.3～5を参照されたい。

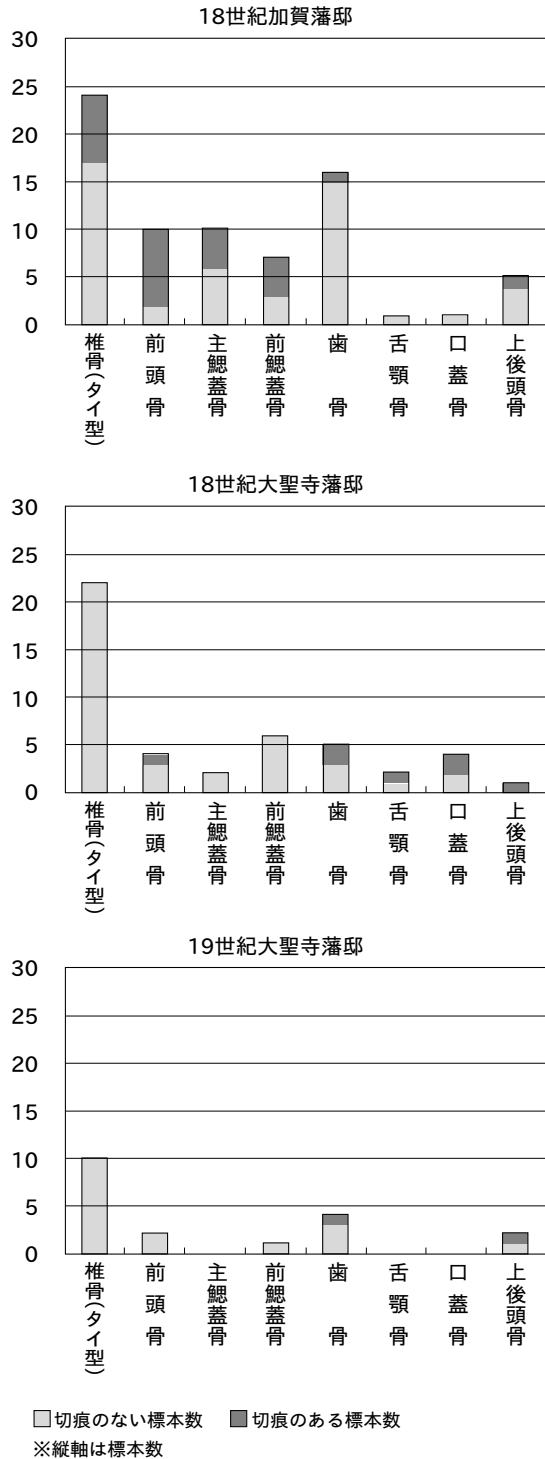


図3 魚類遺体切痕グラフ

④ 年代・屋敷別に見た切痕

本地点から出土した魚骨を、年代、屋敷、部位ごとに分類し、切痕のある資料と、ない資料の同定資料数をグラフにすると、図3のようになった。全体量では、加賀藩邸のほうが切痕のある資料の割合が多い。部位ごとにみると、椎骨は、加賀藩邸では3割ほどに切痕があるが、大聖寺藩邸には一つも見られない。このほかの部位でもそれぞれ異なった傾向がある。

こういった傾向から、献立内容の違いが考えられる。例えば、タイの椎骨に切断痕が無い地点は、姿焼き・姿煮などの料理が多く行われており、一方、切断痕の多い地点では、刺身など身をさばく料理が多く行われていたことが想定される。

本地点の資料は、取り上げ方法の問題から、廃棄実態を反映しているとはいいがたく、議論の対象とすることは難しい。よって、今回は、魚骨切痕の分析から、東大における食生活復元の可能性とデータを提示するに留め、今後新たなデータの蓄積を待ってから、改めて議論していきたい。さらに、相伴資料や、文献資料との比較によっては、料理の提供される場の違い(ハレやケ、等)まで論及していけるものとする。

(4) ま と め

貝類は、最小個体数で282個体出土している。そのうち約3分の1がサザエで、続いてハマグリ・アカガイ・ヤマトシジミがそれぞれ35個体前後で多かった。魚類は、マダイが最も多く、魚類遺体が多数出土する遺構には必ずみられた。最小個体数ではマダイに次いで、フグ科・ボラ科・サバ属が他の種より若干多かったが、いずれも5・6個体で他の種とあまり数に差は見られなかった。確認された貝種・魚種は、そのほとんどが近世の江戸遺跡において、頻繁に出土するものであった。また、マダイを中心とした魚類遺体の1割ほどには切痕が確認された。これらは、当時の食生活を調理方法の面からより具体的に復元しうる資料である。

おわりに、魚介類が特に多く出土している遺構について簡単にまとめる。

SK81 19世紀前半の大聖寺藩邸に関する遺構である。本遺構は水洗選別法による資料の抽出を行っている。最小個体数で47個体の貝類と10個体の魚類が出土した。貝類では、アワビ類が8点で本地点のなかで最も多く出土している。そのほとんどが長径150～190mmの大型の個体であった。本遺構は、水洗選別を行ったにも関わらず、サケ属・タラ科・ブリ属・マグロ属など、大型の魚種が中心である。

SK137 18世紀前半の加賀藩邸に関連する遺構である。52個体の貝類と、23個体の魚類が出土した。魚類、貝類とも、多数の種が混合していた。貝類ではヤマトシジミ・サザエ・ハマグリが、魚類では、マダイ・ハタ科・フグ科が特に多かった。

SK144 18世紀中葉の大聖寺藩邸に関連する遺構である。魚類は19個体が出土した。魚種は、マダイを中心に多くの種が混合していた。貝類はサザエとアワビ類が1個体ずつ出土したのみである。

SK152 18世紀後半の加賀藩邸に関連する遺構である。魚類はほとんど出土しなかった。一方、貝類が89個体と、本地点の中で最も多く出土した。その半数以上がサザエで、大きさのそろったものが多かった。魚類がほとんど出土していない要因として、大きな遺構であり、さらに、水

洗選別法による資料の抽出も行われていないため、多くのものは取り上げられなかった可能性があることも考慮する必要がある。

SK290 18世紀前半の加賀藩邸に関連する遺構である。本遺構は、水洗選別による資料の抽出を行っている。貝類が32個体、魚類が16個体出土した。貝類は、サザエとアカガイが多い。マイワシとニシン科は、本地点では、本遺構でのみ出土している。(野々村 海)

3. 鳥類遺体

(1) 資料と方法

医学部附属病院外来診療棟地点から出土したすべての鳥類遺体(計230点)を対象に分析した。これらの資料は、動物遺体の出土した26遺構中10遺構から手掘り採集によって得られたもので、17世紀後半から19世紀半ばに比定される。資料の同定は、現生骨格標本との肉眼比較で行った。現生標本としては、川上和人氏(森林総研)所蔵の標本と筆者所有の標本を利用した。なお、現生標本のあとに示した番号は各人の骨格標本の登録番号で、×××-○としたものは川上氏の、単にNoとしたものは江田の標本である。骨の部位の名称は、Baumel et al(1993)及び日本獣医解剖学会編(1998)に、分類群名については基本的に日本鳥類目録編集委員会編(2000)に従い、日本鳥類目録編集委員会編(2000)が触れていないカモ科の亜科及び族分類についてはA.O.U.(1983)に従った。同定は、上腕骨や尺骨、大腿骨や脛足根骨といったいわゆる主要四肢骨のほか、方骨や寛骨、下顎の関節骨など、解剖学的な位置が明らかにできて、分類群間での形態の差が明瞭に認められるものを対象とした。足指骨については、同定の対象とした部位の骨でありながら現生標本の不足などから鳥綱以下の同定ができなかった資料と共に、種不明鳥類として記載した。一方、資料の破損が著しいために同定できなかった資料は同定不能鳥類とした。資料の残存状態は、資料にほとんど損傷がないものは完存(w)、近位端や遠位端の関節が半分以上残っているものはそれぞれ近位端(p)、遠位端(d)とした。また、いわゆる主要四肢骨のうち、骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨については中間部(m)として記載し、以上の条件に合わない資料は中間部破片(fr)とした。時間の都合から、被熱や解体、切断の痕跡などの観察は目に付いたものを記載するに、資料の計測はカモ類について最も多く出土した中手骨と、属を単位とした同定が可能な上腕骨を測定するに留まった。すべての資料を対象とした精査は今後の課題としたい。

(2) 結果

分析した230点中222点で目以下の同定ができた。確認された分類群はサギ類、ガン類、カモ類、マガモ類、タカ類、キジ類、チドリ類、シギ類、ハト類、スズメ類、カラス類で、計7目7科に及んだ(表7)。このうち、マガモ類とガン類、カラス類には骨の大きさに大きな変異が認められ、それぞれ2種以上が含まれる可能性がある。同定された資料の約80%(183点)はマガモ類を含むカモ類であり、これにガン類(約10% 25点)、シギ類を含むチドリ類(計5点)が続いた。他の分類群は調査地点全体で3点以下と少なかった。以下、今回確認された分類群別、及び時代別に骨の出土傾向を記載する。

研究編 6. 医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体

遺構	分類群	部位	左右	残存部	点数	
SU1	サギ類	脛足根骨	左	d	1	
	ガン類	大指基節骨	右		1	
	カモ類	尺骨	右	p-m	1	
足根中足骨		右	w	1		
SK81	ガン類	大腿骨	右	w	1	
		橈骨	左	p-m	1	
	カモ類	上腕骨	左	m-d	1	
		尺骨	右	p	1	
			左	w	1	
		橈骨	右	p-m	1	
			左	d	1	
		手根中手骨	右	w	1	
	マガモ類	上腕骨	左	p-m	1	
	SK137	ガン類	上腕骨	右	pfr	1
				d	1	
				mfr	1	
尺骨			右	w	1	
			左	w	1	
橈骨			右	w	1	
			左	w	1	
手根中手骨			右	m-d	1	
			左	w	1	
				p-m	1	
小翼節骨			左		1	
			大指基節骨	左		1
		左			1	
カモ類		上腕骨	右	m-d	1	
				d	7	
				dfr	1	
			左	d	10	
			尺骨	右	w	8
					p	1
				p-m	2	
				m-d	3	
				d	1	
		左		w	13	
		橈骨	左	p	1	
				p-m	3	
				m-d	2	
				d	2	
			右	w	4	
				p	1	
		手根中手骨	右	p-m	2	
				m-d	2	
				d	1	
			左	w	8	
				p	1	
				p-m	9	
		大指基節骨	右	m-d	1	
				w	7	
				p	1	
				m	1	
				m-d	3	
				d	1	
		小翼節骨	右	w	17	
				p-m	1	
				m-d	1	
			左	w	1	
				2		
	右		w	2		
	大腿骨	右	w	1		
		左	m-d	1		
脛足根骨	左	p-m	4			
		d	2			
腓骨	左		1			
SK137	マガモ類	上腕骨	右	w	2	
		シギ類	橈骨	右	p-m	1
			脛足根骨	左	m	1
	種不明鳥類	仙骨			1	
		大指基節骨	右		1	
	SK141	ガン類	脛足根骨	左	m	1
	SK144	ガン類	尺骨	左	d	1
			橈骨	左	d	1
		カモ類	尺骨	左	d	1
			橈骨	左	d	1
			手根中手骨	右	w	1
		チドリ類	脛足根骨	左	d	1
			足根中足骨	左	w	1
		シギ類	手根中手骨	右	w	1
			脛足根骨	右	p-m	1
手根中手骨			右	m-d	1	
スズメ類	脛足根骨	右	d	1		
	尺骨	右	p-m	1		
SK152	マガモ類	上腕骨	左	w	1	
	スズメ類	手根中手骨	左	m-d	1	
	ガン類	脛足根骨	左	m-d	1	
SK166	カモ類	橈骨	左	w	1	
		手根中手骨	左	w	1	
	マガモ類	上腕骨	右	p	1	
	ハト類	尺骨	左	p-m	1	
SK290	ガン類	上腕骨	右	m-d	1	
			左	d	10	
		手根中手骨	右	p	1	
	カモ類	尺骨	右	w	8	
			左	p	1	
		橈骨	右	p-m	2	
			左	m-d	3	
		マガモ類	上腕骨	右	w	13
				左	p	1
	手根中手骨		右	p-m	3	
			左	m-d	2	
	大指基節骨		上腕骨	右	w	4
				左	p	1
		尺骨	右	p-m	2	
			左	m-d	2	
橈骨		右	d	1		
		左	w	8		
手根中手骨	上腕骨	右	p	1		
		左	p-m	9		
	大指基節骨	右	m-d	1		
小翼節骨	上腕骨	右	w	7		
		左	p	1		
	大指基節骨	右	m	1		
SK361	マガモ類	上腕骨	右	p	3	
		左	p-m	1		
	タカ類	上腕骨	右	p	2	
SK380	カモ類	上腕骨	左	p	1	
		尺骨	左	m-d	1	
	種不明鳥類	足指骨			1	

w : 完存, p : 近位端, d : 遠位端, m : 中間部, fr : 破片を示す。

表7 鳥類遺体一覧表

① 分類群別出土傾向

サギ類 SU1 から脛足根骨が1点認められた。大きさはコサギの標本 (No. 33) とほぼ同じであった。

ガン類 8遺構から計25点が認められた。検出された資料の約90% (22点) は前肢の骨で、後肢の骨は大腿骨1点、脛足根骨2点であった。また、大指基節骨や小指節骨、小翼節骨も計4点認められた。大きさとしては、マガンの標本 (No. 25) とほぼ同じ大きさのもの (12点)、明らかに小さいもの (8点)、それより明らかに大きいもの (5点) が認められた。

カモ類・マガモ類 9遺構から183点が出土した。江田 (2005) で示した基準に従って上腕骨を属単位で同定した結果、マガモ類 (15点) のみ確認された。検出された資料の約90% (165点) は前肢の骨で、後肢の骨は大腿骨6点、脛足根骨8点、腓骨1点、足根中足骨3点であった。また、大指基節骨と小翼節骨が計7点認められた。最も保存状態が良かった手根中手骨の大きさをみると、コガモの標本 (No. 7) とほぼ同じ大きさのものから、ハシビロガモ (No. 30)、ヒドリガモ (No. 6)、オナガガモ (No. 4)、カルガモ (No. 84) 程度の大きさの骨まで認められた (図4)。このうちでは、ヒドリガモ～オナガガモ程度の大きさのものが多かった。

タカ類 SK361 からトビ (No. 3) よりやや大きい上腕骨の中間部が検出された。

キジ類 SK361 からキジ♂ (No. 143) よりやや大きい尺骨が検出された。近位端が一部破損しており、そこから骨髓骨様の細かな骨の粒子が見られる。しかし、骨髓腔を満たすほどには発達していないため、骨髓骨かどうかの判断は保留としたい。

チドリ類・シギ類 SK137、SK144 から計5点が検出された。チドリ類としたものは、標本の不足からシギ科かカモメ科かの識別ができなかった資料である。他に明らかにカモメ科の骨と考えられる資料はなく、また、標本と比較した場合にすべての資料がほぼ同じ相対的な大きさを持つため、おそらくシギ科のものと考えられる。比較標本の不足から詳細な大きさの記載は困難であるが、すべての資料がオグロシギ (No. 172) よりかなり小さく、コアジサシ (No. 290-1) よりかなり大きいものであった。

ハト類 SK166 からキジバト (No. 17) よりやや大きい尺骨が認められた。

スズメ類 SK144 と SK152 から計3点、アカハラ (No. 425-01) とほぼ同じ大きさの骨が認められた。スズメ目には大きさや形態の類似した種が多数いるため、資料が実際にアカハラであるかどうかは不明である。

カラス類 SK137 から脛足根骨が、SK166 から上腕骨が検出された。前者はハシブトガラス (No. 13) と、後者はハシボソガラス (No. 32) とほぼ同じ大きさであった。

種不明鳥類 SK137 で検出された大指基節骨と仙骨が種不明として残った。大指基節骨はコハクチョウ (No. 200) のものより大きく、ツル類、ハクチョウ類、タカ類ではないものである。仙骨は小型鳥類のものである。

② 時代別出土傾向

17世紀の遺構 17世紀後半に比定されるSK361から、カモ類 (1点)、マガモ類 (3点)、タカ類 (1点)、キジ類 (1点) が出土した (表7)。骨の保存状態は良好であった。最小個体数はマガモ類で2個体であった他はすべて1個体であった。タカ類、キジ類は、他の遺構からは出土していな

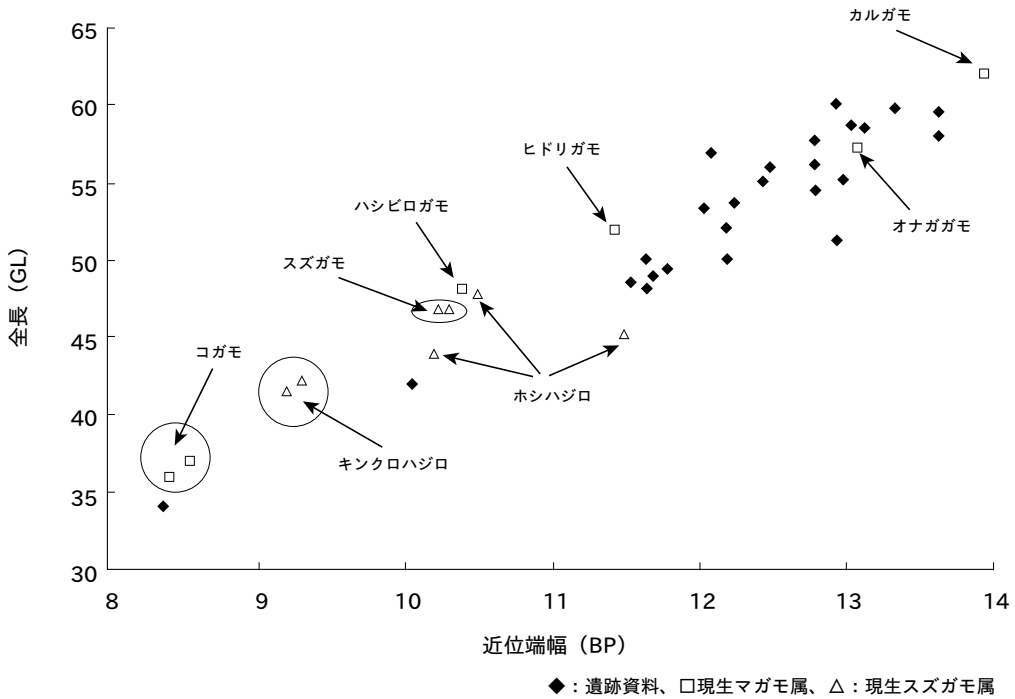


図4 中手骨の大きさ比較

いものである。出土した3点すべてのマガモ類で、上腕骨頭に解体痕が認められた。

18世紀の遺構 18世紀前半に比定されるSK141、第2四半期に比定されるSK290、第3四半期に比定されるSK152、18世紀中頃に比定されるSK137とSK144から計202点が出土した(表7)。骨の保存状態は良好で、計202点中196点で目以下の同定ができた。確認された分類群としては、ガン類、カモ類、マガモ類、チドリ類、シギ類、スズメ類、カラス類が挙げられる。これらの資料の約80%はマガモ類(10点)を含むカモ類(計164点)が占め、ガン類(21点)が続いた。遺構ごとにみると、ごみ穴であったと推定されるSK137からは150点、土採り穴であったと推定されるSK290からは37点と、他の遺構に比べ多くの鳥類遺体が検出された。以下、これら2つの遺構について詳細を記す。

SK137 シギ類とカラス類を各1点、種不明鳥類を2点含む以外、カモ類(計132点、マガモ類2点を含む)とガン類(14点)の骨で構成されていた。これらの骨の部位別出土量をみると、カモ類では約93%、ガン類では100%を前肢の骨(上腕骨、尺骨、橈骨、手根中手骨、大指基節骨、小指翼骨、小指節骨)が占めた。また、カモ類では、ほとんどの尺骨や橈骨、手根中手骨が完存、あるいは割れ口の新しい資料であったのに対し、上腕骨のみ、約90%の資料(26点中23点)が遠位端のみ残存する、割れ口の古い資料であった。最小個体数はカモ類で19個体、ガン類で3個体、他では各1個体であった。

SK290 カモ類(計27点、マガモ類7点を含む)とガン類(4点)の骨で構成されていた。骨の部位別の出土量をみると、カモ類では約75%、ガン類ではすべてが前肢の骨であった。カモ類

の上腕骨のうち、遠位端のみが残存する資料は9点中1点のみで、SK137で認められたような遠位端のみの資料が多い傾向は認められなかった。また、出土したカモ類の大腿骨4点中、3点で骨幹内側面中間部に解体痕が認められた。最小個体数はカモ類で4個体、ガン類では2個体であった。

19世紀の遺構 19世紀第2四半期に比定されるSK81とSU01、19世紀～幕末に比定されるSK166とSK380から計22点が出土した(表7)。確認された分類群としては、サギ類、ガン類、カモ類、マガモ類、ハト類、カラス類が挙げられる。内訳は、カモ類計15点(マガモ類2点を含む)、ガン類4点、他の分類群は各1点であった。ごみ穴であったと推定されるSK81では、18世紀のSK137やSK290と同様、前肢の骨の多い傾向(8点中8点)が認められた。

(3) まとめと考察

同定された鳥類の大部分をカモ類(80%)とガン類(10%)が占め、キジ類の骨が非常に少ない傾向が17世紀から19世紀の各遺構で見られた。この傾向は加賀藩邸内の他地点でも認められるものであるが(秋元 1989、金子 1990a、b、新美 1990)、同じ大名屋敷でも丸の内遺跡や溜池遺跡ではニワトリ類がカモ類と同程度出土している(山根・西本 1994、西本・山根 1996)。こういった違いは各大家の嗜好性の違いに由来するのであろうか。カモ類のうちでは、御殿下記念館地点や医学部附属病院地点、法学部4号館・文学部3号館地点ではコガモ程度の大きさの鳥が占める割合が高いことが指摘されているが(金子 1990a、b、新美 1990)、本地点ではこの傾向は認められず、むしろオナガガモ程度からヒドリガモ程度の大きさのカモが多かった。

カモ類の骨の出土状況には他に3つの興味深い傾向が指摘できる。第一に、ほとんどが上肢の骨(上腕骨、尺骨、橈骨、手根中手骨、大指基節骨、小指翼骨、小指節骨)に限られること、第二に、カモ類の骨が大量に出土した18世紀中頃のSK137とSK290の間で上腕骨の残存状態に差が認められたこと、第三に、大指基節骨、小指翼骨、小指節骨といった上肢の指の骨が比較的多く検出されたことである。第一の傾向は江戸時代の他の遺跡のカモ類や他の分類群でも認められることがある。一方で、同じカモ類でも、御殿下記念館地点の309号遺構や802号遺構では下顎骨を含むほぼ全身の骨の偏りない出土が(金子 1990b)、葛西城跡(中世から近世)ではカモ類の鳥口骨、肩甲骨、上腕骨への偏りが認められている(金子 1994)。第二の傾向として挙げた上腕骨の残存状態の違いは、SK137では遠位端のみが出土したのに対し、SK290ではこういった傾向が認められなかったというものである。SK137と同様の傾向は御殿下地点の309号遺構でも指摘されている(金子 1990b)。調理をするうえでの取り扱いの相違がこういった違いを生むことは推測できるが、これらの違いの意味を読み解くためには、料理史などの観点からの検討が必要であろう。第三の傾向として挙げた上肢の指の骨の検出は、これらの遺構に羽根のついた状態の上肢が廃棄されたことを示唆すると考えられるが、こういった骨の有無の違いは調理上の取り扱いの違いを顕著に示すのではないかと考えられる。

謝 辞

本報告にあたり、川上和人氏(森林総合研究所)には現生標本を閲覧させていただいた。末筆ながら、深く御礼申し上げる次第である。

(江田 真毅)

4. 哺乳類遺体

(1) はじめに

本地点から出土した哺乳類遺体は破片数で250点(遊離歯、小破片等を除く)、4種(不明哺乳類を除く)である(表9)。そのほとんどはイヌとネコであり、地点内最小個体数(註1)でイヌが13体分(成9、幼・若4:破片数 $172 + \alpha$)、ネコが6体分(成5、幼・若1:破片数 $69 + \alpha$)出土している。そこで哺乳類遺体はイヌとネコを中心に報告を行う。なお、その他に種の明らかになった哺乳類遺体は、ウマの右上顎第2前臼歯がSD62から1点、イノシシの犬歯(牙)がSK81から1点のみである(PL.16)。SD62は19世紀、SK81は17世紀前半に属する。詳細は、表8の観察表を参照されたい。なお、哺乳類遺体は、遺構ごとに資料番号を付している。

(2) 分析方法

哺乳類の計測方法はDriesch(1976)に基づいている。さらに、イヌの計測方法は、斉藤(1963)、茂原(1986)に基づいている。なお、計測表(CD-ROM表15)のなかの番号は、計測凡例図(図1)のものとそれぞれ対応している。

イヌは、基礎データの提示と共にいくつかの分析を行っている。

山内(1958)の推定式を用いて四肢骨の計測値からの体高推定を行っている。具体的には、橈骨がⅡ式、その他の部位はⅢ式を用いている。なお、未癒合のため骨端が欠損している「幼獣」のものも、参考までに実際の計測値をもって体高を推定している。また、一部破損しているがある程度サイズが予想のできるものも、その予想した値で体高を推定している。これらのあいまいな値による体高の推定値には、表中では、“※”を付してある(CD-ROM表15)。なお、イヌのサイズの分類は、長谷部(1952)に基づいている。

歯の萌出の状況と四肢骨骨端の閉鎖時期を基準にイヌの年齢の推定を行っている。歯の萌出の状況による推定は森(1930)を、四肢骨骨端の閉鎖時期による推定は浅利(2003)を基準として用いている。成長の過程の区分は、生後6ヶ月以下のものを「幼獣」、生後6ヶ月以上と推定されるが骨端が未癒合であるなど骨化が完了せず成長途上にあるものを「若獣」、すべての骨の成長が完了しているものを「成獣」としている。さらに、「成獣」のうち、上顎や下顎において歯の脱落後の歯槽の閉鎖がみられるものについては、その点について加えて記載を行った(表10)(註2)。なお、ネコについても四肢骨骨端の閉鎖時期からの年齢推定を、浅利(2003)を基準におこなった。

SK166より出土した病変により骨増殖の見られたいくつかのイヌ資料については、レントゲン写真の撮影を行った(PL.12)。レントゲン写真の撮影は、国立歴史民俗博物館の永嶋正春先生に依頼した。

(3) 各遺構における哺乳類遺体の出土状況

① 17世紀

SK361 哺乳類遺体が出土した17世紀に属する遺構は、SK361のみである。本遺構は、本調

研究編 6. 医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体

遺構名	整理番号	種名 (最小個体数/年齢による内訳)	部位名 (最小個体数/年齢による内訳)	左/右	数量	同一個体	観察所見	残存状況					成長の程度		大きさ	計測	歯冠計測		
								完	近	-	中	-	速	区分				年齢推定結果	
SU1	01	不明	頭蓋骨		1			眼窩部分のみ。											
SK18		不明	四肢骨		1			× 四肢骨骨片破片。											
SK22	01	イヌ (成1)	上顎骨 (1)	左	1		(××××××××M1××)	後臼歯 (M1~3) 付近のみ残存。歯は第1後臼歯のみ。					成				○		
	01		02		右	1		歯は遊離し、残存しない。	M1 後側から M3 付近の顎底部分のみ残存。					成				△	
	01		03	歯			○		右下顎 M1 ほか、歯の破片多数。					成				○	
	02		寛骨 (1)	右	1		破損が激しい。	△ ○ △ ○ ○ ○ ○					成						
	03	イヌ?	頭蓋骨+下顎骨		○			破片資料					-						
SU28	01	イヌ (幼・若1)	大腿骨 (1)	左	1	A	残存する大転子部分の端部が未癒合であることと骨質が未成熟であることから若獣より下と思われる。	×	●	○	○	○	×	幼・若	1歳6ヶ月未満				
				右	1	A	残存する大転子部分の端部が未癒合であることと骨質が未成熟であることから若獣より下と思われる。	×	●	○	○	○	×	幼・若	1歳6ヶ月未満				
	02		寛骨 (1)	左	1	A?		胸骨部分のみ残存。					幼・若						
	03		寛骨	右	1			胸骨部分破片。					-						
	-		不明	不明		○		破片資料。					-						
SU58	01	不明	桃骨	右	1			遠位端。					-						
SD62-1	01	ウマ	上顎第2前臼歯	右	1			歯冠のみ残存。					-				○		
SK81	01	イノシシ	犬歯		1			○					-						
SK133	01	イヌ	桃骨	右	1		両骨端未癒合。	●					幼	6ヶ月未満			○		
SK137	01	イヌ (2/成? 1, 幼1)	下顎骨	左	1		(×××××××p3p4) C (永久歯) は歯槽内に埋伏。M1より後ろの歯槽は少し開いた程度。	△ Cより前の部分が欠損。					幼	3ヶ月			○		
			犬歯		1		永久歯、頬舌径5.76mm、近遠心径9.53mm、歯冠高18.18mm。	○					-						
	06	ネコ (1)	肩甲骨	右	1			△ 遠位の一部が破損。					成				○		
	09		桃骨	右	1			○					成				○		
	07		尺骨	右	1			○					成				○		
	08		01	02	寛骨	左	1	B		△ 恥骨が欠損					成				○
						右	1	B		△ 恥骨と腸骨下部が欠損。					成				
	04		大腿骨	右	1	C		○					成				○		
	05			左	1	C		× ○ × × × ○					成				○		
	03		01	02	脛骨	左	1			○					成				○
						右	1			○					成				○
	10			腓骨	左	1			× × ○ ○ ○ ○					成				○	
	15		椎骨		11			-					成						
	14		仙骨		1			○					成						
	11	01	02	踵骨	左	1			○					成					
					右	1			○					成					
	12	01	02	距骨	左	1			○					成					
				右	1			○					成						
13	01	02	中足骨	左	4		同一個体 (第2~第5)	○					成						
				右	4		同一個体 (第2~第5)	○					成						
-		不明	不明		○		同定外	-					-						
SK152	05	イヌ (4/成2, 幼2)	下顎骨 (2/幼1, 成※1)	左	1		(××××P1×P3××××) P2脱落後、歯槽が開閉。顎体は低い。老犬。	×					成※				○		
				右	1		CとM1が萌出途中。萌出済みの歯は遊離して残存しない。	×					幼	4~5ヶ月			○		
	06		犬歯		1		○					-							
	13	01	02	第3頸椎		1		○					成						
				第4頸椎		2		○					成						
	03	04	上腕骨 (1/成1)	左	1			× × × × ○ ○					成				○		
				右	1			× × × × ○ ○ × ×					成						
	07		大腿骨 (1/幼1)	左	1		両骨端未癒合。	× ● ○ × ○ ●					幼・若	1歳6ヶ月未満			○		
	09	10	桃骨 (3/成1, 幼2)	左	1		No.8とは別個体。	× ○ ○ × × ×					成				○		
					1		骨端未癒合。No.8とは別個体。	× ● ○ × × ×					幼	6ヶ月~8か月以前					
	08			右	1		骨端未癒合。No.9・10とは別個体。	× × × ○ ○ ●					幼・若	1歳6ヶ月未満					
	11		尺骨 (1/幼1)	右	1		骨端未癒合。	× ● ○ ○ × ×					幼・若	1歳3ヶ月未満					
	12		寛骨 (1/成1)	左	1			× ○ ○ ○ ○ × ×					幼・若	1歳3ヶ月未満					
	14		ネコ (1体分)	頭蓋骨		1	D		× 上顎と吻部が欠損。					成					
	16			上腕骨	左	1	D		○					成				○	
	17	01		02	尺骨	左	1	D		○					成				○
						右	1	D		× ○ ○ ○ × ×					成				
18	01	02		桃骨	左	1	D		× ○ ○ ○ ○ × ×					成				○	
				右	1	D		× × × ○ ○ ○					成						
20		椎骨		5	D		-					成							
19	01	02	寛骨	左	1	D		腸骨と、恥骨前枝~後枝までが欠損。					成				○		
				右	1	D		腸骨と、恥骨前枝~後枝までが欠損。					成						
15	01	02	大腿骨	左	1	D		○					成				○		
				右	1	D		○					成						
-		不明	不明		○		同定外	-					-						

表8 哺乳類遺体一覧表 (1)

研究編 6. 医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体

遺構名	整理番号	種名 (最小個体数/年齢による内訳)	部位名 (最小個体数/年齢による内訳)	左/右	数量	同一個体	観察所見	残存状況					成長の程度		大きさ	計測	歯冠計測					
								完	近	-	中	-	速	区分				年齢推定結果				
SK166	01	イヌ(6/成3, 幼・若3) ネコ(3/成2, 幼1)	頭蓋骨(2)		1		右(XXXXXP24XX)左(XXXXXP4XX)右側P2が顕著に歯槽部、骨に痕跡が残存。左と共にP24歯槽部とP4歯槽部にいく程度歯槽部がみられる。P2P3それぞれの歯が無く、歯が小さく、歯は短い。小型犬。	×							成							
					1	E	前頭部左側に外傷によると思われる骨髄液による骨増殖がみられる。(レントゲン写真)	×							成							
	03	01	下顎骨(3)	左	1	E	(XXXXXP1234M12X)角突部分が変形・肥厚している。また関節突起が欠損している。P4M1歯槽部に軽度の歯周炎がみられる。P2P3P4それぞれの歯が無く、また、P4の後面が外側にずれて、M1と重なる。	△							成			○	○			
				右	1	E	(XXXXXP234M12X)P2~M1の歯槽部に軽度の歯周炎がみられる。P2P3P4それぞれの歯が無く、また、P4の後面が外側にずれて、M1と重なる。M1野突起舌側縁と次突起先、M2後突起先端がそれぞれ磨耗し、歯かに象牙質が露出。下顎部が舌側に歪み出す。	△						成		中	○	○				
	04				1		(XXXXXP2XXXXXX)P2の歯槽が少し内転する。P2P3P4それぞれの歯が無く、(ほぼ完存)							成		大	○	○				
	05				1		歯は遊離して残存しない。下顎体は低い。								成			○	△			
	32			歯	1			○														
	38	01		第1頸椎	1			○							成							
	38	02		第2頸椎(2)	1			○							成							
	39				1		椎体端部が未癒合。	●							幼・若							
	35			第6頸椎	1			○							成							
	36	01		第1胸椎	1			○							成							
	36	02		第8胸椎	1			○							成							
	37			仙骨	1			○							成							
	40			腰椎	1		椎体端部が未癒合。	●							幼・若							
	54	01		尾椎	2			○														
	27			肩甲骨(1)	右	1									関節部付近のみ残存。	成				○		
	19	01		上腕骨(3)	左	1	F		×	×	○	○	○	○	○	成						
	20		1						×	×	×	○	○	×	○	成						
	18				右	1		骨幹は細い。	○							成			中大	○		
	19	02			1	F			×	×	△	△	△	○	○	成						
	21				1			×	×	△	○	○	×	○	成							
	22			尺骨(1)	左	1			×	○	○	×	×	×	○	成						
	23		右			1			×	○	○	○	×	×	○	成				中	○	
	24			寛骨(3/成2, 幼1)	左(3)	1									恥骨部分が欠損。	成						
	25	01	1			G										腸骨下半分と骨上半分のみ残存。	成				○	
	26				1			骨端が未癒合で、骨質もやや未成熟であるが、サイズは大きい。								腸骨から寛骨白上端まで残存。	若					
	25	02			右(1)	1	G								腸骨から寛骨白上端まで残存。	成						
	07			大腿骨(6)	左(3/成2, 若1)	1	G	骨幹は細く、真→直ぐである。	×	○	○	○	○	×	○	成						
	09					1				△	△	○	○	○	△	○	成				中	
	13	01				1	H		骨端未癒合、骨端を除いて完存。サイズは大きく、形もほとんど成犬のものと同じ。	●	●	○	○	○	●	○	若	7~11ヶ月			○	
	06				右(6/成3, 幼・若3)	1	G	骨幹中位において外側や後方に骨髄液による骨増殖が見られる。(レントゲン写真)	×	○	○	○	×	×	○	成						
	08					1		転子窩に近い骨頭部分、裏側第三転子付近それぞれに髯り痕がみられる。	△	△	○	○	○	△	○	成					大	
	10					1		両骨端未癒合。サイズは小さく未成熟。	●							幼	6ヶ月未満				○	
	11				1		骨端未癒合。サイズは大きく、形もほとんど成犬のものと同じ。	×	●	○	○	○	×	○	若	7~11ヶ月						
	12				1			×	×	○	×	×	×	×	成							
	13	02			1	H	骨端未癒合、骨端を除いて完存。サイズは大きく、形もほとんど成犬のものと同じ。	●	●	○	○	○	●	○	若	7~11ヶ月						
	14	01		脛骨(4/成2, 若・幼2)	左(3)	1	G	骨幹は細く、ほとんど骨が折れている。	○							成					中	
	15	01				1	H		●	●	○	○	○	○	●	○	若	1歳~1歳1ヶ月				○
	17					1			骨端未癒合。サイズが小さく未成熟。	×	●	○	○	×	×	○	幼	1歳1ヶ月未満				
	14	02				右(3)	1	G	骨幹は細く、ほとんど骨が折れている。	×	×	○	○	○	○	○	成					
	15	02			1		H		●	●	○	○	○	○	●	○	若	1歳~1歳1ヶ月				
	16					1		骨幹は細く、短い。	×	×	○	○	○	○	○	成						
28			腓骨		左	1	I	遠位端欠損。	×	○	○	○	○	×	成							
30			踵骨	右	1	I		○							成							
31			距骨	右	1			○							成							
33	01		中足骨(2)	左	3		同一個体(第2~4)。	○							成							
	02				2			同一個体(第2・3)。	○							成						
34					3			同一個体(第2・3・5)。	○							成						
41			下顎骨	左	1			△						成					○			
42			上腕骨	右	1			○							成					○		
43					左	1			×	○	○	×	×	×	成						○	

表8 哺乳類遺体一覧表(2)

研究編 6. 医学部附属病院外来診療棟地点出土の動物遺体

遺構名	整理番号	種名 (最小個体数/年齢による内訳)	部位名 (最小個体数/年齢による内訳)	左/右	数量	同一 個体	観察所見	残存状況					成長の程度		大き き	計 測	歯 冠 計 測					
								完	近	-	中	-	遠	区分				年齢推定結果				
	44		尺骨	左	1			○						成			○					
	46			左	1			×	○	○	×	×	×	成			○					
	45			右	1			×	○	○	○	○	×	成			○					
	51			橈骨	左	1			○						成			○				
	50		大腿骨		左	1	J	骨端未癒合。	●						幼	10ヶ月未満		○				
	47			脛骨	左	1	J		×	●	○	○	×	×	幼	1歳3ヶ月未満		○				
	49 01				1	K		○							成			○				
	48				右	1		骨幹は細く、真っ直ぐ。表面は滑らか。	×	×	×	○	○	○	成							
	49 02				1	K		△	○	△	○	○	○	成								
	29			腓骨	右	1		骨頭欠損。	×	×	○	○	○	○	成							
	52 01			中足骨	左	1		第2欠。	○													
	52 02				右	1		全てあり。	○													
	16			不明	椎骨		○			×												
	54 02				胸骨		1			×												
					不明		○		同定外(イヌ肋骨など)。	-												
SK174	01	イヌ (7/成4, 幼・若3)	下顎骨 (6/成4, 幼2)	右	1		(XXXXCP1234M12X) 犬歯骨舌部のエナメル質が剥がれるように欠損。噛み合わせの不具合によるもの。P4M1歯槽側に軽度の歯周症がみられる。P2P3P4それぞれの歯が開く。P4後側がわずかに外側にずれM1と重なる。	△						成※	5・6歳以上		中	○	○			
					1		(XXXXP234M12X) P4M1歯槽側に軽度の歯周症がみられる。それによって、M1は歯根が明かに露出。P2P3P4それぞれの歯が開く。P4後側がわずかに外側にずれM1と重なる。	△						成※			中	○	○			
					1	L	(XXXXP234M12X) M1後側からM2の歯槽側に軽度の歯周症がみられる。P2P3の歯が開く。犬歯は、歯根のみ残存。	△							成			中	○	○		
					1		萌出の完了した歯は、全て遊離し残存せず。CP2P3が萌出途中。P3には、乳歯の歯片が残存。骨質は未成熟。	△									幼	5ヶ月前後		○	△	
					1	M	(XXXXP1×P34M123) P2が脱落後、歯槽間隙痕跡は残存。歯周症によるもの? P2-M1の歯槽側に軽度の歯周症がみられる。P3P4の歯が開く。また、P4後側とM1前側が重なっている。	△									成※			中	○	○
					1	N?	(XXXX×p2p3XXXX) CP2P3が萌出途中(未久歯)。P2P3は、歯槽内の永久歯によって乳歯が持ち上げられ、歯根部分の一部が外に露出している。Cの乳歯歯根が残存。	×									幼	5~6ヶ月		○	○	
					1	M?	No.8の関節突起と似ていることからそれと対するNo.5の一部か?										関節突起とその周辺のみ残存	?				
					1		歯は遊離して残存しない。	△									若	7ヶ月~1歳		○	△	
					1	M	(XXXXP1×P34M12X) P2脱落後、歯槽間隙痕跡は残存。P4M1歯槽側に軽度の歯周症がみられる。P3とP4の歯が開く。またP4後側がM1と重なる。	△									成※			中	○	○
					1	L	(XXXXP234M12X) M2歯槽側に軽度の歯周症がみられる。P2P3P4それぞれの歯が開く。P4後側がやや外側にずれ、M1と重なる。	×									成				○	○
		1	N?	歯槽内にP4(永久歯)が埋伏。										P4(乳歯) 前端部のみとその周辺の顎体のみ残存。	幼							
		1		左(XXXX×P2×P4M1X) 右(XXXX×P4M1X) 右側P4が脱落後、歯槽間隙痕跡は残存。P4M1歯槽側に軽度の歯周症がみられる。左P4の前部歯槽が遊離し、歯根が露出。右P4前突起先端が遊離し、骨に象牙質が露出。										成※				○				
		1		右(XXXX×M1X) P4の歯槽の舌側部分が遊離し、歯根が明かに露出。軽度の歯周症による可能性あり。										成				○				
		37		肩甲骨	左	1		関節部分骨端未癒合。						関節部分とその周辺のみ残存。	幼			○				
		39		頸椎		2		同一個体(第3・第4)。	○					成								
		40		胸椎		5		同一個体。	○					成								
		41		腰椎		10		同一個体。	○					成								
		14 01		上腕骨(4/成2, 幼・若2)	左	1			×	×	○	○	○	○	成			○				
		15			1				×	×	×	×	×	○	成			○				
		17			1			近位骨端部分のみ。骨端が承継した資料で合致するものは無し。	×	○	×	×	×	×	-							
		55 01			1	O			×	×	○	○	○	×	幼							
		16			1	P	骨端未癒合。		×	●	○	×	×	×	幼・若	1歳3ヶ月未満		○				
		14 02			1				○						成			中	○			
	55 02			1	O	両骨端未癒合		●						幼	5ヶ月未満		○					
	56			1	P	骨端未癒合。		×	●	○	○	×	×	幼・若	1歳3ヶ月未満			○				
	21		尺骨(4/成2, 幼・若2)	左	1			×	○	○	○	×	×	成				○				
	22			1			骨端未癒合。しかし骨質はしっかりしている。	×	●	○	×	×	×	幼・若	10ヶ月未満			○				
	25			1				×	×	○	○	×	×	成								
	54			1			骨端未癒合。		×	●	○	○	×	×	幼・若	10ヶ月未満						
	23			右	1				×	○	×	×	×	×	成							

表8 哺乳類遺体一覧表(3)

遺構名	整理番号		種名 (最小個体数/年齢による内訳)	部位名 (最小個体数/年齢による内訳)	左/右	数量	同一個体	観察所見	残存状況					成長の程度		大きさ	計測	歯冠計測		
									完	近	-	中	-	速	区分				年齢推定結果	
	18	02			右	1	S?		腸骨のみ残存。					成						
	16	01		大腿骨 (1)	左	1			○						成			○		
	16	02			右	1			×	×	×					成			○	
	17	01		脛骨 (2)	左	1			×	×	×	×	×	○	成				○	
	17	02			右	1			×	×	×	×	○	○	成				○	
	19					1			×	○	×	×	×	×	成				○	
	21			踵骨	左	1			○						成					
	22			距骨	右	1			○						成					
	23	01		中足骨	左	2		同一個体 (第4・5)。	○						成					
	23	02			右	1			第2。	○						成				
	-	-	不明	不明		○		同定外。	-						-					
SK361	6		イヌ (2/成1, 幼1)	上腕骨 (1: 幼)	右	1		両骨端未癒合。	●						幼	6ヶ月~8か月以前				
	1	01		寛骨 (1)	左	1		腸骨翼上方に蓄り痕あり。また、耳状面に擦痕が見られる。	恥骨部分が欠損。					成						
	1	02			右	1			恥骨部分が欠損。					成						
	4			仙骨 (1)		1		左側耳状面下に蓄り痕と思われる下から上へ刺突したような痕が見られる。	左側耳状面の上部が欠損しているのみ。					成						
	3	01		大腿骨 (1)	左	1		骨端裏面に傷があり、また、ほぼその下の大腿骨根に上から下に向かって刺突したような傷がある。さらに骨頭と小転子の間に細い亀が見られる。これは蓄り痕であると思われる。	×	△	○	○	○	×	成					
	3	02			右	1		近位表側に蓄り痕あり。また、転子関節外側に2本の深い傷が見られる。	×	○	○	○	○	×	成					
	2	01		脛骨 (1)	左	1		骨幹がS字状に強く湾曲している。近位裏の内側膝蓋筋線上に傷が見られる。	×	△	○	○	○	○	成					
	2	02			右	1			×	×	×	×	×	○	成					
	7			腓骨 (1)	右	1			×	×	×	×	×	○	成					
	5	01		中足骨 (1)	左	3		同一個体 (第3~5)。	○						成					
	5	02			右	3		同一個体 (第2・4・5)。	○						成					
	-	-		不明	不明		○		同定外。	-						-				
東表探	01			イノシシ?	中手・足骨	不明				-						-				

《残存状況》に関する凡例
 完：完存か否か、近：近位端、中：骨幹中位、遠：遠位端、-：それぞれの間、○：残存部分、×：欠損部分、●：端部は未癒合のため欠損するが、その他は残存、△：一部欠損

表8 哺乳類遺体一覧表 (5)

査地点の北東端に位置し、加賀藩藩邸に関連している。出土した哺乳類遺体はイヌのみである。両方の骨端が癒合していない幼獣のものと思われる右上腕骨が1点出土している他は、成獣のものが出土している。出土している部位は、腰の部分(仙骨及び左右寛骨)から後ろでそれより前の骨は出土していない。これらの骨は、大きさや骨質から同一個体のものと考えられる。なお、これらの骨のほとんどに、近位を中心に主にイヌによってかじられたものと思われる痕跡が観察された(詳細は表8、PL.10・11)。そのことから、そのイヌの遺体が死後すぐに本遺構内に投棄されたものであると仮定するならば、本遺構に投棄(埋葬?)した際にその遺体の上に土を被せなかった、もしくは、他のイヌによって簡単に掘り返されるほどの土しか被せずそのまま、放置されていた状況が推測される。

② 18世紀

イヌやネコが出土した遺構の数は、本調査地点の中では、18世紀に属するものが最も多く、また、資料自体の量も多い。イヌとネコが出土した遺構は、SK22とSU28を除いて、本調査地点の南側中央に集中している。いずれも加賀藩藩邸に関連した遺構である。出土状況の詳細は不明であるが、遺構の性格や他の遺物との共伴関係から、明確に埋葬されたと判断することのできる資料はない。

イヌは、生後5・6ヶ月の幼獣から成獣、中でも歯槽の閉鎖のみられるやや老齢なものまでさまざまな成長過程のものを有する。

ネコは、各遺構において最小個体数で1・2体分ずつ出土しており、各遺構で1体分はほぼ全身

イヌ (成獣)

	頭蓋骨		下顎骨	上顎骨		犬歯		歯		胸椎		腰椎		尾椎		仙骨	肩甲骨	上腕骨	尺骨	桡骨	第1中手骨	第2中手骨	第3中手骨	第4中手骨	第5中手骨	第6中手骨	腕骨		掌骨		指骨		趾骨			
	左	右	左	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
SU1																																				
SK18																																				
SK22																																				
SU28																																				
SU58																																				
SD62-1																																				
SK81																																				
SK133																																				
SK137																																				
SK152																																				
SK174																																				
SK290																																				
SK361																																				
合計	3	2	2	6	8	2	0	1	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	

イヌ (幼・若獣)

	下顎骨		肩甲骨		上腕骨		尺骨		桡骨		腕骨		掌骨		指骨		趾骨		
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	
SU1																			
SK18																			
SK22																			
SU28																			
SU58																			
SD62-1																			
SK81																			
SK133																			
SK137																			
SK152																			
SK174																			
SK290																			
SK361																			
合計	2	3	1	1	2	2	4	1	2	2	1	1	3	3	3	3	3	3	

ネコ

	頭蓋骨		下顎骨		肩甲骨		上腕骨		尺骨		桡骨		腕骨		掌骨		指骨		趾骨			
	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	右		
SU1																						
SK18																						
SK22																						
SU28																						
SU58																						
SD62-1																						
SK81																						
SK133																						
SK137																						
SK152																						
SK174																						
SK290																						
SK361																						
合計	2	2	1	2	4	2	3	1	2	3	2	3	4	4	3	4	5	1	1	1	1	2

表9 哺乳類遺体組成表

その他

	イヌ?		ウマ		イノシシ?		イノシシ		不明	
	頭蓋骨片	肩甲骨	腕骨	上腕第2前臼歯	中手第5指骨	犬歯(牙)	胸骨	椎骨	四股骨	不明
SU01										
SK29										
SK298										
SU298										
SU58										
SD62-1										
SK81										
SK133										
SK137										
SK152										
SK166										
SK174										
SK290										
SK301										
SK361										
合計	0	1	2	1	1	1	1	1	1	1

○ : 破片有り

遺構名	整理番号	部位名	左/右	成長		I			C	P				M			M1の 近遠心径	
						1	2	3		1	2	3	4	1	2	3		
SK22	01	上顎骨	左	成	歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-
			右		歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
SK137	01	下顎骨	左	幼	歯式	/	/	/	/	×	vii	viii	-	-	-	-	-	
SK152	02	下顎骨	右	幼	歯式	/	/	/	/	×	×	×	×	×	×	×	-	
					所見	M1部分の歯槽は少し開いた程度。												
SK152	05	下顎骨	左	成	歯式	/	/	/	/	5	●	7	×	/	/	/	-	
					所見	M1：ほぼ萌出完了。歯根は形成途中。 C：先端が歯槽外にわずかに出ている程度												
SK166	01	上顎骨	左	成	歯式	/	/	/	×	×	●	7	8	×	×	-	-	
			右		歯式	/	/	/	×	×	●	7	8	×	×	-	-	
	03	下顎骨	左	成	歯式	/	/	/	×	5	6	7	8	9	10	×	18.81	
			右		歯式	/	/	/	×	△	6	7	8	9	10	×	18.44	
SK174	04	下顎骨	右	成	歯式	×	×	×	4	×	6	×	×	×	×	×	-	
			左		歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-
	01	下顎骨	右	成	歯式	×	×	×	4	5	6	7	8	9	10	×	20.77	
			左		歯式	×	×	×	×	×	6	7	8	9	10	×	19.97	
	02	下顎骨	右	成	歯式	/	/	/	×	×	6	7	8	9	10	×	21.64	
			左		歯式	/	/	/	△	×	6	7	8	9	10	×	21.64	
	03	下顎骨	右	成	歯式	/	/	/	×	×	×	×	×	×	×	-	-	
			左		歯式	/	/	/	4	×	6	7	8	9	10	×	-	-
	04	下顎骨	右	幼	歯式	/	/	/	/	4	6	7	8	-	-	-	-	
					所見	C・P2・P3：先端が歯槽外にわずかに出ている程度 p3：歯槽に歯根の一部が残存。												
05	下顎骨	右	成	歯式	/	/	/	/	5	●	7	8	9	10	11	-	19.67	
				歯式	/	/	/	×	×	vi	vii	/	/	/	/	/	-	-
06	下顎骨	右	幼	歯式	/	/	/	/	4	6	7	/	/	/	/	-	-	
				所見	C・P2・P3：先端が歯槽外にわずかに出ている程度 p2・p3：萌出途中の永久歯によって、押し出されて、持ち上がっている。													
07	下顎骨	左	成	歯式	/	/	/	×	×	×	×	×	×	×	-	-		
				歯式	/	/	/	×	5	●	7	8	9	10	×	19.83		
08	下顎骨	左	成	歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-	-	
				歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-	-
10	下顎骨	左	成	歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-	-	
				所見	第4前臼歯（乳歯）前端部のみとその周辺の顎体のみ残存。													
12	上顎骨	右	成	歯式	/	/	/	/	×	6	●	8	9	/	/	-	-	
		左		歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	×	8	9	/	-	-
12	上顎骨	右	成	歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-	-	
		左		歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-	-	
SK290	01	上顎骨	右	成	歯式	/	/	/	/	4	×	●	7	8	9	10	-	-
			左		歯式	/	/	/	×	×	●	×	●	×	/	-	-	
			右		歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	●	/
02	下顎骨	左	成	歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-	-	
		右		歯式	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	-	-

凡例
 アラビア数字（例：4）：永久歯あり、ローマ数字（小文字、例：iv）：乳歯あり、×：歯脱落、歯槽は開放されたまま、●：歯脱落の上、歯槽が閉鎖、/：顎体自体が欠損、△：歯はあるが、欠損し詳細不明、下線を付してある数字（例：4）：歯槽内に埋伏しているもの
 計測値の単位：mm

表10 イヌの上顎及び下顎骨における歯の残存状況

の部位が出土している。これらのネコは全て成獣である。

SK22 本遺構からは、イヌの成獣の左右上顎骨、右寛骨がそれぞれ1点ずつ出土しており、いずれも破損が激しい。

SU28 本遺構からは、イヌの幼獣もしくは若獣の左右大腿骨、左寛骨が各1点ずつ出土している。これらの資料は、サイズ、骨質、形態などから同一個体のもと考えられる。いずれも、骨端が未癒合で、骨質も未成熟である。なお、本遺構の埋没時期は、17世紀後半から18世紀とされているが、便宜上、18世紀に含めた。

SK133 本遺構からは、イヌの幼獣の右橈骨が1点出土しているのみである。資料は完存である。両骨端は未癒合で、骨質も未成熟である。

SK137 本遺構からは、ネコの肩甲骨から中足骨までのほとんどの部位が一体分出土している。また、生後5・6ヶ月ほどのイヌの幼獣の左下顎骨1点と永久歯である犬歯が1本出土している。

SK152 本遺構からは、最小個体数でイヌが4体分、ネコが1体分、それぞれ出土している。

まず、イヌは4体分の内、成獣が2体分、幼獣が2体分出土している。成獣、幼獣ともに1体分ずつ、ほぼ全身の部位が出土している。なお、成獣は第4頸椎が、幼獣は左橈骨が、それぞれ2点ずつ出土している。成獣は、左下顎骨第2前臼歯の歯槽が閉鎖していることから、2体のうち1体はやや老齢な個体であったことが考えられる。また、幼獣は、右下顎骨犬歯と第1後臼歯の永久歯

が萌出途中であることから生後4・5ヶ月であると考えられる。

ネコは、頭蓋骨から大腿骨までのほぼ全身の部位が出土している(PL.14)。

SK174 本遺構からは、最小個体数でイヌが7体分、ネコが1体分、それぞれ出土している。

まず、イヌは7体分の内、成獣が4体分、幼獣もしくは若獣が3体分出土している。成獣は、右下顎骨の観察からの歯槽の閉鎖がみられるやや老齢な個体と考えられるものが4点の内3点認められる。幼獣もしくは若獣3体分の内1体分は左尺骨(No.22)と右橈骨(No.50)である。この2つの資料はそれぞれ残存する骨端部分が未癒合であるものの他の資料と異なり、骨質・形状が比較的成獣に近い。2つの資料が同一個体のもと仮定した場合、尺骨の肘頭が癒合するのが生後5ヶ月から10ヶ月、橈骨の遠位骨端が癒合するのが生後6ヶ月から1歳ぐらいであることから、6ヶ月を過ぎた若獣であると考えられる。残りの特に長骨はそれぞれ骨端が未癒合な上、骨質、形状共にまだ未成熟なものばかりである。下顎骨の観察から、2体分は共に第2及び第3前臼歯の永久歯が萌出途中のため、生後5・6ヶ月であると考えられる。

ネコは肩甲骨から脛骨までのほぼ全身の部位が出土している。

SK290 本遺構からは、最小個体数でイヌが3体分、ネコが2体分出土している。

まず、イヌは3体分の内、成獣が2体分、幼獣が1体分出土している。成獣は、上顎骨と左右下顎骨がそれぞれ1点ずつ出土しており、それらの歯槽で閉鎖をしている箇所があることから少なくとも2体中1体は、やや老齢な個体であったことが考えられる。また、イヌの成獣の骨はほとんどのものが、各部位1点ずつであるが、左上腕骨と左橈骨はそれぞれ2点ずつ出土している。幼獣のものは、左肩甲骨(No.9)が1点出土しているのみである。

ネコは、仙骨のみ2点出土している。その他の部位は、それぞれ1点ずつ出土しており、頭蓋骨から中足骨までのほぼ全身のものが出土している。

③ 19世紀

SK166 哺乳類遺体が出土した19世紀に属する遺構は、SK166のみである。本遺構からは、最小個体数でイヌが6体分、ネコが3体分出土している。

まず、イヌは6体分の内、成獣が3体分、幼獣もしくは若獣が3体分出土している。なお、最小個体数は右大腿骨で算出している。成獣は、出土している2点の頭蓋骨のうち、1点(No.1)の上顎骨において歯槽の閉鎖がみられることから少なくとも3体中1体は、やや老齢な個体であったことが考えられる。また、頭蓋骨1点(No.2)、左下顎骨1点(No.3-1)、右大腿骨(No.6)それぞれに顕著な病変が見られた。詳細は、表8とレントゲン写真(PL.12)を参照されたい。頭蓋骨1点(No.2)と右大腿骨(No.6)は、外傷が骨表面にまで達し、骨膜炎を起こしたことによると思われる骨増殖がみられる。左下顎骨1点(No.3-1)は、なんらかの外傷の治癒痕と思われる関節突起の変形が見られ、本資料の対になる右下顎骨(No.3-2)の下顎底が舌側に張り出していることから、そのイヌが食事など何かを噛む際に、右側により負荷が掛かっていたことが推測される(註3)。

幼獣もしくは若獣は、椎体端部が未癒合である第2頸椎と腰椎が1点ずつ出土している他は、寛骨から脛骨の間の部位が出土している。左寛骨、左右脛骨、左大腿骨で各1点、右大腿骨で2点の資料が、骨端こそ未癒合であるが、形状、骨質において、ほとんど成獣に近いものであった。つまり、幼獣もしくは若獣とされるものの内、最小個体数で3体中2体は若獣であることが考えられる。

ネコは3体の内、成獣が2体、幼獣もしくは若獣が1体出土している(PL15)。成獣は、右尺骨と右脛骨が2点出土している他は、下顎骨から中足骨までほぼ全身の部位が1点ずつ出土している。幼獣もしくは若獣のものは、左側の大腿骨(No.50)と脛骨(No.47)が各1点ずつ出土するのみである。この2点は残存する骨端が未癒合である。なお、大腿骨の骨端の閉鎖時期から、生後7ヶ月から10ヶ月と推測される。さらに骨質が未成熟で華奢であることから、比較的若い個体であることが予想される。また、この2点の資料は、骨質とサイズから同一の個体の可能性が想起される。

(4) ま と め

イヌとネコは、19世紀のSK166を除き、17世紀と18世紀ともに全て、加賀藩邸に関連した遺構から出土している。これらの資料は、明らかに埋葬されたと判断することのできるものではなく、ほとんどのものは、他の“ごみ”と想定される遺物と共に出土している。特に、17世紀後半に属するSK361で腰より後ろのほとんどの主要部位が出土したイヌは、後肢骨の近位を中心に他のイヌによってかじられたと想定される痕跡が多く見られることから、廃棄後、その遺体の上に土を被せることがなかった、もしくは、被せてあったとしても、他のイヌによって掘り返されるほど薄くしか被せていなかったことが推測される。以上のことから、近世を通じて、本地点より出土したイヌとネコは、少なくとも藩主やその家族によって愛玩用に飼われていたものではないと考えられる。また、本地点より出土したイヌやネコの資料のなかに、人為的につけられた切痕と思われる傷を有する資料が確認されなかった。特にイヌに関しては幼齢個体から老齢個体までさまざまな成長過程にあるものが含まれており、幕末に属するSK166においては、外傷によるものと考えられる病変を有する骨も出土している。もし、これらが食肉もしくは鷹餌にするために解体したものであるならば、老齢個体になるまで飼うこともないであろうし、病変が骨に現れる前に、すぐに“つぶしていた”と考えたほうが妥当である。さらに、ほとんどの遺構から、1・2体分のネコが共に出土していること(註4)も考え合わせると、これらのイヌ及びネコのほとんどは、屋敷内に入入りしていた“野良”であり、屋敷内において死んだものを片付けたものであることが推測される。また、当時、多くの大名屋敷において大量のイヌが飼育されていただけでなく、それらの屋敷が江戸の町の野犬の繁殖源になっていたことが指摘されており、現在のようにあまり管理がなされていなかったことも指摘されている(塚本 1993)ことから、そのような、藩邸内で飼育していたものの内、しっかり管理していなかったイヌの遺体を投棄(埋葬?)したものであることも予想される。今までの東京大学本郷構内の遺跡においては、本地点のほとんどのイヌの資料と同様に、明瞭な解体痕を有するものは出土しておらず、また、さまざまな成長過程にあるものが出土している。特に、法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡E8-5号土坑からは、SK166の右大腿骨のように、異常な骨増殖によって骨体が大きく膨らんでいる左橈骨と尺骨が出土している(金子 1990a)。以上のことから、今まで加賀藩邸跡より出土したイヌは、“野良”もしくは大量に飼育されあまり管理されていなかったものの遺体を片付けたものが主体であることが推測される。(阿部常樹)

5. 爬虫類・両生類遺体

両生類はSK166からカエル類のほぼ全身、爬虫類は、SK290からスッポンの左下腹骨板1点、SK152からカメ類の右腹甲板1点と腹甲板破片2片が出土している。詳細は、表11を参照されたい。(阿部常樹)

6. おわりに

医学部附属病院外来診療棟地点において動物遺体は、魚介類遺体はもちろんのこと、鳥類遺体、哺乳類遺体などほとんどのものが廃棄されたものであると考えられる。つまり、埋葬によるものなど廃棄以外の行動によって、そこに遺棄されたものと想定される遺体は、見出すことができなかった。また、魚介類及び鳥類が料理後もしくは食事後に廃棄された食物残滓である一方、哺乳類遺体、特にイヌやネコが屋敷内で死亡し片付けられたものであるなど、これらが廃棄されるに至るまでの経緯は様々である可能性が考えられる。さらに、食物残滓とされる遺体のなかでも、特に魚類遺体の切痕の観察から、廃棄にいたるまでにおいて、料理として出された場の違いなど様々な背景を有している可能性が示唆されている。しかし、現場においてほとんどの場所で、肉眼で確認のできたもののみを対象に資料を取り上げているという問題を有する。また、遺構内において一括で採集しているために、廃棄単位ごとの詳細なその廃棄にいたるまでの背景や経緯を知ることができない。特に18世紀に属するSK152、SK174、SK290は大きな遺構であることから、様々なその背景や経緯を有したものが複合的に含まれることが予想される。

なお、SK137出土の動物遺体の組成は、本地点のなかで特異なものである。まず、魚類と鳥類

遺構名	分類群		部位	左/右	数	備考
SK152	爬虫類	カメ類	腹甲板	右	1	国立歴史民俗博物館所蔵のニホンイシガメの標本とほぼ同じ形状及びサイズ 破片資料2片
				—	○	
SK290		スッポン	下腹骨板	左	1	
SK166	両生類	カエル類	上腕骨	左	1	同一個体、不明は破片資料
				右	1	
			肩甲骨	左	1	
				右	1	
			橈尺骨	左	1	
				右	1	
			仙骨	—	1	
			椎骨	—	5	
			尾椎	—	1	
不明	—	○				

表11 両生類及び爬虫類遺体一覧表

は、地点内で最も多く出土している。魚類は、一部、水洗選別による資料の抽出が行われたにも関わらず、キス属以外の当時も日常的によく食されていたと考えられるイワシ類やアジ科などの小型のものが検出されず、マダイを中心に中・大型且つ高級とされるものがほとんどであった。鳥類は、ガン・カモ類のみである。また、鳥類は、部位にも偏りがあり、四肢骨以外は出土せず、特に主体とするカモ類は、上肢部分(翼の部分)の骨が極めて多く出土している。貝類も魚類と同様に、大型且つ高級とされるものが主体となっている。一方、哺乳類は、イヌが幼獣の左下顎骨と成獣の犬歯が1点ずつ出土するほかは、ネコが1体分出土するのみで他の遺構に比べて少ない。以上から、本遺構の内容物には、宴会などの特殊な場でも出された料理に関連するものが極めて多く含まれていることが推測される。(阿部常樹)

7. CD-ROMに収録したデータ

本報告において、本文の内容とあまり関連性のないデータは、CD-ROMに収録した。そのデータは、以下のとおりである。

表12 貝類遺体計測データ

表13 マダイ計測データ

表14 鳥類遺体基礎データ

表15 イヌ及びネコの長骨計測データ

表16 イヌ及びネコの頭蓋骨・下顎骨計測データ

表17 哺乳類遺体歯冠計測データ(イヌ・ネコ・ウマ)

(阿部常樹)

謝 辞

本報告を行うにあたり、国立歴史民俗博物館及び同館の西本豊弘・永嶋正春両先生をはじめ、新美倫子氏、樋泉岳二氏、小林園子氏、太田敦子氏、山根洋子氏、藤田祐樹氏には有益なご指導と多大なるご協力を賜った。ご芳名を記して感謝の意を表したい。(阿部・野々村)

【註】

- (1) この最小個体数は、あくまで地点内でのものであるため、後述する遺構ごとの最小個体数の合計と等しくならないことを注意されたい。
- (2) 歯の脱落は、老齢化によるものだけでなく、喧嘩など外的要因によっておこる場合も想定され、それをもって年齢を推定することは難しい。しかし、本地点より出土した歯の脱落に伴う歯槽の閉鎖の見られる資料は、歯の磨耗の程度などから比較的高齢なものであると考えられるもののみであった。そこで、本報告中では、以上の議論を省略して記載を行っている。
- (3) 以上の所見は、西本豊弘先生のご教示によるところが大きい。
- (4) 『料理物語』(寛永13年本)のなかでネコは、イヌと同様に食用にされていたことが示されている。また、三味線などに使用するために処理されたものであることも想定される。しかし、本地点より出土したこれらの遺体には、解体痕などが全く観察されないことや、ひとつの遺構から1体から3体分しか出土してい

ないことも考え合わせると、屋敷内で自然死していたものを“ごみ穴”に投棄したものであると考えるのが妥当であると思われる。

【文献】

- 秋元智也子 1989 「動物遺存体 (3) 両生類, 爬虫類, 鳥類, 哺乳類」『東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告1, 東京大学遺跡調査室, 406-408.
- 浅利昌男 2003 『新・犬と猫の解剖セミナー—基礎と臨床—』 株式会社インターズー
- 阿部常樹 2001 「貝類」『魚類』『東京都中央区日本橋二丁目遺跡』 日本橋二丁目遺跡調査会, 294-303.
- 阿部常樹 2003 「近世遺跡出土の貝類遺体とその採集方法について—東京都新宿区市谷砂土原町三丁目遺跡を例に—」『奈和』第41号, 奈和同人会, 27-48.
- 阿部常樹・加藤久雄 2003 「近世江戸府内遺跡出土ハマグリのサイズの推定法」『史紋』第1号 史紋編集委員会, 37-44
- 江田真毅 2005 「生活復原資料としての鳥類遺体の研究—カモ亜科遺体の同定とその考古学的意義—」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』六一書房, 387-406.
- 金子浩昌 1990a 「動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』 東京大学遺跡調査室発掘調査報告2, 東京大学遺跡調査室, 785-787.
- 金子浩昌 1990b 「山下会館・御殿下記念館出土の動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡 山下会館・御殿下記念館地点 第3分冊 考察編』 東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告4, 東京大学遺跡調査室, 244-361.
- 金子浩昌 1994 「葛西城跡出土の動物遺体の研究」『葛西城XVIII 葛飾区青戸7丁目22番地点御殿山公園拡張工事に伴う発掘調査報告書』 葛飾区遺跡調査会, 38-216.
- 斉藤弘吉 1963 『犬科動物骨格計測法』 私家版
- 桜井準也・山口 徹 1986 「自然遺物」『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』 港区麻布台一丁目遺跡調査団, 316-322
- 茂原信夫 1986 『東京大学総合研究資料館所蔵 長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ』 東京大学総合研究資料館
- 塚本 学 1993 『生類をめぐる政治』 平凡社
- 樋泉岳二 2003 「明石町遺跡の魚類遺体群」『東京都中央区 明石町遺跡』 明石町遺跡調査会, 172-180.
- 西本豊弘・山根洋子 1996 「溜池遺跡出土の動物遺体」『溜池遺跡—総理大臣官邸整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1分冊』 都内遺跡調査会, 192-210.
- 新美倫子 1990 「医学部附属病院地点出土の動物遺存体」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』 東京大学遺跡調査室発掘調査報告3, 東京大学遺跡調査室, 912-922.
- 日本獣医解剖学会編 1998 『家禽解剖学用語』 日本中央競馬会
- 日本鳥類目録編集委員会編 2000 『日本鳥類目録 改訂第6版』 日本鳥学会
- 長谷部言人 1952 「犬骨」『吉胡貝塚』 文化財保護委員会, 145-150
- 森 忠男 1930 「本邦産雑種ニ於ケル歯牙形態及ビ其ノニ生齒列発生ノ時期ニ就イテ」『日本歯科学会雑誌』第23巻, 日本歯科学会, 227-256
- 山内忠平 1958 「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第7号, 鹿児島大学農学部, 125-131
- 山口 徹 1988 「自然遺物」『芝公園一丁目 増上寺寺院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』 港区教育委員会, 485-493

- 山根洋子・西本豊弘 1994 「丸の内三丁目遺跡出土の動物遺存体」『東京都千代田区丸の内三丁目遺跡－東京国際フォーラム建設予定地の江戸遺跡の調査－』 東京都埋蔵文化財センター調査報告 17, 東京都埋蔵文化財センター, 41-50.
- A. O. U 1983 THE A.O.U. CHECKLIST OF NORTH AMERICAN BIRDS A.O.U.
- J. J. Baumel, A. S. King, J. E. Breazil, H. E. Evans, & J. C. V. Berge 1993 HANDBOOK OF AVIAN ANATOMY: NOMINA ANATOMICA AVIUM. Nuttall Ornithological Club.
- von den Driesch 1976 A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.
- A. J. Legge 1986 A manual for the identification of Bird bones from archaeological sites, Archetype Publications Ltd, London.

【図版出典】

- 図1 巻貝類： 文京区遺跡調査会 1999 『春日町遺跡第VI地点』
二枚貝類： 阿部常樹・加藤久雄 2003 「近世江戸府内遺跡出土ハマグリサイズの推定法」『史紋』第1号 史紋編集委員会, 37-44
魚類： 赤澤 威 1983 『採集狩猟民の考古学 その生態学的アプローチ』 海鳴社
哺乳類： 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 2002 『埋蔵文化財ニュース108 環境考古学2 中・小型哺乳類骨格図譜』
Angela von den Driesch 1976 A GUIDE TO THE MEASUREMENT OF ANIMAL BONES FROM ARCHEOLOGICAL SITES, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology Harvard University.
- 図2 桜井準也・山口 徹 1986 「自然遺物」『麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡』 港区麻布台一丁目遺跡調査団, 316-322
山口 徹 1988 「自然遺物」『芝公園一丁目 増上寺子院群 光学院・貞松院跡 源興院跡』 港区教育委員会, 485-493

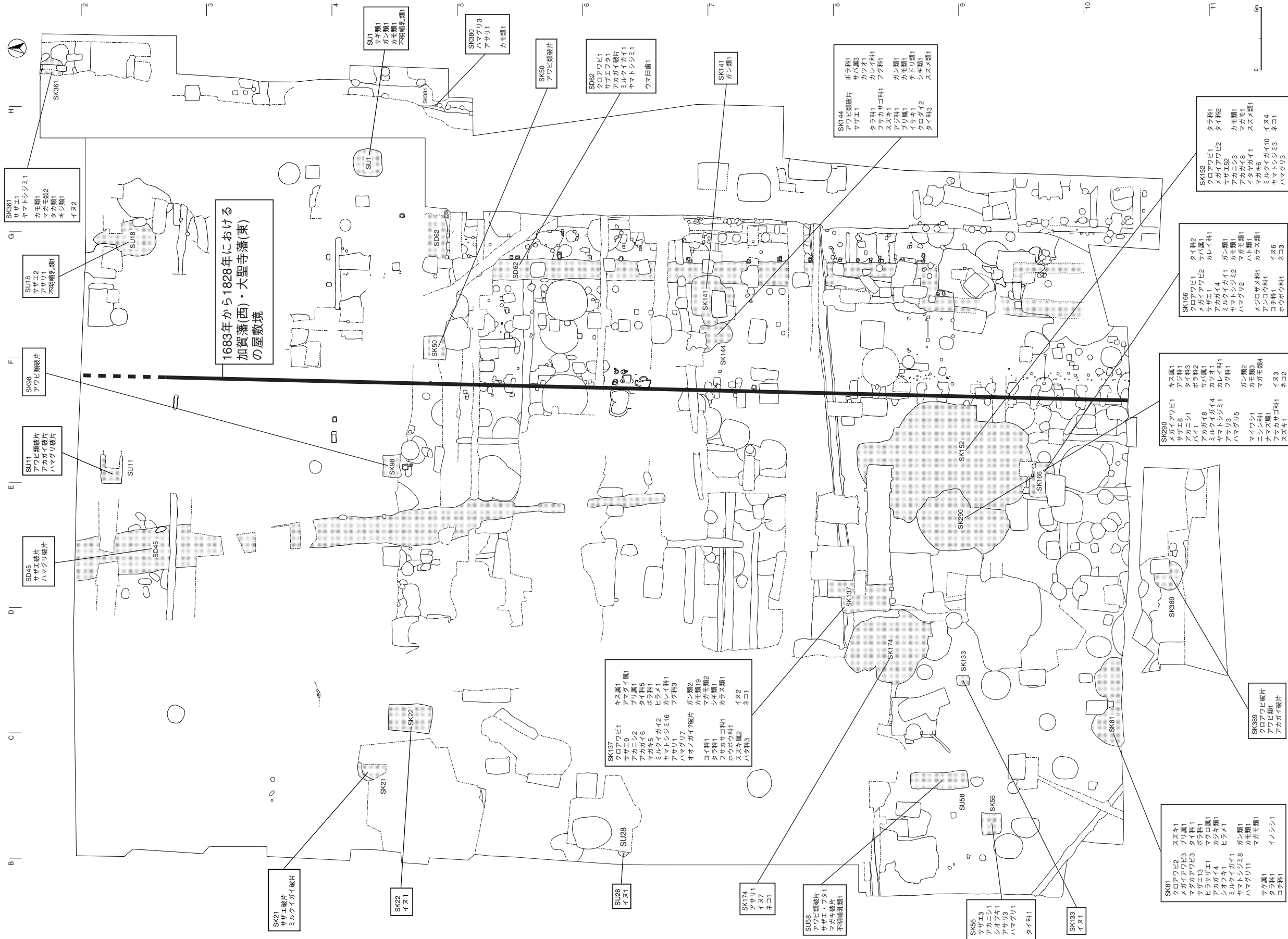
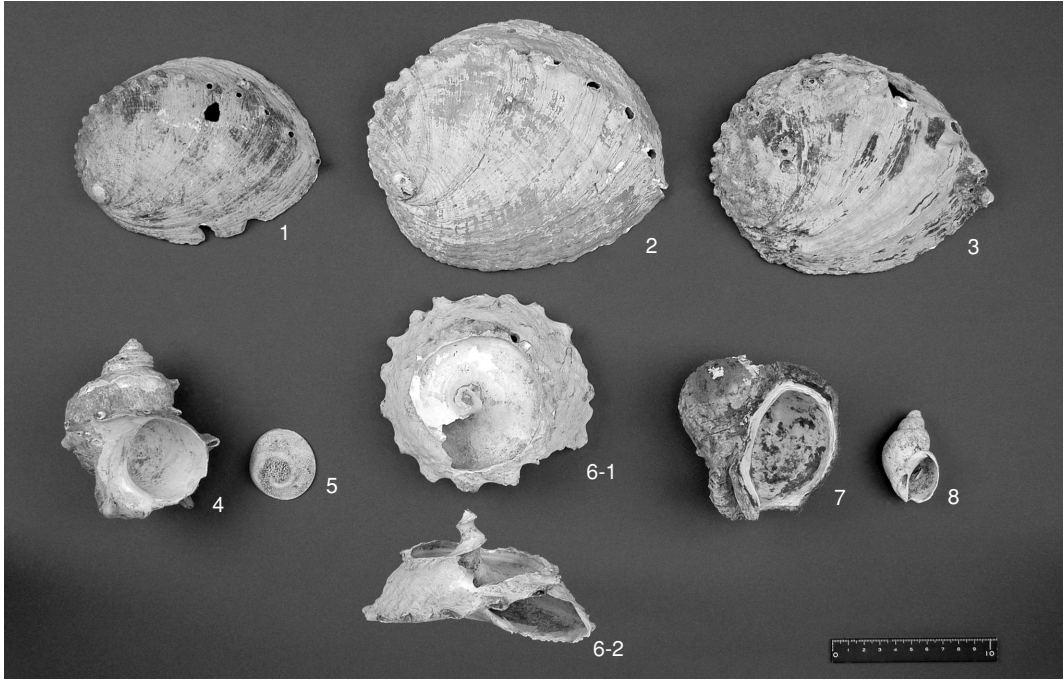
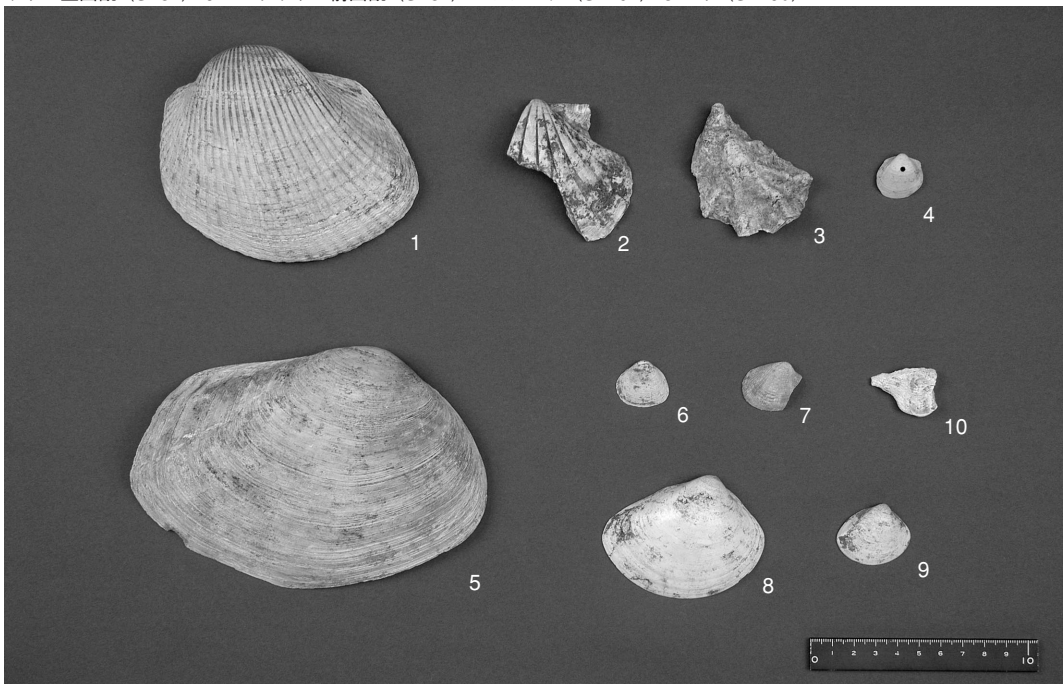


図5 動物遺体出土遺構



P.L.1 本地点出土の貝類遺体（巻貝類）

1.クロアワビ (SK81) 2.メガイアワビ (SK81) 3.マダカアワビ (SK81) 4.サザエ (SK81) 5.サザエ蓋 (SK81) 6-1.ヒラサザエ上面観 (SK81) 6-2.ヒラサザエ前面観 (SK81) 7.アカニシ (SK152) 8.バイ (SK290)



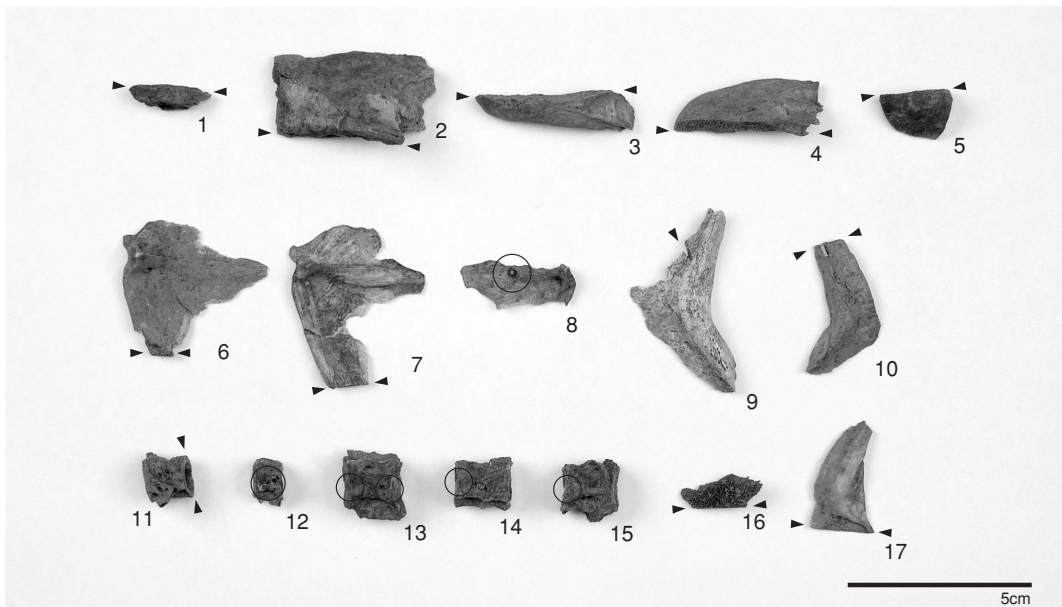
P.L.2 本地点出土の貝類遺体（二枚貝類）

1.アカガイ (SK81) 2.イタヤガイ (SK152) 3.マガキ (SK152) 4.シオフキ (SK81) 5.ミルクイガイ (SK81) 6.ヤマトシジミ (SK81) 7.アサリ (SK290) 8.ハマグリ (大型・SK81) 9.ハマグリ (中小型・SK81) 10.オオノガイ? (SK137)
1・3・6・10は左殻、他は右殻



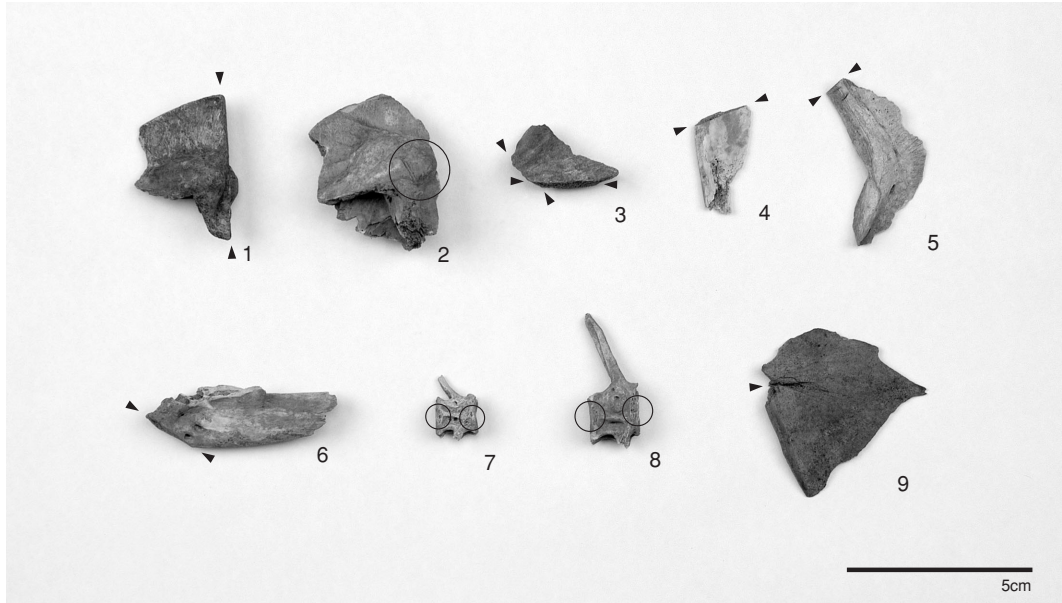
P.L.3 本地点出土の魚類遺体切断痕1

SK81 : 1.マダイ左歯骨 2.カジキ類尾椎の棘 3.カジキ類腹椎 4.ボラ科右主鰓蓋骨 5.マグロ属椎骨 6.マグロ属腹椎
SK144 : 7.マダイ前頭骨 8.マダイ右歯骨 9.マダイ亜科左口蓋骨 10.タイ科右舌顎骨 11.タイ科左後側頭骨



P.L.4 本地点出土の魚類遺体切断痕2

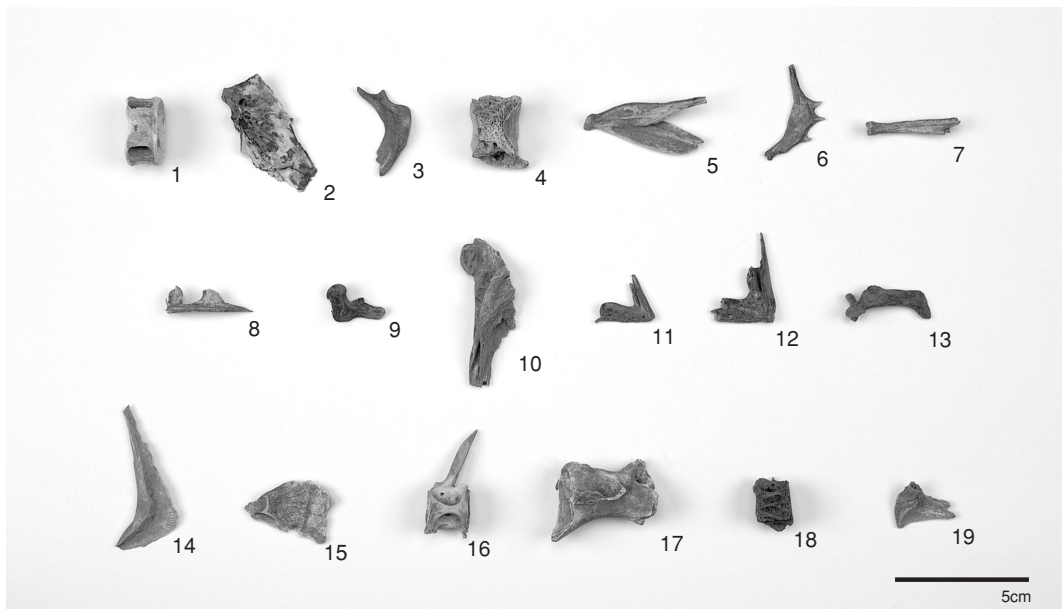
SK137 : 1~5.マダイ前頭骨 6・7.マダイ右主鰓蓋骨 8.マダイ左主鰓蓋骨 9.タイ科右前鰓蓋骨 10.タイ科左前鰓蓋骨
11・12.「タイ」型腹椎 13~15.「タイ」型尾椎 16.ホウボウ頭骨 17.ハタ科右前鰓蓋骨



P.L.5 本地点出土の魚類遺体切断痕3

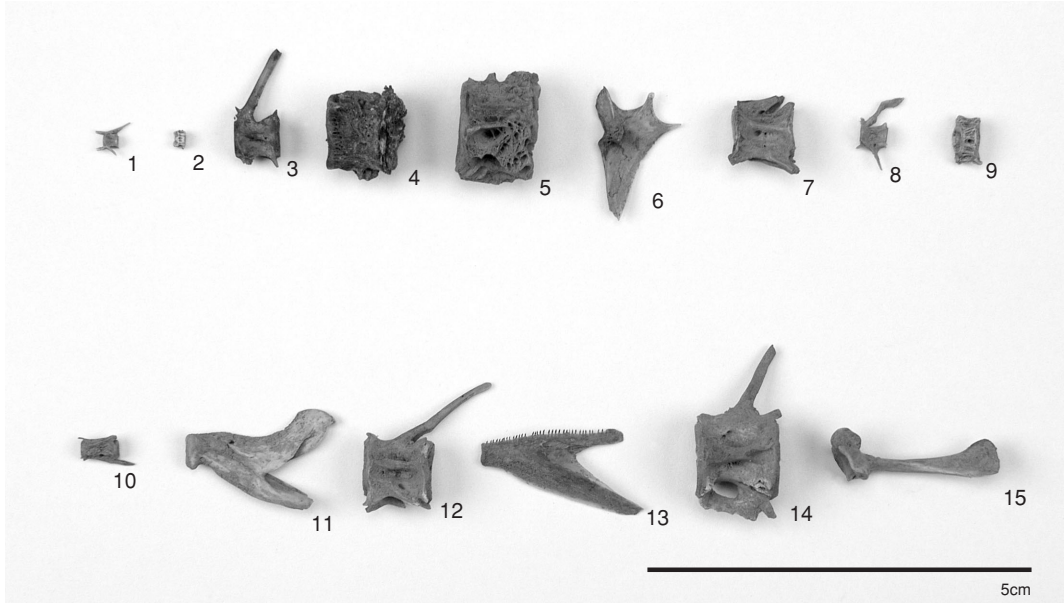
SK166 : 1.マダイ上後頭骨

SK290 : 2.マダイ上後頭骨 3.マダイ前頭骨 4.マダイ右主鰓蓋骨 5.タイ科左前鰓蓋骨 6.マダイ左歯骨 7・8.「タイ」型尾椎 9.スズキ左主鰓蓋骨



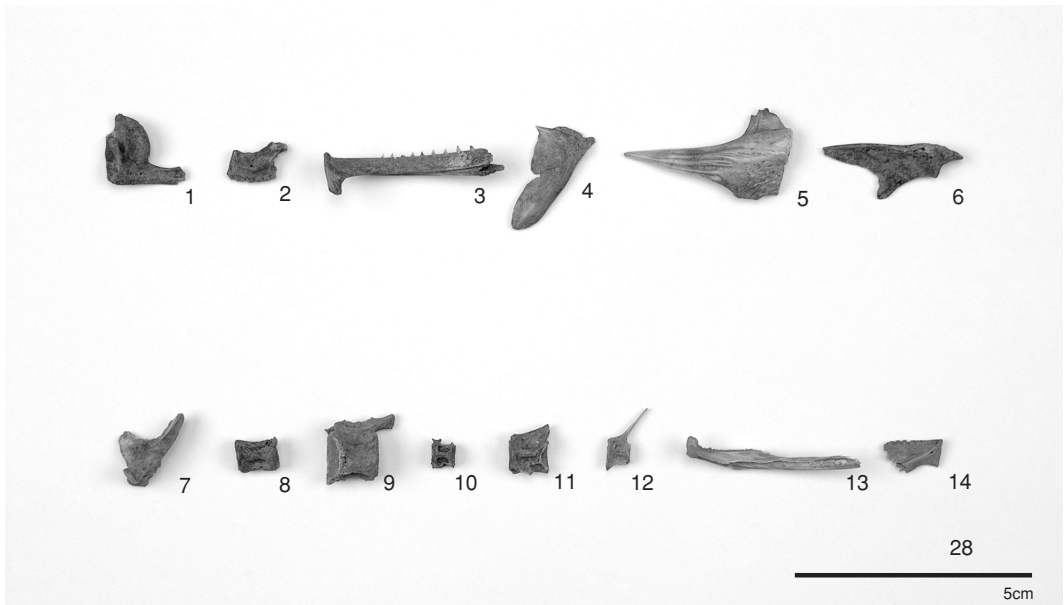
P.L.6 本地点出土の魚類遺体1

1.メジロサメ科椎骨 (SK166) 2.コイ右主鰓蓋骨 (SK137) 3.ナマズ属左擬鎖骨 (SK290) 4.アンコウ科腹椎 (SK166)
 5.カサゴ属右歯骨 (SK144) 6.フサカサゴ科右前鰓蓋骨 (SK137) 7.コチ科右歯骨 (SK166) 8.スズキ左前上顎骨 (SK290)
 9.アマダイ属右主上顎骨 (SK137) 10.ブリ属右舌顎骨 (SK144) 11.クロダイ左前上顎骨 (SK144) 12.マダイ左前上顎骨 (SK144)
 13.マダイ亜科左主上顎骨 (SK137) 14.タイ科左前鰓蓋骨 (SK81) 15.ボラ科左主鰓蓋骨 (SK290) 16.マグロ属尾椎 (SK81)
 17.カジギ類腹椎 (SK81) 18.ヒラメ腹椎 (SK137) 19.フグ科右前上顎骨



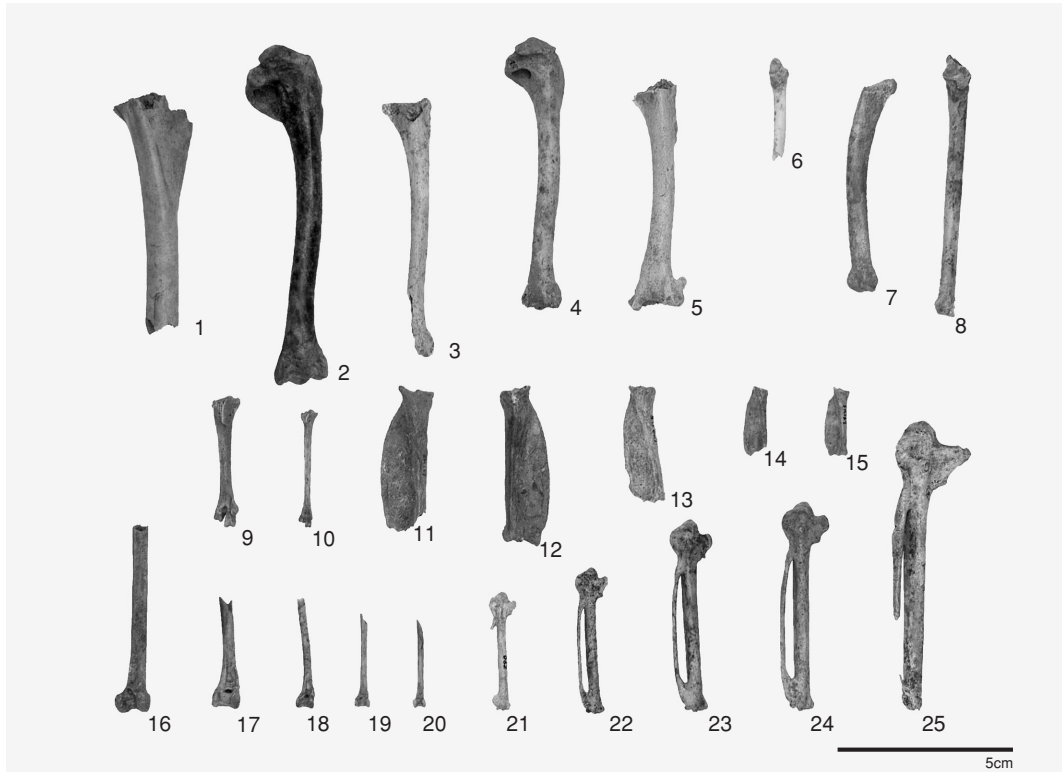
P.L.7 本地点出土の魚類遺体2

1.ニシン科尾椎 (SK290) 2.マイワシ腹椎 (SK290) 3.コイ科尾椎 (SK137) 4.サケ属尾椎 (SK81) 5.タラ科椎骨 (SK144)
 6.ホウボウ科右主鰓蓋骨 (SK137) 7.ハタ科尾椎 (SK137) 8.キス属尾椎 (SK137) 9.アジ科第一椎骨 (SK290) 10.アジ科
 マアジ型尾椎 (SK144) 11.イサキ右歯骨 (SK144) 12.「タイ」型尾椎 (SK144) 13.サバ属左歯骨 (SK166) 14.カツオ尾
 椎 (SK290) 15.カレイ科右上顎骨 (SK166)



P.L.8 本地点出土の不明魚類遺体

出土遺構：1~12.SK137 13.SK166 14.SK144



P.L.9 本地点出土の鳥類遺体

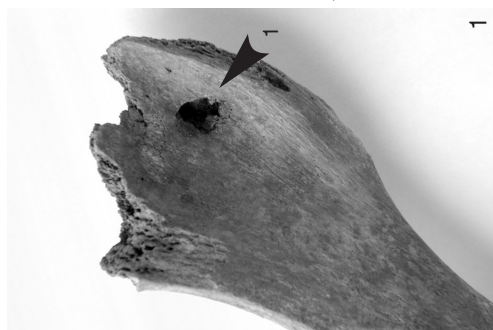
1～5.上腕骨 6～8.尺骨 9.10.足根中足骨 11～15.大指基節骨 16～20.足根脛骨 21～25.手根中手骨

1.タカ類 2.4.マガモ類 5.カラス類 6.7.ハト類 3.8.9.14.17.18.21～24.カモ類 10.シギ類 11.種不明鳥類
12.13.25ガン類 16.サギ類 19.チドリ類 20.スズメ類 11.13～15は右、他は左の試料

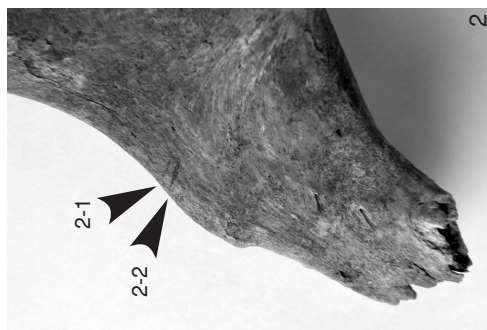
1.7.9:SK361、2.14.21:SK290、3.4.8.11.12.15.18.23～25:SK137、5.6.22:SK166、10.19.20:SK144、13.16:SU1

P.L.10 SK361出土のイヌ資料1

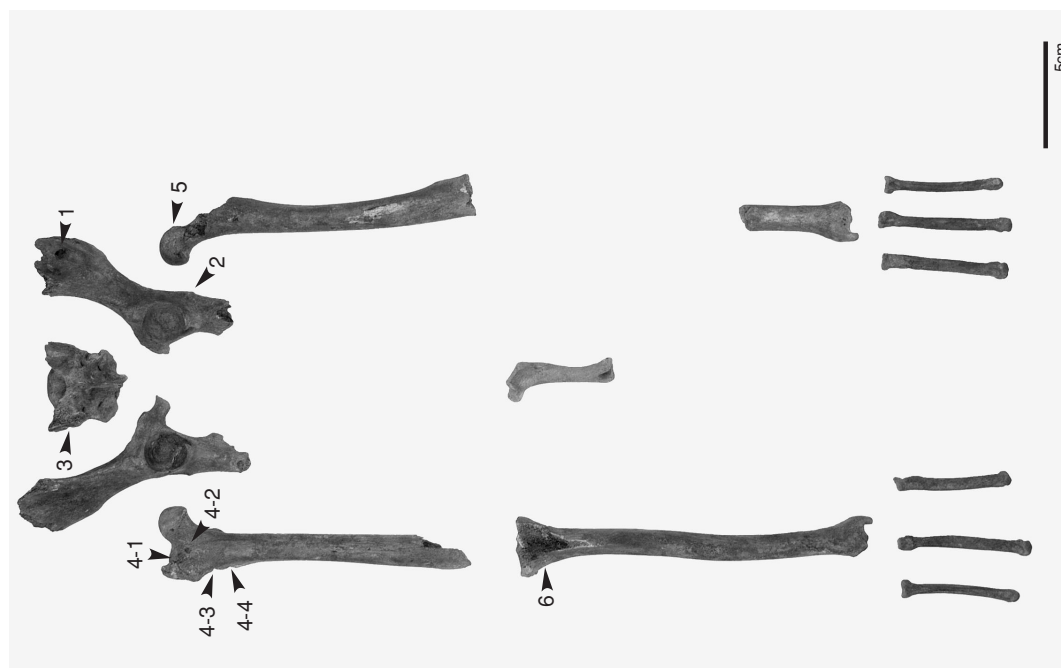
※写真中央の幼犬右上腕骨(資料番号:6)以外同一個体
 仙骨(背面を正面にしているため、他の部位と左右が逆)
 左右寛骨、左右脛骨、左右中足骨(左は第2、右は第3が
 それぞれ欠)

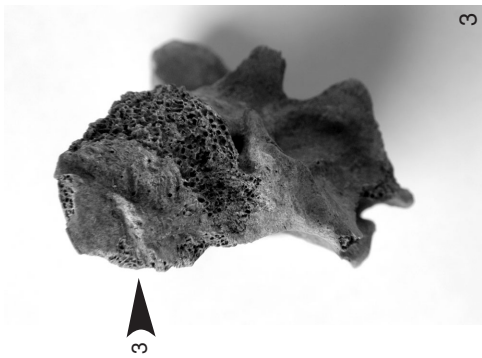
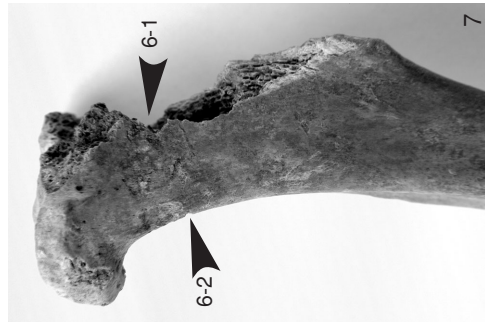
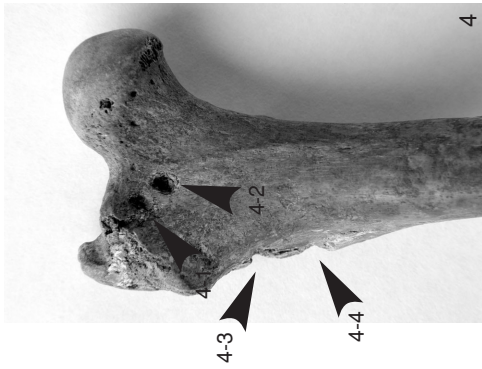
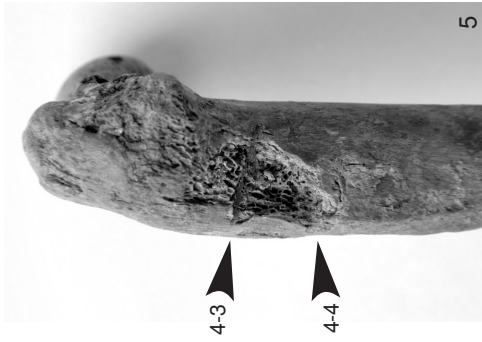


左寛骨・外側腸骨部分



左寛骨・内側坐骨部分





P.L.11 SK361出土のイヌ資料2

P.L.12 SK166出土のイヌ (病変のみられる資料)

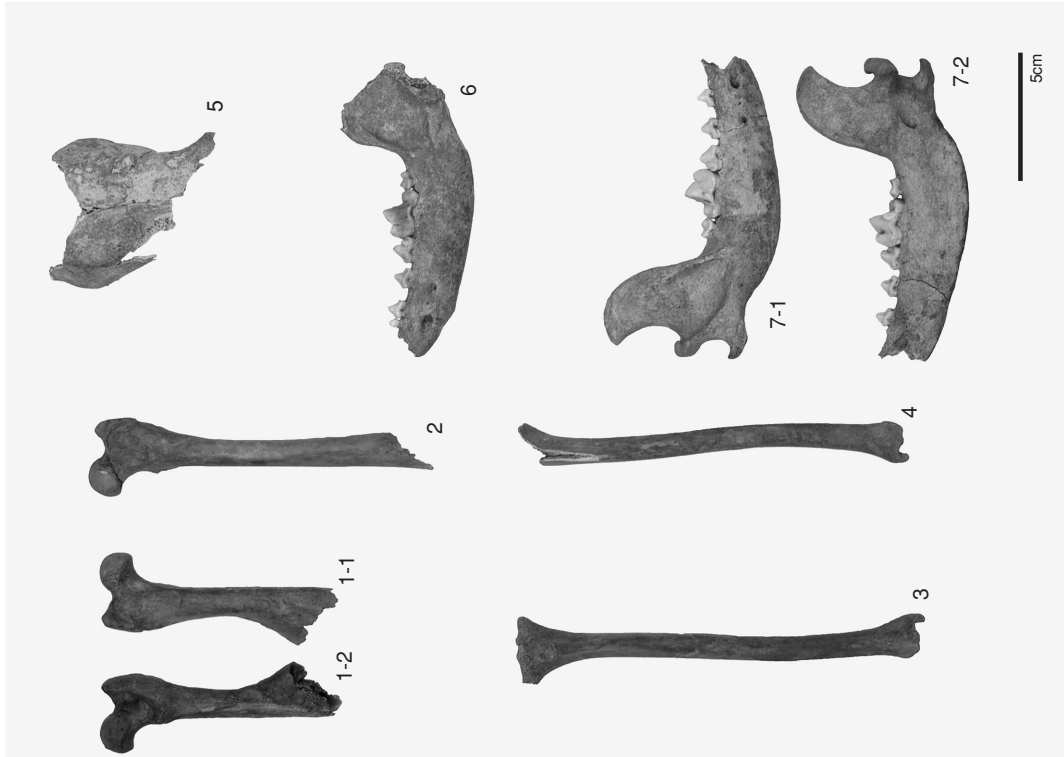
※1~4、6と7はそれぞれ同一個体

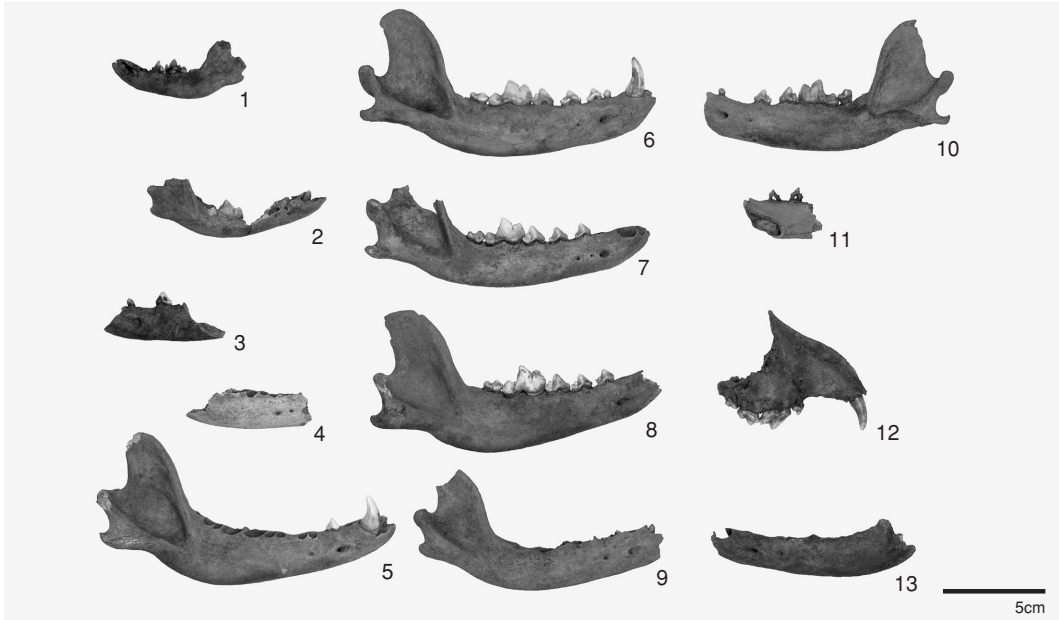
- 1.右大腿骨 (1は正面、2は後面、資料番号:6) 2.左大腿骨 (資料番号:7)
- 3.4.脛骨 (資料番号:14) 5.頭蓋骨 (資料番号:2) 6.左下顎骨 (資料番号:3-01)
- 7.右下顎骨 (1は頬側、2は舌側、資料番号3-02)



レントゲン写真

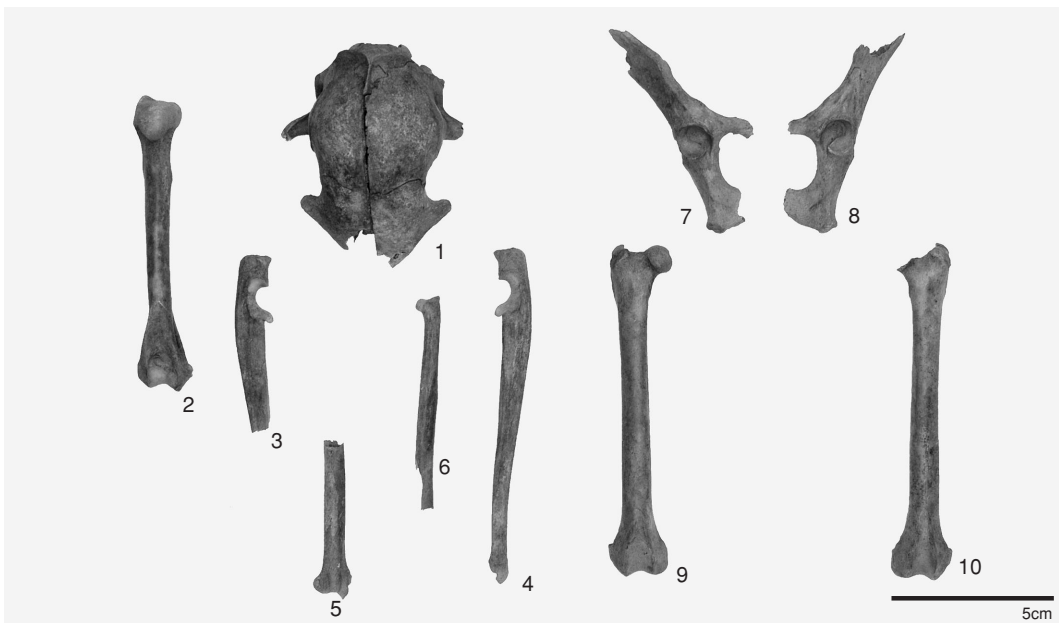
1はP.L.12の1-1、2はP.L.12の2、3はP.L.12の5の資料とそれぞれ対応





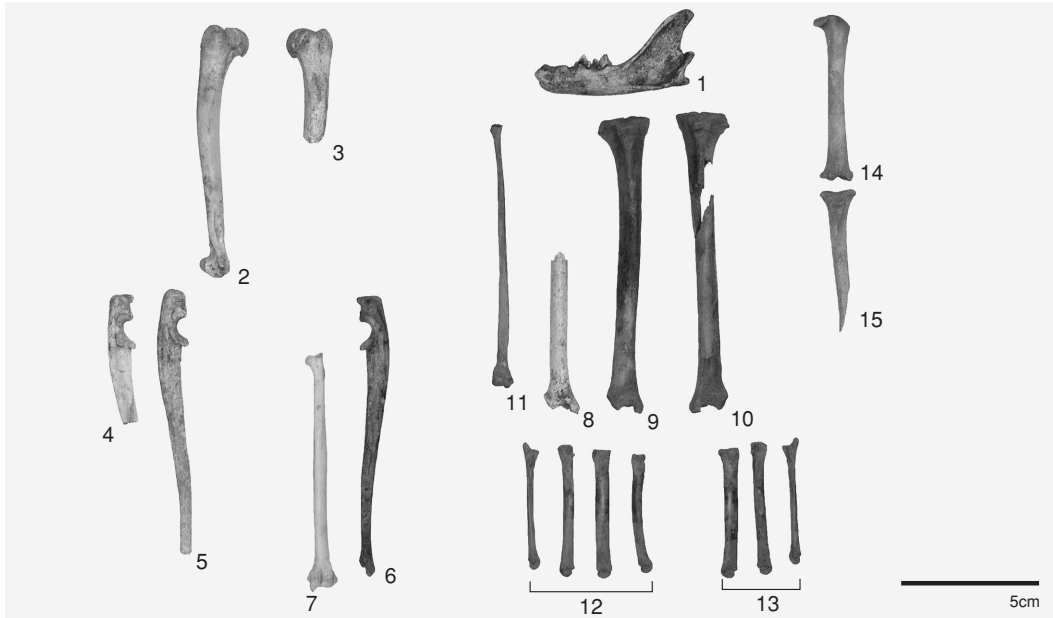
P.L.14 本地点出土のイヌ下顎骨（一部上顎骨も含む）

1.SK137（資料番号:1） 2.3.SK152（資料番号:2=2、3=5） 4.5.SK166（資料番号:4=5、5=4） 6~11.SK174（資料番号:6=1
7=2、9=4、10=8、11=6） 12.13.SK290（資料番号:12=1、13=2） ※1.3.10.11が左下顎骨、12が右上顎骨、他は右下顎骨



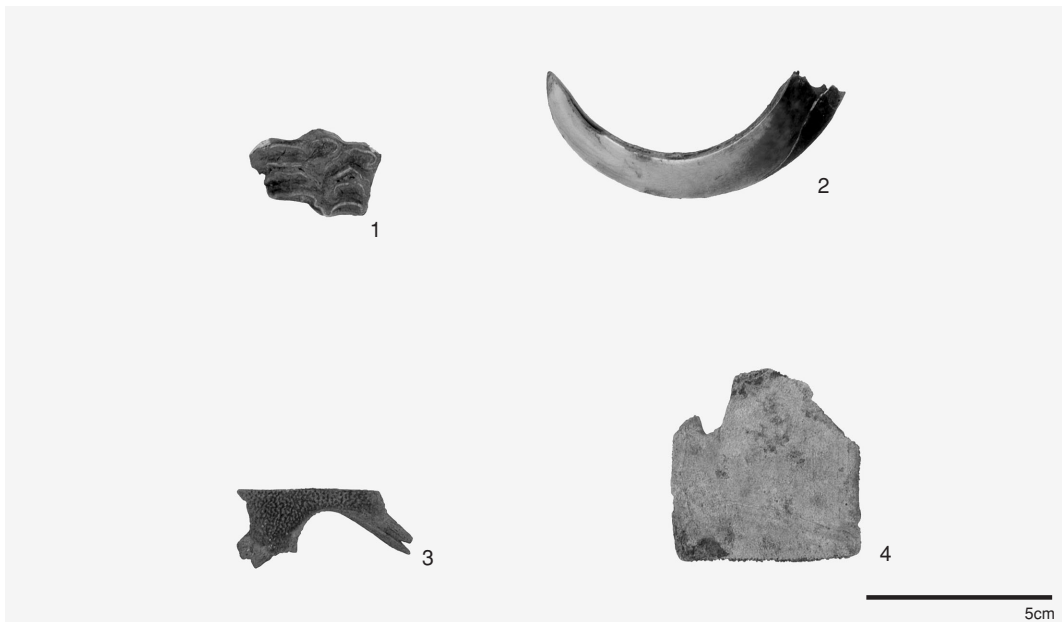
P.L.14 SK152出土のネコ資料

1.頭蓋骨（資料番号:14） 2.左上腕骨（資料番号:16） 3.4.尺骨（資料番号:17） 5.6.橈骨（資料番号:18） 7.8.寛骨（資料番号:19）
9.10.大腿骨（資料番号:15）



P.L.15 SK166出土のネコ資料

1.左下顎骨（資料番号:41） 2.3.上腕骨（資料番号:2=42、3=43） 4~6.尺骨（資料番号:4=46、5=45、6=44） 7.左橈骨（資料番号:51） 8~10.脛骨（資料番号:8=48、9.10=49） 12.13.中足骨（13は第2が欠、資料番号:52） 14.若獣・左大腿骨（資料番号:50） 15.若獣・左脛骨（資料番号:47）



P.L.16 イヌ・ネコ以外の哺乳類及び爬虫類遺体

1.ウマ 左上顎臼歯（SD62-1） 2.イノシシ犬歯（SK81） 3.スッポン腹甲左腹骨板（SK290） 4.カメ類腹甲・腹骨板（SK152）

加賀藩邸徳利内容物の材質調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

東京大学医学部敷地内の遺跡(加賀藩邸)から出土した徳利(SK18 25)内容物の材質調査を目的とし、科学的調査を実施する。なお、調査所見では、魚醤、醤油、油、酒、炭などの可能性が予想され、特に魚醤の可能性が高いと考えられている。魚醤は、魚を大量の塩とともに漬け込み、そのまま数ヶ月以上発酵させて作られることから、まずは蛍光X線分析法により残留塩分の確認調査を実施し、その情報を基に分析調査法を組み立て、調査を行う。

2. 試料

試料は、徳利(SK18 25)から検出された内容物である。出土した当初は黒い軟質物質であったが、現在では乾燥し、硬質化している。内容物は主として褐色の固形物と白色の固形物から構成されており、本調査ではこれらを便宜的に褐色固形物と白色固形物と呼称する。

3. 徳利内容物の元素分析

(1) 蛍光X線分析

① 分析方法

蛍光X線分析装置(理学電気工業製: RIX1000)を利用し、徳利内容物に含まれる無機元素の定性分析を実施する。この方法は試料にX線(一次X線)を照射し、含有される元素が発する固有X線(二次X線)を測定することにより、その成分を知ろうとするものである。なお、本装置による定量可能元素は希ガス元素を除いた9Fから92Uの範囲にある元素である。

対象とする試料は、徳利内容物の褐色固形物と白色固形物の2試料である。これら試料は、メノウ乳鉢で粉碎した後、塩化ビニルリング(30mmφ)および四ホウ酸リチウムを用いたダブルレイヤーペレット法にて加圧円盤(加圧力: 10ton(100KN))とし、測定試料とする。装置条件および測定条件の詳細については、表1、2に示す。

② 結果

褐色固形物および白色固形物の蛍光X線スペクトルを図1、2に示す。これら試料から検出された元素はナトリウム(Na)、マグネシウム(Mg)、ケイ素(Si)、リン(P)、硫黄(S)、塩素(Cl)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、クロム(Cr)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)などである。両試料ともに特にカルシウムの検出強度が著しく高く、量的にも多く含まれる元素と考えられる。なお、塩分(ナトリウムや塩素など)については両者ともに検出強度は微

ターゲット	Cr
管電圧 (KV)	50
管電流 (mA)	50
試料マスキ	30mmφ
試料スピンドル	OFF
ダイアフラム	20mmφ
測定雰囲気	真空

表1 蛍光 X線装置条件

測定元素	測定スペクトル	1次フィルタ	アッテネータ	スリット	分光結晶	検出器	PHA		スキヤン条件			
							LL	UL	開始 (deg)	終了 (deg)	ステップ (deg)	測定時間 (sec)
HEAVY	Kα	OUT	1/1	Std.	LIF1	SC	100	300	5.000	90.000	0.02	0.1
Cr	Kα	IN	1/1	Std.	LIF1	SC	100	300	67.000	72.000	0.02	0.4
Mn	Kα	IN	1/1	Std.	LIF1	SC	100	300	61.000	65.000	0.02	0.4
Ca	Kα	OUT	1/1	Std.	GE	PC	100	300	59.000	65.000	0.05	0.4
K	Kα	OUT	1/1	Std.	GE	PC	100	300	67.000	73.000	0.05	0.4
P	Kα	OUT	1/1	Std.	GE	PC	150	300	138.000	144.000	0.05	0.4
Si	Kα	OUT	1/1	Std.	PET	PC	100	300	106.000	112.000	0.05	0.4
Al	Kα	OUT	1/1	Std.	PET	PC	100	300	140.000	147.000	0.05	0.4
Mg	Kα	OUT	1/1	Std.	TAP	PC	150	250	42.000	48.000	0.05	1.0
Na	Kα	OUT	1/1	Std.	TAP	PC	150	250	52.000	58.000	0.05	1.0
S	Kα	OUT	1/1	Std.	GE	PC	150	300	108.000	114.000	0.05	0.4
F	Kα	OUT	1/1	Std.	TAP	PC	150	300	88.000	94.000	0.05	1.0
Cl	Kα	OUT	1/1	Std.	GE	PC	150	300	90.000	96.000	0.05	0.4

表2 蛍光 X線定性測定条件

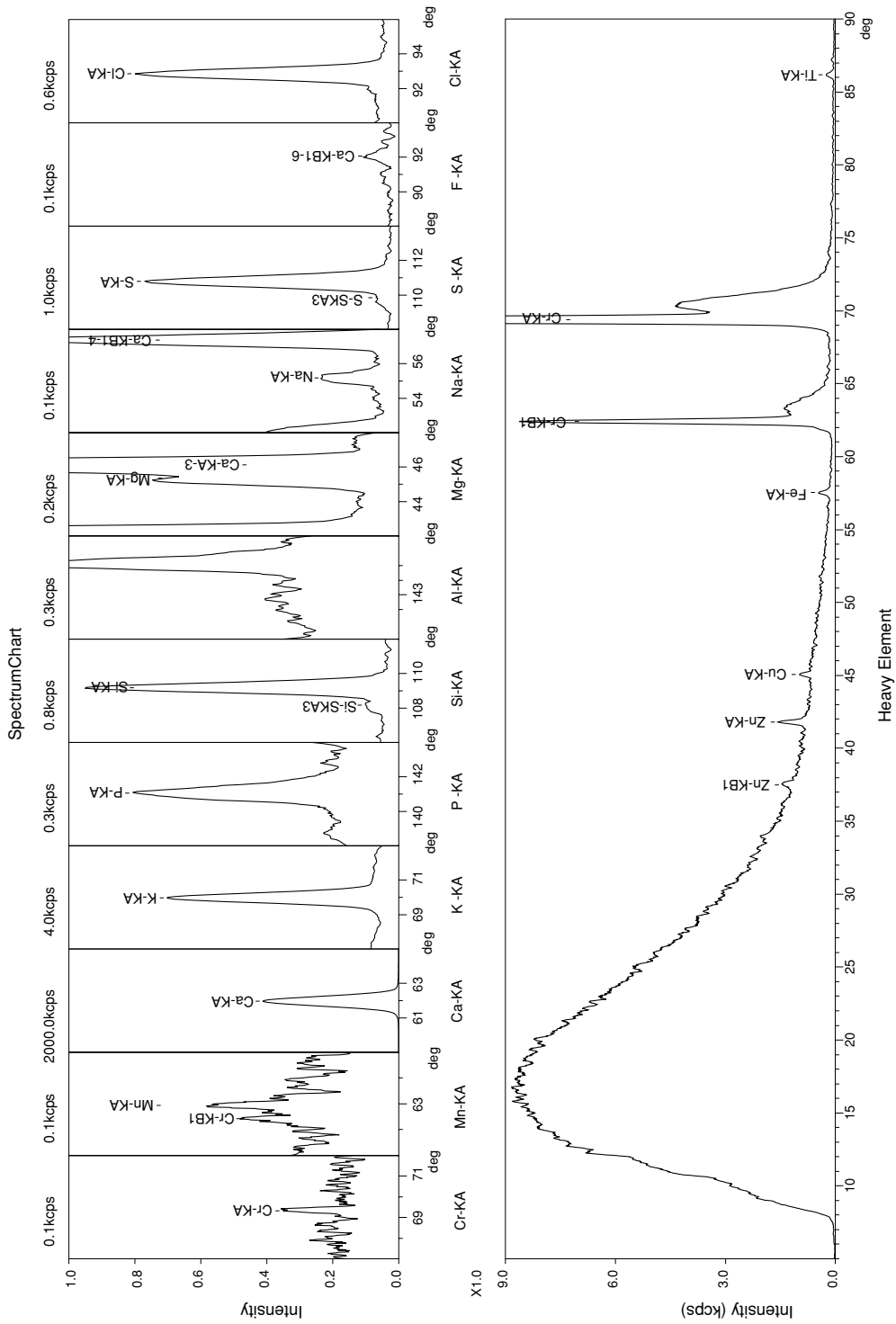


図1 徳利内容物(褐色固形物)の蛍光X線スペクトル

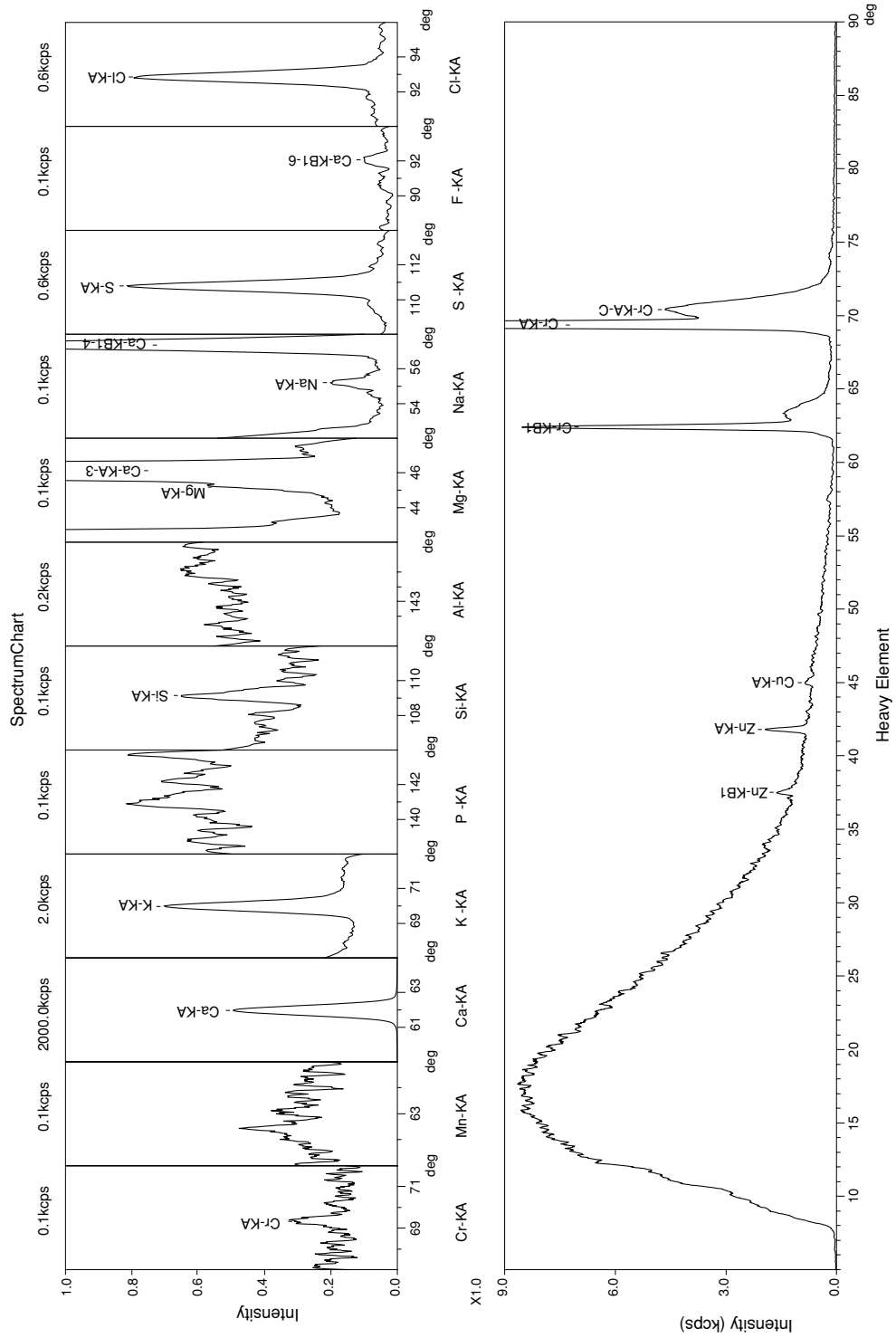


図2 徳利内容物(白色固形物)の蛍光X線スペクトル

弱であり、量的にも微量含まれる程度と思われる。

なお、これら結果をより定量的に把握するために、次に最も多く含まれると考えられるカルシウムを定量し、その結果を基に、本結果についてノンスタンダードによるFP法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いて定量演算を行い、検出元素の含有率（wt %）を算出する。

(2) 全カルシウム量

① 分析方法

褐色固形物および白色固形物をケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO₃）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO₄）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計（AAS）によりカルシウム（Ca）濃度を測定し、試料中の全カルシウム量（%）を求める。

② 結果

全カルシウム量は、褐色固形物で4.2%、白色固形物で4.4%である。この結果を固定値とし、蛍光X線分析で得られた結果をノンスタンダードによるFP法（ファンダメンタルパラメーター法）を用いて定量演算を行った結果を表3、4に示す。なお、表中にLossと記した項は、本装置で検出されない成分から由来するものであり、有機化合物や水分、炭酸などが主となる。

本結果から、褐色固形物、白色固形物には、無機元素としてはカルシウムが最も多く含まれるが、他の検出元素については極微量含まれる程度であることが明らかである。したがって、これら試料が魚醬や醬油などの類である可能性は否定される。なお、両試料ともLossと記される部分が95%存在し、これら試料が有機化合物である可能性が高いことが予想されることから、次に徳利内容物の有機化合物としての特性から調査を行う。

成分名	スペクトル	X線強度 (kcps)	分析結果 (wt %)	測定法
Na	Na-KA	0.0149	0.0025	XRF
Mg	Mg-KA	0.1186	0.0053	XRF
Si	Si-KA	0.8188	0.0099	XRF
P	P-KA	0.1812	trace	XRF
S	S-KA	0.7379	0.0023	XRF
Cl	Cl-KA	0.5155	0.0018	XRF
K	K-KA	2.5682	0.0021	XRF
Ca	Ca-KA	820.2659	4.2000	AAS
Ti	Ti-KA	0.1983	0.0017	XRF
Cr	Cr-KA	0.0196	0.0043	XRF
Mn	Mn-KA	0.0367	0.0042	XRF
Fe	Fe-KA	0.2815	0.0046	XRF
Cu	Cu-KA	0.3027	0.0020	XRF
Zn	Zn-KA	0.7130	0.0033	XRF
Loss	—	—	95.7554	

表3 徳利内容物（褐色固形物）の元素組成

成分名	スペクトル	X線強度 (kcps)	分析結果 (wt %)	測定法
Na	Na-KA	0.0116	0.0020	XRF
Mg	Mg-KA	0.0070	trace	XRF
Si	Si-KA	0.0338	trace	XRF
S	S-KA	0.4616	0.0015	XRF
Cl	Cl-KA	0.5181	0.0019	XRF
K	K-KA	1.1248	trace	XRF
Ca	Ca-KA	985.9904	4.4000	AAS
Cr	Cr-KA	0.0126	0.0029	XRF
Cu	Cu-KA	0.1918	0.0013	XRF
Zn	Zn-KA	1.1108	0.0054	XRF
Loss	—	—	95.5833	

表4 徳利内容物（白色固形物）の元素組成

4. 徳利内容物の成分分析

(1) 赤外分光分析

① 分析方法

赤外分光分析では、徳利内容物の有機化合物としての特性を調査し、材質に関する情報を得ることとする。対象とする試料は、徳利内容物の褐色固形物と白色固形物の2試料である。これら試料は、メノウ乳鉢で粉碎した後、KBr錠剤法により、測定試料とする。測定条件の詳細については、表5に示す。

装置	島津製作所製FTIR-8100A
測光値 (Measuring mode)	% T
分解能 (Resolution)	4.0 cm ⁻¹
積算回数 (No.of Scan)	40回
ゲイン (Gain)	自動
ミラー速度 (Detector)	2.8 mm/sec
アポダイズ関数 (Apodization)	Happ-genzel
測定範囲	4600 ~ 400 cm ⁻¹
測定方法	KBr ミクロ錠剤法

表5 赤外分光分析測定条件

② 結果

褐色固形物および白色固形物の赤外線吸収 (IR) スペクトルを図3に示す。両試料ともに赤外線吸収スペクトルは同様なパターンを示し、3430cm⁻¹付近の幅広く強い吸収帯、2920cm⁻¹、2850cm⁻¹、1710cm⁻¹、1580cm⁻¹、1540cm⁻¹、1470cm⁻¹、1430cm⁻¹、720cm⁻¹付近の吸収帯が特徴的であるほか、1310cm⁻¹、1110cm⁻¹付近に弱い吸収が認められる。主な吸収帯について推定される帰属官能基は、3430cm⁻¹付近の吸収帯がO-H伸縮振動、2920cm⁻¹、2850cm⁻¹付近の吸収帯がメチル基、メチレン基のC-H伸縮振動、1710cm⁻¹付近の吸収帯がカルボキシル基のC=O伸縮振動、1580cm⁻¹付近の吸収帯がC=O伸縮振動、あるいはカルボキシル基のO-H面外変角振動、1470cm⁻¹、1430cm⁻¹付近の吸収帯がメチル基の対称変角振動である。

一方、これら試料の赤外線吸収特性と類似するパターンを示す物質としては脂肪酸が想定されるが、1710cm⁻¹付近のカルボキシル基によるC=O伸縮振動が比較的弱い傾向にある。前述の元素分析の結果で、これら試料中にカルシウムが多く含まれることが指摘されたことを含めて考えると、脂肪酸金属塩が形成されている可能性が高い。

そこで、市販されている脂肪酸カルシウム塩のいくつかについて、同一条件にて赤外分光分析を実施した結果を図3に併記し、検討した結果、ステアリン酸カルシウム (東京化成工業) と最も類似した特徴が見られた。ただし、同じステアリン酸カルシウムでもキシダ化学製のものとは東京化成工業製のものとはやや吸収特性が異なっており、本結果によって成分を特定するまでには至らず、パルミチン酸カルシウムなどの可能性も残される。なお、これら市販のステアリン酸カルシウムやパルミチン酸カルシウムの赤外線吸収スペクトルでは、1710cm⁻¹付近のカルボキシル基によるC=O伸縮振動が認められていない。徳利内容物にこの吸収が認められることは、これらの脂肪酸金属塩のほかにも、遊離脂肪酸や脂質が混じる可能性を示唆する。

これらのことから、次にX線回折法を実施し、含有される脂肪酸カルシウム塩を特定するとともに、ガスクロマトグラフィー分析により、脂肪酸組成を明らかとする。なお、これまでの調査結

研究編 7. 加賀藩邸徳利内容物の材質調査

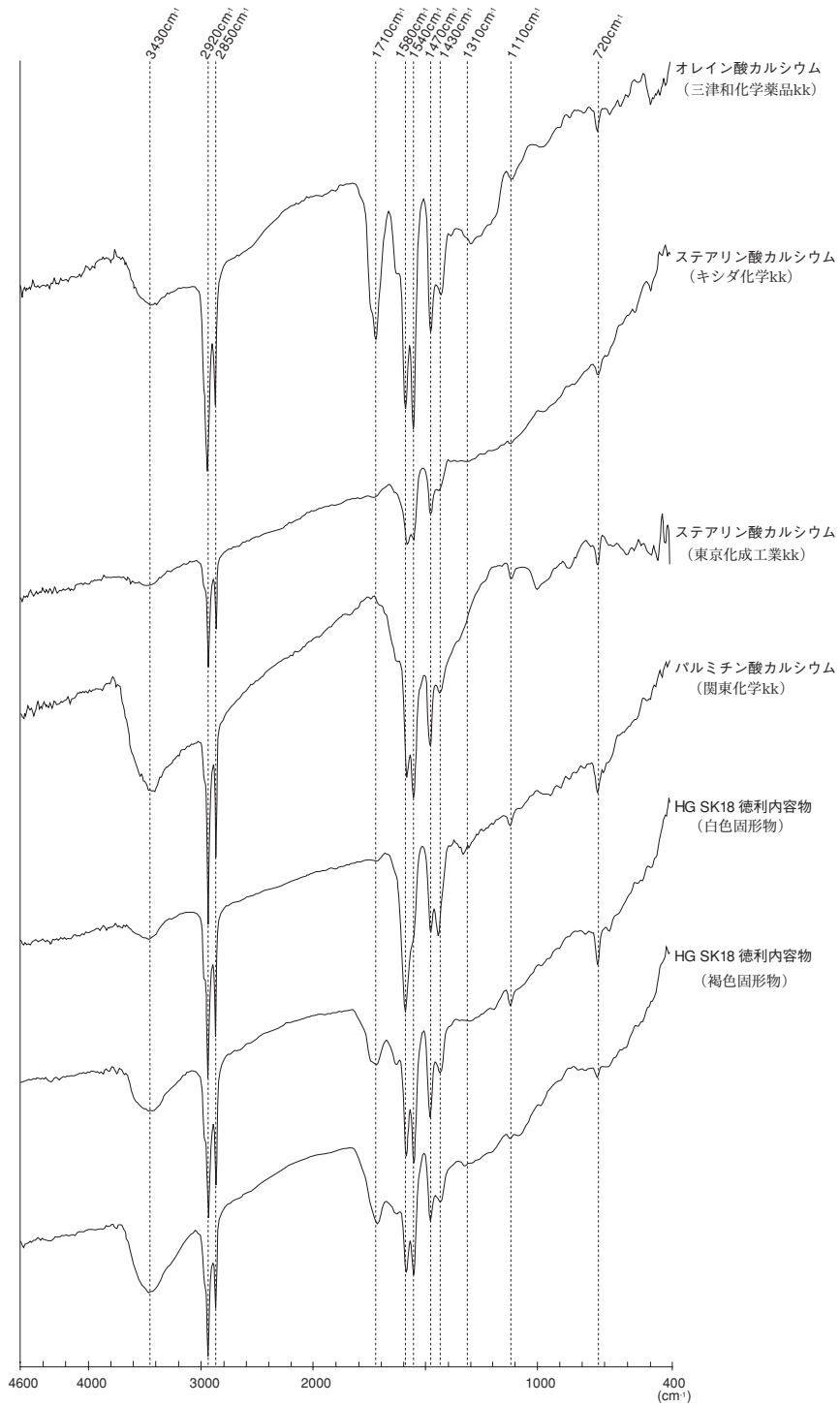


図3 徳利内容物のIRスペクトル

果において褐色固形物と白色固形物の試験結果に大きな違いが認められていないことから、対象とする試料は褐色固形物と白色固形物を一括とし、単に徳利内容物として扱うことし、必要試料量を得ることとする。

(2) X線回折分析

① 分析方法

徳利内容物をメノウ乳鉢で微粉碎した後、アルミニウムホルダーに充填し、測定試料とする。測定条件の詳細については、表6に示す。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJADEを用い、該当する化合物または鉱物を検索する。

② 結果

徳利内容物のX線回折図を図4に示す。なお、図中下段には同定化合物の回折パターンと可能性の高い化合物の回折パターンを併記する。徳利内容物から検出された化合物は、パルミチン酸カルシウム一水和物である。なお、45.5nm付近に見られる回折が強く現れていることから、パルミチン酸カルシウム一水和物からの回折以外に、無水のパルミチン酸カルシウムやステアリン酸カルシウムが関与していることが推察されるが、これらについては他の回折が一致しておらず、特定するまでには至っていない。

装置	理学電気製 MultiFlex
Target	Cu (K α)
Monochrometer	Graphite 湾曲
Voltage	40KV
Current	40mA
Detector	SC
Calculation Mode	cps
Divergency Slit	1°
Scattering Slit	1°
Receiving Slit	0.3mm
Scanning Speed	0.5° / min
Scanning Mode	連続法
Sampling Range	0.01°
Scanning Range	1.5 ~ 45°

表6 X線回折分析測定条件

(3) 脂肪酸分析

① 分析方法

予備実験の結果、徳利内容物は、水には不溶で、塩酸-メタノールには良く溶解し、クロロホルム-メタノールでは若干溶解する。そのため、塩酸-メタノールに溶出したものを試料A、クロロホルム-メタノールに溶出したものを試料Bとして分析を行う。

試料Aについては、試料を塩酸-メタノール内で溶解させ、メチル化を行う。試料Bについてはクロロホルム：メタノール(2：1)を入れ、超音波をかけながら脂質を抽出し、ロータリーエボレーターにより、溶媒を除去する。抽出物を塩酸-メタノールで溶解させ、メチル化を行う。ヘキサンにより脂質を再抽出し、セップパックシリカを使用して脂肪酸メチルエステル、ステロールを分離する。脂肪酸のメチルエステルの分離は、キャピラリーカラム(ULBON、HR-SS-10、内径0.25mm、長さ30m)を装着したガスクロマトグラフィー(GC-14A、SHIMADZU)を使用した。注入口温度は250℃、検出器は水素炎イオン検出器を使用する。ステロールの分析は、キャピラリーカラム(J&W SCIENFIC、DB-1、内径0.36mm、長さ30m)を装着する。注入口温度は320℃、カラム温度は270℃恒温で分析を行う。キャリアガスは窒素を、検出器は水素炎イオン化検出器を使用する。

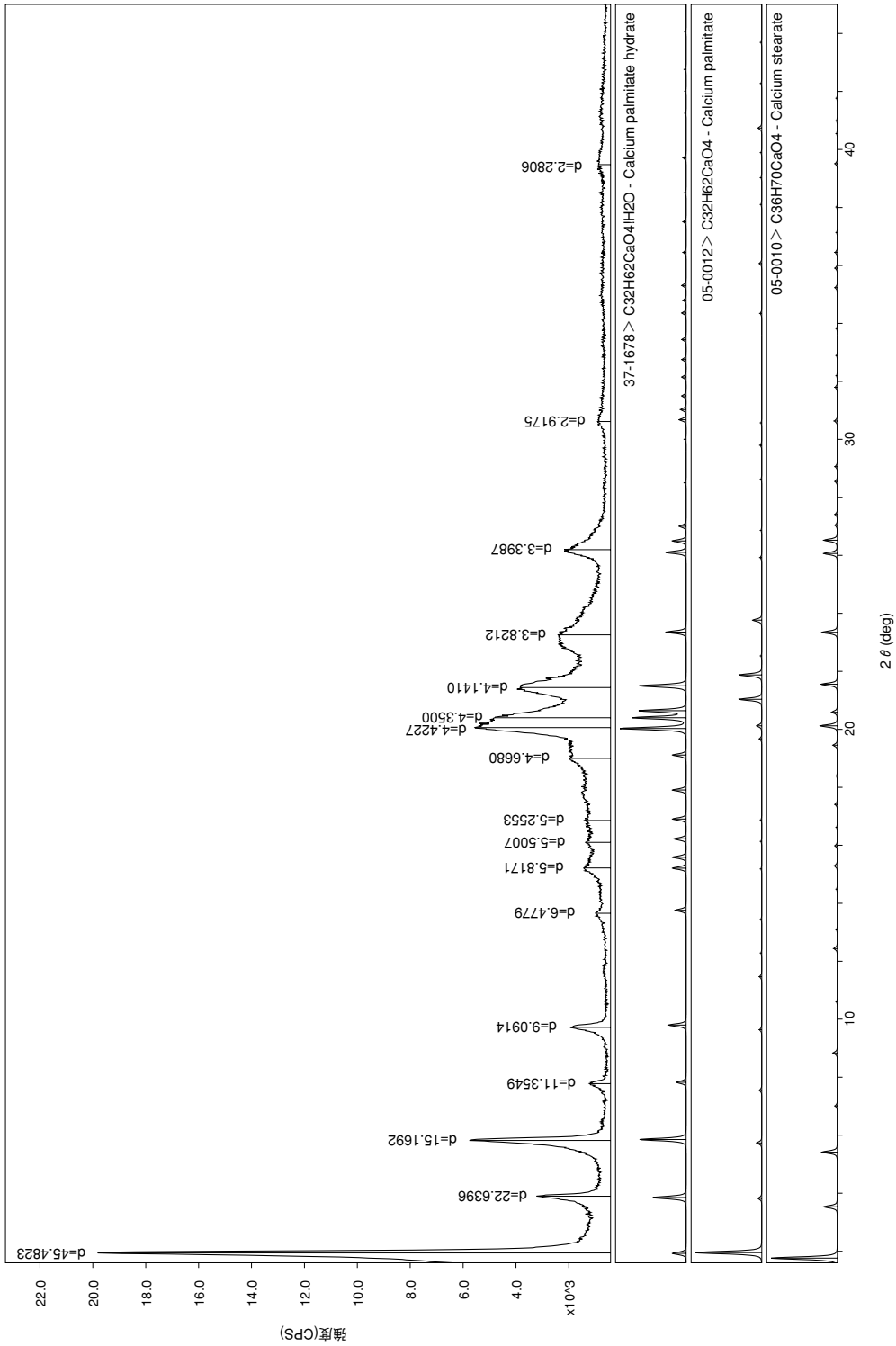


図 4 徳利内容物の X 線回折図

② 結 果

徳利内容物の脂肪酸組成を表7、図5に示す。塩酸-メタノールに溶出したもの(試料A)については、パルミチン酸が最も多く、ミリスチン酸、パルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸等が見られる。クロロホルム-メタノールに溶出したもの(試料B)に関しては、ミリスチン酸とパルミチン酸が多く、パルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸がみられる。全体として、分子量が小さい飽和脂肪酸が多くみられ、C₂₀以上の分子量が大きい脂肪酸や不飽和脂肪酸が少ない特徴をもっている。

なお、試料Aでは、試料Bと比較してパルミチン酸やステアリン酸の割合が多いことから、徳利内容物中でカルシウム塩を形成している脂肪酸はパルミチン酸やステアリン酸が主体となることが示唆され、これら以外の脂肪酸は主に遊離脂肪酸もしくは脂質として存在していると推察される

種 類	試料名	試料A	試料B
脂肪酸組成			
	ミリスチン酸(C14)	21.2	35.8
	パルミチン酸(C16)	55.6	30.7
	パルミトレイン酸(C16:1)	6.1	16.4
	ステアリン酸(C18)	7.4	4.5
	オレイン酸(C18:1)	5.0	9.4
	リノール酸(C18:2)	1.2	—
	γリノレン酸(C18:3)	—	—
	αリノレン酸(C18:3)	0.4	—
	アラキジン酸(C20)	—	1.7
	イコセン酸(C20:1)	1.0	1.5
	アラキドン酸(C20:4)	—	—
	ベヘン酸(C22)	0.3	—
	ドコセン酸(C22:1trans)	0.6	—
	エルカ酸(C22:1cis)	0.3	—
	イコサペンタエン酸(C20:5)	—	—
	リグノセリン酸(C24)	0.2	—
	テトラコセン酸(C24:1)	0.6	—
	ドコサヘキサエン酸(C22:6)	—	—

試料A:メチル化から開始

試料B:クロロホルム-メタノール抽出から開始

表7 徳利内容物の脂肪酸組成

5. 考 察

これまでの調査結果を総合すると、徳利内容物は魚醤や醤油などの類ではなく、その主体はパルミチン酸カルシウムおよびステアリン酸カルシウムを主とする脂肪酸カルシウム塩とミリスチン酸やパルミチン酸のほか、パルミトレイン酸、ステアリン酸、オレイン酸など、主に低分子の飽和脂肪酸からなる遊離脂肪酸もしくはこれらの脂質から構成されていることが指摘される。なお、徳利内容物中には平均4.3%のカルシウムが含まれていることから、徳利内容物に含有される脂肪酸カルシウム塩の割合を最も多く含まれているパルミチン酸カルシウム一水和物としてカルシウム量から試算した場合、その割合は約61%となる。元素分析結果で、Lossが約95%であったことから、残りの約34%が遊離脂肪酸や脂質、その他の有機化合物や水分、炭酸などによって占められていることとなる。

なお、このような脂肪酸カルシウム塩は、金属石鹼と呼ばれるが、冷水や温水に比較的溶け難く、洗浄力も大きくない。俗に石鹼かすとも呼ばれる物質である。金属石鹼はアルカリ石鹼溶液に金属塩溶液を加えるか、または油脂を金属酸化物とともに加熱して得られる。前者の場合、アルカリ石鹼(天然石鹼とか自然石鹼などという名称で市販されているもの)を、カルシウムイオンを含む水溶液に溶かすことによって金属石鹼が沈殿する。カルシウムイオンは、地下水、河川水などに程度の差はあれ普遍的に含まれることから、石鹼を水に溶かすだけで生じる。しかし、この場合生じる

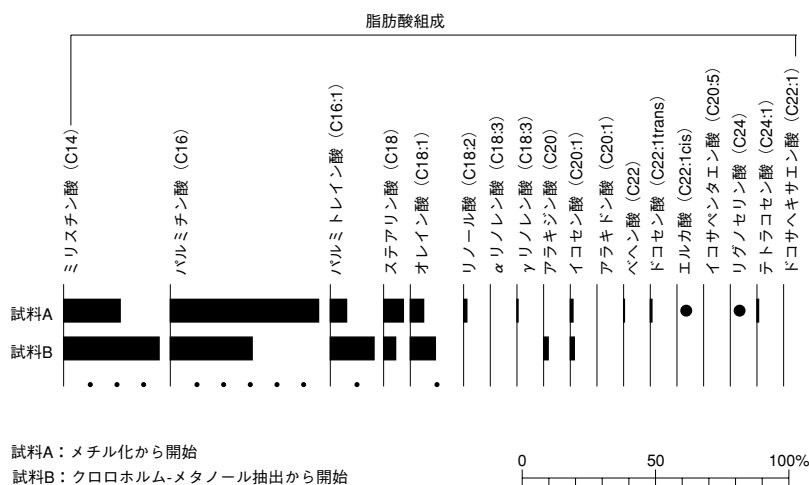


図5 徳利内容物の脂肪酸組成(●は1%未満)

金属石鹼は少量であり、今回のようにまとめて出土することはまずあり得ない。また、地下水、河川水、灰、骨貝などと石鹼が反応した場合、カルシウム以外の成分(マグネシウム、リン、珪素、アルミニウムなど)もかなりの割合で混在すると考えられるが、徳利内容物に関しては、カルシウム以外の他のアルカリ元素が極微量であることから、自然に反応して生成したものは考えにくい。さらにアルカリ石鹼が日本で本格的に製造されたのは明治に入ってからであり、近世においては全て舶来品のため、ほとんど流通しておらず、たいへん貴重であったことから、アルカリ石鹼との反応物である可能性は低いと思われる。

一方、後者の場合には、獣肉を焼いたときにしたり落ちる油と草木灰が反応して出来たのが石鹼の始まりと言われるように、油脂と灰や骨貝などに含まれる金属酸化物を加熱反応(鹼化)させて作られる。油脂は動物や植物などから採取された天然の油を利用したと思われるが、徳利内容物の脂肪酸組成からみると、植物に多い不飽和脂肪酸(リノール酸など)がほとんど含まれていないことから、脂質の由来としては、動物性であった可能性が高い。また、金属酸化物(今回の場合は酸化カルシウムいわゆる生石灰)は、石灰岩や貝殻を焼けば容易に作成され、古来から漆喰の材料として使われており、当時の技術でも作ることは可能である。なお、徳利内容物中には未反応油脂が過剰に存在し、過脂肪石鹼であることが指摘されることから、仮に「窯焚きけん化・塩析法」という伝統的な製造法で作られたとした場合、水洗い、仕上煮、仕上塩析、静置という工程が省かれた未熟な技術によって作られたと考えられる。現時点では、原料や製造法を明らかに出来ませんが、今後事例を重ねることによって、追究したい課題である。

さらに、金属石鹼は洗浄剤としての用途以外に、塗料、化学反応触媒、潤滑油、防腐剤としての工業用途、潤滑剤、剥離剤などの医療用途など幅広い分野で利用されるが、徳利内容物が当時どのような用途で使われたかについても、現時点では不明であることから、出土状況や時代背景、民族事例などから今後検討していく必要があると考える。

江戸遺跡出土のキセル

— 東大構内遺跡における時期別様相 —

安芸 毬子

1. はじめに

最近喫煙者にたいし厳しい社会となってきたが、喫煙の習慣は400年前に遡ることが出来る。日本国内の煙草の史料は、慶長年間(1596～1615)から登場しているが、出土資料からもその歴史の一端をみることができる。

考古資料論考は古泉氏(1992)をはじめ五十嵐氏(1988)、小川氏(2000)、関根氏(2000)が行っている。キセルを整理するにあたり改めて報告書を再読したが、いずれも古泉氏の編年には無理があるとし、キセルでの時期設定は出来ないとしている。しかし一方、時期差はあるものの大きな変遷は捉えることは妥当であるとしている。古泉分類と東京大学構内で出土した資料での時期の対応については小川氏が既に行っている(小川 2000)。ここでは、その後増えた資料から、東大編年の時期区分の中でどのような型式のものが出土しているのか検討を試みた。

2. 文献史料

煙草やキセルのに関する史料が登場するのは慶長年間と云われている。もっとも古い史料は、スペインのマドリッド旧王宮図書館に所蔵されているもので、慶長6(1601)年にスペインのフランシスコ会司祭の一行が伏見で徳川家康に謁見した際に煙草の種子と煙草の葉を原料とした薬を献上したものである(谷田 2000)。また、『徳川実紀』第一巻、慶長10(1605)年の項に「…又蛮船はじめて烟草をのせ来る。京人その種をうへて、専らその烟を吸ふ事風尚となり天下あまねまし。この事益少なく損多きをもて。令をくだし禁ぜられ。」とあり、すでに喫煙が流行し禁令が出されている。キセルの名称については慶長12(1607)年『君臣言行録』に「蕃語にてきせると言うもの懐中し競ひて吹ければ無益のものなりてこれをかたくこれを禁ぜらる」とある(田中 1988)。また、この頃は既に、買い物のための案内記や商人職人の図説書などが発行されている。おもな史料を紹介しておく、寛文6(1666)年刊の案内記『京雀』に「間之町通り二条下るきせる屋町、この町東西両側ながら みなきせるを張り世を渡る業とす」とある。元禄3(1690)年に書かれた人倫訓蒙図彙の幾世留張の条に「今二条通富小路に桜やという者あり。其先祖これをはじめむとかや。…」とある。また同様職人尽百人一首の看板に火皿と吸口の絵が描書かれており「地張」とある。地張キセルは真鍮や銅、鉄などに金鍍金したものである。天明以前には地張キセルと呼び歩いて売っていたようである。『増補江戸惣鹿子名所大全』元禄15(1702)年の買い物案内書に見ることができ、きせる屋の項に姫御門通・尾草橋通・芝神明前・下谷池之端付近にあることが記録されている(田中 1988)。また、文政7(1824)年刊行の『江戸買物独案内』には、煙草屋の項に43軒の名がみられる。「煙管問屋」「御煙管所」「煙管於呂志」「御煙管師」「地張御煙管師」等の名で紹介され

ている。文政13(1830)年『嬉遊笑覧』には、「三条大橋の東大仏付近にきせる屋が多く、二条下る富小路に桜屋があり」とあり、桜張という真鍮製が有名であったとしている。『守貞謄稿』天保8～嘉永6(1837～1853)年などがある。研究著作には、文化12(1815)年に出版された随筆『目さまし草』版元清中亭叔親(たばこ商)に詳細に記されている。この随筆は、蘭学者の大槻玄澤が文化6(1809)年に著した『蔦録』を門人であった清中亭叔親が大槻家から借り受け玄澤の門人達と共に追記しながらわかりやすく上梓したものである。挿画も多くタバコの歴史が詳細に記録されている。喫煙する女性の姿を描いた浮世絵が寛文年間から散見している。

3. キセルの部分名と変遷図

古泉氏が作成した図を参考資料として掲載しておく。

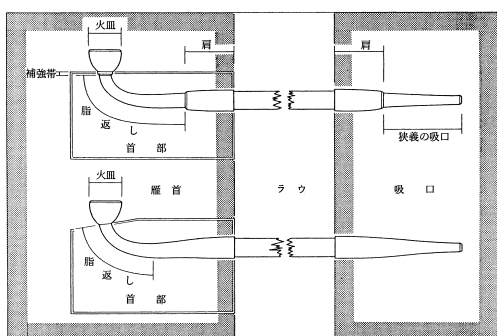


図1 キセル部分名 (古泉 1985)

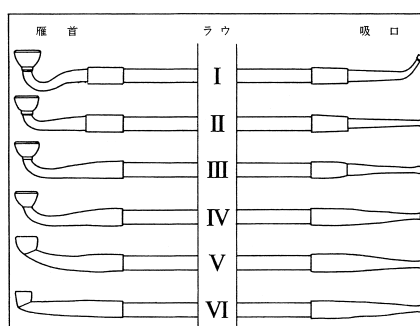


図2 キセルの変遷 (古泉 1983)

4. 先行研究・報告

(1) 東京大学構内の遺跡から

ここでは、各地点の報告書にあるものを若干整理し報告する。

① 御殿下記念館地点(黒田 1990)

ここからは、100点のキセルが出土している。報告されている雁首38点についてみると、A～Dまでの4段階に分類を行っている(黒田 1990)。

A類：羅字を挿入する管(肩付)を別個に取り付けたもので、脂返しが大きく湾曲する河骨形の形態をとる。＝古泉編年第二段階

B類：肩を持たず、火皿と首部の接合部に補強帯を持つものである。脂返しの湾曲は河骨形を呈する。＝古泉編年第三段階

C類：肩を持たず、火皿と首部の接合部に補強帯を持たないものである。脂返しの湾曲は河骨形を呈する。＝古泉編年第四段階

D類：肩を持たず、脂返しが湾曲しないものである。＝古泉編年第五段階

ここの分類では、肩が付くA類と肩が付かないB類を中心として、次に肩を持たないC・D類として、補強帯がなく脂返しの湾曲が河骨形を呈するC類、脂返しの湾曲がないものをD類とし、D類のなかにはC類と区別が付きにくいものもあるとしている。D類が若干新しくA～D類の出土時期に大差がないと報告している。

本地点からは、最も古い時期にあたる532号遺構からキセルが出土している。東大編年のⅡ期(1630～1650)にあたる。御殿下記念館地点では、古泉編年の第二段階～第五段階が時期差なく出土していることがわかる。

② 医学部附属病院地点(小川 1990)

雁首69点、吸口88点が出土している。ここでは、古泉氏が「江戸—都立一橋高校地点」の中で行った分類を基本に分類を行っている。しかし、古泉氏の分類Ⅰ～Ⅲ類、首部に肩の付くⅠ類、肩の付かないⅡ類、特殊な形態のⅢ類とし、さらにⅠ類を脂返しの碗曲によりAとB類に細分化、Ⅱ類は脂返しの湾曲と補強帯からAとBそして首部が火皿にすぐ接合形態のC類に細分化している。以上の分類から補強帯は脱落しやすいとして、Ⅱ類全体を主に火皿の形態から分類を以下のようになおしている(小川 1990)。また、『江戸文化の考古学』(2000)の中で東大構内で出土したキセルを用いて、東大編年を縦軸、古泉編年を横軸に据え「キセルの分類と出土遺構の時期の対応」表を作成している。そして、古泉編年とは年代的にややずれがあるがおおむね妥当であるとしている。

○ 分類

Ⅰ類—— 首部に肩が付く

Ⅱ類—— 首部に肩が付かない

Ⅱ類は以下のように細分化している。

Ⅱ類	— a類	(火皿の口径と、首部との接合面とが平行なもの)
		a1 : 火皿の深さが口径の半分以上あるもの
	a2 : 火皿の深さが口径の半分以上ないもの	
	— b類	(火皿の口径と、首部との接合面が平行でないもの)
		b1 : 段を持つ
		b2 : 段を持たない

Ⅲ類—— 特殊な形態なもの

以上のように観察を行っている。上記した分類からみるとⅠ類は類例が少ないため除外している。Ⅱ類は相互に重なり合いがみられるが、{a1→a2→b1→b2}の変遷をみることが出来るとしている。

③ 農学部家畜病院地点

雁首11点、吸口9点出土している。20点のうち18点はSK09、2点はSK11からの出土である。

SK09からは陶磁器、土製品、金属等が最も多く出土した大型土坑である。共伴した陶磁器から17世紀末～18世紀初頭に位置づけられる遺構で、東大編年のⅣb期に位置づけられる。SU11は中央南端に位置する不整形な地下室で、共伴した陶磁器等から18世紀前半に位置づけられる遺構である。報告書には詳細がなかったが整理しておく。

SK09からは以下のものが出土している。①脂返しの湾曲は大きく(河骨形)、補強帯のないもので、火皿は口径が大きく器高の高い碗形である。古泉編年の第四段階(18世紀前半)にあたる。②脂返しの湾曲は大きく(河骨形)、補強帯のないもので、火皿は碗形で首部が細いものである。古泉編年の第四段階(18世紀前半)にあたる。③脂返しの湾曲は①よりやや小さく、火皿は器高の低い碗形である。古泉編年第四段階(18世紀前半)にあたる。④脂返しの湾曲は大きく、肩付きのものである。火皿は欠損している。SK11からは、⑤脂返しの湾曲はなく、補強帯のないものである。火皿は器高の低い碗形を呈し、首部は短い。古泉編年第五段階(18世紀後半)にあたる。SK11は18世紀前半に位置する遺構で、古泉編年の第五段階のものが出土している。農学部家畜病院からは以上の5種類のもので出土している。

(2) 都内遺跡にみる

① 溜池遺跡(伊藤 1996)

ここからは、雁首132点、吸口129点が出土し計93点について掲載している。

ここでは、古泉氏の変遷を製作工程と1個体の構成パーツからの分類に、火皿接合部の形態を基にした分類を加え再検討している。

○製作工程と1個体の構成パーツから

I類——肩を有する製品。いわゆる肩付きである。

II類——胴が一枚の板から形成されて製品。胴中央部付近に稜が存在し、I類に似た形状を呈する。

III類——胴が一枚の板から形成された製品。胴の形状から滑らかに変化する。

○火皿接合部の形態を基に

A類——胴が湾曲して火皿と接合されて製品。接合部の面積は狭い傾向にあり、強度不足を補足するための補強帯が付加されたもの。

B類——胴がほとんど湾曲せず火皿と接合された製品。接合面積を広くとることが可能な造りを呈する。

上記した分類を使い層位と照らし合わせた結果、古泉氏の変遷と符号しないことを指摘し、キセルから遺構の年代を推定する指標とはならないとしている。

② 増上寺子院群(五十嵐 1988)

総出土数250点(雁首134点、吸口115点、延ベキセル1点)

○分類基準

雁首の火皿及び首部の形態差を基準として、次のように火皿の上径(B)と下径(C)の比($D=B/C$)に対する火皿の高さ(E)によって火皿の形態を検討し、次に首部長さに対する首部の湾曲の程度(F)から首部の形態を検討し分布図を作成している。要約すると、次の通りとなる。

I類：火皿が碗形を呈し、首部の長さや湾曲は大きく、穿孔と補強帯を有する。

II類：火皿が皿形を呈し、首部の長さや湾曲は小さい。

そして、分布図とした結果、碗形と分類されたI類は、首部の形態では、大略首部の長さ、湾曲

が共に大きい領域に分布し、Ⅱ類は、小さい領域に分布するとしている。

そして出土したキセルの形態を次のように要約している。

- (1) 雁首の時間的変化は、火皿と首部の形態によって代表的により表される。
- (2) 雁首は、火皿と首部の形態差によって、江戸時代の前期と後期に判別する。
- (3) 江戸時代前期に特徴的な属性としては、火皿の穿孔と補強帯があげられる。
- (4) 首部の形態は、火皿の形態ほど明瞭な時間的差異を示さない。
- (5) 首部の形態差は、主として首部の湾曲の度合いに関係する。
- (6) 継ぎ目が右にあるか、上にあるか、肩が付くか付かないかは、首部の湾曲に関連する。

以上のことから、近世における喫煙具という嗜好品に対して、空間的属性と社会・文化的属性を考慮せずに形式を設定し、時間的変遷をもとめるには、無理があると思われると、結んでいる。

③ 真砂遺跡(中井 1987)

真砂遺跡からは、約300点(遺構内171点)のキセルが出土している。171点のうち雁首85点、吸口86点である。ここでは残存率の高い141点について写真図版とし、雁首、吸口の分類を行っている。尚、ここでは雁首の分類のみを取り上げてみたい。

○分類

古泉氏の分類(1985)を参考に出土資料の観察を行っている。

I. 肩のあるもの

イ. 肩と脂返しが別材

ロ. 肩と脂返しが同材：肩の途中で段を設けることで、肩を作り出している

Ⅱ. 肩のないもの

イ. 脂返しがはっきりとした河骨形

ロ. 脂返しが短めでゆるい河骨形

ハ. 脂返しがなく管が直線的なもの

*その他特殊なものとして、六角形や毛筋巻きや火打ちがね付きのキセルなどをあげている。

そして、雁首Ⅱイ類・ロ類を18世紀、Ⅰ類は17世紀、Ⅱハ類は19世紀にはいる可能性があるとしている。

また、出土状況と廃棄について書いている。特殊な廃棄事例として、吸口のみが入れ子状に重なって出土した108号土坑をあげている。各遺構での雁首と吸口の出土点数をみて49遺構中13遺構が同数であり、他は異なる。そして、その理由として、雁首は灰を落とすさい灰落とし等の縁に叩きつけることによる雁首の破損による廃棄、もう一つは雁首のヤニ詰まりによる廃棄をあげている。ヤニ詰まりは掃除のし易い吸口には少なく、吸口まで届くヤニの量の違いにも着目している。以上のことから雁首と吸口の数量の違いは雁首のみを取り替える行為が行われていた可能性があるとしている。そして、真砂遺跡においては長い時間で雁首と吸口の廃棄率がほぼ同数になったのではないだろうかとしている。東大医学部附属病院外来地点出土のキセルの廃棄についてみると、41遺構から出土しており、雁首総数60点(遺構外3点含む)、吸口総数43点である。その内雁首、吸口が同数出土している遺構は9遺構、雁首が多い遺構は19遺構、吸口が多い遺構は8遺構であった。出土総数は雁首の方が多きものであった。

(3) その他の研究にみる

① 「日本の初期煙管に関する覚え書き」(古泉 1992) (図2)

ここでは古泉氏が都立一橋高校地点のキセルを六段階に分類したものをもとに、1985年「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』第13号で年代観を付け加えて編年を行っている(図2)。

一橋高校地点の中での分類は首部に肩のつくⅠ類と肩の付かないⅡ類に大別している。

- | | |
|--------------------|---|
| 第一段階(16世紀末～17世紀初頭) | : 肩付き河骨形で補強帯が付く。脂返しが大きく下方に湾曲する |
| 第二段階(17世紀前半) | : 肩付き河骨形で補強帯が付く。 |
| 第三段階(17世紀後半) | : 河骨形で補強帯が付く。 |
| 第四段階(18世紀前半) | : 河骨形で補強帯が付かない。 |
| 第五段階(18世紀後半) | : 脂返しの湾曲が小さくなる。 |
| 第六段階(19世紀) | : 脂返しの湾曲がまったく消失。火皿はきわめて小型化し、その形態は皿形や碗形というより、逆台形に近くなる。 |

② 「江戸時代の煙管に関する考古学的検討」(関根 2000) (図3)

関根氏は、東北地方太平洋側の地域の近世墓から出土したキセルを分析して検討を行った。氏は分析資料として地域を南部藩領、仙台藩領、東南北部諸藩領、東南北部天領の4地域に大別し、墓の時期は墓碑の没年、没年が不明な場合は共伴資料の銭貨から年代を与えている。

- | | |
|----------|--|
| I 期 | : 喫煙習慣の無い時期であり渡来銭のみで構成されている。 |
| II 期 | : 1636～1665年代・古寛永のみ。 |
| III 期 | : 1666～1708年代・新寛永背文銭を含み新寛永背無文銭を含まない。 |
| IV a・b 期 | : 1709～1830年代・新寛永を含み新寛永鉄銭を含まない。 |
| IV c・d 期 | : 1840～1870年代・鉄銭・天保通寶・文久通寶を含み近代銭を含まない。 |
| V 期 | : 1880年以降・近代銭を含む。 |

検討対象となった墓は、10才未満の小児の墓を除いた1180基であった。キセルは1180基のうち360基に副葬されていた。360基のうち雁首と吸口がセットで出土した墓261基(72.5%)、雁首のみ63基(17.5%)、吸口のみ34基(9.4%)、判別不可能なもの2基(0.6%)、複数の含まれていた墓は27基(7.5%)で検討資料として良好なものである。氏はキセルの副葬率を男女別に、更に副葬率の時期的推移をグラフとしている。

結果をみると、東南北部天領では17世紀中葉以前に副葬率が20%を超えて、17世紀後葉～18世紀初頭にピークを迎え、それ以降は減少していく。仙台藩領では17世紀中葉以前の副葬率は大変低く、17世紀後半以降から18世紀代にかけ急激に上昇していく。南部藩領も仙台藩と同様で

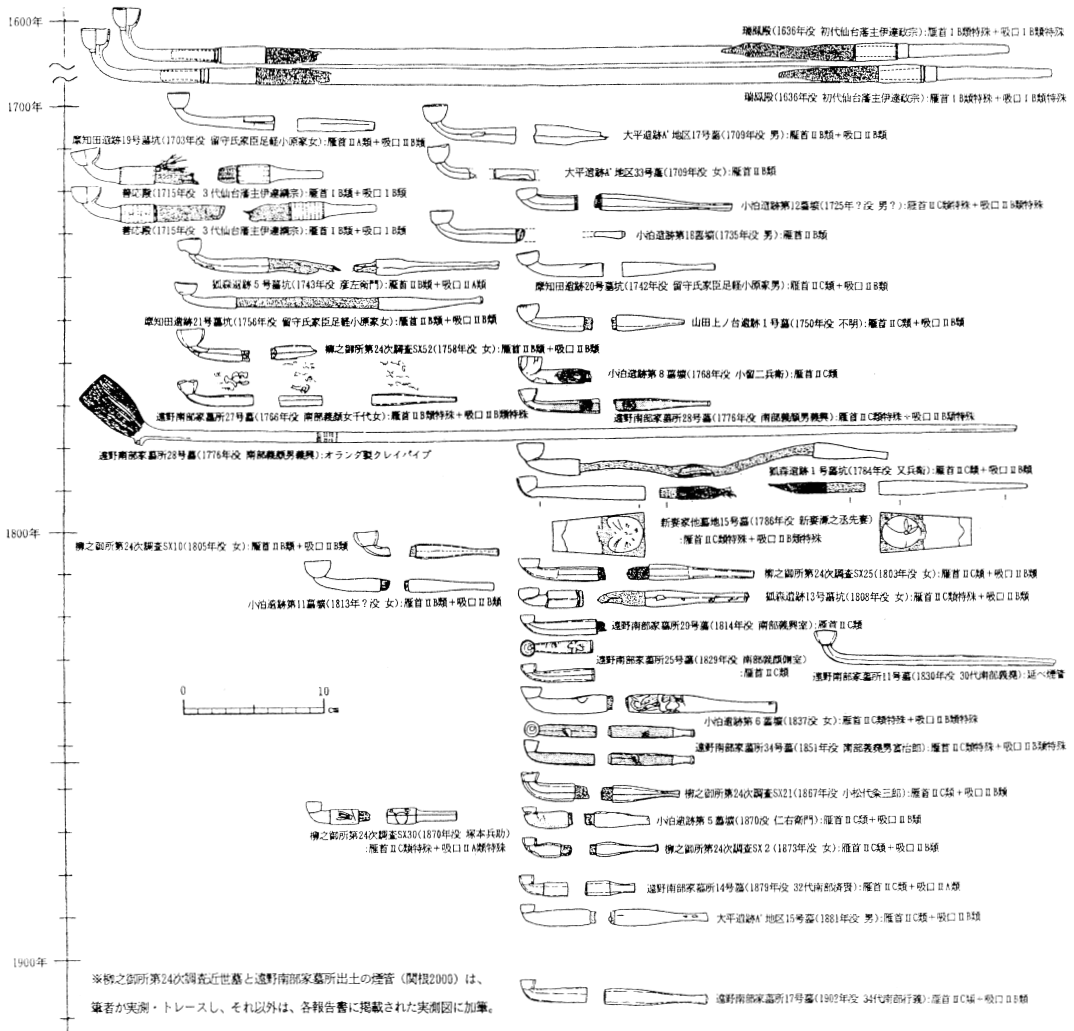


図3 関根氏（2000）によるキセルの編年

18世紀前葉から幕末まで僅かに上昇傾向が見られる。近代に入り副葬率はどの藩でも急激に低下するようになる。これは、喫煙方法の変化によるものと考えられる。紙煙草、葉巻などの出現によりキセルの使用も減少するためと思われるとしている。おもしろい結果がある。仙台藩領では女性の副葬率が男性より多いのである。墓以外での出土では、仙台城二の丸第9地点、仙台城三の丸跡からは、江戸初期、I類（延ベキセル状）が17世紀前葉の遺構から出土している。金属のキセル以外では、浜通遺跡の16世紀末～17世紀初頭の遺構から土製のパイプが出土している。遠野南部家の墓所、没年安永5年（1776）南部義興の墓からはクレイパイプが出土している。

今現在型式編年の多くは古泉氏の6段階を基準にきているが、やはり関根氏も再検証の必要があるとしている。関根氏が作成した図を東大編年のものと比較してみると、江戸出土のものと同様の変遷を辿っている。

以上東大構内遺跡3地点、都内遺跡が3遺跡と、古泉弘氏と関根達人氏の論考を踏まえ改めて東大構内の各地点から出土したものを図化し各期の様相を見ていきたい。

5. 東大構内遺跡出土キセル各期の様相(図4・5)(表1)

(1) 分類

観察した際に違いが明確である、肩が付いていないものをA類、肩が付いたものをB類に大別し、A類はA1とA2類に、B類もB1、B2類に細分類した。

- A類 ・ 火皿以外の首部が一つのパーツで作られているもの=肩付きでない
- A1 ・ 肩が付かないもので首部が長い
- A2 ・ 肩が付かないもので首部が太く短い
- B類 ・ 火皿以外の首部が二つのパーツからなるもの=肩付き
- B1 ・ 肩付きで首部が長く、脂返しが認められる
- B2 ・ 肩付きで首部が短く、脂返しが無い

なお、掲載した表1について火皿の大きさ(大・中・小)は、図にある119点のうち118点の口径・高さ・接合部を計測し平均を出し分類した。

(2) 東大編年の時期区分

ここでの年代は東大統一編年の時期区分を用いた(堀内 1996)。尚、表作成にあたりI a、I b期(17世紀初頭)からはキセルが出土していないため表記はしていない。また、時期区分が長く捉えられるキセルについての時期区分は細区分を避けて記述した。

○ 各期の様相

図示したものについての報告を行う。(番号)は図版番号である。尚、各期の説明の○内の番号以下の通りである。①分類 ②火皿 ③脂返し ④接合部である。VI期以降のものについては良好な資料がないため、尾張藩上屋敷(V・VI・IX・X)と日影町(II・III)と御先手組(駒込鰻縄手)、汐留遺跡II出土のキセルを使用した。また、古泉編年に当てはまるものについては参考として表示しておいた。また、表中の大きさについての判断基準は口径、高さ、接合部の平均で行っている。I a期、I b期については東大構内からは出土していないため他の地域の資料を記述しておく。

I a期～I b期(～1610・1610～1630年代)

平戸和蘭商館跡の遺跡の西区第3生活面(1600～1618年)からは、肩付きで、口径が大きく、脂返しの湾曲が大きいものが出土している。また、大阪城下町跡II OS86-20次調査の6層(1598～1614)から出土している。キセルは首部の一部を欠損しているため肩付きかどうか分からないが、補強帯は二重で火皿はやや小さいものである。同遺跡の5層(1614年冬の陣焼土層)からは、肩な

して、火皿口縁に突帯を施し、小口に段を持ったもので補強帯と肩を有するものが出土している。

堺市環壕都市遺跡 SKT57-SK057・SK053 の第2次生活面からは、脂返しの湾曲が大きく、補強帯と肩を有する。古泉編年の第三段階のものが出土している。この遺跡は16世紀初頭～17世紀初頭まで町として成立しており、1615年大火で終末期をむかえた。また、仙台城三の丸6号土壙からは、脂返しの湾曲が大きく、補強帯と肩を有するものが出土している。古泉編年の第二段階のものである。6号土壙は慶長6～寛永14(1601～1637)年までの遺構である。

Ⅱ 期 (1630～1650年代) (図5-1～6)

- ① A1類とB1類が出土している。
- ② A1類の火皿は口径の大きい碗形であるが、器高はやや高いものである。また、(3)のように小型のものが出土している。B1類は口径は大きい、器高はA1類よりやや小さい。
- ③ 脂返しの湾曲は大きい。しかし、B1類の(5)はやや小さい。
- ④ 接合部はやや細く、補強帯はA1、B1類双方に見られる。

Ⅱ期は、A1、B1類が出土しており、火皿は口径の大きいもので、接合部は細く、脂返しの湾曲は大きいものが大半であった。そして、細身で小型のものが共伴している。古泉編年の第二段階と第三段階のものである。

Ⅲ a 期 (1650～1660年代) (図5-7～14)

- ① A1・B1類が出土している。
- ② A1類の火皿は、Ⅱ期の口径と同様で大きく、器高はⅡ期のものより高い、丸みのある碗形(7・8)と、(9・10)のように小型のものがある。また、(10)のように穿孔を有するものがある。B1類はⅡ期と同様であるが、(13)のよう丸みのないもので、口縁部に段差を持つものがある。
- ③ A1、B1類とも脂返しの湾曲は大きいものが主であるが、(8)のように首部が短く湾曲が僅かな特殊なものもある。
- ④ 接合部は、小型で細身のものとやや大きいものがある。

Ⅲ a 期は、Ⅱ期と同様の形態のものが多いが、補強帯が太く火皿に穿孔を有するものや、首部の長い延べキセルがあり、(8)のように首部が非常に短く火皿の大きいものなどが出土している。

<17世紀中葉～後葉の江戸以外の地域>

平安京左京北辺四坊(公家町)遺跡、土壙1432(17世紀中)からは火皿から吸口まで4つの部分で構成されている、長さは50cmになるキセルが出土している。器高は高く腰の張らない碗形である。脂返しの湾曲は大きいものである。B725(17世紀中～後)からは、ラウ、首部、吸口の3部分から構成されている長いキセルが出土している。器高は高い碗形で、脂返しは大きいものである。首部の長さは約14.5cmと長い、補強帯は二重になっている。また、肩を持つもので、脂返しの湾曲が非常に大きいキセルが出土している。古泉編年の第二段階、第三段階のものである。

Ⅲ b 期 (1670～1682年) (図5-15～21)

- ① A1類、B1類が出土している。

- ② A1類の火皿は、器高の高い逆台形を呈する(15・17・18)ものと、(19)のように非常に小さい逆台形を呈する特殊キセルがある。また、小型で丸みのある碗形を呈するものがある(16)。B1類は、器高が高い碗形である。
- ③ A1、B1類とも脂返しの湾曲は、Ⅱ期、Ⅲa期のものよりは若干小さくなる。しかし、(19)のように脂返しの湾曲の全くない偏平形を呈する特殊なキセルが出土している。
- ④ 火皿との接合部は、特殊な(19)を除いては小さいものである。補強帯は(15)のみに確認されている。

Ⅲb期は、火皿が碗形を呈するものに加え逆台形にちかいものが多く出土している。脂返しの湾曲は、Ⅱ期やⅢa期に比べ小さいものが多くなる。古泉編年の第四段階のものである。

Ⅳa期(1680年代)(図5-22～31)

- ① A1類とB1類が出土している。
- ② 火皿は腰の張る碗形と(22・24・28)、丸みの少ない碗形とがある(23・25・26・27)。器高は高いものと低いものがある。また、(22・23)は穿孔されている。
- ③ 脂返しの湾曲は大小あるが、(30)のように非常に小さいものもある。
- ④ 火皿との接合部は細いものと、太いものが混在している。(22)は補強帯は四重になっているが、装飾性も兼ねているものであろうか。

Ⅳa期に使用した資料は、(25)以外のものは、東大医学部附属病院病棟地点SK03-D層とSU436から出土したものである。SK03の遺構の廃絶年代は元禄16年(1703)の火災に比定されるが、出土した陶磁器は1段階古いⅣa期のもので占められている。また、同時期の病院中央診療棟地点F34-11と比較すると、SK03は古い段階のものが主体となっていることから絶対年代は1680年代と推定できる(成瀬 2003)。陶磁器はⅢb期～Ⅳa期が主体となっている。以上のことからキセルをみると(22・23)は、Ⅲa期に類似する形態を持つことから、キセルも陶磁器と同様に古いものが含まれている可能性がある。因みに(25)はF34-11出土のキセルである。B1群に属する(31)の火皿は大きく、ラウの差し込み部である小口径は非常に大きいものである。Ⅳa期は脂返しの湾曲が極小のものが出土している。古泉編年の第三段階と第四段階のものである。

Ⅳb期(1690～1700年代)(図5-32～38)

- ① A1類とB1類が出土している。
- ② 火皿は器高の高いもので、丸みのある碗形(35・36・37)とやや細身の碗形(32～34)がある。B1類の(38)の火皿は、口径の大きい碗形である。
- ③ 脂返しの湾曲はⅡ期、Ⅲ期と同様で大きいものである。
- ④ 火皿との接合部は、全体的に細い。

Ⅳb期は、Ⅱ期、Ⅲ期の様相と類似するが、碗の形態は若干異なるものがある。同時期で都内遺跡の「巢鴨I」(1994)遺跡の1号遺構出土のキセルをみると、火皿はみな碗形を呈し、脂返しの湾曲は図のものと同様のものではあった。また、図(32～34)が出土した、外来診療棟SK139の共伴したキセルをみると、図示したものと同様の形態のものであった。古泉編年の第三段階～第五段

階のものである。

V a期 (1710～1720年代) (図5-39～44)

- ① A1類のみが出土している。
- ② 火皿は、首部の短いものは丸みのある碗形を呈し(39・42～44)、(40・41)は、器高が低く丸みの少ない碗形を呈する。
- ③ 脂返しの湾曲は、みな小さいものである。
- ④ 火皿との接合部は首部の短いもの以外は大きく、火皿口縁部に対し平行でない(39～41)。

V a期は、脂返しの湾曲が小さいものが大半であり、火皿との接合部は、火皿の口径に対し平行でないのがみられる。A2、B類は出土していない。同時期のB1類については、関根氏が作成した煙管の図版中(図3)に1715年に没した、3代仙台藩主の副葬品の中に2本みられる。

V b期 (1730～1740年代) (図5-45～52)

- ① A1類、首部が短くて太いA2類が出土している。
- ② 火皿はⅢ期のA1類のものと同様の碗形を呈するものと、A2類の、口径が大きく、器高の低いものである。
- ③ 脂返しの湾曲は大きい(47)と、中位(45・46)と小さい(48・49)があり、A2類のものには湾曲はみられない。
- ④ 火皿との接合部は(47)以外のものは大きい、A2類は特に大きく、火皿の口径に対し平行ではない。

V b期は、A2類が登場する。A2類の特徴は首部が短いもので、火皿の口径が大きく、器高は低い。また、(47)のような古い様相を呈するキセルが出土している。長いあいだ使用されたものが廃棄されたものであろうか。図示した(47・52)は外来診療棟SK290から出土しており、共伴したキセルをみると、(52)と同様のものが出土している。また、クレイパイプの脚部も出土している。(48)は、農学部家畜病院地点のSK11出土のものであるが、共伴した他のキセルをみると図示したものと同様で脂返しの湾曲が僅かなものである。(50・51)は東大病院中央診療棟E34-2出土のものである。IV a期、IV b期ともB類は出土していない。古泉編年第三段階～第五段階のものである。

VI a期～VI b期 (1760～1770年代) (図5-53～66)

VI期は東大編年では、a、b期に分けているが資料上細分化出来ないため大きくVI期とした。また、この時期以降、東大構内の遺跡から出土した資料が少ないため都内遺跡の「尾張藩上屋敷」「日影町遺跡」「御先手組」で補足した。

- ① A1、A2、B2類が出土している。
- ② 火皿は、口径が大きい碗形を呈するものが大半であるが、器高は様々である。(57)は、古い時期にみられた穿孔を有するものであるが、脂返しの湾曲は小さい。B2類の(63・65)は、首部が短いもので、口径と小口径は大きいものである。また、(65・66)は口径が大きく器高は非常に小さいものである。(64)肩の部分に沈潜を彫り込み装飾としている。

③脂返しの湾曲は、A1類では(56・57)が明確にみられるが、(53・55・58)は僅かである。A2類とB2類のすべてに湾曲はみられない。

④火皿との接合部は大きいものが大半である。特にA2類は大きく、火皿の口径に対し平行でない。

VI期では、脂返しの湾曲は、小さいものと、ないものが多く、火皿は口径が大きいものが多い。B2類は火皿が大きく首部の短いもので占められ、特殊な形状しているものが出土している。(53・59)は東大医学部附属病院中央診療棟地点L34-1から出土したもので、詳細年代は東大編年のVI a期(1750～1760年代)に位置するものである。(62)は東大御殿下記念館地点416号遺構出土、(64)も同地点の125号出土のものである。詳細年代は東大編年のVI b期(1770年代)に位置づけられる。古泉編年の第五段階のものである。

Ⅶ期～Ⅷa期(1780～1810年代)(図67～85)

この時期に使用した資料は18世紀中葉～18世紀末、18世紀末～19世紀初頭、18世紀末～19世紀前葉と明記されたものであるため、Ⅶ期とⅧa期を結合した時期とした。

①A1、A2、B1、B2類が出土している。

②火皿は、口径が大きく、器高が高い碗形(67・72・76・83)と、口径が大きく、器高が低い碗形(70・73・74・80・84)を呈するものがある。また、口径と器高が小さいものが出土している(71・78・79・81)。

③脂返しの湾曲は、古い様相を呈する(67・82)は大きく、(69～72)は僅かであるが小さい湾曲がみられる。また、その他のものにはまったくみられない。

④火皿との接合部は、脂返しの湾曲が無いものはみな大きい。

Ⅶ期～Ⅷa期は、古い様相を持つキセルが若干含まれるが、多くは脂返しの湾曲が僅かなものと無いものが多くなる。A2類では脂返しの湾曲がなく、火皿が大きいものと、小さいものが混在している。B類では火皿と脂返しの傾向はA2類と同様である。

(68～69・81・85)は、東大工学部1号館SK01から出土したものであるが、この遺構の共伴資料の陶磁器をみると、18世紀末～19世紀前半に位置づけられるものであるが、若干古い様相を持つものが出土していることから、キセルの古い様相を持つ(67・82)は、長い間使用されていた可能性も考えられる。古泉編年の第四段階と第五段階のものである。

Ⅷb期～Ⅷd期(1820～1860年代)(図5-86～105)

Ⅷb期～Ⅷd期は、東大編年では、四期(Ⅷa～Ⅷd)に詳細に分けているが、上記した年代設定と同様、19世紀前葉、19世紀前葉～19世紀中葉、Ⅷc期と明記された資料であるため、ⅧbからⅧdを結合した時期設定とした。

①A1・A2類、B1・B2類が出土している。

②火皿は、器高が高い碗形(89・92・96・97)と、器高が低い碗形(88・93・94・95・98・100・104)がある。また、口径と底径の差があまりなく、器高の低いものが出土している(94・95・98・100・102・104)。

③脂返しの湾曲は、古い様相を持つ5点(89・90・91・92・99)以外のものには、みられない。

④火皿との接合部は古い様相を持つ5点以外は大きい。

VIII b期～VIII d期は、若干古い形態のもの、A2類の3点(96～98)以外のものは、火皿が小さく、脂返しの湾曲は消失したものである。尚、(86)は、H21-1出土のもので東大編年VIII b期(1820～1830年代)、また(87)は、医学部附属病院外来診療棟地点SK81出土のもので東大編年VIII b期、(90)は、東大御殿下記念館地点50号遺構出土のもので、東大編年のVIII c期(1830～1840年代)に位置づけられる。古泉編年の第三段階、第五段階、第六段階のものである。

IX期(明治)(図5-106～119)

①A1・A2類、B1・B2類が出土している。

②火皿は、やや小さめの碗形を呈する(106・107)と、首部の長さの割に口径が大きく、器高が低い碗形を呈するもの(108・118)、口径と底径の差のない方形を呈するものが出土している(109～112・114～116)。

③脂返しの湾曲はみられない。

④火皿との接合部は、火皿が碗形を呈するものは大きく、方形を呈するものは若干小さい。

IX期は火皿が小さく、脂返しの湾曲は消失したものである。古泉編年の第六段階のものである。

6. ま と め

各期の様相をみてきたが、A類とB類とも、時期的な変遷をみることができる。分類するに際し、時期別に火皿の口径と高さ、接合部について計測し平均をグラフとし、改めて時期別に変化があるか検討をした。グラフはII期～IX期に区分したものである。なお、図4のグラフの数値は実寸の平均値である。

(1) 口 径

II期・III a期が最も大きく、III b期になり急激に小さくなるこれは、非常に小さい火皿を持つ特殊な延ベキセル(19)のためである。III b期からIV b期にかけ緩やかに大きくなっていくが、再びV a期で小さくなる。V a期が小さくなった要因は、V a期で取り上げた資料6点の内3点が首部の短い小型のキセルであった事と、V a期以前の各期にくらべ火皿が小さくなったためと思われる。V a期からV b期にかけ上昇するがまた、VI a期～VI b期からVIII d期～VIII d期にかけ緩やかに下降し、IX期は最も小さくなる。V b期の口径が大きいのは、この時期から、首部が短く口径が大きいA2類の出現によるためである。このことは小型のB2類の登場とA2類のなかにも火皿が小さいものが登場することも要因の一つであろう。

(2) 高 さ

II期からIII b期にかけ緩やかに上昇しIV a期で小さくなり、IV b期で再び上昇し、V a期からIX期にかけ緩やかに下降していく。V a期から徐々に低くなる要因は、器高の低いA2類とB2類が登場しはじめた事によるものであると思われる。

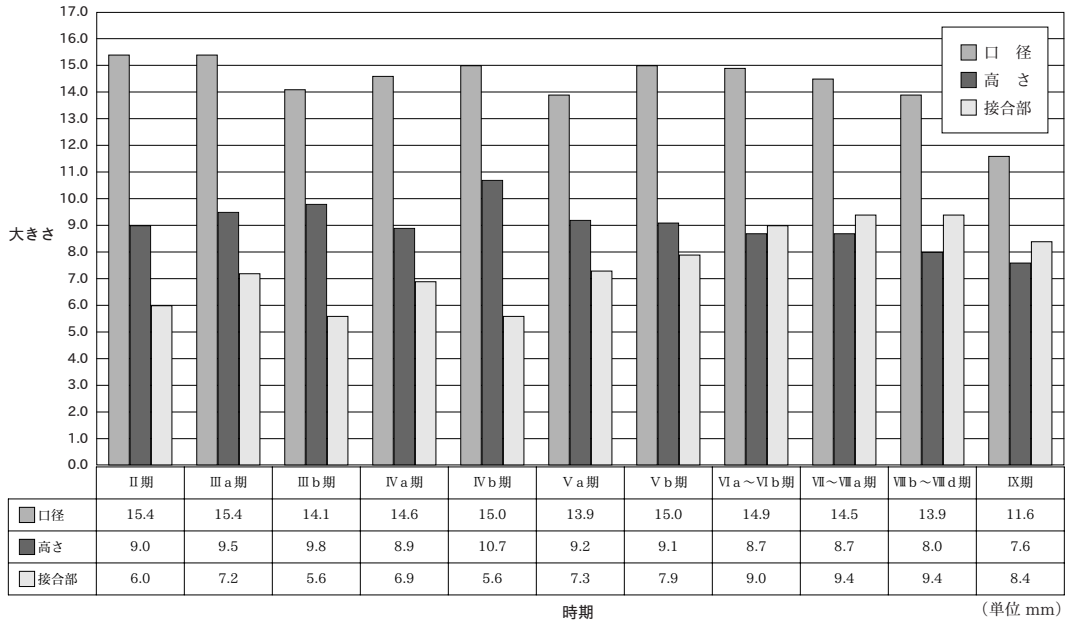


図4 火皿時期別平均グラフ

(3) 接 合 部

II期～IV b期まで上下を繰り返し、IV b期からVIII b期～VIII d期まで緩やかに上昇しIX期で再び小さくなる。IV b期からの変化は、IV b期のキセルの接合部は細いものが大半であり、V a期から上昇していく傾向にあるのは、脂返しの湾曲が小さくなり消滅しはじめ、それに伴い接合部が太くなるためである。そして、V b期からは首部が短くて接合部が大きいA2類が登場したことによる。接合部が最も大きいのはVII期～VIII a期からVIII b～VIII d期にかけてである。これは、脂返しの湾曲が消滅し、それにより接合部が大きくなったキセルがA1、A2類、B1、B2類すべてにみられることによるためと思われる。

以上火皿の口径、高さ、接合部をグラフを作成検討したが、各部所での時期別変化があることがわかる。

7. おわりに

キセルについては『守貞謄稿』に次のようにある「…其形、種々大小長短、全体ノ形定ナク際限ナシ。然レドモ、大略首尾ヲ金属ニテ造之ニ、小竿ニ、両頭ニ挟之ヲ普通トス…」、出土資料をみても種々大小長短のものが各時期から出土している。

図5に掲載した資料を古泉編年の第一段階～第六段階に分類しようと試みたが、分類出来ないものも多くあった。筆者も詳細分類を試みたが、火皿の形態は多種あり、また脂返しの湾曲も微妙であるため、火皿、脂返しとも大、中、小の三段階という大まかな分類とした。分類した大・中・小

で火皿、脂返し、接合部などを時期別にみてきたが、火皿の大きさでは明確な変化はないが、Ⅱ期～Ⅳb期にかけ大きいものがみられる。中位の大きさのものはⅣb期～Ⅵb期にかけ多くみられる。そして小さいものはⅡ期から点在するが、Ⅷc期～Ⅸ期にかけ多くみられる。脂返しの湾曲は時期別に明確に捉えることができる。大きいものは、Ⅱ期～Ⅳb期に多くみられ、中位のものはⅢa期～Ⅳb期にかけて多く、小さいものはⅤa期～Ⅵa期にかけ多くみられる。また、脂返しの湾曲がまったくないものはⅤb期～Ⅸ期にかけ多くみられる。接合部については大きいものは、Ⅴb期～Ⅸ期にかけて多くなる傾向を示している。小さいものはⅢb期～Ⅳb期にかけ集中しており、中位のものはⅡ期～Ⅸ期まで点在している。以上のことから、キセルからは明確な時期設定は難しいが大きな変遷はみることができる。このことは冒頭で記述したように古泉氏の変遷も妥当であると思われる。

この編年表はあくまでも私が拾い集めた資料の中でのものであるため、更に検討する必要がある。しかし、今回はここで留めておきたい。

参考文献

- 財団法人 大阪市文化財協会 1981 『難波宮址の研究』第七 報告篇
 財団法人 大阪市文化財協会 2004 『大阪城下町跡Ⅱ』
 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 2004 『平安京左京北辺四坊』
 仙台市教育委員会 1985 『仙台城三ノ丸』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』
 東京大学遺跡調査室 1990 『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点』
 東京大学埋蔵文化財調査室 1996 『農学部家畜病院』『東京大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』
 東京都埋蔵文化財センター 2000 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ』
 東京都埋蔵文化財センター 2001 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅵ』
 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅸ』
 東京都埋蔵文化財センター 2002 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅹ』
 東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡Ⅱ』
 都立一橋高校内遺跡調査団 1985 『江戸ー都立一橋高校地点』
 都立学校遺跡調査会 1999 『日影町Ⅱ』
 都内遺跡調査会 1997 『駒込鰻縄手 御先手組屋敷ー都立向丘高校地点』
 五十嵐彰 1988 「煙管」『芝公園一丁目増上寺子院群』 港区教育委員会
 伊藤大史 1996 「煙管」『溜池遺跡』 都内遺跡調査会
 小川 望 1990 「各地点出土金属製品 煙管」『東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』 東京大学遺跡調査室
 小川 望 2000 「出土遺物から見る江戸のたばこ」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
 朝倉治彦・柏川修一編 1992 『守貞謄稿』 東京堂出版所収
 黒田 晃 1990 「煙管」『東京大学構内の遺跡 山上会館御殿下記念館地点』 東京大学埋蔵文化財調査室
 古和 弘 1985 「10.銅製品 Bキセル」『江戸ー都立一橋高校地点』 都立一橋高校内遺跡調査団
 古泉 弘 1992 「日本の初期煙管に関する覚え書き」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』 大阪・郵政考古学会

研究編 8. 江戸遺跡出土のキセル

- 関根達人 2000 「江戸時代の喫煙に関する考古学的検討」『文化』第64巻
- 田中富吉 1988 「きせる」『きせる』 たばこと塩の博物館
- 谷田有史 2000 「江戸時代のたばこ」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館
- 中井さやか 1987 「煙管」『真砂遺跡』 真砂遺跡調査会
- 成瀬晃司 2003 「大名藩邸における廃業の一例－災害と造成からみた－」『遺跡からみた江戸のゴミ』
江戸遺跡研究会
- 野間光辰編 1973 『新修 京都叢書 第一巻』「京雀 第二巻」 臨川書店
- 喜田川守貞 1853 『守貞謄稿』（朝倉治彦・柏川修一編1992『守貞謄稿』 東京堂出版所収）
- 花咲一男編 1972 『江戸買物独案内』 渡辺書店
- 堀内秀樹 1996 「東京大学本郷構内の遺跡の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査年報1』
東京大学埋蔵文化調査室
- 吉川圭三 1974 「目さまし草」『日本随筆大成』〈第二期〉8 吉川弘文館

研究編 8. 江戸遺跡出土のキセル

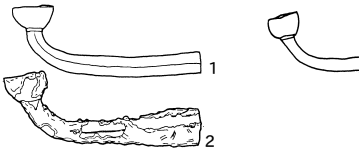
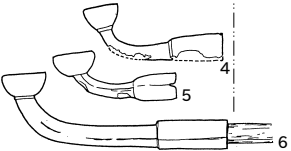
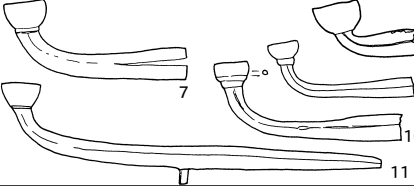
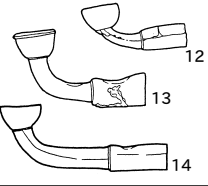
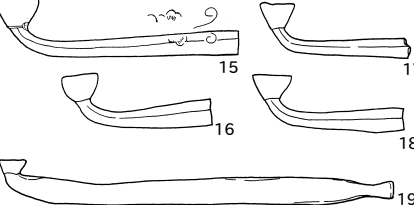
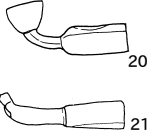
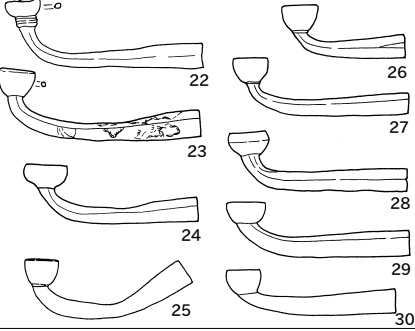
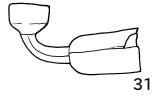
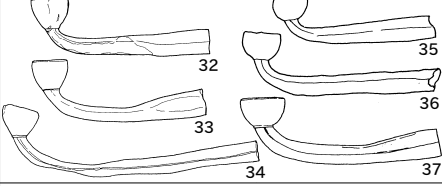

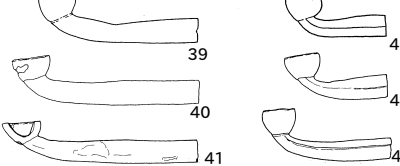
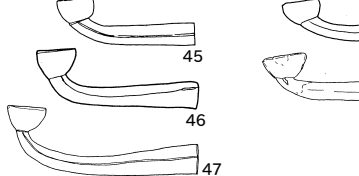
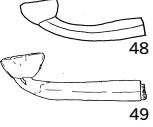
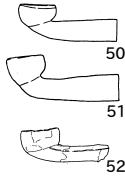
時期	実年代	A1類	A2類	B1類	B2類
II	1630 ～ 1650 年代				
IIIa	1650 ～ 1660 年代				
IIIb	1670 ～ 1682				
IVa	1680 年代				
IVb	1690 ～ 1700 年代				
Va	1710 ～ 1720 年代				
Vb	1730 ～ 1740 年代				

図5 江戸遺跡出土のキセル編年(1) (S=1/3)

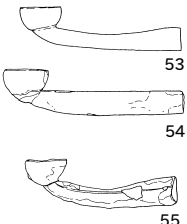
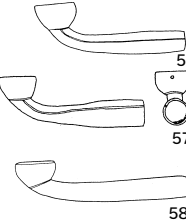
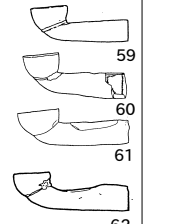

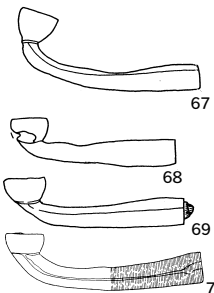
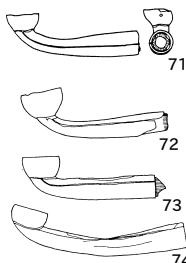
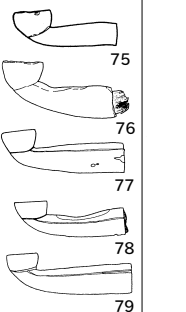
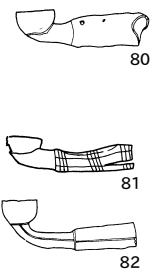

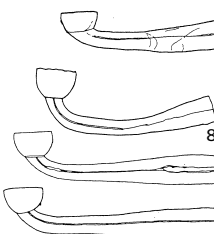
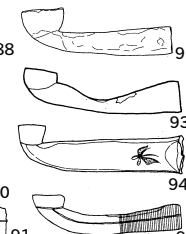

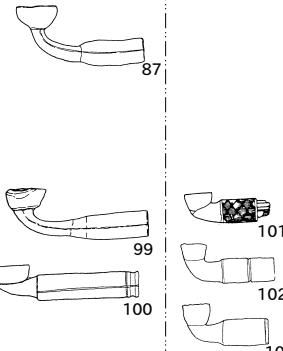
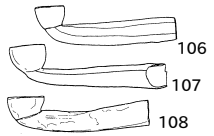
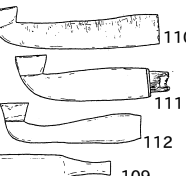
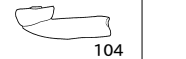
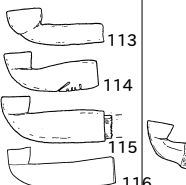
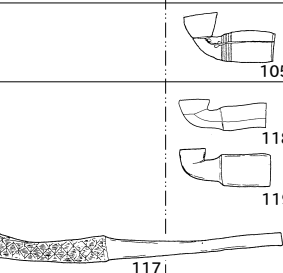
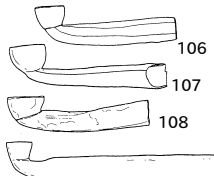
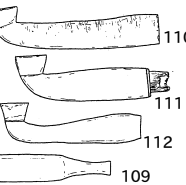
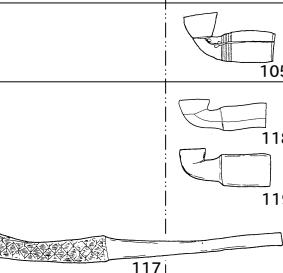
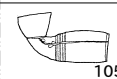
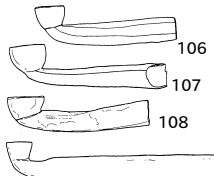
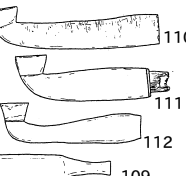
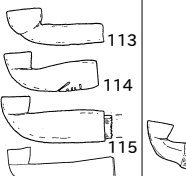
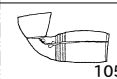
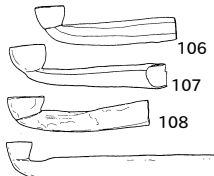
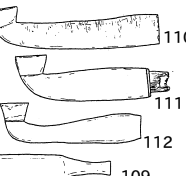
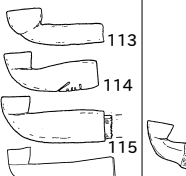
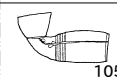
時期	実年代	A1類	A2類	B1類	B2類
VIa ∩ VIb	1750 ∩ 1770 年代	 53 54 55	 56 57 58	 59 60 61 62	 63 64 65 66
	 67 68 69 70	 71 72 73 74	 75 76 77 78 79	 80 81 82	 83 84 85
VII ∩ VIIIa	1780 ∩ 1810 年代	 88 89 90 91	 92 93 94 95	 86 87	 96 97 98 99 100 101 102 103
	 106 107 108	 109 110 111 112	 104 105	 113 114 115 116	 117 118 119
VIIIb ∩ VIIId	1820 ∩ 1860 年代	 110 111 112	 113 114 115 116	 117 118 119	 120 121 122
	江戸 or 明治	 123 124 125	 126 127 128	 129 130 131	 132 133 134
IX	明治	 135 136 137	 138 139 140	 141 142 143	 144 145 146

図5 江戸遺跡出土のキセル編年(2) (S=1/3)

時期区分	実年代	図 No.	分類	出土地点	出土遺構	寸法 (mm)				火皿			脂返し				接合部	補強帯	備考	古泉編年	
						口径	高さ	接合部	平均	大	中	小	大	中	小	無					
II 期	1630 ~ 1650 年代	1	A1	東大病院病棟	SU2245	11.0	6.0	4.0	7.0	○						中	○		III		
		2	A1	東大御殿下記念館	532号	11.0	7.0	5.5	7.8	○						中			III		
		3	A1	東大御殿下記念館	532号	8.0	6.0	3.3	5.8			○				小	○		III		
		4	B1	東大御殿下記念館	532号	9.0	6.0	3.0	6.0			○				小	○		II		
		5	B1	東大病院病棟	E 面上層	11.0	5.0	3.5	6.5	○				○		中			細		
		6	B1	東大御殿下記念館	532号	12.0	6.0	5.0	7.7			○				中	○		II		
III a 期	1650 ~ 1660 年代	7	A1	東大御殿下記念館	532号	11.0	8.0	6.0	8.3	○						大	○		III		
		8	A1	東大御殿下記念館	270号	12.0	8.0	4.0	8.0	○				○		中			短		
		9	A1	東大病院病棟	SK2440	8.0	4.0	3.0	5.0			○				小	○		III		
		10	A1	東大病院病棟	D2層	9.0	4.8	6.5	6.8	○・孔						中	○		III		
		11	A1	東大病院病棟	SU327	10.5	7.0	5.0	7.5							中	○		延バキセル		
		12	B1	東大御殿下記念館	802号	11.0	7.0	5.0	7.7	○						中	○		II		
		13	B1	東大御殿下記念館	270号	11.0	6.0	5.0	7.3							中	○		II		
		14	B1	東大御殿下記念館	802号	10.0	6.0	4.0	6.7	○					○		小			短	
		15	A1	東大御殿下記念館	255a	12.0	8.0	4.0	8.0	○						小	○		IV		
		16	A1	東大病院病棟	SU390	9.5	7.0	4.0	6.8							小				IV	
		17	A1	東大病院病棟	SU390	8.0	7.0	3.0	6.0							小				IV	
		18	A1	東大病院病棟	D 面焼土	10.0	6.0	4.0	6.7							小				IV	
		19	A1	東大病院病棟	SE1155	7.0	3.5	4.0	4.8							中				延バキセル	
		20	B1	東大病院病棟	SU390	10.0	8.0	3.5	7.2	○						小				短	
21	B1	東大御殿下記念館	255a	-	-	-	-							-							
IV a 期	1680 年代	22	A1	東大病院病棟	SK03.D2層	9.0	4.5	4.0	5.8				○・孔			中	○三重		細	II	
		23	A1	東大病院病棟	SK03.D層	9.5	7.0	5.0	7.2				○・孔			小					
		24	A1	東大病院病棟	SK03.D層	12.0	6.0	4.0	7.3							小				IV	
		25	A1	東大病院中央診療棟	F34-11	9.0	6.5	4.5	6.7							小	○			III	
		26	A1	東大病院病棟	SK03.D層	9.8	3.5	7.0	6.8	○						小	○			IV	
		27	A1	東大病院病棟	SK03.D3層	9.0	6.0	3.0	6.0							小	○			IV	
		28	A1	東大病院病棟	SK03.D3層	9.5	6.0	5.0	6.8							中				III	
		29	A1	東大病院病棟	SK03.D3層	10.0	5.5	5.0	6.8							大				IV	
		30	A1	東大病院病棟	SK03.D3層	9.0	6.5	5.0	6.8							中				V	
		31	B1	東大病院病棟	SU436	11.0	8.0	4.0	7.7	○						小					
		32	A1	東大病院外来診療棟	SK139	10.0	8.0	3.0	7.0	○						小				IV	
		33	A1	東大病院外来診療棟	SK29	9.5	7.5	4.0	7.0	○						小	○			IV	
34	A1	東大病院外来診療棟	SK139	9.8	8.0	3.5	7.1	○						小	○			III			
35	A1	東大農学部家畜病院	SK09	8.5	6.0	3.0	5.8							小				IV			
36	A1	東大農学部家畜病院	SK09	10.0	7.0	4.0	7.0							小				IV			
37	A1	東大病院中央診療棟	E35-4	12.0	7.5	4.8	8.1	○						中	○			IV			
38	A2	東大御殿下記念館	640号	11.0	6.0	4.0	7.0							小				短			
V a 期	1710 ~ 1720 年代	39	A1	東大病院中央診療棟	F33-3	10.0	7.0	6.0	7.7						大				V		
		40	A1	東大病院外来診療棟	SU75	10.0	5.5	6.0	7.2						大				V		
		41	A1	東大病院外来診療棟	SU63	10.0	5.5	4.5	6.7						中				V		
		42	A1	東大病院中央診療棟	G20-2	9.0	6.0	4.5	6.5						中				V		
		43	A1	東大病院外来診療棟	SU313	9.0	6.0	4.3	6.4						中				V		
		44	A1	東大病院外来診療棟	SE105	8.0	7.0	4.0	6.3						中				V		
V b 期	1730 ~ 1750 年代	45	A1	東大病院外来診療棟	E31-1	9.0	6.0	5.0	6.7						中				V		
		46	A1	東大御殿下記念館	206号	10.5	7.0	4.8	7.4						中				IV		
		47	A1	東大病院外来診療棟	SK290	10.0	6.5	3.0	6.5						小	○			III		
		48	A1	東大農学部家畜病院	SK11	10.0	5.5	5.0	6.8						中				V		
		49	A1	東大病院外来診療棟	SK137	11.0	6.0	4.5	7.2						中				V		
		50	A2	東大病院中央診療棟	E34-2	10.0	6.0	6.3	7.4						大				短		
		51	A2	東大病院中央診療棟	E34-2	10.0	7.0	6.0	7.7						大				短		
		52	A2	東大病院外来診療棟	SK290	10.0	5.0	8.0	7.7						大				短		
		53	A1	東大病院中央診療棟	L34-1	11.0	6.0	6.0	7.7						大				V		
		54	A1	東大病院外来診療棟	SK152	11.0	7.0	7.0	8.3	○					大				V		
VI a 期 ~ VI b 期	1750 ~ 1770 年代	55	A1	東大病院外来診療棟	SK174	11.0	6.0	4.0	7.0						中				V		
		56	A1	尾張藩上屋敷 V	40-4Y-3	10.5	6.5	5.5	7.5						中				V		
		57	A1	尾張藩上屋敷 IX	131-2J-1	10.0	6.0	6.0	7.3						中				V		
		58	A1	尾張藩上屋敷 V	4104V-4	10.0	6.0	6.0	7.3						大						
		59	A2	東大病院中央診療棟	L34-1	10.0	5.0	6.5	7.2						大				短		
		60	A2	尾張藩上屋敷 V	40-4Y-3	9.0	6.0	6.0	7.0						大				短		
		61	A2	尾張藩上屋敷 V	40-4Y-3	11.0	6.0	7.5	8.2	○					大				短		
		62	A2	東大御殿下記念館	416号	9.0	6.0	7.0	7.3						大				短		
		63	B2	尾張藩上屋敷 V	41-4U-2	11.0	6.0	6.0	7.7	○					大				短		
		64	B2	尾張藩上屋敷 X	171-3K-1	8.0	5.0	5.0	6.0						中				短		
		65	B2	東大御殿下記念館	125号	10.0	6.0	5.0	7.0						大				短		
		66	B2	尾張藩上屋敷 X	163-3X-2	8.0	4.0	7.0	6.3						大				短		
		VII 期 ~ VII a 期	1780 ~ 1810 年代	67	A1	東大工学部 1号館	SK01	10.0	8.0	4.0	7.3						小	○			III
				68	A1	東大工学部 1号館	SK01	10.0	6.5	6.0	7.5						大				VI
				69	A1	東大工学部 1号館	SK01	11.0	6.5	6.0	7.8						大				V
				70	A1	尾張藩上屋敷 VI	24-5S-1	10.0	5.0	7.5	7.5						大				V
				71	A1	尾張藩上屋敷 VI	24-5S-1	8.5	5.0	4.0	5.8						中				V
				72	A1	尾張藩上屋敷 VI	24-5S-1	11.0	6.5	5.0	7.5	○					中				V
73	A1			尾張藩上屋敷 VI	24-5S-1	10.0	6.0	6.5	7.5						大						
74	A1			尾張藩上屋敷 VI	24-5S-1	9.0	5.0	7.5	7.2						大						
75	A2			東大御殿下記念館	245号	9.0	6.5	6.5	7.3						大				短		
76	A2			東大病院外来診療棟	SK133	11.0	7.0	7.0	8.3	○					大				短		
77	A2			尾張藩上屋敷 VI	24-5S-1	9.0	5.5	6.0	6.8						大				短		
78	A2			尾張藩上屋敷 VI	24-5S-1	8.5	4.5	6.5	6.5						大				短		
79	A2			尾張藩上屋敷 IX	172-3U-1	8.0	4.5	7.0	6.5						大				短		
80	B1			尾張藩上屋敷 IX	143-2O-1	10.0	6.0	8.0	8.0						大						
81	B1			東大工学部 1号館	SK01	9.0	4.5	7.3	6.9						大						
82	B1			尾張藩上屋敷 IX	125-2K-1	9.0	6.0	5.0	6.7						中	○					
83	B2			日影町 II	159号土坑	11.0	7.0	6.0	8.0	○					大				短		
84	B2			日影町 II	8号地下室	11.0	6.0	8.0	8.3	○					中				短		
85	B2	東大工学部 1号館	SK01	9.0	5.0	5.5	6.5						中				短				
VII b 期 ~ VII d 期	1820 ~ 1860 年代	86	A2	東大病院中央診療棟	H21-2	8.5	4.0	7.0	6.5												

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき いがくぶふぞくびょういんがいらいしんりょうとうちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号	5							
編著者名	成瀬晃司、堀内秀樹、寺島孝一、大成可乃、原祐一、安芸穂子、大貫浩子、野々村海、阿部常樹、江田真毅、北野信彦、降幡順子、村上 隆、パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成17年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくほんごう 東京大学本郷 構内の遺跡 ほんごうだいいせきぐん (本郷台遺跡群) いがくぶ 医学部 みぶぞくびょういん 附属病院 がいらいしんりょうとう 外来診療棟 ちてん 地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 ほんごう ちょうめ 本郷7丁目 ほん 3 ごう 1 号	13105	47	35° 42' 27" ~	139° 46' 3" ~	平成2年6月 27日~平成 3年2月21日 平成3年5月 8日~5月21 日	5,500 m ²	医学部附属 病院外来診 療棟建設に 先立つ事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷 構内の遺跡 (本郷台遺跡群) 医学部附属病 院外来診療棟 地点	大名屋敷	近世	地下室、井戸、溝、 木樋、堀跡、建物 跡、採土坑、厠跡、 植栽痕	陶器、磁器、土器・土 製品、瓦、金属製品、 石製品、ガラス製品、 木製品、銭貨、動物遺 体		加賀藩邸と大聖寺藩邸 の調査。 両藩邸の地境堀を確 認。 徳利内容物を分析。 九谷産染付小坏の胎土 分析を実施。		

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 5
東京大学本郷構内の遺跡
医学部附属病院外来診療棟地点

2005年3月31日 発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場4-6-1

印刷 株式会社セビラス
